

1993年北海道南西沖地震における 住民の対応と災害情報の伝達

— 巨大津波と避難行動 —

平成6年1月

東京大学社会情報研究所
「災害と情報」研究会

目 次

1 章；北海道南西沖地震の地震像と被害の概要

- 1. 北海道南西沖地震の地震像 1
- 2. 災害の概要 2

2 章；巨大津波と避難行動－奥尻町青苗地区で何が起きたか－

- はじめに 7
- 1. 奥尻町青苗地区の人的被害 7
- 2. 津波被害を免れた人々 11
- 3. アンケート調査からみた避難行動 14
- 4. 津波の犠牲になった人々 22
- 5. 津波災害の教訓－歴史はくり返す 30

3 章；巨大津波と避難行動－渡島半島の場合－

- はじめに 33
- 1. 瀬棚町の人的被害と住民の行動 34
- 2. 大成町の人的被害と住民の行動 37
- 3. 島牧村の人的被害と住民の行動 40
- 4. 奥尻町と比較する 43

4 章；津波警報はどう伝えられたか

- 1. 津波警報とは 53
- 2. 札幌管区気象台はいかに対応したか 54
- 3. 防災機関における津波警報の伝達 56
- 4. 放送はどう対応したか－NHKの場合 67
- 5. 放送はどう対応したか－民間放送の場合 76

5 章；北海道南西沖地震と災害情報

1. 緊急通報ができなかった（110番・119番の不通）…………… 87
2. 同報無線は役だったかー同報無線の自動放送をー…………… 91
3. 流言の発生……………100
- （補論）島牧村のオフトーク通信……………110

6 章；災害ボランティア活動

1. ボランティア活動の実態と住民の評価……………115
2. ボランティア活動の問題点……………120
3. 今後の課題……………124

7 章；アンケート調査にみる住民の行動ー奥尻町ー

1. 地震・津波の被害状況……………127
2. 地震時にいた場所としていたこと、地震直後の行動・心理……………128
3. 避難行動の実態……………132
4. 津波の知識……………136
5. 防災無線と住民の行動……………139
6. 住民の電話行動……………142
7. マス・メディアの活動に対する評価……………143
8. 大津波来襲のうわさ……………149
9. 防災ボランティア活動……………152

8 章；アンケート調査にみる住民の行動ー渡島半島ー

1. 地震・津波の被害状況……………155
2. 地震時にいた場所としていたこと、地震直後の行動・心理……………156
3. 避難行動の実態……………162
4. 津波の知識……………168
5. 防災無線・オフトーク通信と住民の行動……………170
6. 住民の電話行動……………175
7. マス・メディアの活動に対する評価……………177
8. 大津波来襲のうわさ……………187
9. 防災ボランティア活動……………189

本報告における執筆者と、各章の主な執筆分担は、以下のとおりである。

伊藤和明（文教大学国際学部）．．．．． 1 章
宇田川真之（東京大学理学部）．．．．． 6 章
中森広道（日本大学大学院）．．．．． 3 章、4 章、7 章、8 章、
中村功（東京大学大学院）．．．．． 4 章、5 章、7 章、8 章
廣井脩（東京大学社会情報研究所）．． 2 章、3 章、5 章、7 章、8 章
（50 音順）

なお、本調査にあたっては、奥尻町をはじめとする防災機関、北海道および東京における放送局など、多くの方々にお話しをうかがった。災害後の多忙な時期にもかかわらず、しかもできれば公開したくないようなことがらまで、率直に教えていただいたことに深く感謝の意を表したい。

1 章

北海道南西沖地震の地震像と被害の概要

1. 北海道南西沖地震の地震像

1993年7月12日、22時17分、北海道南西沖地震が発生した。気象庁の発表によれば、震源地は、北緯42度47分、東経139度12分、震源の深さは34キロで、地震のマグニチュードは7.8であった。

マグニチュード7.8は日本海で起きる地震としては最大規模のもので、巨大地震といってもいい（アメリカの地震学者サイクスは、 $M \geq 7.8$ の地震をGreat Earthquakeと定義している）。

地震の直後に大津波が奥尻島および渡島半島沿岸を襲い、震害ともあわせて、死者・行方不明者231人（消防庁調べ）をだす大災害となった。

この地震による各地の震度（気象庁発表）は次の通りである。

震度5	深浦	小樽	寿都	江差															
4	青森	室蘭	苫小牧	むつ	倶知安	函館													
3	留萌	札幌	八戸	秋田	帯広	岩見沢	羽幌												
2	旭川	稚内	新庄	盛岡	酒田	浦河													
1	山形	網走	宮古	釧路	小名浜	新潟	大船渡	輪島	雄勝	広尾									
	仙台																		

なお、最大の被害をだした奥尻島の震度発表はないが、震害の模様や住民の体験談などから、参考震度6になったものと推測される。

地震の震源域は、南北約100キロ、東西約50キロとされているが、地震のメカニズムや津波の解析などから、2つの地震が相次いで発生したマルチプルショックだったと考えられている。第一の破壊は、奥尻島の北西で発生して南へ向かって進行した。それから約30秒後に、奥尻島に近いところで第2の破壊が発生した。奥尻での住民の聞き取り調査でも、30秒ほどの間隔をおいて、強い揺れが2度襲ったという証言がある。第二の地震の震源域は、その東端がほとんど奥尻島の直下にまで達していたため、同島での震害がとくに大きく、また大津波が短時間で島へ到達したのである。

北海道南西沖地震は、北米プレートとユーラシアプレートの境界で発生した地震である。北海道から東北地方にかけての日本海側では、ユーラシアプレートが、東側にある北米プレートの下に沈みこんでおり、その境界で、これまでもしばしば大地震が発生してきた。1983年に起きた日本海中部地震（ $M 7.7$ ）も、その一つである。

18世紀以降、このプレート境界で発生したと考えられる地震を、次表にあげておく。

年	震源または地震名	M
1741	渡島大島付近	6・9?
1833	庄内沖	7・5
1940	積丹半島沖	7・5
1964	新潟地震	7・5
1983	日本海中部地震	7・7
1993	北海道南西沖地震	7・8

(注) 1741年の渡島大島付近の地震は、震害はなく、大津波だけが沿岸を襲い、1500人近い死者をだしたもので、渡島大島火山の噴火による山体崩壊が、大津波の発生源と考えられていたが、最近の研究では、津波被害の大きさからみて、津波地震(ヌルヌル地震)だったとする説が有力である。

1983年日本海中部地震が発生した後、〔日本海中部地震の震源域+1741年渡島大島付近の地震の推定震源域〕と、〔1940年積丹半島沖地震の震源域〕との間が、地震の空白域になっていて、近い将来、大きめの地震が発生するのではないかと、一部の専門家は指摘していた。1993年北海道南西沖地震は、まさにその空白域を埋めるようなかたちで発生したのである。

表に示したように、北海道～東北地方の日本海側、つまり日本海東縁を南北に走るプレート境界では、18世紀以降、6つの顕著な地震が発生しているが、そのうち4つは、1940年以後の50年あまりのあいだに発生している。しかも、6つの地震の発生間隔を順次求めてみると、92年、67年、24年、19年、10年と、しだいに間隔が狭まってきていることがわかる。この統計的事実は、日本海側のプレート境界地震の活動が、近年しだいに活発化していることを意味しているとみることもできよう(図1)。

また、1983年日本海中部地震の震源域の南に隣接する部分、つまりほぼ秋田県沖にあたる日本海は、前記6つの地震によって埋められていない地震空白域になっているとみられており、防災対策の整備が強く望まれるところである。このような空白域の存在も、1993年北海道南西沖地震の発生によって、いっそう色濃く浮かび上がった問題といえることができる。

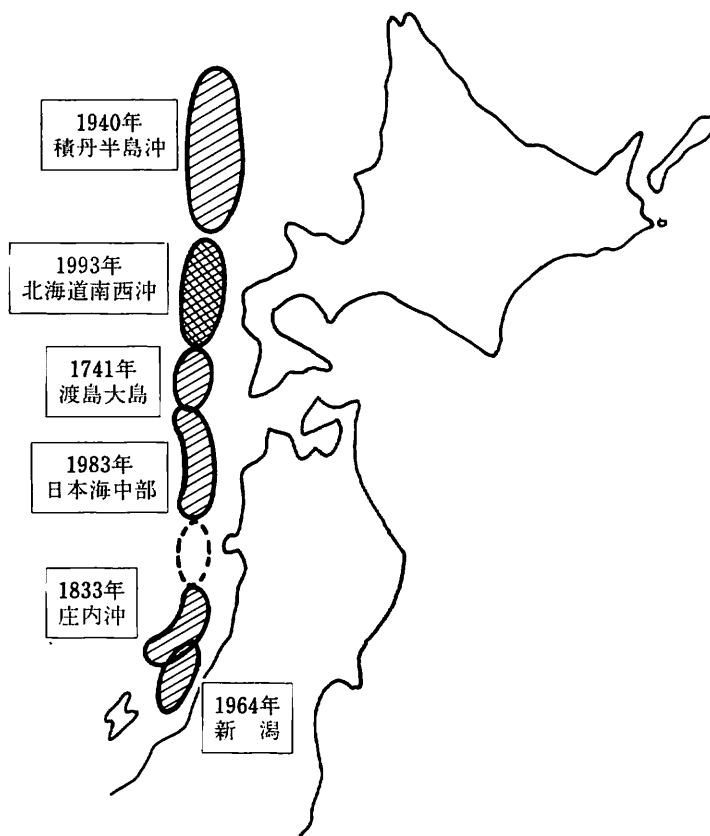
2・災害の概要

(1) 津波災害

津波による被害は、震源にもっとも近かった奥尻島が最大であったが、渡島半島西海岸の島牧村、瀬棚町、北桧山町、大成町などの沿岸集落でも大きな被害がでた。

奥尻島では、津波災害は全島に及んだ。1983年日本海中部地震で津波を体験していただに、避難行動はかなり迅速に行なわれたが、地震発生後、津波が襲来するまでの時間が短かったことと、日本海中部地震のさいの津波よりも波高が高かったため、壊滅的な災害となった。稲穂、海栗前、球浦、初松前、青苗、藻内などの各地区では、津

図1. 日本海側のプレート境界地震の震源域



波の遡上高も高く、一瞬のうちに集落が洗い去られてしまった。また津波は、家屋だけでなく、道路の擁壁を倒壊させるなど、道路施設にも被害をもたらした。

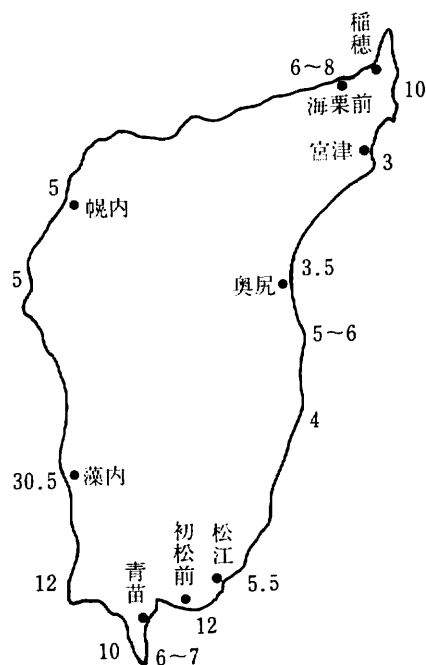
島で最も被害の大きかった南部の青苗地区は、波高10メートルの津波に洗われたうえ、直後に発生した火災によって、500棟あまりが流失または焼失している。

図2は、東京大学地震研究所の都司嘉宜助教授が、地震直後に調査した奥尻島における津波の遡上高分布である。

西海岸の藻内地区では、30.5メートルという最大の遡上高を記録している。島の南端に突出した青苗5区は、西側から10メートル、東側から6～7メートルの津波を受け、住民の約3分の1が犠牲になった。

奥尻島での津波被害を大きくしたのは、島が地震の震源域のほぼ真上にあったこととともに、島の南方沖の海底地形にも原因があった。島南端の青苗地区の南には、海底に浅瀬が伸びている。この浅瀬の存在によって、西からきた波は、進行方向がねじまげられ、浅瀬をまわりこむようにして東側から青苗を襲った。つまり青苗地区は、西からますぐに襲ってきた波と、まわりこんで東からきた波との挟み打ちにあって、甚大な災害となったのである。

図2. 奥尻島各地の津波遡上高（単位；メートル）（都司嘉宣氏による）



奥尻島には、地震発生から5分前後で津波が襲来した。そのため、地震直後のとっさの判断が、人々の生死をわけた。津波の襲来を予想し、いち早く高台へ逃げた人は助かった。一方、車で逃げようとしたが渋滞にまきこまれ、間に合わずに車ごと津波にさらわれた人も少なくない。まだ時間があると思い、ゆっくり歩いて避難をしているうちに、波に吞まれてしまった人もいる。

奥尻島では、1983年の日本海中部地震のとき、津波によって2人の犠牲者をだしている。10年前のそのような体験が教訓となって、地震発生後の適切な避難行動に結びついた点が指適できよう。もし日本海中部地震の体験がなければ、犠牲者の数は大幅に増したものと推測される。

渡島半島西岸の町村でも、津波による被害がでた。犠牲者の数は、たとえば島牧町で7人、瀬棚町で6人、大成町で10人などとなっている。津波の波高は、都司助教授らの調査によれば、島牧村原歌で8.5メートル、瀬棚で4.1メートル、大成町平浜で8.5メートルなどで、いずれも家屋の全壊流失をだしている。

気象庁の札幌管区气象台は、地震発生5分後の22時22分、津波警報（北海道～東北地方の日本海側には大津波警報）・津波注意報を発令した。5分という時間は、これまでに例のない早さであり、札幌管区气象台に観測データを自動処理するエトス（地震津波監視システム）を導入して、津波情報の迅速化に努力してきた成果のあらわれとして評価できよう。

気象庁からの津波警報を受けてNHKが緊急警報放送を開始したのは、22時24分すぎ、地震発生から7分あまり経っていた。しかし奥尻島では、警報は間に合わなかった。そのときすでに、津波は島を洗っていたのである。

このように、北海道南西沖地震による死者・行方不明者の大部分は津波によるものだが、231人という犠牲者の数は、1948年福井地震（死者3769人）以後の45年間では、最大のものであった。実は、福井地震以後、死者・行方不明者の数が100人をこえたものとしては、1960年のチリ地震津波（142人）、1983年日本海中部地震（104人）、そして今回の北海道南西沖地震（231人）の3件があげられるが、いずれも津波によって大災害となったものである。地震にともなう津波が、いかに大量死を招く恐ろしい現象であるかを如実に物語っているといえよう。

（2）火災

奥尻島青苗地区では、津波襲来の直後、火災が発生して被害を大きくした。火は、北東からの10メートル近い風にあおられ、たちまち南西方向へと燃えひろがって、およそ300戸を焼失した。漁村特有の木造家屋密集地帯だったことも、大火の要因の一つであった。

火元の特定は、いまだにできないままであるが、奥尻消防署の調べによると、最初に出火したのは青苗北部の旅館などがある一角で、22時40分ごろだったという。さらに翌13日0時30分ごろ、漁業協同組合の倉庫や多くの食堂のあるあたりから、第2の出火が起きたという。

7月とはいえ、北海道の離島では朝晩はかなり冷えこむため、多くの家庭や民宿などでは、灯油ストーブを使用していた。そこへ地震の強い揺れが襲い、住民の大部分が、直後に避難行動を起こしたため、ストーブなどの火源を残す結果となり、火災が発生したと考えられる。

延焼するにつれ、プロパンガスのボンベや家庭用の燃料タンクが爆発をくり返した。しかも、津波による流出物が消防活動を阻み、手のつけられない状態となったため、地元消防署と消防団は、破壊消防を実施し、延焼の拡大は食い止められた。その結果、青苗4区の17棟だけが火災から免れることができたのである。

津波とともに火災が発生したケースは、決して少なくない。1933年昭和三陸大津波のとき、岩手県の田老や釜石などで、津波で流された家から出火し、漂流する人々が焼死した例もある。1964年新潟地震のときには、石油タンクからもれ出た油に火がつき、それを津波が運んだために燃えひろがり、民家約300戸が焼失した。

筆者らの一人（伊藤）も、かつて取材した1964年アラスカ地震のさい、大津波に襲われたアラスカの港町、スワードやバルディーズなどで、出火した石油タンクの火が津波に運ばれ、多数の民家が焼失していたことをはっきりと記憶している。

津波被害の盲点といってもいい「津波に誘発される火災」は、日本各地の港湾地帯の地震防災をかんがえるうえで、きわめて重要な問題である。高度な経済活動、工業活動とともに、日本の沿岸には、石油タンクをはじめとするさまざまな危険物が林立している。

たとえばもし、懸念されている東海地震が発生すれば、駿河湾沿岸には、大津波が押し寄せることは疑いない。このとき、地震・津波災害だけでなく、広域火災に発展するとすれば、災害の規模をどれほど拡大することになるのか、予想もつかない。

奥尻島の災害を契機に、港湾地帯においては、「津波」「火災」を念頭においた防災対策の充実を望みたいところである。

(3) 斜面崩壊

最も地震動の激しかった奥尻島を中心に、各地で斜面崩壊が発生した。

奥尻島では、全島に渡り斜面崩壊が発生し、建物が倒壊・埋没したり、道路が寸断されるなどの被害を生じた。

なかでも悲劇を招いたのは奥尻地区で、奥尻港に面した斜面が大崩壊を起こし、ホテル「洋々荘」とレストラン「シーサイドもり川」が、その下敷となって、28人の死者をだしたことである。上部の傾斜角が70～80度もある斜面が、高さ約100メートル、幅約180メートルにわたって崩れ落ち、ホテルとレストランを一瞬のうちに埋没した。斜面を構成している岩石は、砂岩を主とした第三紀の堆積岩であり、同じ第三紀層が、同島の各所で崩壊を起こしている。

なお、大崩壊を起こした奥尻港背後の斜面では、地震前から崖の頂部に亀裂が入っていたとする証言もあるが、未確認である。

(4) 地盤の液状化

地盤の液状化による被害は、とりわけ渡島半島の各地で目立った。

液状化の発生は、後志川など河川の旧河道の部分、長万部から八雲にかけての海岸砂丘の内陸側、駒ヶ岳火山の山麓などに集中した。このため、河川堤防の亀裂・破損、道路の陥没、農地などでの噴砂現象のほか、水道管・ガス管などのライフラインの折損、建物の沈下や破損を生じた。

今回新たに注目すべきことは、駒ヶ岳火山の岩屑流堆積物のなかで液状化が発生したことである。これは、北海道駒ヶ岳が1640年に大噴火したさい、山体の崩壊によって発生した「クルミ坂岩屑流」の堆積物である。岩塊もまじえた淘汰の悪い堆積物が、3メートル以上の厚さで積もっており、地下水位が1メートル未満と高いこの岩屑流堆積物のなかで液状化が起きたため、表層を突き破って砂を噴き出したり、別荘やペンションなど建物の土台に被害を生じた。

この岩屑流堆積物は、未固結ではあるものの、比較的堅固な地盤を形成しており、これまで液状化などには強い地盤と考えられていた。にもかかわらず、震度5程度の揺れで液状化が発生した事実は、液状化危険度に関する概念とその対策についての見直しを迫るものであり、今後の大きな課題であるということができよう。

2 章

巨大津波と避難行動

－奥尻町青苗地区で何が起きたか－

はじめに

1993年7月12日22時17分頃、北海道南西沖の深さ34キロの海底で、マグニチュード7.8の地震が起こった。北海道南西沖地震である。

そして、この地震の直後に巨大な津波が発生し、北海道奥尻町をはじめ、渡島半島の西海岸に襲ったため、実に死者・行方不明231名にのぼる甚大な被害になった。この人的被害は、奥尻町奥尻地区で旅館・洋々荘の裏山が崩れ、宿泊客など28人が犠牲になったほかは、ほとんど津波による被害であり、この数字は、1983年に起きた日本海中部地震を大きく上回り、昭和35年のチリ地震津波をしのぐ戦後最大のものとなった。不幸にして災害の犠牲になられた方々に対し、深い哀悼の意を捧げるものである。

地震の後、5－10メートルに達する巨大な津波がきわめて早い時間に各地を襲ったこと、また、被災地域が漁業を主な産業としており、地震と津波の発生時刻には多くの人々が就寝していたことなどが、被害を大きくした主な要因である。

筆者らは、この北海道南西沖地震が起こった直後からつごう3回にわたって、奥尻町をはじめ、渡島半島において被害がいちじるしかった大成町・瀬棚町・島牧村を訪ね、役場や消防などの行政機関と被災住民に対して聞き取り調査を行ない、災害当日の対応と津波に対する避難行動について調査した。以下は、その報告である。この章では、今回の災害においてもっとも被害が大きかった奥尻町青苗地区をとりあげて、巨大津波が襲撃したときの住民の避難行動を検証していきたい。

1. 奥尻町青苗地区の人的被害

奥尻町青苗地区は奥尻島の南端にある。この地区は平野部の1－5区と高台の6、7区があり、平野部には漁港があって、住民の大半が漁業で生計をたてている。また小高い丘になっている高台には燈台や奥尻空港があり、そして緑が丘団地といわれる住宅地がある。

今回の災害の被害は、このうち平野部の1－5区に集中した。これらの地区には、当時353世帯・1015人が住んでいたが、そのうち107人が亡くなったり、いまだに行方不明になっている。とくに青苗地区の南端にある青苗5区では、214人の住民

図1. 奥尻町・青苗地区の略図

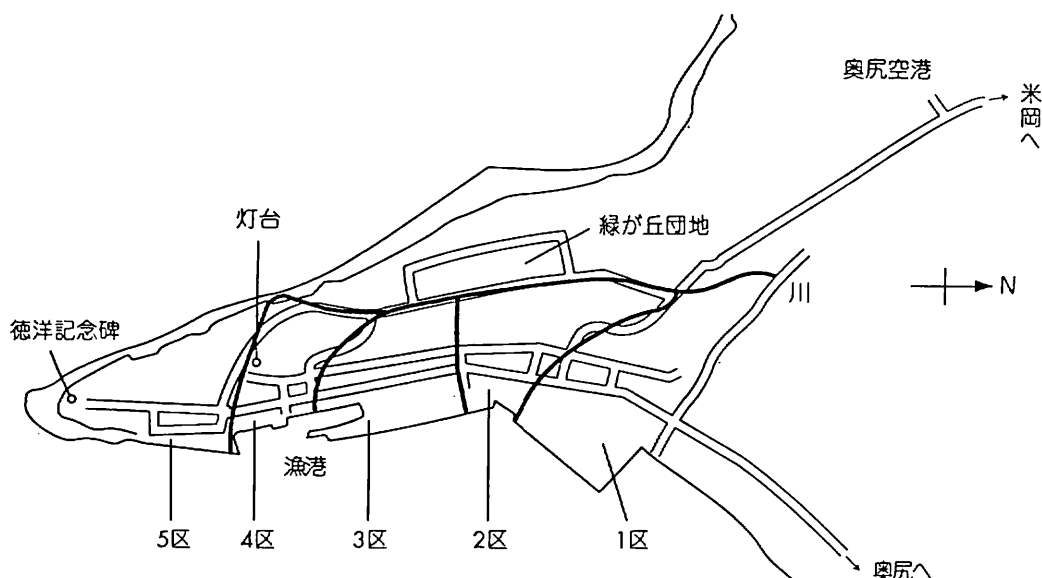


表1. 青苗地区の被害概要

	世帯数	人員	人的被害	全壊家屋
青苗1区	87	242	10	71
青苗2区	74	218	21	74
青苗3区	59	174	1	59
青苗4区	56	167	3	28
青苗5区	77	214	72	77
奥尻町全体	895	2559	197	428

のうち72人の死者・行方不明者が出た。その死亡率は実に33.6%にもものぼっている。

この青苗地区を筆者らが最初に訪ねたのは災害の5日後だったが、津波とその後に起こった火災によって、同地区は漁協と農協のビルをのぞいてほとんど壊滅状態であり、津波の脅威をあらためて認識させられたものである。

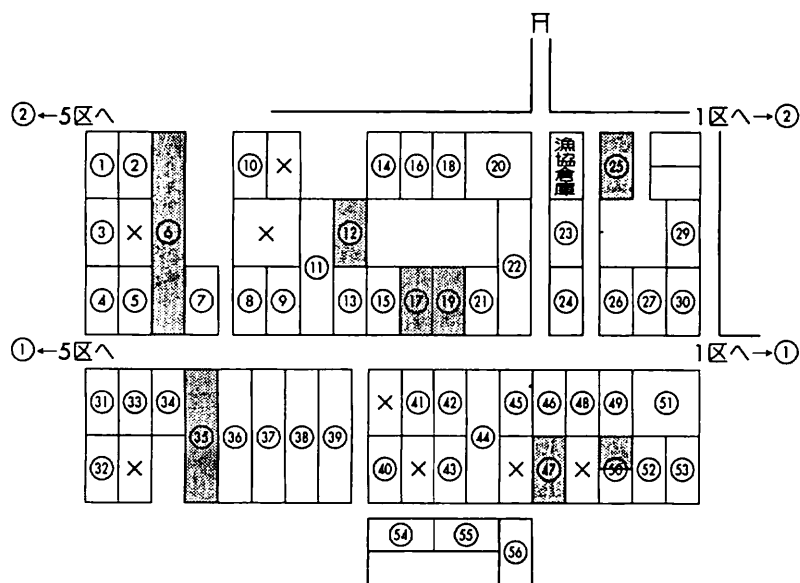
その後の調査の過程で、筆者らは被害を免れた方々に当時の状況をインタビューするとともに、地区の事情にくわしい数人に青苗地区の住宅地図をわたして、どの世帯の方が亡くなったのか、また亡くなった方はどんな状況のもとで亡くなったと聞いているか、についてできるだけくわしく教えていただいた。その結果の一部は、図2-4に示している。これらの図において、黒く塗ってある世帯が死者の出た世帯、色を塗ってないのが全員無事だった世帯、そして×印は当時留守だった世帯を意味している。

これをみると、青苗地区の被害の大きさに暗澹とした気持ちになるが、もう一つ、避難行動という点から注目すべきなのは、

図2. 奥尻町青苗5区の被害世帯



図3. 奥尻町青苗2区の被害世帯



高台へ

奥尻養協

奥尻農協

木工場

育苗郵便局

育苗中学校

奥尻へ

② ← 2区へ

① ← 2区へ

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47

- 住民の話をうかがうと、津波の来襲時間は地震後さわめて早く、また、最初のはほぼ5分後に西から、次に地震後17、8分後に東から、いずれも想像を絶する巨大津波がやってきたという。たしかに、このことが被害を甚大にしたのは間違いのないであろう。しかし死者世帯の分布をみると、それでも犠牲にならなかった住民がかなりおり、とくに高台にもっとも遠い岬の先端の人たちの多くが助かっているのも事実である。これは、住民の避難行動の適否が生死の別れ目になったということではないだろうか。

たとえば、最初に青苗を訪ねたときにこういう話を聞いた。

話してくれたのは40代の商店主だった。かれは就寝直後に地震に襲われ、津波を直感してそれこそパンツ一つで奥さんと子供をつれて高台に避難したというが、かれが沈痛な表情で語ったのは、この災害で亡くなったのは、（1）津波がくるとは思ったが、10年前の日本海中部地震の経験（日本海中部地震では、地震のおよそ30分後に奥尻に津波が襲った）から津波はまだ来ないと思った人、（2）津波の来襲を予想したけれども体が不自由で早く避難できなかった人、（3）家族と一緒に避難しようとして避難が遅れた人、（4）車に荷物を積んだり、遠くに駐車させてある車を取りに行ったりした人、（5）近所に津波の注意を呼びかけたり、一緒に避難しようと迎えに行ったりした人、（6）いったんは避難したのに、大事なものを取りに家にも戻った人などだ、ということだった。

奥尻町は10年前にも津波で死者2人をふくむ大被害を受けている。そこで、今回の地震のときも多くの人が津波の来襲を予想し、すぐに避難行動を開始したのであった。ここが、対岸の渡島半島の人々（かなり多くの人たちが、地震のあと津波の来襲を予想しなかったようである）とは異なるところであり、もし10年前の経験がなかったら、今回の被害はもっとずっと大きかったかもしれない。

しかし、それでも目を覆うような大被害になってしまった。そこで、われわれは今回の津波災害の避難行動をもっとくわしく調べ、生存者はなぜ助かったのか、犠牲者はどうして犠牲になってしまったのか、その生死を分けた要因はいったい何だったのかを分析しようと試みた。以下、その結果について述べていきたい。

2. 津波被害を免れた人々

まず、津波被害を免れた人々の体験談から紹介していこう。

今回の災害で生死を分けたのは避難行動の適否だったのではないかと先にも述べたが、紹介するのはいずれも、地震直後に津波の来襲を予想して、いち早く避難した人々である。

まず、青苗5区のKさん（女・30代）（住居は図2の66）から。

Kさんは、5区のなかでも徳洋記念碑に近いまさに島の南端に住居があり、避難場所の高台からはかなり離れている。家族は、Kさん夫婦と子供2人とご両親の6人である。地震発生当時、ご主人は2階でくつろいでおり、Kさんは風呂上がりであった。強い揺れを感じたKさんは、バスタオルを羽織って外に飛び出し、玄関先に置いてあった車につかまって揺れがおさまるのを待ったという。Kさんは、10年前の日本海中部地震で津波を経験しており、地震の揺れがそのときよりずっと大きかったので絶対に津波がくると思い、すぐさま避難しようと、寝ている子供たち（8才・6才）を起こしに家のなかに入ろうとしたが、玄関は開かなくなっており、仕方なく窓から入って2人の子供を連れ出した。玄関のなかからご主人の来る音がしたので、ご主人も後からくるだろうと思い、バスタオルを羽織ったまま、子供2人と駆け足で逃げだした。やがて息が切れて

きたが、高台に向かうため通りの十字路を左に曲がったところで、両親を乗せて逃げてきたご主人の車が来たのでそれに乗り、家族6人を乗せた車は一気に高台の住宅地に駆け上がったという。

このように、Kさんは、10年前の経験から津波を予想している。10年前は、地震の後に家で食事をしていたら、まわりの人が津波がくると騒いでいたので逃げ始めたとき津波に襲われ、図2の7のお宅の物置に逃げ込んだ。そして、物置ごと津波に流されしばらく漂ったという。そのときは腰くらいまで波に浸かったが、この経験があったので子供たちにそういう思いはさせたくなかったのだという。

また、Kさんは、10年前の津波の経験があるから、付近の人はかなり早く逃げたようだという。たとえば、Yさん（図2の11）一家はパジャマで逃げていたし、Hさん（図2の24）も揺れているあいだに外に出てそのまま車で避難したという。また、Yさん（図2の13）は揺れているあいだにご主人が2階にかけのぼって子供（小5と幼稚園）を連れ、奥さんとご主人がそれぞれ別の車に乗って避難したという。

10年前の経験からすばやく避難したという話は、同じ青苗5区のMさん（女・40代）（図2の5）からもうかがった。地震のとき、Mさんの家は29インチのテレビが落ちるやら時計が落ちるやら大変だったという。Mさんは地震のあいだ流しにつかまっていたが、10年前には津波で家が全壊していたので、今度も津波がくるとして、財布1つだけ持ち、サンダルをつっかけてご主人と一緒に高台に向かい駆け出した。まるで、短距離競争のようにして走ったので、息切れしてしまったという。

もちろん、津波を直感してすばやく避難したのは、青苗5区の人だけではない。次にあげるのは青苗2区のIさん（男・60代）（図3の9）の体験。

地震が起こったとき、Iさんは2階で床について眠っていた。大揺れがはじまったとたん、父さん地震だ！と奥さんに声をかけられ、すぐ飛び起きたが、とても立ってられないほどの揺れで、屋根が落ちて家が壊れると思ったという。揺れの続くなかを奥さんと一緒に階段を降り、茶の間に入ると、タンスが倒れたりコップが割れて飛び散ったりで、足の踏み場もないほどだったが、こんな大地震ならきっと大津波がやってくると思い、すぐに着替えをして避難しようとした。着替えはいつも袋に入れてすぐわかる場所に置いてあったが、地震直後に停電になり懐中電灯も見当たらず、柱につるしてあるペンライトを頼りに着替えたので、多少時間がかかった。外へ出ようとなると、冷蔵庫が倒れて戸口をふさぎ、外へ出られない。どうやらこうやら冷蔵庫を動かして、やっと出るだけの隙間を作って外に出ると、地震であわてて飛び出した人たちが何人かかたまってざわざわしていた。そこで、「このバカものが。津波がくるぞ！」と怒鳴ったという。そして、ペンライトを照らしながら近くの浜に行き、軽四輪車のエンジンをかけ、高台に避難した。避難する途中に親戚の家があって、奥さんが「父さん、迎えに行かには、連れて行かには」と言ったが、津波がいつ来るかわからないと思ってあえて無視した。しかし親戚の人は、結局みんな無事だったという。

Iさんたちが車で走っているときはほとんど人影がなく、避難する車もなかったので、このへんでもっとも早く避難したのだろうというが、高台についてしばらくすると、左手のほうから10メートルはあろうかという巨大な津波がやってきた。なお、青苗1区

や2区に巨大な津波が襲ったのは、地震発生から17-18分後だったようで、5区にくらべて避難するのにいくらか余裕があったという。

以上のように、ここであげた人たちは、自分で津波を直感して避難している。しかし、自らは津波を予想しなかったが、他人にいわれてことの重大さに気づき急いで避難した人も少なくない。

たとえば、Hさん（女・50代）（図2の51）もその一人である。地震が起こったとき、Hさんの夫は漁で沖におり不在で、彼女は床に入って眠りにつく前だったが、地震に驚いて裸足で飛び出し、外の物干しにつかまっていた。恐くて泣き叫んでいたが、まわりの人は誰も出てこなかったという。揺れがおさまると、Kさん（道路をへだてて向かい側の家、図2にはない）がガスの元栓を閉めたかというので、裏に行き行って閉め、靴を履いてまた物干しのところに行ったとき、Yさん夫婦（図2の10）がパンツ一枚で逃げてきた。そして、「かあさんこんなことしてはだめだ、一緒に逃げよう」と手を引っ張ってくれた。そのとき裏のOさん（図2の48）の母親から、息子が兄のところに行っているのを迎えに行ってくれといわれたが、Yさんが「そんなことしては大変だ、自分の身が大事だから早く逃げよう」と言ったので、耳には残ったけれども細い道を燈台に向かい、走って避難した。高台につくと、知人が大きな鞆を持っていたので、自分も（家が近いから）大事なものを取りに行きたくなり、戻っていったらもうすでに家はなくなっていた。その直後、ここにいたら駄目だという声を聞いたので、ふたたび高台に避難したという。Hさんは、Yさんが来るまで津波のことなど考えもしなかったようである。Hさんの自宅は、青苗5区のなかで高台のもっとも近くにあり、10年前も津波はここまで来なかったの、今回もまさかと思ったのであろう。

Aさん（図2の34）も、最初は津波を予想せず、家人にいわれて急いで避難した一人である。地震が起こったとき、Aさんは居間で横になってうとうとしていたが、日本海中部地震のとき小学3年生だったこともあって、当初は津波のことは念頭になかった。しかし、家族が津波が来るということで外へ出ようとした。このとき地震で戸が開かなくなっていたが、戸を蹴って外に出た。自宅には歩行が困難な祖父がいるので、Aさんは車で避難しようと考え、家のすぐ横に駐車してある車のエンジンをかけ、祖父が出てくると同時に車をスタートさせたという。Aさんの避難時刻はかなり早かったようで、車にもものを積み込むなどという余裕はまったくなく、Aさん自身も靴も履かずに裸足で車を運転している。なお、最初に触れたKさんは子供と走って避難する途中で、このAさんが車に祖父を乗せようとしているのを目撃したそうである。

以上、青苗地区において津波被害を免れた人たちの体験を紹介してきた。

大地震に遭遇した直後、自ら予想したか他人に教えられたかは別にして、どの人たちも、津波を恐れてただちに高台へと避難している。地震発生時刻が、多くの人が床に就いていた午後10時過ぎだったことを考えると、多くの人がこのように緊急避難したことは、ある意味で驚異的である。その背後には、日本海中部地震の経験が大きく寄与しているのはたしかであろうが、津波による人的被害を軽減するためには、何をおいても迅速な避難が必要であることをあらためて教えてくれたのであった。

3. アンケート調査からみた避難行動

さて次に、大災害から3月半経過した10月29日から31日にかけて、筆者らが奥尻町青苗地区の人々に対して行なったアンケート調査（回収数；仮設住宅に住む265世帯の204人）の結果から、津波当日の避難行動の実態について推測してみたい。7章の記述と重複する部分も多いが、避難行動にかかわるものをここでとりあげておく。

アンケート調査の結果をみると、地震が発生した7月12日午後10時17分には、多くの人はずでに自宅で床についていた（「自宅にいた」人88.7%、「すでに眠っていた」人42.2%、「床に入っていたが眠ってはいなかった」人15.2%）。しかし、地震直後の行動は非常に迅速であり、とくに「家族に逃げようと声をかけた」（33.3%）、「高台に向けて避難した」（48.0%）の割合が非常に多くなっている（図5、表2）。

図5. 地震のときどこにいたか・何をしていたか（奥尻町 N=204人）

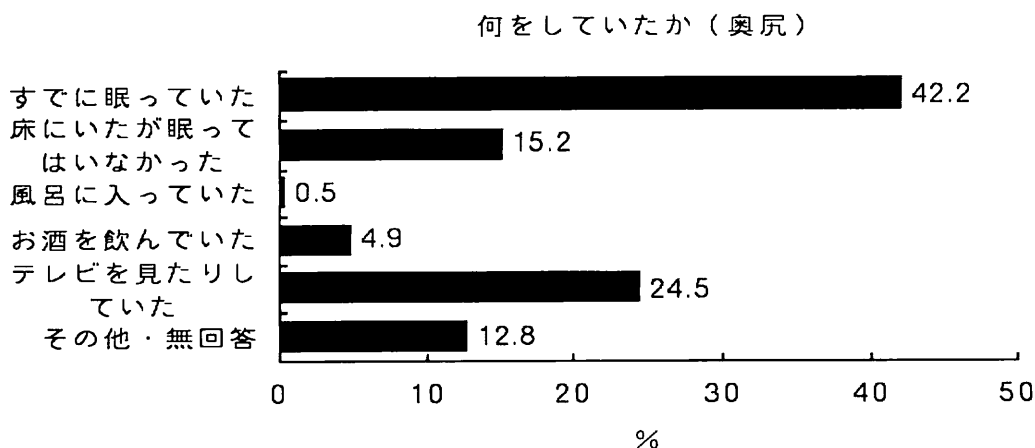
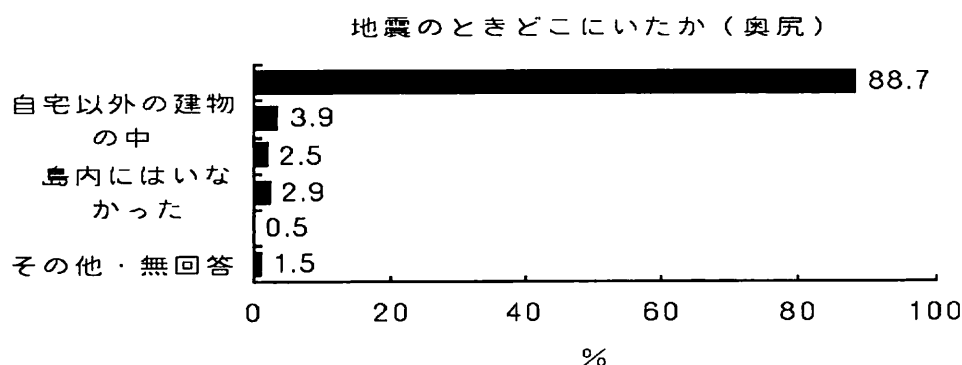
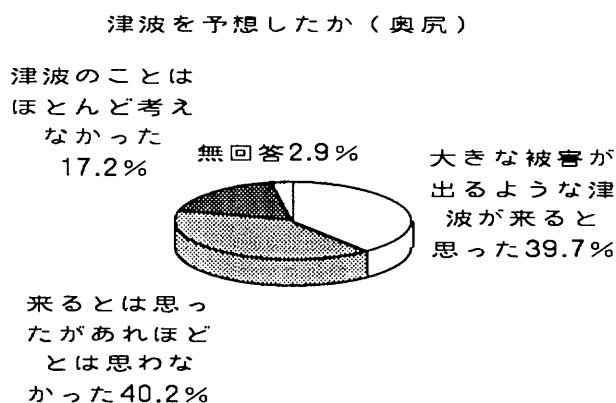


表2. 地震時にとっさにしたこと（奥尻町 N=204人）（複数回答）

	N	%
あわてて外に飛び出した	60	29.4
家族に逃げようと声をかけた	68	33.3
高台に向けて避難した	98	48.0
火の始末をしようとした	37	18.1
窓や戸をあけて外の様子を見た	6	2.9
室内を片づけた	4	2.0
服を着た・着替えた	27	13.2
家具などが倒れないように押さえた	21	10.3
頑丈なものにつかまって身をささえた	17	8.3
子どもや老人・病人などを気づかった	42	20.6
机の下などに身を伏せた	18	8.8
海や船のようすを見に行った	5	2.5
何もできずぼう然としていた	32	15.7
無我夢中だったので覚えていない	10	4.9
その他	15	7.4
無回答	6	2.9

これらは、津波を予想した避難行動に深く関係しているが、青苗地区の人々に、地震の直後、津波をとっさに予想したかどうかたずねると、地震直後に「大きな被害が出るような津波が来ると思った」人が39.7%とほぼ4割を占め、「津波のことはほとんど考えなかった」人の17.2%を大きく上回っている（図6）。また、津波を予想し

図6. 地震直後に津波を予想したか（奥尻町 N=204人）



た人がどのくらい切迫感を持っていたかをみても、津波は「すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った」人が60.7%と半数を上回り、「津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った」人(18.4%)や、「日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があったと思った」人(9.8%)を大きく引き離していた(表3)。

表3. 津波への切迫感(奥尻町 N=163人)

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	99	60.7
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	30	18.4
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があったと思った	16	9.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があったと思った	1	0.6
その他	8	4.9
無回答	9	5.5

このように、奥尻町では、地震直後に津波を予想した人が少ない。その大きな理由は、10年前の日本海中部地震における津波体験であろう。

つまり、アンケート調査のなかで、どうして地震の後に津波が来ると思ったのかをたずねたところ、「10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから」という人が72.4%と圧倒的多数を占めていた(表4)。また、別の質問で、10年前の津波経験が今回の避難行動にどんな影響を与えたかをたずねても、「日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う」という人が52.0%と半数を越えていたのである(表5)。

筆者らは、津波から辛くも逃れた人たちから、今回の災害では、10年前の日本海中部地震にくらべての地震の揺れが格段に大きかったことから、10年前よりも大きな津波がもっと早く襲ってくると直感して懸命に避難したという話をしばしば聞いたが、上のアンケート結果は、調査対象になった多くの人々が、大津波の急襲を直感的に予想したことを示唆している。

しかし、10年前の津波経験が必ずしも有効に働いたとはいえないケースもある。というのは、10年前には地震の約30分後に津波が襲ってきていることから、地震直後に津波の到来を予想しながら、「日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があったと思った」人が9.8%と、ほぼ1割にのぼっているし(表3)、また、津波経験が今回の避難にどう影響したかという質問でも、「日本海中部地震の経験がかえっ

表4. なぜ地震直後に津波が来ると思ったか (奥尻町 N=163人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	118	72.4
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話聞いていたから	24	14.7
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	12	7.4
その他	8	4.9
無回答	1	0.6

表5. 日本海中部地震の経験が避難行動に影響したか (奥尻町 N=204人)

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う	106	52.0
日本海中部地震の経験がかえってわざわざいして、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う	15	7.4
日本海中部地震の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	27	13.2
日本海中部地震の経験はない	43	21.1
その他	6	2.9
無回答	7	3.4

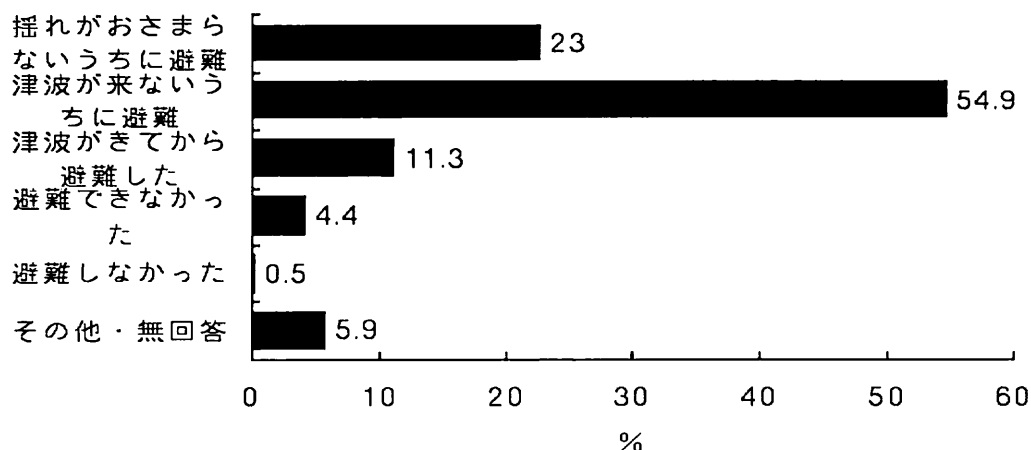
てわざわざいして、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う」という人が7.4%いたからである(表5)。全体的にみれば、津波経験が被害の減少に大きく寄与したことは間違いのないけれども、部分的には経験がマイナスに作用したケースもあった。災害経験を大事にすることに異論はないが、わずか数十年から数百年の災害経験を絶対視することなく、経験に科学者の専門的判断を加えて後世に伝えていくことが必要であろう。

次に、住民の具体的な避難行動について触れると、前述のように、奥尻町の多くの人々は地震直後に津波の来襲を予測したため、いっせいに高台へ避難を開始した。その避難行動は、非常に迅速だったといえよう。

つまり、まず、地震の後どのくらいしてから避難をはじめたかをたずねたところ、「まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた」人が23%、「揺れはおさまったが、

津波がまだ来ないうちに避難しはじめた」人が54.9%と、ほぼ8割の人が緊急避難しており、避難するより早く津波が来てしまった人は2割弱である。また、避難した人の平均避難時間は、地震の5.3分後であった。今回の津波災害は、多くの人が就寝していた午後10時過ぎに発生したこと、地震の5分後には津波が来襲し、津波警報も間に合わなかったことを考え合わせると、その避難がきわめて早かったことがわかる（図7）。

図7. 避難の時期（奥尻町 N=204人）



	N	%
1分以内に避難	8	4.4
1分後	5	2.7
2分後	9	4.9
3分後	30	16.5
4分後	20	11.0
5分後	65	35.7
6分後	2	1.1
7分後	2	1.1
8分後	2	1.1
10～14分後	21	11.5
15～19分後	1	0.5
20～24分後	4	2.2
30～34分後	1	0.5
無回答	12	6.6

（平均避難時間；5.3分）

また、住民が避難を決断した理由をみると、ここでも10年前の津波経験が有効に機能しており、「日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから」という回答が、50.5%と半数にのぼっている。これは、自分で避難を決断した人々であるが、そのほか、「家族が避難しようといったので」（39.0%）、「親戚や近所の人が避難するようにいったので」（19.8%）という理由のなかにも、過去経験にもとづくものが少なくなかったと思われる（表6）。

表6. 避難を決断したきっかけ（奥尻町 N=182人）（複数回答）

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	92	50.5
家族が避難しようといったので	71	39.0
親戚や近所の人が避難するようにいったので	36	19.8
屋外の防災無線拡声器から避難を呼びかけたので	3	1.6
室内の防災無線戸別受信機で避難を呼びかけたので		
テレビで津波警報を聞いたので		
ラジオで津波警報を聞いたので		
実際に津波に襲われたので	2	1.1
その他	21	11.5
無回答	2	1.1

次に、避難の手段と避難形態をみると、避難手段としては、「自動車に乗って避難した」人がもっとも多く47.8%を占め、次いで「走って避難した」（28.6%）、「歩いて避難した」（22.0%）となっていた。また、避難形態としては、「家族全員で避難した」が65.4%と最大で、以下、「近所の人や親戚と一緒に避難した」（18.1%）、「一人だけで避難した」（12.6%）と続いていた（図8）。

このように、多くの人は自動車を使い、集団で避難している。また、徒歩で避難した人も少なくなかった。しかし一方、今回の災害では、歩いて避難したり、自動車を使って避難した人が津波の犠牲になったケースも少なくなかった。その分析は後に触れるが、おそらく津波の難を免れた人たちは、犠牲者にくらべ、とるものもとらずあえず着のみ着のままで迅速に避難したのであろう。たとえば、調査対象者に避難するとき何を持ち出したかをたずねたところ、「かなりのものを持ち出すことができた」人はゼロ、「少しだけ持ち出せた」人は16.5%と非常に少なく、一方、「何も持ち出せなかった」人が81.3%と圧倒的多数を占めていたのである（図9）。

図8. どんな手段で避難したか・だれと避難したか（奥尻町 N=182人）

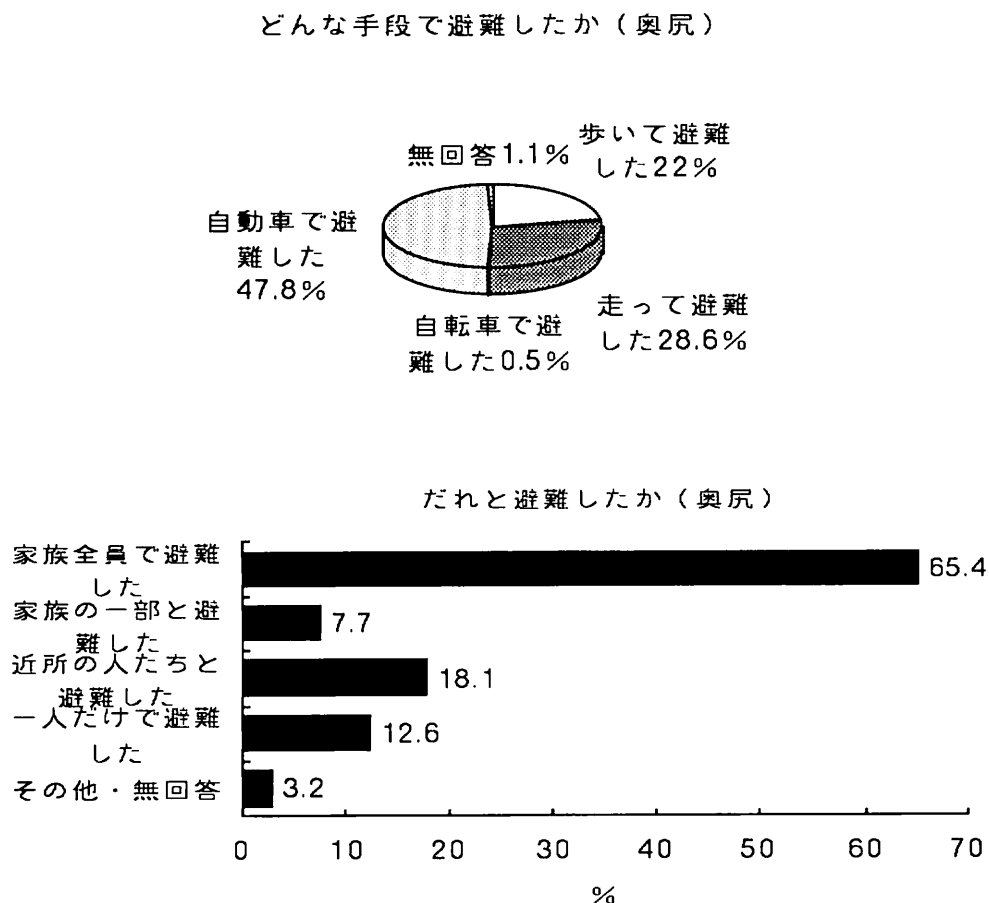
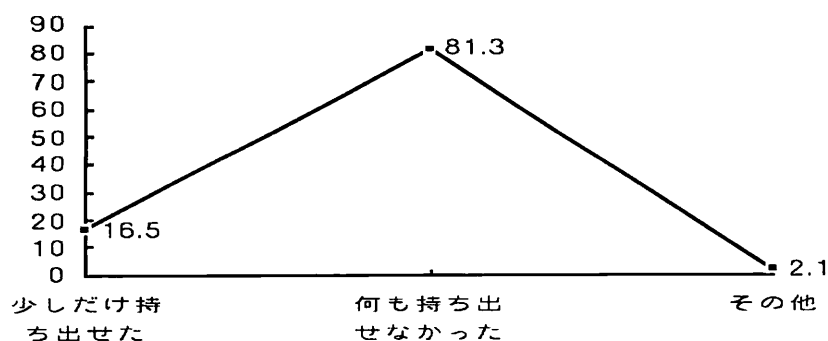


図9. 避難時の持ち出し品（奥尻町 N=182人）



しかしそれでも、多くの住民はかなりせっぱつまった状況で避難している。アンケート調査では、避難したときの状況をたずねたが、答えをみると、「ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった」という人が61.5%で、「死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった」人(29.1%)を大きく上回っているし(図10)、避難するとき実際に津波に襲われたかどうかをみても、「津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった」人が55.9%と過半数を占めているが、一方、「避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした」人(4.4%)や、「津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た」(28.4%)もけっして少なくないのである(表7)。

図10. 避難時の状況(奥尻町 N=182人)

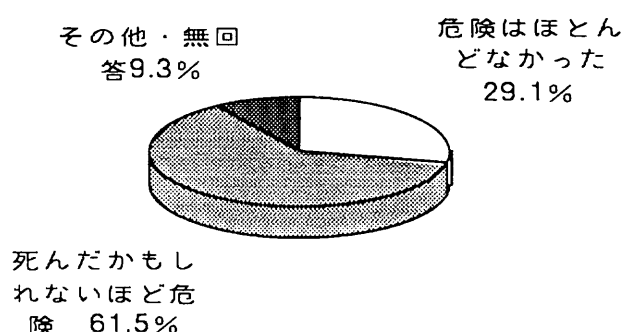


表7. 実際に津波に襲われたかどうか(奥尻町 N=204人)

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	12	5.9
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.4
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	58	28.4
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	114	55.9
その他	5	2.5
無回答	6	2.9

4. 津波の犠牲になった人々

次に、青苗地区において不幸にして津波の犠牲になった方々の行動について述べていきたい。

前にも触れたように、筆者らは地区の事情に詳しい何人かの住民から、津波の犠牲者がどんな状況のもとで亡くなったと聞いているか、について教えてもらった。もちろん、これらの人たちも犠牲者から直接に話を聞けるわけではないから、実態と異なることもあるにちがいない。けれども、津波によって一家全滅というケースは割合に少なく、多くは家族の誰かが助かっているのも事実であり、残された家族の口からだれそれはどういう状況で亡くなった、という話が地区内で語られている。ここで紹介するのはそういう話であり、完全な実態を反映しているとはいえなくても、ある程度は実態に近いと考えられる。

その結果が、表8、9、10に示されている。津波被害を免れたのは何をおいても真っ先に避難した人たちだったと先に述べたが、一方、死者・行方不明者がなぜ津波の犠牲になったかの分析は、もっとずっと複雑である。

こんなに多くの犠牲者が出たもっとも大きな理由が、巨大な津波がきわめて早い時間に青苗地区を襲ったことにあるのは、もちろんいうまでもない。けれども、前述のように、死者世帯の分布が地区全体に散在していることとか、高台から遠くても無事だった世帯や、高台のすぐ近くに死者の出た世帯が少なくないことなどからみると、別な理由もいくつかあると思われる。

以下、このことをくわしくみていきたい。

表8、9、10をみると、犠牲者のパターンは、大きくいって、次の4つに別れるようである。

1. 避難しなかった（できなかった）人
2. 避難しようとしたがいろいろな理由から避難が遅れた人
3. 歩いて避難したり、遅れて車で避難したりした人
4. いったん避難したのにふたたび戻って被害にあった人

このうち、死者数からいえば、1と2のパターンがもっとも多く、またその理由ももっとも多様だと思われる。

まず、1の「避難しなかった（できなかった）人」から触れるが、これをもっと細かく区分すると、

- (1-1) 高齢や身体障害のため避難できなかった人
- (1-2) 津波を予想しなかったので避難しなかった人

がある。

このうち、(1-1)の「高齢や心身障害のため避難できなかった人」は、聞き取り調査では非常に多く、たとえば、青苗5区のS. Sさん(60)(図2の2)は病身で、ふだんもつまづくような歩き方をしていたというし、K. Fさん(72)(図2の19)は腰が悪く、S. Yさん(72)(図2の81)は耳が不自由だったという。これは青

表 8. 青苗 5 区の死者・行方不明者と推測される状況
(平成 5 年 8 月 1 2 日現在 * = 行方不明者)

番号	氏名 (性別・年齢)	
2	S. S (女・60)	病身のため逃げられなかった。ふだんからつまずくように歩いていた。夫はイカ漁で生存。
6	Y. T (女・58) Y. K (女・31) Y. T (男・33) *	逃げ遅れる。
7	K. T (女・28) K. A (女・8) * K. Y (男・6)	逃げ遅れる。夫はイカ漁に出ていて助かる。 NHK の VTR に映っている？ 子供が避難中祖母宅に声をかけようと親の手を離れたところを目撃されている。
9	H. R (男・73)	車で避難中に津波にあう。
12	H. T (女・70) H. K (女・60) H. K (男・38) H. S (女・12) H. S (男・9)	H. K (男・38) さんが車を運転。 (9 と 12 区別つかず)
14	K. K (男・70) * K. Y (女・61) K. H (女・31) K. T (男・13) K. Y (男・12) K. M (男・2)	7 人家族中 6 人死亡。「年寄りを残して死ぬわけには行かない。死ぬなら家族全員で死にたい」と一つの部屋に集まる。K. K さんは血圧高く体が不自由。
15	H. K (男・不明) H. T (女・60)	逃げ遅れる。夫は日本海中部地震の津波で負傷し仕事には支障があったが避難はできたはず。
17	H. T (女・57) K. K (男・32)	逃げ遅れる。K. K さんは H. T さんの息子。
18	N. A (女・61) Y. K (女・17)	68 の酒場「ユーホー」を経営。Y. K さんは N. A さんの孫。
19	K. F (女・72)	腰が悪い。いつも 2 階に寝ていたが一人では降りられないので避難できなかった。
21	S. T (女・75) S. M (男・28)	S. M さんが近くに住む兄弟に声をかけていた。
22	S. H (女・57)	S. M さんのおば。夫はイカ漁で生存。
23	T. K (男・62) T. S (女・50)	早くから避難開始していたが、車で避難中、津波にあう。夫婦。
25	I. T (女・62)	服を着替え、物を探していた。夫も流されたが生存。
26	T. A (女・51) *	「ユーホー」にいた。物をとりに戻ったらしい。
27	K. K (男・70) K. S (女・66) K. J (女・33)	十字路まで避難していた。孫は流されたが助かった。 K. K さんは腰が曲がって早くは歩けない。
29	M. K (男・64) M. E (女・58) *	身体に障害がある(左腕がない)。M. K さんが庭に出て奥さんを待っていた。
32	H. T (男・57)	一人暮らし。家から出てこられなかった？
35	K. T (男・39) K. A (女・6)	子供 3 人が母親の部屋に集まった。

3 8	T. E (男・7 4)	逃げ遅れる。夫が病弱な妻をかばったらしい。
	T. M (女・6 9)	
4 0	Y. Y (男・8 3)	自転車で逃げる途中に津波にあう。リアカーをひいてその上に両親を乗せていたらしい。Y. Hさんは杖2本なければ歩けない。Y. Sさんの夫はイカ漁で生存。
	Y. H (女・7 7)	
	Y. S (女・5 0)	
4 3	H. Y (男・5 1)	不明
4 5	Y. K (女・6 8)	夫は流されたが助かる。逃げる方向を間違えた？
4 7	S. S (男・6 7)	近所の人を起こしに行った。
	S. A (女・6 4)	荷物を取りに戻った。
4 8	O. T (女・5 5)	正美さんが車の鍵を取りに行く。逃げる方向を間違えた。
	O. M (男・2 9)	
4 9	K. H (女・5 6)	築港に夜釣りに行って津波にあう。8 0のY. Yさんと一緒だった。
5 0	H. H (男・7 4)	不明。高齢だが元気だった。
	H. H (女・6 9)	
5 3	S. Y (男・7 8)	不明
5 4	K. K (男・6 0)	判断の誤りか？
	K. H (女・4 5)	
5 5	S. A (女・8 2)	S. Kさんの夫はイカ漁で不在。アキさんは歩くのがやっと。S. KさんがS. Aさんをかばったのでは。
	S. K (女・4 8)	
	S. Y (女・1 7)	Y. SさんはS. Aさんの孫。
	Y. S (男・9)	
5 8	M. S (女・6 0) *	M. A君とM. Yちゃんの母親は流されたが助かる。
	M. A (男・3)	父親は奥尻で夜勤をしていて助かる。家からは出ていた。
	M. Y (女・8 カ月)	
6 5	T. E (男・6 7)	NHKテレビに映っていた？
	T. H (女・6 0)	
7 3	A. T (男・6 3)	逃げ遅れる。歩いて逃げていた。NHKテレビのV T Rに映っている。
	A. K (女・5 9)	
7 4	H. S (男・4 9)	病身であった。父は島を離れていて助かる。
8 0	Y. Y (女・6 6)	築港に夜釣りに行って津波にあう？4 1のK. Hさんと一緒だった。
8 1	S. Y (女・7 2) *	耳が不自由であった。
?	H. Y (男・5 8)	タクシーの運転手。「ユーホー」にいた。

表9. 青苗2区の死者・行方不明者（平成5年8月12日現在 *＝行方不明者）

番号	氏名（性別・年齢）	
6	A. K（男・71）＊	近所の開店祝いから帰宅中地震にあう。車で避難中本商店の前で下車。家に物を取りに行ったのでは。 体が悪い。妻や息子に先に避難しろと言った。自分は避難しなかったのでは。 足が不自由。義足をつけている。土井民宿の人が声をかけたが返事なし。 車で逃げたらしい？ ＊（全員不明）
12	T. K（男・47）＊	
17	D. M（男・44）	
19	S. Y（男・77）	
	S. Y（女・73）	
	S. M（男・41）	
	S. K（男・35）	
	S. M（女・33）	
	S. M（女・7）	
	S. Y（男・6）	
25	K. T（男・39）	ワゴンにふとんや家具を積み込んでいた。 ＊（全員不明）
	K. S（女・38）	
	K. T（男・4）	
35	O. S（男・76）	開店祝いから帰って来た？病身の親を助けようとした？近所の人が声をかけても返事がない。 O. Sさんが病身。
	O. S（女・71）	
	O. Y（男・50）	
	O. S（女・44）	
47	I. M（男・82）＊	逃げ遅れた？
	I. H（女・78）	
50	M. K（女・72）	足が不自由。息子が母の手を取って逃げていたが、津波に遭い手を離してしまう。 不明
11	O. K（男・50）	

表10. 青苗1区の死者・行方不明者（平成5年8月12日現在 *＝行方不明者）

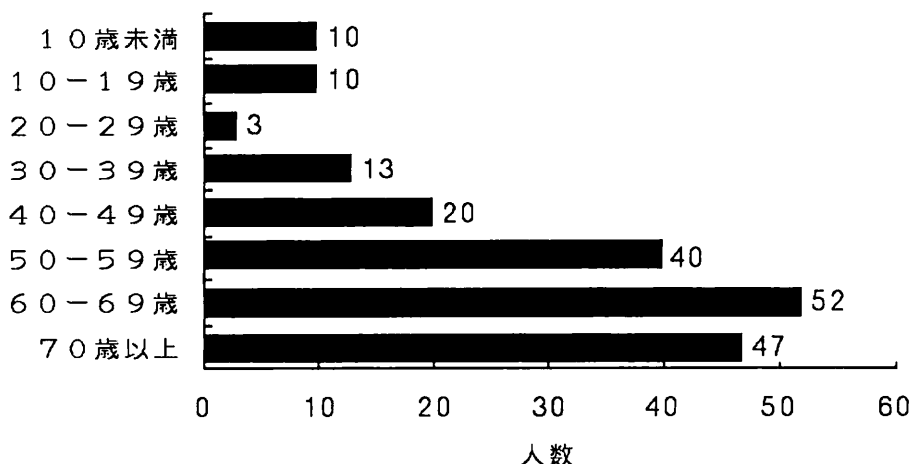
番号	氏名（性別・年齢）	
1	S. T（男・75） S. M（女・68）	焼死。S. Tさんはゆっくりでしか歩けない。
18	K. M（男・64） K. T（女・61）	
23	K. T（男・65）	いったん避難したが車を取りに行った。負傷し搬送中に死亡。
28	Y. Y（男・75）	
29	Y. K（男・45）	一家で車で避難中、耕養寺の所で車を止め飼い犬を放しにいった。
44	K. Y（男・59） K. T（女・58）	
31	A. M（女・70）	大工。建築材料を片づけていた。暴風林で津波は来ないと思っていたらしい。 身体障害者。夫は出張中。
?	K. S（男・64）	
		一人暮らし。足に障害があって普段ゆっくり歩いていた。その上酒を飲んでいたので？

苗2区でも同様で、M. Kさん（72）（図3の50）は、足が不自由な方で、息子さんが手をひいて逃げていたが、津波にあって息子さんの手を離してしまい亡くなっている。また、同じ2区のD. Mさん（44）（図3の17）は足が不自由で義足をつけていたそうである。

ここにあげたのはほんの1例であり、表8-10をみると、このような犠牲者が非常に多いという印象を受ける。これは、青苗地区全体の高齢化を反映しているのであろうが、とにかくできるだけ迅速に高いところに避難することが、人的被害を防ぐ最善の方法である津波のような災害では、身体がきかない高齢者や身体障害者はまったくの「災害弱者」であることを、この事実は如実に物語っている。

なお、これは青苗地区だけの特徴ではなく、対岸の渡島半島をふくめた犠牲者の大きな特徴ともいえよう。つまり、今回の災害では、図11のように高齢者の死亡率がきわめて高いのである。図11は、8月11日時点の集計なので、死者・行方不明者の全員を網羅していないが、それでも、60-69歳、および70歳以上の人たちの死亡率がきわめて高いことがわかるだろう。高齢者を津波災害からどうやって守るかということが、今回の災害が突きつけた大きな課題といえよう。

図11. 年齢別の津波死者数（まちづくり研究所提供資料より）



次に、（1-2）の「津波を予想しなかったので避難しなかった人」をみると、こうした人はさほど多くなく、青苗1区のK. Yさん（59）（図4の44）が防風林があるのでここまで津波は来ないと思い、木材を片づけていたという話があるほかは、5区のH. Sさん（図2の74）もまったく逃げた形跡がないと聞いただけだった。

さて、2の「避難しようとしたがいろいろな理由から避難が遅れた人」も多かったが、こうした人たちは、さらに、

（2-1）津波は予想したが、あまりにも早くきたので避難が遅れた人

(2-2) 家族や近所の人を助けようとして避難が遅れた人に分けられる。

このうち、(2-1)の「津波は予想したが、あまりにも早くきたので避難が遅れた人」はかなり多かったようである。

まず、10年前の日本海中部地震では、奥尻町に津波は地震のおよそ30分後にやってきたというが、今回の大津波は5分前後で来襲しており、そのため、津波の来襲は予想しても避難に多少の余裕があると思った人が犠牲になった。

また、この点では、津波が多くの人が就寝していた夜間に起こったということが、きわめて重要である。すでに床についていた人たちは避難するさい着替えをしなければならなかったし、地震直後に停電になったため、その着替えもかなり手間取ってしまった。表8、9、10のなかには、死亡理由として「逃げ遅れる」というものが少なくないが、このなかには避難の支度にかかって避難が遅れた人が多いと思われる。また、5区のI. Tさん(62)(図2の25)のように着替えのあと物を探していて逃げ遅れたとか、O. Mさん(29)(図2の48)のように暗やみのなかで車の鍵を探すのに手間取って避難が遅れた人もいる。

もう一つ、夜間の津波で不運だったのは、かなりの人がアルコールが入っていた、ということである。飲酒後の精神の弛緩や判断力の鈍化が、緊急避難を遅らせたのではないと思われる。たとえば、図2の68の酒場「ユーホー」には地震当時、青苗以外の客もふくめて7人がいたが、そのうち6人が津波の犠牲になっているのである。

(2-2)の「家族や近所の人を助けようとして避難が遅れた人」もけっして少なくない。その典型は、青苗5区のK. Kさん(70)(図2の14)一家で、K. Kさんが体が不自由であるため避難が難しく、「年寄りを残して逃げるわけにはいかない」と家族全員7人が一つの部屋に集まって津波にあい、7人中6人が死亡するという痛ましい話である。同様に、5区のY. Hさん(77)(図2の40)は杖なしでは歩けないため、娘のY. Sさんがリヤカーにのせ引っ張って避難していたが、二人とも津波に流されたという。また、S. Aさん(82)(図2の55)も歩くのがやっとだったが娘さんやお孫さんと一緒に亡くなっている。これもおそらく家族がかばっていたのではないか、と思われる。一方、2区のT. Kさん(47)(図3の12)は病気で寝ていたが、自分は逃げきれないと思ったのか、妻や息子に先に避難しろといったまま津波に襲われ、被害者が1人だけだった例もある。

家族だけでなく、近所の人に避難を呼びかけたり、一緒に避難しようと迎えに行ったりした人も犠牲になっている。たとえば、青苗5区のS. Tさん(75)(図2の21)は近くに住む兄弟に声をかけているうちに逃げ遅れたようだし、S. Sさん(67)(図2の47)も近所の人を起こしに行って避難が遅れたということである。

次に、3の「歩いて避難したり、遅れて車で避難したりした人」をみていく。これらの方々は、津波を予想して避難したけれども、避難の途中で津波に巻き込まれた人たちである。

当時、青苗5区の民宿にNHKのスタッフが宿泊していた。強い地震があっても、かれらは津波を予想しなかったようであるが、民宿の従業員から津波が来るから避難しな

さいといわれ、撮影道具だけをもって急いで車で避難した。その状況は、津波から4日後に『大津波が襲ったー奥尻島からの報告』という特別番組で報道されたが、そのシーンとして、暗やみのなかを黙々と高台に向かって歩いていく老若男女の姿が出てくる。筆者もこの放映を見て、こんなにゆっくり避難していて大丈夫だったのだろうかと思ったものだが、現地で聞いた話では、これらの人たちの大部分はやはり津波に襲われて命を失ったということである。

NHKでは、のちにこの事実を知り、以後、遺族の心境などを配慮してこのシーンをいっさい放映しないようにしたが、表8のなかで、「NHKのVTRに映っている？」（後ろ姿なのではっきり確認できないがたぶん当人だろうという意味）などとあるのは、このように歩いて避難して犠牲になった方々のことである。

おそらくこうした方々は、津波が、しばしば猛烈なスピードで来襲することをあまりよく知っていなかったのではないと思われる。だから、せっかく津波を予想して避難したのに、徒歩でゆっくり高台に向かったため津波に追いつかれて犠牲になってしまったと考えられる。

しかし、津波のスピードはしばしば猛烈である。1960年のチリ地震津波では、遠く南米のチリで発生した津波が、22時間かかって日本列島の太平洋岸に達したために大被害が起こっているが、これはまるでジェット機なみのスピードといいいい。それほどでなくとも、津波のスピードは速いから、沖合に津波を目撃してから避難しても間に合わないことが多い。海底における津波のスピードは、海の深さと重力の加速度の積の2分の1乗であり、深ければ深いほどスピードがあるが、10年前の日本海中部地震のときの津波のように、陸上に遡上しても猛烈なスピードで来襲することも少なくない。したがって、津波を予想したら、とにかくまっしぐらに高台に避難しなければならないのである。迅速な避難ということは、時間的にも早く、また避難のスピードも速く、という2つの意味を持っている。もし、このことが徹底されていたならば、徒歩で避難する人は少なくなり、犠牲者は減少していたかもしれない。

では、人々は津波の持つスピードについてどのくらいの知識があるのだろうか。筆者らのアンケート調査の回答をみると、「10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた」という人が22.1%、「実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた」人が8.3%と、あわせて3割が知識を持っていた。一方、「津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった」という人が59.3%になっており、半数以上の人々が津波のスピードを知らなかったと答えている（表11）。今後、津波への避難を促進し、人的被害を軽減するためには、「強い地震の後には津波に注意せよ」という知識を徹底するとともに、津波のスピードを人々に知ってもらうような広報活動が必要になろう。

また、3のパターンのもう一つ、「車で避難した」人のなかにも犠牲者は少なくなかった。助かった人の体験として先に触れたKさん、Iさん、Aさんはいずれも車を使って避難しているが、かれらはいずれも地震直後にただちに車に乗っており、そのため渋滞にもあわずに無事に避難できた。

たしかに、家族に高齢者や幼児、病人など迅速な避難が難しい人がいる場合、車で避

表 1 1. 津波のもつスピードについての知識 (奥尻町 N = 2 0 4 人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	45	22.1
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	17	8.3
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	121	59.3
その他	13	6.4
無回答	8	3.9

難しいという気持ちが強くなるし、とくに今回のように大地震が夜間に起こって停電する場合は、照明を確保する意味でも車を使いたくなるのであろう。しかし一方、車は荷物を運べるから貴重なものを積み込むことになりがちだし、またわれわれには車は速いという心理もあるから、車の避難はどうしても遅れ気味になる。さらに、車は小回りがきかないため、狭い路地を通して避難することができないという問題もある。こうして、避難時期が遅れた車により道路が渋滞すれば、いっきに大量の人命が失われる危険も少なくないであろう。

今回の津波でも、避難時期が遅れたと思われる車が被害にあっている。たとえば、青苗5区のH. Rさん(73)一家(図2の9と12)や、T. Kさん(62)夫妻(図2の23)、2区のS. Yさん(77)一家(図3の19)、K. Tさん(39)一家(図3の25)などがそれぞれ、前の3組は避難中に津波にあったのではないかと推測されるし、K. Tさん一家はワゴンに布団や家具を積み込んでいたところを目撃されている。また、H. Rさん一家は6人、S. Yさん一家は7人など、車の犠牲者は、その数が多いのが特徴である。さらに、津波によって海底に没した車を引き上げたところ、そのほとんどにキーがついていたという話もある。これらの車がすべて運転中に津波に襲われたというわけではないだろうが、この事実も、避難には車を使わないほうがいいことを示す一つのデータと思われる。

最後に、4の「いったん避難したのにふたたび戻って被害にあった人」について述べておきたい。

こうした人たちもかなり数が多いが、どちらかといえば、被害がもっとも大きかった青苗5区より1区や2区に多く、また5区の場合には、高台に遠い人より高台に近い人に多いようである。これは、おそらく高台寄りの人たちは、10年前の津波のときに被害がさほど大きくなかったこともあって、いったんは避難したものの、自分の家まで津波は来ないだろうとか、すぐ近くだから家に帰り大事なものを取って戻ってきててもまだ間に合う、と考えてしまったものと思われる。

そうしたケースをいくつかあげておくと、たとえば、1区のK. Rさん(65)(図4の23)はいったん避難したものの車を出しに戻ったところを被害にあっているし、

Y. Kさん（45）（図4の29）は高台に避難したが犬を放してくるというて戻り、津波にあってゐる。また、父親のY. Yさん（75）（図4の28）も、いったん避難したが奥さんの財布を取りに行き、津波にあったということである。青苗2区をみると、A. Kさん（71）（図3の6）は、農業委員の当選祝いのあと車で移動中に地震にあり、途中で下車して自宅のほうへ歩いて行って津波に流されたが、どうも「津波はここまでこない」と思い荷物を取りに戻ったようである。また聞くとところによれば、青苗ではないが、松江地区のO. Yさんは、地震後に自分の船をあげに行つて津波にさらわれたという。

5. 津波災害の教訓－歴史はくり返す

以上、不幸にして津波によって亡くなった方々について、推測されるその理由を述べてきた。

10年前の経験から、多くの人が津波の来襲を予想していたが、残念ながら、病気や高齢のために体が自由でなかったり、避難の支度に手間取ったり、家族がそろうのを待っていたり、あるいはここまでは津波がこないだろうとか、来るにしてもそれほど早くこないだろうとか考えたりして、避難が遅れてしまったのである。また、いったんは避難したのに、荷物などを取りに戻つて災難にあった人も少なくなかった。

われわれは、こうした悲劇を2度とくり返さないために、この不幸な出来事から何を学ぶべきであろうか。

奥尻調査のあと筆者は、ちょうど60年前（1933年3月3日）に起こつた三陸地震津波の資料を調べてみた。この災害では、午前2時32分に起こつた地震の後、三陸沿岸に巨大な津波が襲い、岩手県を中心として3000人を越える死者行方不明を出したが、その災害記録の一つである『岩手県昭和震嘯誌』（岩手県知事官房、1934）のなかに、犠牲者の状態を記した次のようなエピソードが載っていた。

「○孝道に殉じた村長父娘

（岩手県）下閉伊郡田野畑村長小田喜八氏（54）は、2日の夕刻村会を済まして平井賀の自宅に帰り、その夜津波に遭つて殉死した。強震の後、海鳴りと一緒に丈余の津波が来襲し、暗夜の中に悲痛な叫び声が聞こえたので、小田村長は「あつ、津波だ、皆んな逃げろ」と、躊躇する家族を叱つて避難させ、自分は最後に年老いた母をおぶつて家を出、娘のタマ子さん（20）が提灯をとばして道案内となり、高所へ避難の途中津波に遭ひ、無惨にも3人は波に浚われてしまった。（後略）（同誌、1185p）

○尊し！母の愛

気仙郡唐丹村小白浜高山いわさん（43）は、津波だといふ叫び声に驚いて、3人の子供の手を曳いて一生懸命逃げ出し、やうやう岸の真下迄辿り着いた。此の時はもう、激浪は凄じい音をたててその背後に迫つて来た。いわさんは半狂乱になつて子供等を一人一人抱き上げて岸の上に避難させ、3人目の子を上げようとした刹那、頭か

ら波を被ってしまった。愛児を死なしてはならない！尊い母性愛の一念に、波に弄ばれながらも必死となって努力したが、哀れにも力が尽きて愛児を頭上高く差上げたまま、波の底深く沈んでいった（1185-1186p）。

○親類を見廻って遭難

下閉伊郡山田町の佐々木壽郎君（24）は、津波の夜叔母の家に泊ってゐたが、最初の地震で懐中電灯を持って自宅へ帰り、父母の安否を見舞った。家族が揃って無事なのに安心し、皆の止めるのも聞き入れず引返して海岸の友人を見舞ひ、更に川向の親戚の所へ行く途中津波に遭ひ、流されて南町はづれの或る呉服屋の2階に流れ込んだが、その波で家が倒壊し梁木の下に敷かれて、遂に無慚な最後を遂げた（1187p）」

また、同じ三陸地震津波の被害を記録した『三陸大震災史』（友文堂書房、1933）の中にも、次のような文がある。

「宮城県本吉郡唐桑村只越部落の人達、グラグラッとあの大揺れに夜更の夢を破られたがいつとはなしに聞かされてゐた古老の言葉がピンと頭に来てその後に襲ひ来る恐ろしいものを予期して一同逃げ始めたが部落切つての素封家の奥七爺さんは地震直後浜辺まで出て見て大丈夫と思ったか一人家に戻り重要書類とかシコタマ現ナマを持って逃げんとするところをドドーッと来た大津波におだ佛その黄金と心中した訳だ」

このように、最初の2つは、避難困難な家族と一緒に避難しようとして、あるいは家族をかばって、自分も一緒に犠牲になったケース。3つ目は、止めるのも聞かないで親戚を見舞って死亡したケース。最後は、家に戻って被害にあったケースである。今回分析した各種のケースときわめてよく似ていることに気づく。残念ながら、過去の経験が十分に生かされていなかったということであろう。

ここで筆者が思い出すのは、津波常襲地域の三陸地方に伝わる「津波テンデンコ」という言い伝えである。

この言い伝えを筆者はかつて岩手県田老町で聞いたのだが、青森の八戸あたりでは「津波テンデコ」というようである。いずれにしても、これは、「津波のときは家族がテンデンバラバラに避難せよ」という意味であるが、明治29年の三陸地震津波（6月15日発生、死者行方不明27000人以上といわれる）のとき、家族をかばったり家族と一緒に避難しようとして、結局家族全員が死亡してしまった例が非常に多く、こうした悲劇を2度とくり返さないために生まれた教訓である。つまり、残酷なようだが、津波が予想されるときは、たとえ最愛の家族でもあえて見捨てて、自分だけ助かるようにひたすら避難せよ、そのことが結局は全体的に津波被害をもっとも少なくする方法だということであり、津波常襲地域に言い伝えられてきた悲しい教訓である。

こういう話をもっと普及しており、それを青苗地区の人たちがよく知っていたら、事態ははたして変わっていたであろうか。

3 章

巨大津波と避難行動 ―渡島半島の場合―

はじめに

前にも触れたように、1993年7月12日午後10時17分に発生した北海道南西沖地震による津波の被害は、戦後最大の規模に達した。とくに、震源に近かった桧山支庁管内奥尻町の被害の凄まじさは、言語に絶するものであった。しかし大津波は、奥尻町だけでなく対岸の渡島半島の町村にも襲来し、この地域にも大きな人的被害を生じさせたのである。

渡島半島は津波によってどのような人的被害を受けたのだろうか。そして、人的被害を大きくした要因はどこにあったのだろうか。

ここでは、渡島半島に焦点をあてて、聞き取り調査や新聞報道における体験者の証言などを参考にしながら、奥尻島の人々とどんな共通点や相違点があったかという点も考慮して、津波来襲時の住民の行動を考察したいと思う。本稿では、以下、桧山支庁管内の瀬棚町・大成町、および後志支庁管内の島牧村の3地域についてみていくことにする。

本論に入る前に、渡島半島の地震・津波の概況をざっとみておくと、渡島半島において津波により死者・行方不明者が出た地域は、桧山支庁管内の瀬棚町・北桧山町・大成町、そして後志支庁管内の島牧村・神恵内村などである。

地震発生時刻を正確にいうと、午後10時17分12秒。地震発生当時、渡島半島周辺の気象台管轄の観測点は、桧山支庁管内の江差、後志支庁管内の小樽・寿都・倶知安、渡島支庁管内の函館・森にあった。このなかで、一番はじめに地震波を感じたのが寿都測候所で、地震計が振れはじめたのが22時17分26秒であった。各地の震度は小樽・寿都・江差が震度5、倶知安・函館・森が震度4であるが、これをみると、渡島半島のほとんどの地域が震度5に相当する揺れであったと考えられる。

では、津波は、いつどのような規模で渡島半島を襲ったのであろうか。

その点について、気象庁に非公式に聞いたところでは、だいたい地震発生から10分前後であろうということである。ただし、これは地域によって差があるので、10分前後といってもその幅はかなり大きいとも聞いた。また、津波の大きさも地域差があるが、被害が出た地域で5メートル前後、一方、後に述べる大成町では、8メートルに達したところもあったようである。

1. 瀬棚町の人的被害と住民の行動

まず、瀬棚町の状況から述べていこう。

瀬棚町は、桧山支庁管内瀬棚郡にあり、位置は奥尻島の北側対岸、港からは奥尻行き
のフェリーが出航している。人口は3019人、世帯数は1079である。今回の地震
と津波により、死者6人、重軽傷者16人、全壊家屋25棟、半壊家屋13棟、床上浸
水33棟などの被害が生じ、被災者は164世帯512人にのぼった（表1）。

表1. 瀬棚町の被害概要（平成5年8月3日現在；自治省消防庁調べ）

	死者	行方不明者	重傷者	軽傷者	全壊世帯
瀬棚町	6		1	15	25

この死者6人のうち、1人は津波によって住家が全壊し、その下敷になって圧死した
ものであるが、他の5人は津波により沖に流されて亡くなった。死者が出たのは、瀬棚
町の中心地で港のある本町・三本杉地区と、中歌漁港であった。

この瀬棚町に津波が襲来した時間は、瀬棚消防署の記録では、本町・三本杉地区で
22時23分頃となっている。また本町3区の奥井商店付近、および本町の東臨港道路と
港湾道路の接点でも、津波がくるのを確認している。この津波がはたして第何波だった
のかわからないが、地震発生後6分で津波が瀬棚町の市街地まで来ていることがわかる。

筆者らが話をうかがった三本杉地区の住民の話では、スナックでアルコールを飲んで
いたとき地震が起こり、割れたビンなどを片付けた後テレビをつけたら、ちょうどNH
Kの津波警報の放送が映って、「あっ渡島半島の沿岸に津波警報が出ている！」と誰か
が叫んだとたんに、窓を突き破って津波が襲ってきた、ということである。NHK札幌
放送局が津波警報を報じたのが地震7分半後の22時24分30秒であるから、このス
ナックに津波が襲ったのは地震発生から8分前後ではなかったかと思われる。

では、津波はどのようにこの地域を襲ったのか。

ここでは、津波にのまれながらも助かったある主婦の体験を紹介したい。この主婦は、
上にあげたのとは違ったスナックを経営していたが、筆者らが聞いた話を、以下にその
まま再録しておく。

「わたしはスナックをしています、あのときの地震は足の底から沸いてくるような
地震で、店のガラスがばらばら落ちました。火を使っている関係もあって、火事の心
配はしましたが、津波のことはまったく予想しなかったんです。まもなく停電になり
まして、わたしがガスの元栓を閉めて店のなかを3歩ほど動いたときに、ものすごい
音が壁のほうからして、次の瞬間に壁が破れて津波がすごいうねりで入ってきました。

わたしは逃げる間もなく水の中に漬かってしまいました。それで、口を開けたら水
を飲むと思って、口を開けないで息を耐えるだけ耐えていたんです。玄関の戸も開い
たままだから、玄関のほうから入る波と壁の破れから入る波と一緒にあって、おそら

く潮が渦巻いたと思うんですね。で、苦し紛れに両手をバタバタしていたら、右手にテレビを吊っている棒がぶつかったから、その棒にうまく掴まったんです。掴まったんだけど、頭の上の天井まで水が入っているから、ずっと水の中です。そして、苦しくなってブクブクもがきながら、両方に力を入れて自分の体を上にグーッと上げたんです。そしたら、顔が鼻のところまで水から出たんですよ。そして息をスーと吐いた。水の中にいて苦しいものだから、吐く息もすごかったと思うんです。

そうやっているうちに、もっと凄い音がして2回目の津波が来たんですよ。2回目の津波は真っ白な津波で、あれを見た時はもう駄目だと思いました。で、またすぐ手が離れてしまって、水の中にゴロンゴロンされたんですよ。とにかく泳ごうと思って全然泳げないんです、引き波が強くて。

でも、いくらか体が浮く状態になって、何かまた手元にもぶつかったら、また同じ棒に掴まったんですよ。掴まっていたんですが、頭の上のさらの上の水です。そして苦しくなってばたばたもがいているうちに、おそらく冷蔵庫だと思うんですが、ものすごい勢いで顔にぶつかってきて大怪我をしました。でも、棒を離すまいと必死になっているうちに、運よく鼻の下まで水が引いてきたんです。で、『もう助かったな』と思った瞬間に頭の中がボーっとして意識がなくなったんです。気を失って、それからがわからないんです。

そして気がついた時には、真っ暗闇の中で遠くから誰かが呼んでいる声がするんです。『誰か呼んでいる』と思っても目が開かないんですよ。真っ白い雲の中に自分の体が浮いている状態で、起きようと思っても起きれない。目を開けようと思っても目が開かない。で、誰かが呼んでいる声が、ほんとに耳元で聞こえた時にホッと目が覚めたら、真っ暗闇の中にいたんです。

当時、店にはお客さんが2人いましたが、2人とも漁師の人で、『船を沖に出す』と言って、地震の後すぐに出ていきました。でも、船に乗る暇がなくて、津波に流されて組合の冷凍庫の屋根にぶら下がったと聞いています」

なんとも凄まじい体験である。この話にもあるように、彼女は助かったものの顔に大怪我をしてしまった。筆者らが話を聞いたのは、災害からほぼ1カ月半経過した8月下旬のことだったが、まだ傷が治っておらず非常に痛々しいようだった。なお、彼女は泳ぎには相当自信があるといっていたが、おそらく水に慣れていたので津波に襲われても、上の話のように冷静でいられたのであろう。そうでなければ、落命していたかもしれない。

さて、次に、津波によって亡くなった方々の状況をみていく。瀬棚町において津波によって死者が出たのは、前述のように三本杉・本町地区と中歌漁港の2地区であった。

三本杉・本町地区では3人の犠牲者が出ている。

そのなかの一人、S. Hさん(女・77)は、海岸からすぐ近くに自宅があり、津波によって自宅が全壊し、その下敷となって圧死してしまった。また、S. Hさんの家からそれほど離れていない、やはり海岸近くに住んでいたN. Kさん(男・63)は、自宅は津波の被害がなかったものの、地震直後、船を固定するために浜へ出て、津波に流されてしまった。もう一人のS. Tさん(19)は、桧山支庁管内瀬棚郡今金町から三

本杉にキャンプに来ていて、津波に襲われた。現地での話では、S. Tさんは津波を予想して船をつないだりボートを上げにきていた漁師の人に、ちょっと手伝ってくれと頼まれて手伝っているうちに津波に襲われたということである。

また、中歌漁港でも3人の死者が出ている。瀬棚町元浦のH. Hさん（男・65）、K. Nさん（男・62）、瀬棚町大里のM. Kさん（男・35）の3人で、いずれも、浜に船を見に行行って津波に流されたようである。なお、この中歌漁港周辺では、津波による家屋の損壊はなかった（以上、表2）。

表2. 瀬棚町の死者・行方不明者と推測される状況（平成5年8月12日現在）

番号	地区名	氏名（性別・年齢）	
1	三本杉	S. H（女・77）	津波によって自宅が全壊し圧死。
2	元浦	H. H（男・65）	浜に船の様子を見に行行った？
3	元浦	K. N（男・62）	浜に船の様子を見に行行った？
4	元浦	M. K（男・35）	？
5	三本杉	S. T（男・19）	今金町からキャンプに来ていた。8日後、瀬棚港防波堤沖で発見。
6	三本杉	N. K（男・63）	自宅は被害がなかったが、船を固定するため浜に行き津波に遭う。7月23日、茂津多岬沖で発見。

このように、瀬棚町の状況をみると、なかには奥尻島と同じように、避難が自由でない高齢者も犠牲になっているが、死者のほとんどが地震後に津波の来襲を予想したにもかかわらず、船を沖に出すとか、船を固定するとか、船のようすを見に行くとかして流されてしまったことがわかる。実はこうしたケースは、10年前の日本海中部地震の被災者のなかにも少なくなかった。たとえば、日本海中部地震の奥尻島における2人の犠牲者は、津波を予想して船を固定しに行行った漁師だったということである。

もちろんこれは、漁師にとって大事な生産手段であり財産でもある船を守ろう、という気持ちから出た行為であろう。しかしもう一つ、残念ながら、津波の脅威に対する認識にも問題があるのではないかと思われる。

つまり、奥尻のケースでも見られるように、津波は木造家屋を粉砕してしまうほどの強烈な破壊力をもっている。また、深い海底では場合によってジェット機と同様のスピードをもち、陸上に遡上したときも人間の脚力ではとうてい逃げきれないほどのスピードがある。残念なことだが、こうした津波のもつエネルギーやスピードについての認識が不足していたから、津波が来ると知りながら、かれらは海に向かったのではないだろうか。いかに大切な財産とはいえ、もし巻き込まれたら命がないと十分に認識していたら、おそらくこんなに多くの人が津波の犠牲にはならなかったであろう。これは、今後の津波防災とその広報のありかたについて、大きな問題を提起する事実である。

2. 大成町の人的被害と住民の行動

次に、大成町の状況について触れていきたい。

同町は、桧山支庁管内久遠郡にあり、位置は、奥尻島の北東約27キロの対岸である。町の人口は3116人、世帯数は1245。今回の地震と津波により、死者9人、行方不明1人、重軽傷者40人、全壊家屋34棟、半壊家屋31棟、床上浸水19棟という大きな被害を出した（表3）。

表3. 大成町の被害概要（平成5年8月3日現在；自治省消防庁調べ）

	死者	行方不明者	重傷者	軽傷者	全壊世帯
大成町	9	1	2	38	34

大成町にいつどのくらいの規模の津波が襲来したかをみると、22時27分には大成町上浦港付近が津波に襲われたことを大成消防署が確認しており、また津波警報が伝達された直後に津波がきたという住民の証言があることから、おそらく、地震発生から8～10分後ではなかったかと考えられる。しかし、その確認された津波が第1波だったのか第2波なのかはわからない。というのは、地震から約10分後に車で巡回していて津波により負傷した警察官は、走っていた道路はすでに濡れていたから、襲ってきた津波はおそらく第2波ではないかと述べているし、また太田地区に住む教員の証言でも、第1波と思われる津波を目撃したのは、地震を感じてから5分かかっていなかった、と述べているからである。なお、この太田地区の津波の高さは8.1メートルに達したところもあったという。

では、大成町をどのように津波が襲ったのか。残念ながら、筆者らは大成町において住民から話を聞くことができなかった。そこで、次善の策として、当時の新聞記事からいくつかの体験談を引用しておきたい。

まず、大成町平浜の海岸べりに住む、漁業のA. Kさん（82）と奥さんのA. Yさん（76）の体験から。

この2人は津波で軽傷を負ったが、地震が発生したときにはすでに眠っており、激しい揺れによって目がさめたという。そのすぐあと、町内に住む娘さんから「津波がくる。早く逃げて」という電話があり、大事なものを探しているうちに1回目の津波が襲った。A. Kさんは、そのときのようすを「バリバリッと音がして家がきしみ、何の音だろうと思ったら、玄関がドーンと揺れ、気がつくとも腰ぐらゐまで波に沈んでいた」と話している。そして、次に来た2回目の津波では肩まで波がきて、体ごと家の中を流された。その波は少なくとも海面から5メートルはあったという。そのさい、奥さんのA. Yさんは浮かび上がった冷蔵庫に顔をぶつけた。続いて猛烈に波が引き、2人とも家の外に押し流された。その直後に家が倒れ、波が引くと3軒隣りの家は跡形もなく消え、屋根だけが道路を隔てた海側に2メートル以上も流されていたという（『朝日新聞』7月1

3日火曜日付夕刊より)。

また、大成町でもっとも被害の大きかった太田地区の小学校校長U. Kさん(57)の自宅は高台にあったが、地震の後に津波を心配して、海岸べりに住む児童を助けに行こうと、車で海岸に向かおうとした。ところが、坂の途中まで降りたところで目前に津波が迫ってきたので、急停車して引き返した。逃げるとき後ろにいた車はそのまま波にのまれてしまったという(『朝日新聞』7月13日火曜日付夕刊より)。

また、大成町役場で聞いたところでは、同小学校の別の教諭は、やはり高台から漁港に向かって車で坂を下りていたが、そこに津波が襲い、車ごと流されてしまった。その教諭は、とっさに車から出て屋根につかまり、海岸のテトラポットに飛び移って助かったという。

一方、大成町で犠牲になった方は、どういう状況で亡くなられたのだろうか。大成町において死者行方不明者が出たのは、太田・久遠・平浜の3地区である(表4)。

表4. 大成町の死者・行方不明者と推測される状況(平成5年8月12日現在)

番号	地区名	氏名(性別・年齢)	
1	太田	O. H(男・86)	津波により建物が倒壊し下敷きになる。溺死。
2	太田	O. K(女・51)	O. Hさんの息子の妻。海に流され1キロ沖合いで発見される。
3	太田	T. Y(女・71)	O. Hさんの親戚で、Oさん宅に同居していた。海に流され4日後、奥尻島で発見され、8月10日に身元が確認される。
4	太田	N. K(女・83)	自宅周辺で発見される。逃げ遅れた?
5	太田	N. S(男・56)	妻は助かる。地震の後、外に出たらしいが、はっきりしたことはわからない。
6	太田	T. Y(女・81)	自宅周辺で発見される。逃げ遅れた?
7	太田	A. M(男・58)	地震の後外に出ていたらしいが、はっきりしたことはわからない。
8	太田	S. I(女・5)	家族と避難している最中に津波に襲われ、抱かれていた母の手から離れて流される。
9	平浜	S. I(男・78)	地震の後、外に出ていた。第1波では水を被りながらも無事だったが、その後行方がわからなくなり、第2波以降の津波に襲われたようである。
10	久遠	T. H(男・60)	函館市豊川町に自宅があり土建の仕事で滞在。他の同僚は助かっている。逃げ遅れたのか、それとも船のロープを締めに行ったのかもしれない。

まず、もっとも被害の大きかった北部の太田地区であるが、ここでは、津波によって38棟の住家に被害があり、死者8人、重軽傷者22人の人的被害を生じた。

このうち、O. Hさん（86）宅では、O. Hさんと、O. Hさんの息子さんの嫁であるO. Kさん（51）、そして、親戚で同居人のT. Yさん（71）の3人が犠牲になった。O. Hさん宅は、津波によって倒壊し、O. Hさんは建物の下敷きになり、またO. KさんとT. Yさんは沖に流された。その後、O. Kさんは1キロ沖合いで発見され、長いあいだ行方不明だったT. Yさんは、約1カ月後、対岸の奥尻島で発見された。

また、同じ太田地区の犠牲者N. Kさん（83）、T. Yさん（81）の2人は自宅周辺で発見されているところから、この2人も自宅で津波に襲われたのであらうと考えられる。

一方、N. Sさん（56）宅では、奥さんは助かったが、ご主人のN. Sさんは亡くなり、自宅周辺で発見された。奥さんは自宅にいたが、ご主人は地震の後、外に出て津波に流されたという話もある。また、A. Mさん（58）も地震の後、家の外に出て津波に襲われたという。

そしてもう一人の犠牲者は、S. Iちゃん（5）である。父親のS. Tさん（41）宅には、奥さん（34）、小学6年生の長女（12）、小学3年生の長男（8）、そして次女の泉ちゃんがいる。地震当夜、S. Tさんはイカ漁に出ていた。地震の後、自宅が海岸近くにあるため、家族は津波を恐れて避難をはじめた。母親は、長女と長男を連れ、次女のS. Iちゃんを抱いて逃げていたが、家から30メートルくらい走ったところで7～8メートルの津波に襲われ、S. Iちゃんは母親の手から離れて流されてしまった。長女も長男も津波に流されたが、幸いにも2人は近くに倒れていたところを近所の人に発見されて助かった。しかし、S. Iちゃんは行方不明となり、数日後、遺体で発見されたのである（『北海道新聞』7月13日火曜日付夕刊および大成町役場における聞き取り調査より）。

次に、太田地区から南東にある久遠地区である。ここでは、住家被害は半壊1棟、一部損壊5棟、そして負傷者は軽傷1人だった。太田地区にくらべて被害は少ないが、ここでも1人の死者が出ている。

亡くなったのはT. Hさん（60）。T. Hさんは、函館から漁港の修理のために滞在していた土建関係者である。地震のとき、かれは何人かの同僚と一緒にいた。他の同僚は高台に逃げて助かったが、T. Hさんだけが津波にのまれてしまった。T. Hさんがなぜ津波の犠牲になったのかくわしいことはわからないが、船を固定するロープの仕事をしていたことから、船の様子を見に行ったら津波に襲われたのではないかとされている。

最後に、久遠地区よりもさらに南の平浜地区であるが、ここでは24棟の住家に被害があり、1人が亡くなっている。

ここで亡くなったのはS. Iさん（78）。S. Iさんは、実は、津波の第1波では助かっており、無事な姿を見た人もいた。しかしその後、行方がわからなくなり、自宅近くで遺体で発見されたのである。おそらく、第2波以降の津波に襲われて亡くなったのではないかと思われる。

このように、大成町では津波によって10人の死者（ひとり長いあいだ行方不明だっ

た)が出てしまった。また、前述したように40人の負傷者もいる。つまり、津波による人的被害は50人ということになる。これほどの大きな人的被害を出した要因はどこにあったのだろうか。

死者の状況をざっとみると、ここでも奥尻町や瀬棚町と同じように、高齢者の被災例や、船の心配から海に行き津波に襲われた人がある。しかし、大成町でとくに目立つのは、自宅あるいは自宅周辺で津波に襲われたというケースである。これはおそらく、少数の例外をのぞいて多くの人が地震後の津波をあまり警戒せず、避難しなかったためであろう。あるいは、津波に気づいて避難しようとしたが、間に合わなかったのかもしれない。大成町も、10年前の日本海中部地震によって多少の被害を受けてはいるが、奥尻町にくらべて被害はだいぶ軽微であり、過去の経験が生かされなかったのではないだろうか。

また現地では、家のなかにいたから助かったとか外に出てしまったから亡くなったとかいう話も聞いたし、同じ家のなかでも1階にいたから亡くなったとか2階にいたから助かったという話も聞いた。これは、奥尻町にくらべて、大成町を襲った津波はエネルギーも波高も小さかったことを示しているものと思われる。

なお、消防職員に案内していただいて、とくに被害が大きかった太田地区をたずねたときに思ったのだが、同地区は海岸沿いに道路が通り、その道路に沿って家並みが続いているという、漁村にはよくある地形をしている。しかし、家並みの背後にかなり高い山があって、その山に登る道は一つしかない。もちろん、これは山仕事をするための道であり、津波の避難道路ではないが、今回の災害では住民はこの道を通して避難している。そして、津波の犠牲者の多くは、この道から遠い人なのである。かれらは津波に気づいて、あるいは実際に津波がやってきて避難しようとしたが、この道に到達する前に遭難したのではないかと思われる。

もし、かれらの住居の近くに津波のとき避難できるような山道がもう一つあったなら、はたして被害はどうなったであろうか。

3. 島牧村の人的被害と住民の行動

最後は、島牧村である。

島牧村は後志支庁管内に属し、渡島半島の付け根部分、震度5を記録した寿都郡寿都町の南西、また瀬棚郡瀬棚町の北にある。人口は2533人、世帯数は888である。ここでは、7人の死者・行方不明者が生じた(表5)。

表5. 島牧村町の被害概要(平成5年9月13日現在;島牧村調べ)

	死者	行方不明者	重傷者	軽傷者	全壊世帯
島牧村	6	1	5	9	25

島牧村は海沿いに長く続いているから、津波の到達時刻には地域差があるが、早いところでは、地震発生のおよそ5分後に第1波が来たようである。とくに被害が大きかったのは、村の東側の栄磯地区から港地区あたりで、このあたりは第1波が大きかったという。次に被害の大きかったのは、村の西側の原歌地区だった。また、港地区の東側にある本日地区は津波が川に入り、水が逆流して被害を出した。

次に、この村のようすを住民の体験談から見て行くことにする。

島牧村の村役場に近い江ノ島地区に住む住職U. Kさんは、地震当夜、午後10時頃に床に就いた。それから17分後に地震が発生した。はじめはすぐにおさまると思っていたが、その次にきた揺れが大きかったという。U. Kさんはあわてて飛び起きたが、家の中の家具の転倒などはなかった。また、墓石も縦揺れだったためか1センチほどずれたけれども、倒れはしなかった。

地震の後すぐに停電になったので、U. Kさんは、懐中電灯を持って住家の隣の本堂のようすを見に行った。そして、本堂から外に出たときは、すでに家の前の国道229号線の道路が濡れており、津波の第1波が去った後であった。このときは、地震からだいたい5分くらいたっていただろうという。U. Kさんは、これは大きな津波がまたくると思い、周囲に津波がくるから逃げろと呼びかけ、何メートルか歩いたが、そのとき第2波が襲ってきた。たちまち海水が腰まで来て、U. Kさんは流木に足をさらわれて転び、海から運ばれたゴミのようなものと一緒に本堂まで流されてしまった。津波がくる直前に、U. Kさんの息子さんは、自分の勤め先のことが気になって車を走らせたが、息子さんは津波に襲われなかったという。わずかな距離でも津波が来たところと来ないところがあったということである。そしてその後、U. Kさんは役場に避難している。

以上がU. Kさんの体験である。

かれは10年前の日本海中部地震を体験しており、そのときも、大きな被害はなかったが島牧村に津波が来ており、その経験から地震の後に津波がくると思ったそうである。しかし、今回の津波は日本海中部地震の津波よりもはるかに大きかった。また、津波がくるまでもう少し余裕があると思ったが、意外に早くやってきたという。なお、江ノ島地区でも川沿いの住人は、津波を恐れて早々と自主的に避難したそうである。

別の地区の状況を新聞記事からみると、栄磯地区の西側にある豊浜地区のS. Rさん(68)は、ご主人と二人で裏山に避難した。そのさいに「山に登りながら港で船同士がぶつかったり、岩に乗り上げたりするのが見えた」そうである。また、近所の人には寝間着姿で逃げてきていたという(『朝日新聞』7月13日火曜日付夕刊より)。また、島牧村西側の千走漁港に停泊していたサルベージ船第8藤本丸は、津波によってロープが切断され、5人の乗組員を乗せたまま沖に流された。そして、船が沈みはじめたので全員海に飛び込み、壊れた船につかまって必死に泳いだという。乗組員たちは、夜明けごろになってイカ釣り漁船に助けられた(『北海道新聞』7月13日火曜日付夕刊より)。

では、津波の犠牲者はどういう状況で亡くなられたのだろうか。

前述のように、島牧村では死者が7人(後に述べるように、実質的には8人)も生じている(表6)。まず、豊浜地区大平のK. Kさん(83)とK. Yさん(74)夫妻であるが、この二人の場合は、津波ではなく、地震により、大きな岩石が崩れその下敷

きになって亡くなったものである。K. Yさんは即死だったが、K. Kさんのほうは腰から下を負傷し、病院に搬送中に亡くなった。

表 6. 島牧村の死者・行方不明者と推測される状況（平成 5 年 8 月 1 2 日現在）

番号	地区名	氏名（性別・年齢）	
1 2	豊浜 (大平)	K. S（男・83） K. Y（女・74）	地震により、大きな岩が家を直撃し、その下敷になる。夫のSさんは腰から下を負傷し病院に搬送中に死亡。妻のYさんは即死。 (津波によるものではない)
3 4 5 6	港 栄磯 原歌	M. T（男・58） M. K（女・50） S. T（男・62） M. T（女・80）	漁船を上げに浜に行って津波に遭う。夫のTさんは現在も行方不明。 漁船を上げに浜に出て津波に襲われる。 自宅にいた。高齢のため逃げられなかったようである。夫とともに津波に流されるが、夫は山に流されて助かる。Mさんは6日後、千走漁港防波堤先で発見される。
7	栄磯	S. T（男・61）	ワゴン車で避難中に津波に襲われ、波で車が住宅にぶつかり、Sさんは外に放り出され、波にさらわれる。
(8)	永豊	N. S（男・19）	島牧村職員で、1と2のKさんの様子を見に車で走行中、津波で打ち上げられた障害物にぶつかって海に転落し死亡。交通事故による死亡とみなされた。

また、島牧村役場の職員で永豊地区に住むS. Sさん（19）は、K. Kさん一家が災害にあったことを知り、そのようすを見に車で向かったが、車が津波によって打ち上げられた障害物に乗り上げ、海に転落して亡くなっている。しかし、S. Sさんの場合は交通事故による死亡とみなされ、公式には今回の地震・津波による死亡者のなかに数えられていない。

次に、港地区のM. Tさん（58）と妻のM. Kさん（50）は、地震後に津波を予想し、漁船をあげようと浜に行って津波に襲われた。また栄磯地区のS. Tさん（62）も、漁船をあげるために浜に行って津波に襲われた。このうち、M. Tさんは現在もまだ行方不明である。

一方、原歌地区のM. Tさん（80）は高齢により体が不自由なため逃げられず、津波に襲われたようである。一緒にいた夫は偶然山のほうに流されて助かったが、M. Tさんは海に流され、6日後に千走漁港の防波堤先で発見された。また、栄磯地区のS. Tさん（61）は、ワゴン車で避難中に津波にあい、波で車が住宅にぶつかり、車から放り出され波にさらわれてしまったそうである。

以上が、島牧村における津波犠牲者の内訳であるが、その特徴を考えると、ここでも

瀬棚町や大成町の場合のように、「災害弱者」である高齢者が逃げ遅れていること、および漁業従事者が船を心配して浜へ出て津波に襲われていることがわかる。また、奥尻町で見られたように、車で避難中に津波に襲われた人もいた。瀬棚町や大成町も同じであるが、島牧村では海沿いに国道229号線が通っており、その道路に沿って住家が並ぶ町並みになっており、車で避難しようとするとしてもこの海沿いの道を走る事になってしまうのである。

4. 奥尻町の被害と比較する

いままで、渡島半島において津波被害があった3地域についてみてきた。ここで、2章で触れた奥尻島の状況と比較しながら、結果をまとめてみたい。

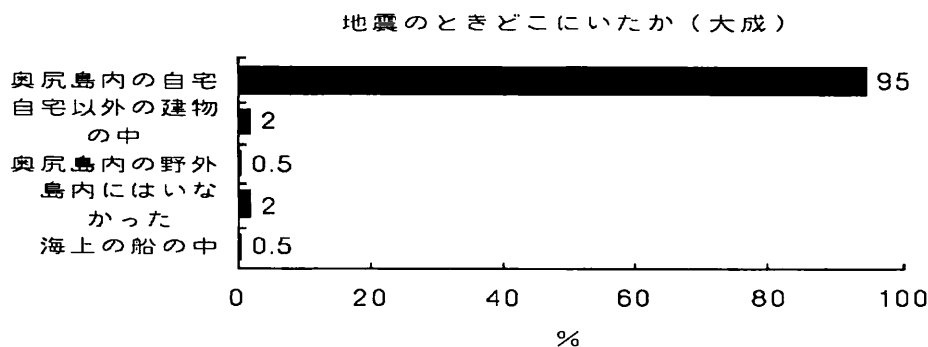
前述のように、奥尻島の青苗地区では、地震発生後5分もたたないうちに高さ10メートル規模の津波が襲い、一番南端の青苗5区のほとんどを流し去って、多くの犠牲者を出してしまった。しかし、青苗5区のしかも岬の先端に住んでいた人のなかにも助かった人が少なくない。かれらの話を聞くと、地震の揺れがおさまるやいなや直ちに高台に向かって全速力で走ったとか、なかにはパンツ一つ、あるいは風呂上がりでバスタオルを巻いた格好で避難したということである。

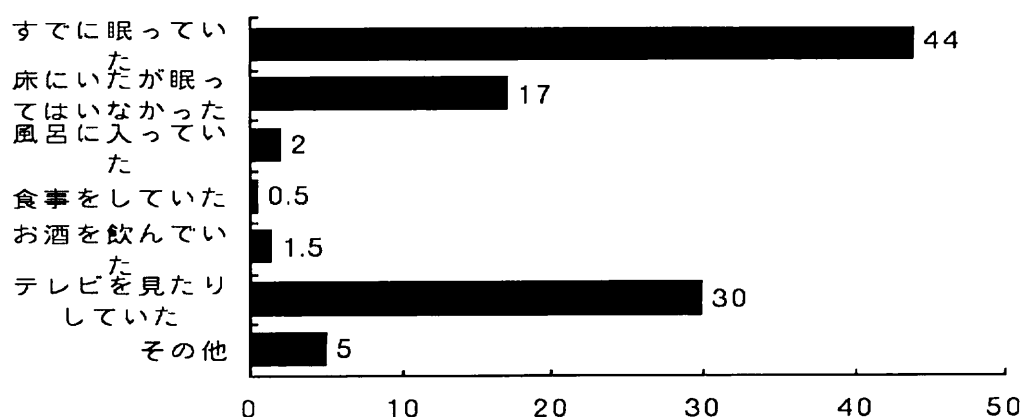
このような行動に比べると、渡島半島の地域では、津波が来るという予想も少なかったし、住民の避難行動もやや緩慢であった。

次に、そのことを、筆者らが大成町において実施したアンケート調査（回収数；大成町の海岸沿いに住む住民200人）の結果から推測していきたい。

まず、地震が起こったとき大成町の人々がどこで何をしていたかについてみると、奥尻町の場合とほとんど変わらず、多くの人はすでに自宅で床についていた（「自宅にいた」95%、「すでに眠っていた」44%、「床に入っていたが眠ってはいなかった」17%）（図1）。

図1. 地震のときどこにいたか・何をしていたか（大成町 N=200人）





しかし、地震直後の行動はかなりちがっており、奥尻町では、「家族に逃げようと声をかけた」、「高台に向けて避難した」など、津波の来襲を予想しての行動が多かったが、一方、大成町では、これらの行動は比較的少なく、前者がほぼ5人に1人（17.5%）、後者が10人に1人（8.5%）にすぎなかったのである（表7）。

表7. 地震時にとっさにしたこと（大成町 N=200人）

	N	%
あわてて外に飛び出した	71	35.5
家族に逃げようと声をかけた	35	17.5
高台に向けて避難した	17	8.5
火の始末をしようとした	46	23.0
窓や戸をあけて外の様子を見た	30	15.0
室内を片づけた	2	1.0
服を着た・着替えた	48	24.0
家具などが倒れないように押さえた	18	9.0
頑丈なものにつかまって身をささえた	3	1.5
子どもや老人・病人などを気づかった	37	18.5
机の下などに身を伏せた	10	5.0
海や船のようすを見に行った	11	5.5
何もできずぼう然としていた	23	11.5
無我夢中だったので覚えていない	6	3.0
その他	24	12.0

また、地震の直後、津波をとっさに予想したかどうかたずねると、大津波を予想した人が28.5%、津波を予想しなかった人が29.5%となっており、奥尻町にくら

べると津波を予想した割合は少ない（図2）。

さらに、津波の切迫感についても、奥尻町では津波がすぐ来ると思った人が多かったが、大成町では、「すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った」人が18.4%、「津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った」人が46.1%であり、津波の切迫感はお尻町にくらべてずっと小さくなっている（表8）。

図2. 地震直後に津波を予想したか（大成町 N=200人）

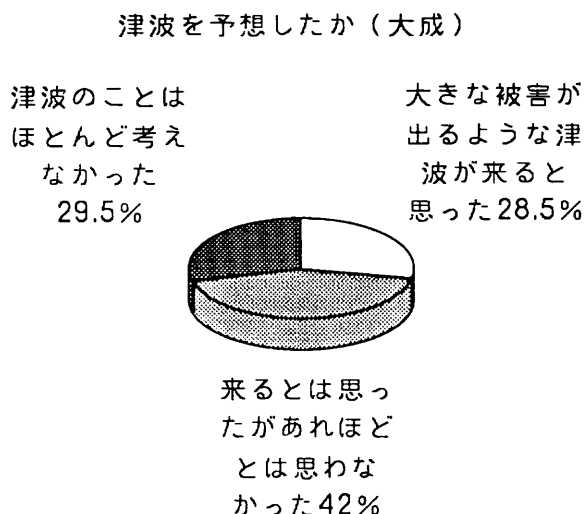


表8. 地震直後に津波を予想したか（大成町 N=141人）

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	26	18.4
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	65	46.1
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	18	12.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	11	7.8
その他	2	1.4
無回答	19	13.5

このように、地震直後にどのくらい多くの人が津波の来襲を予想したかとか、津波の来襲にどのくらい切迫感を持ったかについて、奥尻町と大成町では大きな相違があった。

こうした違いは、やはり1983年に発生した日本海中部地震における津波体験が大きく関係していると思われる。このときは、秋田県を中心に東北地方の日本海側で大きな被害を生じたが、この津波は、北海道の日本海側にも押し寄せ、奥尻島の青苗5区では家屋に被害が生じ、死傷者も出た。一方、対岸の渡島半島にも津波はやってきたが、青苗5区にくらべるとかなり小さな規模であり、ほとんど被害が出なかった。こういった経験の差から、津波に対する危機感に違いがあったといえるだろう。

このことは、アンケートの結果にも現われている。前の章で述べたように、奥尻町において津波を予想した人が多かった理由としては、10年前の日本海中部地震における被害体験が大きかった(72.4%)。一方、大成町では、10年前にも津波被害はあったが、奥尻にくらべると被害の程度が小さかったこともあって、過去の経験から地震直後の津波を予想した人は40.4%と過半数を割っていたのである(表9)。

表9. なぜ地震直後に津波が来ると思ったのか(大成町 N=141人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	57	40.4
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話を聞いていたから	21	14.9
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	55	39.0
その他	7	5.0
無回答	1	0.7

また、日本海中部地震の経験が今回の避難に役だったかという質問に対しても、奥尻町の場合は半数以上の人々が、「日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う」と答えているのに対し、大成町では23%がそういう回答をしているにすぎなかった(表10)。

次に、大成町住民の避難行動について見ていく。

大成町では回答者の73%にあたる146人が実際に避難したが、前にも触れたように、奥尻町にくらべて大成町の人々の避難行動はそれほど迅速ではない。しかし、それでも「まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた」人が10.5%、「揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた」人が43.5%と、あわせて5割を超える人々が津波にそなえて事前避難している(図3)。また、避難した人たちの平均避難時間は、地震の7.8分後となっており、津波警報が発令されたのが地震の5分後、それが放送されたのが7.5分後だったから、多くの人は津波警報が放送されたの

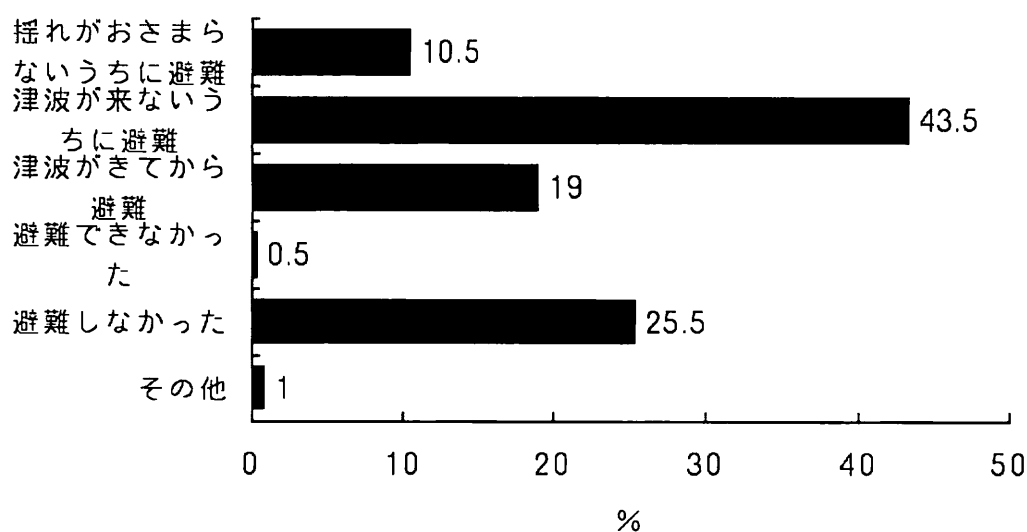
表10. 日本海中部地震の経験が避難行動に影響したか（大成町 N=200人）

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う	46	23.0
日本海中部地震の経験がかえってわざわざ、津波が来るのにまだ余裕があると思ひ避難が遅れてしまったと思う	12	6.0
日本海中部地震の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	86	43.0
日本海中部地震の経験はない	42	21.0
その他	7	3.5
無回答	7	3.5

とはほぼ同時に避難したことになり、避難はかなり早かったともいえる。

また、大成町の人々が避難を決断した理由としては、「親戚や近所の人々が避難するようにいったので」というのがもっとも多く34.9%を占め、次いで、「家族が避難しようといったので」が32.2%と続き、奥尻町で一番多かった「日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから」が28.1%と、奥尻町のほぼ半分になっている（表11）だった。大成町でも10年前の日本海中部地震の経験が生きているといえるが、避難を自分で決断したというより、人から勧められたという回答が多かったのが特徴である。

図3. 避難の時期（大成町 N=200人）



	N	%
1分後に避難	6	4.1
2分後	6	4.1
3分後	13	8.9
4分後	1	0.7
5分後	49	33.6
6分後	1	0.7
7分後	3	2.1
8分後	1	0.7
10－14分後	49	33.6
15－19分後	5	3.4
20－24分後	4	2.7
30－34分後	4	2.7
無回答	4	2.7

(平均避難時間；7.8分)

表11. 避難を決断したきっかけ (大成町 N=146人)

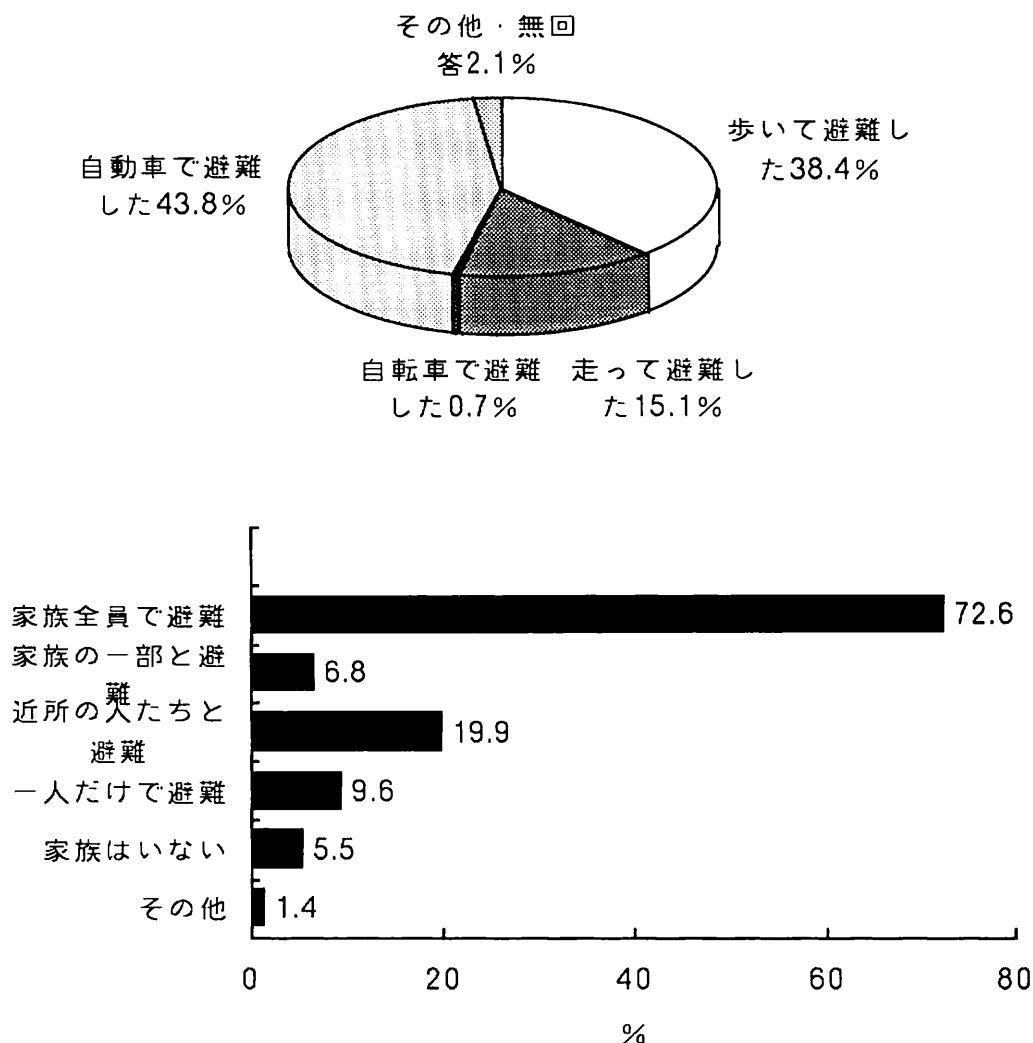
	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	41	28.1
家族が避難しようといったので	47	32.2
親戚や近所の人々が避難するようにいったので	51	34.9
テレビで津波警報を聞いたので	1	0.7
ラジオで津波警報を聞いたので	12	8.2
実際に津波に襲われたので	10	6.8
その他	18	12.3

一方、避難の手段と避難形態は奥尻の場合とさほど変わらなかった。

つまり、避難手段としては、「自動車に乗って避難した」人が43.8%と最も多かった。また避難形態も「家族全員で避難した」人が72.6%と最大だった。ただし、大成町では避難手段の2位と3位が、「歩いて避難した」(38.4%)、「走って避難した」(15.1%)と逆転している。これは、同じく津波を予想しても、大成町の人々の切迫感が小さく、その結果、避難行動もゆっくりしていたことの現われであると思われる(図4)。

さらにまた、津波が奥尻町より数分遅れて到来したこともあって、避難状況も奥尻にくらべれば深刻さの度合いは小さい(とはいえ、これだけ独立してみればやはり相当なものではあるが)。たとえば、避難時に何を持ち出したかをみると、「かなりのものを持ち出すことができた」人はさすがに少なく0.7%にすぎないが、「少しだけ持ち出

図4. どんな手段で避難したか・だれと避難したか（大成町 N=146人）



せた」人は47.9%と半数近くあるし（図5）、避難するとき「ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった」という人が32.9%あったが、「死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった」人が63.7%でずっと多くなっている（図6）。

さらに、避難するとき実際に津波に襲われたかどうかでは、「津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た」人が12%あったものの、「津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった」人が79.5%と圧倒的多数を占めていた（表12）。こうした結果は、大成町においても避難はかなり切迫していたが、奥尻町にくらべるとその度合いは小さかったことを示すものであろう。

図 5. 避難時の持ち出し品 (大成町 N=146人)

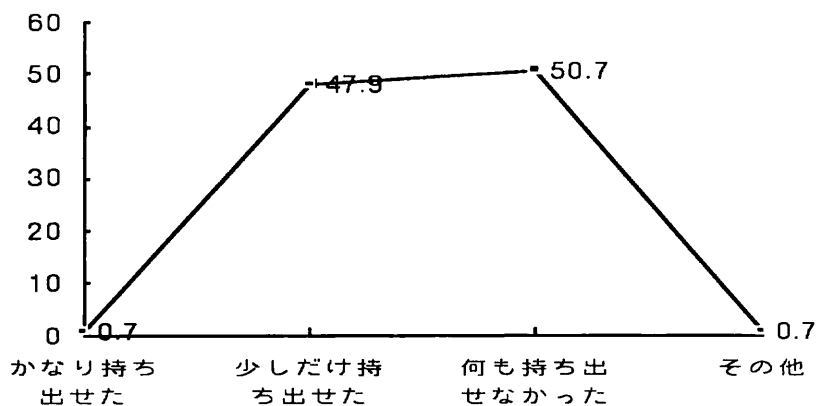


図 6. 避難時の状況 (大成町 N=146人)

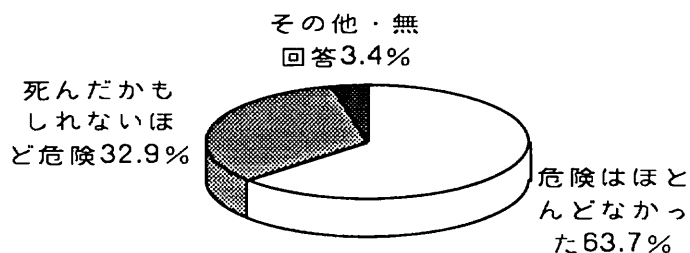


表 12. 実際に津波に襲われたかどうか (大成町 N=146人)

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	6	3.0
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.5
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	24	12.0
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	159	79.5
その他	2	1.0

以上、大成町住民へのアンケート調査を素材に、渡島半島の人々の避難行動について述べてきた。

くりかえし述べたように、今回の災害では、奥尻町の人々は地震直後に津波の来襲を予想し、とにかく懸命に避難しようとした。しかし、いろいろな理由から避難が不可能だったり避難が遅れたり、いったん避難しながらふたたび自宅に戻ったりして、大きな人的被害を出してしまった。一方、渡島半島でも、地震直後に津波を予想して避難行動を開始した人が少なくなかったが、奥尻町にくらべて、津波への切迫感はずっと小さかったし、また避難行動もややゆっくりしていた。

そしてもう一つ、渡島半島の被害に特徴的なことがあった。

それは、瀬棚町で典型的にみられた現象だったが、地震が来たら津波に注意せよということは知っていながら、船を固定するとかボートを陸揚げするとかの理由で、わざわざ海に出かけて津波の犠牲になるというケースが少なくなかった、ということである。津波は、木造家屋をばらばらに粉碎してしまうほど巨大な破壊力を持っている。したがって、津波が予想されるとき、いかに大切な財産とはいえ、船やボートを守るために海に向かうということはかなり危険な行為であり、場合によっては命取りになる。もし、多くの人が津波の持つ破壊力を十分理解していたならば、おそらくこうした行為は行わなかったにちがいない。つまり、われわれは地震と津波をむすびつける知識と同時に、津波の破壊力についての知識を持たねばならない。

大成町の人々はこの程度このことを知っていたのだろうか。

そこで、アンケートにこの質問を入れてみた。その回答をみると、「10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた」という人が14.5%、「実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた」人が28.5%と、あわせて4割がこのことを知っていた。直接の経験から津波の破壊力を知っていた人は奥尻町のほぼ半分であるが、こうした知識を持っている人の全体的割合はそんなにちがいはない。しかし、「津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった」という人が57.0%と半数を越えているのは問題といえよう（表13）。

表13. 津波の破壊力についての知識（大成町 N=200人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	29	14.5
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	57	28.5
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	114	57.0

最後に、アンケート調査の結果を要約しておく。

奥尻町の津波犠牲者は、（1）避難しなかった人・避難できなかった人、（2）歩い

て避難した人・遅れて車で避難した人、そして（３）いったん避難したのに再び戻って被害にあった人などさまざまであった。対岸の渡島半島の犠牲者にも、（１）のパターンに属する人、とくに高齢のために体の自由がきかないで避難できなかった人は少なかつた。したがって、このような「災害弱者」の問題は、とくに津波のような突発的で迅速な避難が求められる災害においては、大きな課題として考えていかねばならないものである。

しかし一方、渡島半島では、津波を予想した漁業従事者が、大切な船を守ろうとして海岸に近づき津波に襲われたというケースも多かった。このこともまた、近い過去に大被害を受けた奥尻島のような場合を別として、多くの漁業関係者が住む漁港などに津波が襲った場合、人的被害を増幅する大きな要因になると思われる。津波を予想したら、まず何をおいても高台に迅速に避難するという行動様式の徹底がぜひとも望まれるところである。

（なお、文章中に示した人口及び世帯数は平成５年６月現在の数値である）

4 章

津波警報はどう伝えられたか

前にも述べたように、北海道南西沖地震が発生したのは1993年7月12日（月曜日）の22時17分12秒であった。そしてその後、北海道・東北・北陸地方の沿岸各地に津波警報が発令された。津波の被害がもっともいちじるしかった奥尻島と渡島半島の沿岸は、津波予報区では3区に属しているが、この3区には、地震発生5分後の22時22分、札幌管区气象台が「オオツナミ」の津波警報を発令した。

この「オオツナミ」の警報は3メートル以上の大津波が予想されるときに発令されるが、1983年に起こった日本海中部地震において、東北地方の日本海沿岸にむけて発令されて以来10年ぶりのものであった。その日本海中部地震では、津波警報は地震の14分後に発令されており、今回は5分後だから、きわめて迅速に出されたといえよう。

けれども、発令された津波警報が沿岸市町村までどのように伝えられたかをみると、これにはかなり問題があったといわなければならない。とくに、札幌管区气象台から各種の行政機関を経て末端の市町村にいたる「行政ルート」には、今後の防災対策を考えると、見逃すことのできない多くの問題があった。この章では、おもにこのことを検討していきたい。

1. 津波警報とは

わが国の津波予報システムは、十勝沖地震直後の1952年4月から、正式に気象庁（当時は中央气象台）の業務として開始された。

その仕組みは全国の海域を18に分け、これを6カ所の津波予報中枢である管区气象台（札幌管区・仙台管区・東京管区・大阪管区・福岡管区・沖縄）が分担して、担当地域の津波警報（予報）を発令するというものである。また津波予報には「津波警報」と「津波注意報」の2つがあり、「津波警報」はさらに「オオツナミ（大津波）」と「ツナミ（津波）」の2種類に、「津波注意報」は「ツナミナシ」、「ツナミチュウイ（津波注意）」、「ツナミチュウイカイジョ（津波注意解除）」、「ツナミケイホウカイジョ（津波警報解除）」の4種類に分けられる。

今回発令された「オオツナミ」の警報は、昭和28（1953）年の房総半島沖地震、および昭和58（1983）年の日本海中部地震について3度目のものであった。

2. 札幌管区気象台はいかに対応したか

では、今回の地震において、3区に津波警報を発令した札幌管区気象台はどのような対応をしたのであろうか。

札幌管区気象台は、北海道全体を担当し、津波の担当海域は1区から3区である。気象台では、今回の地震が発生すると同時に、震源決定と津波の有無決定の作業に入った。これは、平成3年3月に導入された「エトス」と呼ばれる「地震津波監視システム」(E T O S = EARTHQUAKE AND TSUNAMI OBSERVATION SYSTEM)を使って行なわれた。

このシステムは、今年1月の釧路沖地震にも活躍し、そのときは地震発生約7分後に津波予報(「ツナミナシ」)を発令したが、今回は、それよりもさらに早く、地震発生5分後の22時22分、1-3区にむけて、次のような津波警報を発令した。ただし、2区の津波警報は、エトスの解析結果では「オオツナミ」と判定されたが、これは担当官の判断で即座に「ツナミ」と変更した。

表1. 札幌管区気象台が発令した津波警報・津波注意報

3区(北海道日本海側)	津波警報(オオツナミ)
2区(北海道太平洋側及び津軽海峡)	津波警報(ツナミ)
1区(北海道オホーツク海側)	津波注意報(ツナミチュウイ)

気象業務法の規定では、気象庁ならびに気象台は、津波警報を災害対策基本法によって指定された指定行政機関や指定公共機関(NHKは指定公共機関)などに通知しなければならない。

そこで管区気象台では、津波警報の発令と同時に、L-アデス(LOCAL AUTOMATIC DATA EDITING AND SWITCHING SYSTEM: 地方気象資料自動編集集中継装置)を通じ、管轄する各気象台に対して、これらの津波警報を伝達した(このL-アデスは、札幌管区気象台では、1982年3月25日から正式に運用されている。これは、ちょうど浦河沖地震の直後である)。ただし、このL-アデスの端末は、NHK札幌放送局、日本気象協会、およびウエザーニュース社などの機関にも設置されており、これらの機関では、22時22分に津波警報を受信している。

さらに同気象台では、同報通信が可能な「気象情報同報装置」(専用線同報ファックス)によって、その他の指定行政機関・指定公共機関に対して、津波警報を伝えた(ただし、NTT札幌情報営業センターだけは専用電話)。

今回の地震において、札幌管区気象台が津波警報を送信した時間とその送信先は、表2の通りである。

札幌管区気象台は、函館海洋気象台やNHK札幌放送局に対しては、警報の発令と同時にL-アデスを使って警報を伝えており、NHK札幌放送局では、2分半後の22時24分30秒にこの津波警報を放送しているが、その他の機関に対する伝達には、5～

6分もの時間がかかっていることに注意してほしい。10年前の日本海中部地震では、仙台湾気象台が警報を発令し、それを他の機関に伝えるのに1分程度しかかからなかったことを考えると、22時22分に発令した警報を27分ないし28分に伝えているというのはかなり遅いといわねばならない。せっかくすばやく警報を発令しても、それを伝えるのに5～6分もかかったのではどうしようもない。どうしてこんな状況が生じたのだろうか。

表3. 札幌管区気象台が津波警報を伝えた時刻と機関

22:22	函館海洋気象台など気象台・測候所 NHK札幌放送局 ウエザーニュース（千葉県幕張） 日本気象協会	Ｌ－アデス 同 同 同
22:27	第1管区海上保安本部 NHK札幌放送局 北海道警察本部 北海道庁 ＪＲ北海道 北海道開発局 陸上自衛隊 HBC北海道放送 STV札幌テレビ放送 石狩川開発事務所 石狩支庁 共同通信社 北海道道庁土木部 札幌市市民局 北海道電力 NTTネットワーク支社 札幌総合情報センター	同報ファックス 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
22:28	NTT札幌情報営業センター	専用電話

札幌管区気象台での聞き取りによると、22時22分に発令した津波警報は、「気象情報同報装置」（専用線同報ファクス）を使って、関係機関に通知したという。この「気象情報同報装置」は、3台のファクスと交換機・同報部分・無停電電源装置から成っている。このうち、第一のファクスは送信用で、第三のファクスは、第一ファクスから送られた警報文を受信するモニタとして利用されている。そして、第二のファクスには送信先のファクスからの受信確認証が送られてくる。しかし、この受信証はあくまでも相手ファクスが受信したという証でしかなく、受信した情報を人間が読んだという証明

にはならない。そこで、気象台ではさらに専用電話を使って、相手が送った警報文を実際に読んだかどうかを確認している。この確認作業は評価してよいと思う。

しかし、この段階で1つ重要な問題がある。それは、なぜ警報発令から伝達までに5－6分もかかってしまったのかという点である。

前述のように、札幌管区気象台ではエトスを使って、震源の決定と津波の有無を計算し、津波警報を出した。しかし、まずエトスの判定結果をプリントアウトするのに1分近くかかり、次に、この装置と、警報を他の機関に伝えるための気象情報同報装置は別の部屋にあって、そのため関係機関に送信するのに多少の時間を要した。さらに、ファクスの送信が完了し、各機関がこれをうけとるまでにやはり1分近くかかってしまった。これらの時間が、伝達の遅れの原因と考えられる。

今回の地震では、津波は早いところで地震の5分後に沿岸に到達している。一刻も早く伝えられなければならない津波警報が、管区気象台からのスタート時点で5－6分も遅れてしまうのは大きな問題といえよう。今後は、この警報伝達までに要する時間なるべく短縮すべきである。この点については、札幌管区気象台でも現在、改善策を検討しているという。

3. 防災機関における津波警報の伝達

次に、札幌管区気象台が発令した津波警報が、関係機関をどのように経由して末端の市町村にまで伝えられたかをみていきたい。

今回の災害において、被害がもっとも激しかった奥尻島と渡島半島の日本海側は北海道の桧山支庁に属する。この桧山支庁の災害対策要綱（平成4年12月修正版）によると、津波警報は図1のように伝達されることになっている。これをみると、市町村への津波警報の伝達ルートは、大きくいって、道庁経由・測候所経由・N T T経由の3ルートあるといえよう。では、それぞれのルートにおいて、どのように警報が伝達されたのだろうか。

(1) 北海道庁ルート

まず、北海道庁ルートからみていきたい。これは、札幌管区気象台→北海道庁→桧山支庁→奥尻町・瀬棚町・大成町など、というルートである。

22時27分に北海道庁に伝えられた津波警報は、都道府県防災行政無線を使ったファクスによって桧山支庁まで伝えられた。桧山支庁における聞き取りでは、22時28分に道庁から受信していることが確認できた。したがって、道庁では気象台から受信した警報を速やかに支庁に流したことになる。

```

graph LR
    A[札幌管区気象台] -- 防災無線 --> B[北海道庁]
    A -- 防災無線 --> C[檜山支庁(振興課)]
    A -- 防災無線 --> D[各町]
    A -- 消防無線 --> E[檜山広域行政組合江差消防署]
    A -- 消防無線 --> F[各消防署]
    A -- 各警察署 --> G[道警函館方面本部]
    A -- 各警察署 --> H[各警察署]
    A -- 各警察署 --> I[派出所駐在所]
    A -- 放送 --> J[放送局]
    A -- 放送 --> K[民]
    A -- 情報 --> L[NTT札幌情報案内センター]
    A -- 情報 --> M[NTT函館情報案内センター]
    A -- 海上保安 --> N[第1管区海上保安本部]
    N -- 海上保安 --> O[江差海上保安署]
    N -- 海上保安 --> P[網走海上保安署]
    O -- 海上保安 --> Q[各漁業協同組合  
港湾関係団体  
在港船舶]
    P -- 海上保安 --> Q
  
```

ここでは、2つの問題が指摘できるだろう。

では、なぜこうした情報伝達が行われたのだろうか。

- 57 -

津波情報を、22時33分、防災無線の音声連絡で各町に伝えている。ここでも情報伝達に6分の遅れがあり、この遅れの原因は定かではない。

そして、松山支庁は津波情報を受け取ったその1分後に、今度は道庁から津波警報を受信した。同支庁はこれを防災無線で送らずに、一般回線のファックスで各町に伝えたわけである。津波警報を同報無線で送らず、どうしてファックスで送ったのかについては、伝聞によると、最初は津波警報も防災無線で送ろうとしたが、警報を受信したのが津波情報をうけとった1分後だったため、ちょうど防災無線が使用中であり、やむを得ず一般回線のファックスで送ったということらしい。ただし、相手の町村がこれをうけとったかどうかの確認は取らなかったようである。津波警報は、人々の生命に直接かわる情報なので、何をおいても防災無線でこれを放送すればよかった。

また、津波警報以外の連絡についていうと、松山支庁から奥尻町役場への電話はほとんどつながらなかったようである。そこで松山支庁は、都道府県防災行政無線で連絡をとった。しかしこの防災行政無線も、周波数の関係で1カ所しか話せないのも、もっとも被害が大きかった奥尻町とつながりづなであったという。

なお、松山支庁では地震のため停電したが、自家発電が動いたので通信機器への影響はなかった。また、職員はテレビで津波警報を知って登庁しており、もっとも早い情報は放送経由のものであった。最後に、津波警報の受容と伝達に関する松山支庁の対応を、以下にまとめておく。

表3. 松山支庁の対応

22:27	江差測候所から津波情報を受信
22:28	北海道庁から防災無線ファックスで津波警報を受信
22:33	津波情報を各町に防災行政無線の一斉指令で送信・音声連絡。相手がいない場合にはテープに録音される
22:33	一般回線のファックスで各町に津波警報を発信。防災行政無線ファックスは各町にはない。停電や回線輻輳で伝わらなかった可能性が高い
22:44	江差測候所から津波警報受信（一般電話）
23:17	防災行政無線の一斉放送で各町に津波警報を送信。これは各町とも受信しているようである

では次に、松山支庁から津波情報や警報を受けた各町はどう対応したのだろうか。ここでは、奥尻町を例にとって検証してみよう。

当日の奥尻町のメモによると、地震発生直後、气象台からの情報を待たずに、独自に津波からの避難を呼びかける情報を同報無線から発している。直接に放送を担当した職員の話では、地震直後の混乱の中だったから時刻はあまり正確とはいえないが、たしか地震から3分後の22時20分頃だったとのことである。また、このときの放送記録は残っていないので、正確な呼びかけ文はないが、このときの呼びかけは、津波に警戒す

るようにという内容ではなくて、「津波が来るかもしれないから避難するように」という主旨のものだったという。同町では、この放送を3回にわたってくり返した。しかし残念ながら、後述するように、この放送を聞いた住民はおよそ18%で、比較的少数にとどまっている。

そして、「津波警報が出たから避難するように」という呼びかけは、22時31分頃、テレビで津波警報を知った職員が同報無線で行なっている。さらに33分頃には、消防署からもふたたび避難を呼びかけている。なお、奥尻町の記録では、桧山支庁から津波警報を受け取った時刻は23時10分となっている。

表5. 奥尻町役場の対応

22:10頃	同報無線で津波からの避難を呼びかけ
22:31頃	テレビで津波警報を知る。警報に基づき役場から同報無線で避難の呼びかけ
22:33頃	消防署からふたたび同報無線で避難の呼びかけ
22:10	桧山支庁より防災行政無線一斉指令受信

(2) 気象台・測候所ルート

次に、気象台・測候所ルートについて述べていきたい。これは、札幌管区気象台→函館海洋気象台→江差測候所→桧山支庁→奥尻町・瀬棚町・大成町など、というルートである。

今回の場合、津波警報を伝達するのに、このルートがもっとも時間がかかった。それはひとえに、津波警報を伝達するＬーアデスの回線が故障してしまったからである。

前述のように、札幌管区気象台は、地震発生後の5分後に津波警報を発令し、同時にＬーアデスの回線を使って、管轄の気象台・測候所とNHK札幌放送局に対し、これを伝達した。このうちNHK札幌放送局には警報はスムーズに伝わったが、函館海洋気象台→江差測候所→桧山支庁→各町村という経路では、多くの時間がかかった。このＬーアデス回線が、地震による道路決壊のために断線してしまったからである。

この断線により、Ｌーアデスは、地震直後からおよそ1時間にわたって機能を停止してしまった。NTTによれば、札幌と函館のあいだには、海底ケーブルを使った室蘭経由のルートと陸路の倶知安経由のルートの2つがある。その意味では、札幌と釧路間は二重化されていたわけで、このうち、Ｌーアデスがふくまれている気象庁の専用線は室蘭ルートにあった。ところが、強い地震による道路の崩壊とともに、函館と森のあいだの仁山で6システム中の3システムが断線し、気象庁の専用線も切断されたのである。

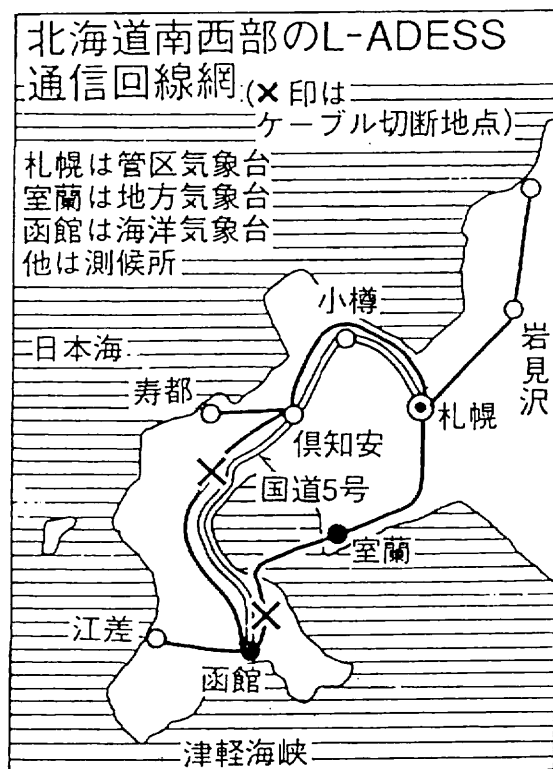
NTTでは、二ルート化された回線の一方が切断した場合は、すぐに他のルートに切り替えが行われる。けれども、今回の地震では、もうひとつの倶知安経由のルートも、国道五号線沿いの炭岱（ワラビタイ）で全回線が切断されてしまい、倶知安経由のルートに切り替えができなかった。また、電話には音声やデータを伝達する信号と、発信地・目的地（電話番号）・課金情報などを伝える制御信号の両方が必要であり、今回の場合、

気象庁回線のデータ信号は室蘭経由のルートに、また制御信号は倶知安経由のルートに収容されていた。ふつうならば、たとえルートの切り替えができなくとも、この制御信号を使って、気象庁の回線を室蘭ルートの切断されていない予備回線に自動的に切り替えることも可能だった。ところが、今回は倶知安ルートの制御信号も一緒に切断されたため、それも不可能になった。そこで、気象庁から専用回線不通の連絡を受けたNTTは、室蘭局において生きている予備回線に手動で切り替えたが、その作業に時間がかかり、結局、札幌と函館のあいだの回線の切り替えが完了したのは、津波警報が発令されたからほぼ1時間後の23時21分になったというのである（図2）。

このように、北海道南西沖地震では、災害情報の伝達メディアとしてきわめて重要な気象庁の専用回線が、地震によるケーブル切断によって大きな支障を受けた。札幌管区気象台では、津波警報を発令した22時22分頃、レーアデスの故障に気づき、ただちにNTTに連絡したが、その復旧にかなりの時間を要してしまった。その理由について、NTT災害対策室では、（1）室蘭に夜間保守者がいなかったの、職員が駆けつけるのに時間がかかった、（2）地震の影響で緊急作業が多発した、（3）室蘭での切り替え装置がなかなかうまくいかなかったため、函館から室蘭への情報伝達に時間がかかった、という3点をあげている。

そして、このレーアデスの故障のため、札幌管区気象台から所管の気象台・測候所への警報伝達は、電話やVHF無線など他の手段に頼らざるを得ず、相当の時間がかかっている。図3は、気象台・測候所が津波警報を受信した時刻を示しているが、これをみ

図2. 地震によるレーアデスの断線（「毎日新聞」1993年8月29日朝刊より）



ると、稚内・旭川・網走の各地方気象台や岩見沢・倶知安・留萌・紋別の各測候所には、津波警報発令後1－2分以内に伝達が完了している。一方、函館海洋気象台には6分後、小樽測候所には33分後、寿都測候所には18分後、江差測候所には23分後、羽幌測候所には26分後など相当の時間を要しているのである。

このように、気象台・測候所ルートでは、とくに札幌→小樽→倶知安→函館→江差のルートを通る伝達がかなり遅れてしまった。

では、Ｌ－アデスから津波警報を受信できなかった気象台・測候所はどのように対応したのだろうか。

ここでは、主に函館海洋気象台についてみていくが、函館海洋気象台では、津波警報が発令されてから6分後の22時28分に、一般電話を通じて津波警報を受け取っている。気象庁発行の『地震・津波速報』によれば、このときの状況は、「津波警報受信」ではなく「津波警報確認」となっており、札幌管区気象台から函館海洋気象台に電話があったのではなく、当然来るであろうと予想していた津波警報がなかなか来なかったため、函館海洋気象台から電話をして確認したということかもしれない。しかし、函館海洋気象台での聞き取りでは、この点は明らかにならなかった。同気象台では、その後、関係各機関に津波警報を通知したが、江差測候所にはVHF無線によって22時43分に警報を伝えている。ここでも、警報の確認から伝達までに15分もかかっていることが注目される。

表6. 函館海洋気象台の対応

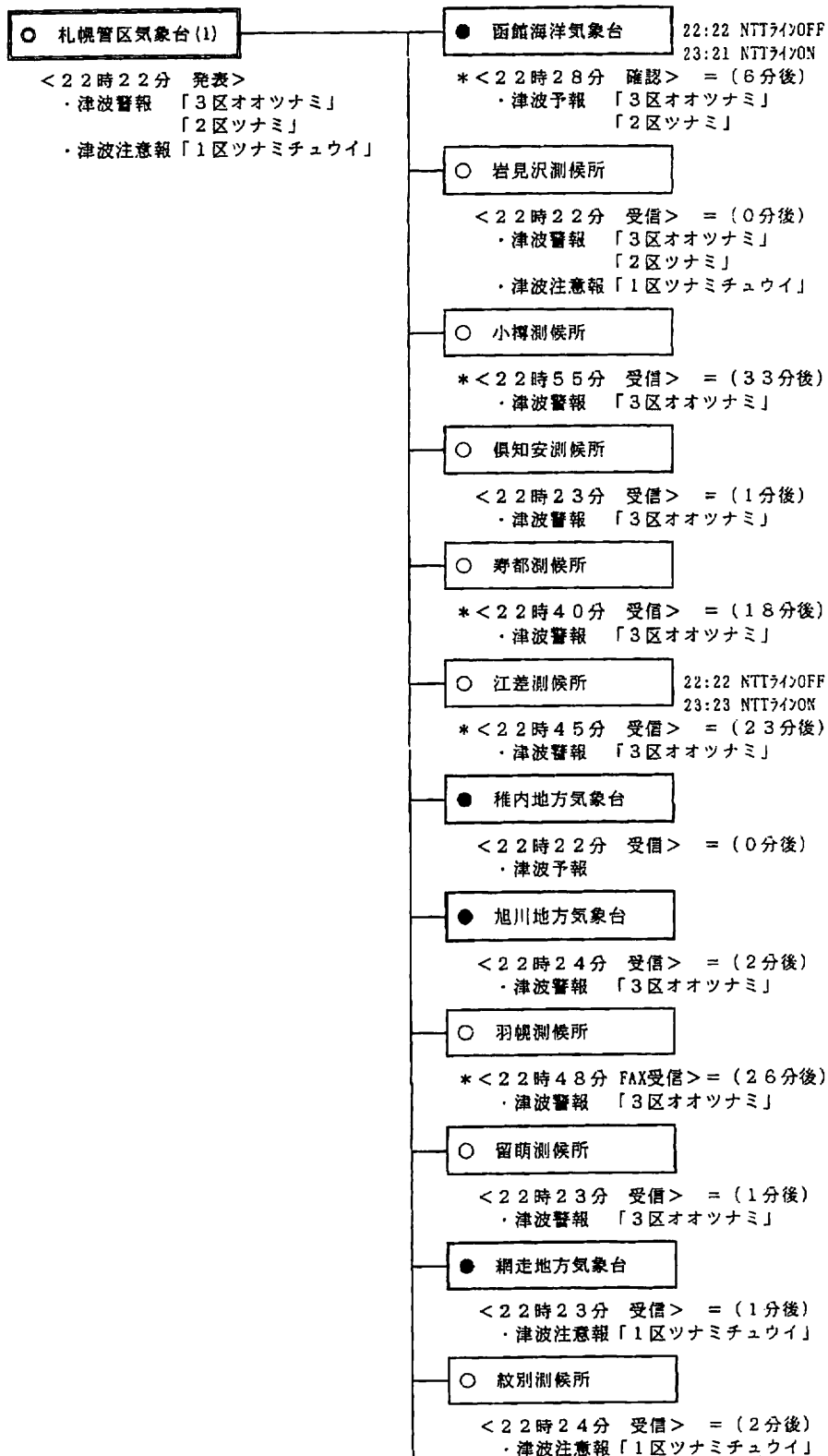
22:28	津波警報の確認（一般加入電話）
22:43	江差測候所にVHF無線で津波警報伝達

さて、ここでのポイントは2つあると思われる。その第1は、警報の確認から、これを江差測候所に伝達するのに15分も要しているということである。

前述のように、函館海洋気象台では、22時28分に一般加入電話によって札幌管区気象台から津波警報を受け取った。津波警報を伝える手段としては、Ｌ－アデスのほかにVHF無線があるが、これも必ずしもつながりやすいとはいえないし、アデスがだめとなれば一般電話だけが頼りである。同気象台では、この津波警報をNHK函館放送局や渡島支庁、函館市役所などにはすみやかに伝えている。しかし、この段階では江差測候所には伝えておらず、一段落ついてああそういえば江差にも送っておこうということ、VHFを使って警報を伝えたのが43分、ということかもしれない。

同気象台によれば、もともと江差測候所への伝達は、札幌管区気象台から直接なされるので、函館海洋気象台は直接それに関与しないのだという。ふだんＬ－アデスが正常に機能しているときには、たしかに札幌管区気象台から直接に江差測候所に伝えられるので、実際面では函館の中継は必要ないから、この認識も一理あるが、しかし、松山支庁の防災計画には函館海洋気象台から江差支庁に伝えることが明記されているので、この発言には矛盾があるということもできよう。ある意味では、Ｌ－アデスができたこと

図3. 津波警報伝達状況 (一部掲載) (株・マチケン資料より)



で、江差測候所には札幌から直接伝えられるという認識が定着し、桧山支庁の防災計画とズレが生じている。津波警報の連絡が遅れたのは、ここに理由があったようである。Ｌ－アデスに過度に頼る心理が問題ともいえるし、警報伝達の実態と防災計画とのあいだの整合性を確保することが重要だともいえよう。

第２のポイントは、函館海洋気象台から各機関への警報通知手段がばらばらだということであろう。

同気象台は、（１）予警報一斉伝達システム、（２）専用線電話、（３）Ｆネットファックス、（４）一般電話などを使って、津波警報を通知することになっている。このうち、予警報一斉伝達システムとは、専用線を使ったファックスで、地震当時はＮＨＫ函館放送局など３カ所に入っていた。また、渡島支庁など３箇所には音声の専用線電話が引かれており、一方、函館市役所・桧山支庁など５箇所にはＦネットファックスが入っていた。このＦネットはＮＴＴの専用線システムで、加入料金も高くなく、全国一律にＡ４一枚５０円で送れるし、同報システムもあるので一般企業の加入も多い。また、電話と違って一般利用者の災害時輻輳も起こりにくいと考えられるので、かなり有効な役割を期待できる。さらに、江差測候所・ＨＢＣ函館放送局・奥尻町役場などは、津波警報の通知先にリストアップされているとはいうものの、一般加入電話による連絡体制であった。これら多くの連絡手段をそれぞれの通知先に分けて使うのは時間もかかるし、間違いも起こりうる。警報伝達の容易さを考えれば、もっと統一的な連絡手段を用いる必要があると思われる。そのさい、災害時の情報連絡に適しているのは、おそらく予警報一斉伝達システム、専用線電話、Ｆネットファックス、一般加入電話の順になると思われるので、今後は、なるべく信頼性の高い手段に切り替えていくことも考慮すべきであろう。

以上が、函館海洋気象台の対応の概要であるが、最後に、江差測候所の対応について、以下のような表だけをあげておきたい。

表 7. 江差測候所の対応

22:27	津波情報発表（震度４以上の場合に自動的に出すもの）
22:44	函館海洋気象台からＶＨＦ無線で津波警報を受信
22:45	専用線電話で桧山支庁、４５分に江差消防署に連絡
23:19	アデス回復

なお、江差測候所の聞き取りの過程で気づいたことであるが、Ｌ－アデスの回線は、それが切断された（故障した）とき、その切断（故障）を知らせる信号がないようである。つまり、江差測候所には地震によってＬ－アデスの回線が切れたため、２３時１９分まで津波警報をふくむさまざまな情報が送られてこなかったが、回線が切れた表示が出ないので異常に気がつかず、情報を待っている状態だったという。これはいわば「赤信号」に頼ったシステムといえよう。警報が来たときにはアラームが鳴るが、システムが壊れたときには何も鳴らないというわけである。もちろん、こうした仕組みは重要で

あるが、もう一つ、Ｌ－アデスが故障したときに異常事態を知らせるような、いわば「青信号」のシステムをこれに付加する必要があると思われる。

(3) ＮＴＴルート

他の多くの警報も同じであるが、津波警報はとくに迅速で確実な伝達が要求されるため、伝達の多様性がはかられている。つまり、できるだけ多くのメディアを使って市民に警報を伝える仕組みができており、そのなかではＮＴＴによる警報の伝達も重要な役割を果たしている。現に、いままでたびたび触れてきた日本海中部地震では、放送をのぞいて、このＮＴＴルートが多くの地域でもっとも早かったという調査結果がある。

今回の北海道南西沖地震でも、ＮＴＴは一般電話を使って、沿岸市町村に津波警報を通知した。

表８が、その通知先と通知時刻であるが、これをみて気づくのは、ＮＴＴ札幌情報営業（案内）センターから函館情報営業（案内）センターまでが４分（伝達が早いとはいいがたいが前述の他の機関とくらべればまあまあといったところ）かかっており、それから、各町に伝達するのに１４－１５分程度かかっている。時間的にはあまり早くないが、札幌管区気象台の発信から、（乙部町をのぞいて）おおむね２０分以内に伝達されていることをみると、比較的スムーズに伝達されたといえるだろう。ただし、問題なのは、警報の通知をするのに相手がしばしば話中だった、ということである。１０年前の日本海中部地震当時は公社だったＮＴＴも、いまや民間会社であり、そのＮＴＴだけが津波警報の伝達を義務づけられていて、他のＮＣＣには何の義務もないという事態も再考に値するが、できれば津波警報のような緊急を要する情報を伝える場合、話中の電話にも強制的に割り込めるような仕組みができないものであろうか。

表８．ＮＴＴの対応

２２：２８	ＮＴＴ札幌情報営業センター	札幌管区気象台より専用電話で津波警報を受信
２２：３２	函館情報営業センター	一般加入電話で津波警報を受信
２２：４４	奥尻町役場に話中３回後伝達	（一般電話）
２２：４５	大成町役場に話中２回後伝達	（一般電話）
２２：４５	熊石町役場に話中４回後伝達	（一般電話）
２２：４６	江差町役場に話中３回後伝達	（一般電話）
２２：４６	瀬棚町役場に話中３回後伝達	（一般電話）
２３：００	乙部町役場に話中４回後伝達	（一般電話）

(4) 防災行政無線の自動接続の推進

このように、北海道南西沖地震では、津波警報は地震の５分後と、いままでにないほ

ど迅速に発令された。そして後述するように、NHK札幌放送局では、札幌管区気象台からＬ－アデスを通じて入手した津波警報を、その２分半後、つまり地震の７分半後に緊急放送した。これもまた異例の早さであった。１０年前の日本海中部地震では、津波警報が発令されたのが地震の１４分後、これが放送されたのがその５分後で、警報が市民に届くまでに１９分かかったのとくらべれば、所要時間は半分以下になっているのである。

しかし残念ながら、いままで述べてきたように、津波警報の発令までは迅速だったが、放送以外は、これを末端市町村まで伝えるのに相当の時間を要している。この状態をなんとか改善できないものであろうか。

この点について、筆者らはもう１０年近く前から、「防災行政無線の自動接続」ということを主張してきた。

そのきっかけは、たびたび述べてきた１０年前の日本海中部地震であった。この地震は、１９８３年５月２６日１２時００分に発生したが、仙台管区気象台が東北地方の日本海沿岸にむけて「オオツナミ」の津波警報を発令したのが１２時１４分であった。そして、今回と同じように、この津波警報が防災機関のあいだをリレー式に伝わっていった。

たとえば、もっとも被害が大きかった秋田県能代市をみると、津波警報は「ＮＴＴ」ルートと「警察」ルートの２つから伝えられた。

つまり、仙台管区気象台→ＮＴＴ仙台市外局→秋田電報電話局→能代電報電話局→能代市役所というルートと、仙台管区気象台→東北管区警察局→秋田県警察本部→能代警察署→能代市役所というルートである。しかし、こうした警報伝達にどのくらい時間がかかったかという点、ＮＴＴルートでは能代市役所に警報が伝わったのが１２時３０分だから１６分かかっているし、警察ルートでは１２時４０分だから２６分かかっているのである。今回の北海道南西沖地震は夜間に発生したということもあって、もっと時間がかかった地域もあるが、要するに、Ａ→Ｂ→Ｃ→Ｄ→Ｅというようにリレー式に伝達し、しかもその中継点に人間が介在するというシステム自体が、迅速な伝達を必要とする津波警報の伝達には向いていないのである。

しかも、こうしたシステムにはもう一つの難点がある。つまり、このシステムでは、伝達の中継点で何らかの支障があると、それから先には伝えられないということである。これも、日本海中部地震のとき、実際に秋田県において発生してしまった。

秋田県の地域防災計画では、津波警報は、先に述べたＮＴＴルートや警察ルートとともに、「都道府県ルート」でも伝えられることになっていた。つまり、仙台管区気象台→秋田地方気象台→秋田県庁→県内市町村というルートも正規の伝達ルートであった。ところが日本海中部地震では、秋田地方気象台から秋田県庁までは津波警報がスムーズに伝えられたが、それ以後は伝わらないという出来事があった。地震のために混乱した職員の見落としといわれるが、県は市町村にこれを伝えなかったのである。

もちろん、突然の大災害であるから、職員が狼狽したり混乱したりしてミスを行っても、それをいちがいに責めるわけにはいかない。むしろ、迅速で確実な伝達が必要な津波警報を、時間がかかりまたミスを行きやすいようなリレー方式で送るという、その伝

達システム自体が問題なのである。

こうした事態を解決する一つの有効な方法が、「防災行政無線の自動接続」である。現在、わが国の防災通信は、国の機関をむすぶ中央防災無線、国と都道府県をむすぶ消防防災無線、都道府県と市町村をむすぶ都道府県防災行政無線、そして市町村と住民をむすぶ市町村防災行政無線と、主として無線網に頼っており、警報などの重要な情報はすべてこの無線網を通じて末端まで伝えられている。しかし現在のところ、これらの無線網は相互に独立して機能しており、有機的に関連してはいない。そこで、これらの無線網を相互接続したらどうかということである。

技術的には、中央防災無線から市町村防災行政無線まで、すべて接続することも可能であり、そうすれば、中央官庁の一室で放送した音声は日本全国の同報無線のスピーカーから聞こえることも可能になる。しかし、日本全国に影響を及ぼすような大災害は考えにくいので、せめて都道府県防災行政無線と市町村防災行政無線を接続したらどうだろう、というのが筆者らの主張であった。

つまり、市町村の庁舎にある都道府県防災行政無線の端末と、市町村防災行政無線の親局とを接続するのである。そうすれば、津波警報が都道府県に届いたとき、担当者が都道府県防災行政無線のマイクに向かって「ただいま、津波警報が発令されました」と放送すれば、人手をいっさい介さずに、市町村に散在している市町村防災行政無線の子局（同報無線）のスピーカーからその声が出る。これが実現すれば、災害情報の伝達に時間がかかるという問題と、伝達の過程におけるヒューマン・エラーの発生という問題が、いっきょに解決できるであろう。そして、もしこれに気象台が加わり、都道府県防災行政無線の端末が地方気象台にあったら、気象台→都道府県→市町村の伝達時間はもっと早くなるであろう。

津波警報の伝達の迅速化には、このような方法がある。そして、このことは筆者らの指摘ばかりではなく、現に、1986年2月、郵政省が「防災行政用無線局の免許方針等の改正」という文書のなかで、次のようなかたちで認めているところでもある。

「（１）都道府県の端末局と市町村の同報親局との接続を認める。

従来、都道府県が市町村端末機関に設置する端末局と市町村が独自に設置する無線局とは、相互に接続できないものであることとしていたが、気象台等からの津波警報等を迅速的確に住民に伝達するうえで必要と判断されるならば接続できることとするため従来の制限を削除する」

この文書では、都道府県と市町村の接続は認めているものの、国の機関である気象台から直接住民に伝えることは認められていない点が、やや不十分と思うが、しかし問題は、それから7年あまり経った現在、いまだにどの都道府県もこの自動接続の実施に踏み切っていないことである。

その背景には、「災害対策基本法」によれば、住民に対する責務という点で、都道府県と市町村は異なっており、都道府県から住民に直接よびかけるのは無理がある。ところが、防災無線を接続すると、都道府県のよびかけが住民に直接届くことになり、これは現在の法体系になじまないのではないかと、という問題がある。とくに、災害が発生したとき、あるいは災害の発生する恐れがあるときに与えられる避難の勧告・指示は市町村

長の権限ということになっており、無線網を接続した場合にも都道府県が出すことはできないであろう。また、無線網を接続した場合、もし万が一事故があったら、都道府県が責任を負うのか市町村が負うのか、その責任の範囲がはっきりしなくなる、ということもあろう。おそらく、そんなところが無線の自動接続が普及しない大きな要因になっていると思われる。

しかし、10年前に続いて今回も津波警報の伝達が、（放送以外は）こんなに遅れてしまったことを考えると、もう一度この問題をじっくり検討することが必要ではないだろうか。津波の危険性が高いどこかの自治体で、まず自動接続の先鞭をつけてくれることを強く期待している。

4. 放送はどう対応したかーNHKの場合

次に、放送局が津波警報をどのように放送したか、についてみていきたい。ただし、報告は主に北海道内の放送局に限定することになる。

北海道には、テレビ・ラジオ併設局としてNHK、HBC北海道放送（テレビはJNNに加盟・東京放送系列）、およびSTV札幌テレビ放送（テレビはNNNに加盟・日本テレビ系列）の3局がある。また、テレビ単営局としてHTB北海道テレビ放送（ANNに加盟・テレビ朝日系列）、UHB北海道文化放送（FNNに加盟・フジテレビ系列）、およびTVHテレビ北海道（テレビ東京系列）の3局がある（以上、開局順）。

筆者らの調査では、このうちNHK、HBC、STV、HTB、UHBの5局で地震当日の対応についてうかがった。

地震発生時刻の22時17分という時間は、どの局も通常は局舎内にいる人間は少なく、局によってはゼロというところもあったが、この地震が発生した7月12日はちょうど総選挙の前であり、局舎に残っている職員はいつもより多く、取材活動をしている記者もいた。

（1）NHK札幌放送局

まず、NHKからスタートする。

地震が起こったとき、NHK札幌放送局では、総合テレビにおいて、全国ネットの番組「プライム10 愛した人はエイズだった」の再放送を入中で流していた（ちなみにこの時間、東京と大阪では衆議院議員選挙の政見放送を流していた）。ふつうならこの時間は、泊まり体制と呼ばれるニュースデスク1、記者1、アナウンサー1、技術4のスタッフしかいないが、総選挙前だったため、さらにデスクが2人、記者が4人いたという。

地震が起こって、札幌放送局内のNHK震度計が震度3を記録。

そしてまず、22時18分45秒、NHK総合テレビの画面に、「ただいま地震がありました。詳しい情報が入り次第お伝えします」という最初のニュース速報（テロップ）

が札幌管中で放送された。くりかえし述べたように、地震の発生は22時17分12秒だから、この速報は、札幌で地震を感じてすぐ放送されたものと考えられる。

その後、Ｌ－アデスなどによって各地の震度が入りはじめ、「地震速報／震度4 函館 倶知安／震度3 岩見沢」という、最初の地震速報（震度／テロップ）が画面に現れたのは22時19分55秒であった。

そして、その2分半後の22時22分30秒、札幌管区气象台からＬ－アデスによって津波警報が送られてきた。これはきわめて重要な情報であるから、札幌放送局では、その確認にホットライン（専用電話）を使用したという。

また、放送のほうは「寿都 震度5」の情報を受けて番組の中断を決定し、22時22分53秒に総合テレビ、ラジオ第1、FMを中断して地震関係の放送を始めた。総合テレビはアナウンサーが顔を出した放送であった。これは、札幌局の内部規定で「震度5で3波中断（原則）」と決まっており、この段階で通常の番組を中断し、地震関係の放送をしていたことが、その後の津波警報の放送を早くさせたといえよう。

なお、ラジオ第1放送は、それより33秒早い22時22分20秒から、放送に上乗せ（本放送の音量を下げ、その上に別のアナウンスをかぶせる方法）して地震速報を伝え、22時22分53秒にテレビ音声に切り替えた。

そして同放送局では、津波警報の確認を終え、22時24分27秒、「3区 大津波警報／2区 津波警報／1区 津波注意報」という津波警報の第1報を伝えた。総合テレビはノルマル（警報・注意報画面）で地図付きの放送となった。

このように、NHK札幌放送局は、津波警報の入電から1分57秒後にこれを放送しており、現在の体制では限界に近い早さだったといえよう。これは前述のように、震度5の情報が入った段階で番組を中断していたため、速やかな放送ができたという面も否定できない。

この点は、1月の釧路沖地震の教訓が生かされた結果であろう。

釧路沖地震の教訓から、北海道内で震度5の地震が観測された場合、通常番組を中断して北海道内に地震情報を放送するように決められていた。釧路沖地震のときは北海道ローカルの放送が立ち遅れてしまったが、今回は、東京が全中で番組を中断してニュースを流す7分前に、札幌管中で地震関係のニュースを流しており、このことが結果的に津波警報の伝達を早めたのである。もっとも、釧路沖地震は休日の夜に発生したのに対し、今回は、夜とはいえ総選挙の前ということで、ふつうより職員の数が多かったことも幸いしたのであろう。

そして、同局は22時27分、ふたたび札幌管区气象台から気象情報同報装置によって津波警報を受信。次いで、22時28分15秒、札幌管中で「緊急警報放送」を実施した。これは、5波（総合テレビ、教育テレビ、ラジオ第1、ラジオ第2、FM）を使って実施したものである。この緊急警報放送は22時29分31秒に終了した。その直後の22時29分45秒、東京からの全中（全国中継）で7波一斉（総合テレビ、教育テレビ、ラジオ第1、ラジオ第2、FM、衛星第1、衛星第2）のノルマル臨時ニュースをQF信号によって放送。同時にふたたび緊急警報放送を行った。

そして22時33分05秒、緊急警報放送を終了したものの、これ以降、地震関係の

ニュースが翌日まで連続放送された。総合テレビでいえば、地震関係のニュースは13日午前5時57分から3分間の気象情報をはさみ、午前6時からの定時ニュース「NHKニュース おはよう日本」に引き継がれ、午前8時15分からの連続テレビ小説「ええによほ（第86回）」でいったん中断されるまでの約10時間、連続放送されたのである。各地に出ていた津波に関する警報・注意報は13日午前7時に解除され、ほぼ同時に、NHKは「NHKニュース おはよう日本」の中でそのことを伝えている。つまり、津波警報発令から解除まで、NHKはほとんど休みなしに地震関係のニュースを放送したことになる。

地震発生から東京からの緊急警報放送までの対応をまとめると次のようになる。

22:17' 12	地震発生
22:18' 45	速報（スーパー）「ただいま北海道で地震を感じました。情報が入りしだいお伝えします」
22:19' 55	地震速報（スーパー）・各地の震度 「震度4＝函館・倶知安 震度3＝岩見沢」
22:21' 20	地震速報（スーパー）・各地の震度 「震度5＝寿都 震度4＝函館・倶知安 震度3＝留萌・札幌・岩見沢」
22:22' 20	ラジオ第1放送で地震情報を上乗せで放送
22:22' 30	「津波警報」をLーアデスで受信
22:22' 53	札幌管中3波（GTV、R1、FM）中断。アナバス（アナウンサー顔出し）で地震情報を放送
22:24' 27	「津波警報」第1報 GTVはノルマル（警報・注意報画面）
22:28' 15	緊急警報放送札幌管中5波（GTV、ETV、R1、R2、FM）で放送
22:29' 31	緊急警報放送 終了信号
22:29' 45	緊急警報放送 東京から全中7波一斉（GTV、ETV、R1、R2、FM、S1、S2） QF信号付で「津波警報」を放送
22:33' 05	全中 緊急警報放送終了

（2）津波警報放送の問題点

では、実際の放送内容はどのようなものだったのだろうか。ここでは、筆者らが気づきたいいくつかの点に触れておこうと思う。

まず、津波警報の伝達についての問題である。

今回の津波警報放送で改善された点は、これまでの気象台から送られて来る「警報文」を忠実に伝えるのをやめて、放送のさい（余計なものと思われる）「前置き」を省略し

たことであろう。

これまでの津波警報の放送は、発令機関と発令海域（番号）を述べて、次に本文の警報文を言うかたちであった。たとえば、1983年の「日本海中部地震」のさいは、NHK東京からの「津波警報」は次のように伝えられた。

1983年5月26日12時19分 NHK全中5波一斉臨時ニュース

「12:19'00

津波警報をお伝えします。

仙台管区気象台午後0時14分発表です。5区に大津波の警報が出ました。

津波警報をお伝えします。

東北地方の日本海沿岸と津軽海峡方面に大津波の警報が出ました。東北地方の日本海沿岸と津軽海峡方面に大津波が来襲し大きな災害が起こる恐れがあります。予想される津波の高さは高いところで平常の海面より3m以上、場所によっては非常に高くなるところがあります。その他の所でも1m位に達する見込みですから、厳重に警戒して下さい。

12:21'10

次に3区の津波警報です。

北海道の日本海沿岸に津波警報を発令しました。北海道の宗谷岬北端から西の宗谷支庁、後志支庁、桧山支庁、白神岬南端より西の渡島支庁管内の日本海沿岸に津波が予想されます。（以下略）」

一般に、緊急情報を伝える場合、「どの管区気象台」が「いつ」出したかということは二の次である。また、気象庁内で使われる「1区」などの区分表示も、一般住民にとってはわかりにくいものであり、それよりも「具体的にどこ」ということをはっきりと伝えることが先決になる。

今回は、この点が改善されており、たとえば東京からの全中放送では、以下のように伝えられている。

1993年7月12日22時29分 NHK全中7波一斉臨時ニュース

「22:30'05

北海道の太平洋の沿岸に津波警報が出ました。

北海道の太平洋の沿岸に津波警報が出ました。ごらんの沿岸に津波警報が出ています。

北海道の太平洋の沿岸に津波警報が出ています。北海道の太平洋沿岸には大津波が来襲します。予想される津波の高さは高いところでおよそ3メートル以上に達する見込みですから、今までに津波の被害を受けたようなところや、特に津波が大きくなりやすいようなところでは厳重な警戒が必要です。そのほかのところでも1メートル位に達する見込みですから警戒が必要です。

それから、北海道のオホーツク海の沿岸でも津波があるかもしれません。津波の高

さは高いところでも数十センチメートル程度の見込みです。

22:31'20

くりかえします。北海道の太平洋と日本海の沿岸に津波警報が出ました。

くりかえします。北海道から東北地方にかけての日本海沿岸に大津波警報が出ました。

くりかえします。北海道から東北地方にかけての日本海沿岸に大津波警報が出ました。予想される津波の高さは高いところでおおよそ3メートル以上に達する見込みですから、今までに津波の被害を受けたようなところや、特に津波が大きくなりやすいようなところでは厳重な警戒が必要です。そのほかのところでも1メートル位に達する見込みですから警戒が必要です。また、北海道から東北地方の太平洋沿岸に津波警報が出ました。予想される津波の高さは、高いところではおおよそ2メートルに達する見込みですから、特に津波が大きくなりやすいところでは警戒を要します・・
(以下略)」

このように、今回の放送文は、日本海中部地震のときのように、「どこの気象台が発令したか」とか「3区」「5区」といった予報区の番号を使わず、「北海道の太平洋の沿岸」などの具体的な地域を明示し、津波警報を伝えている。

また、日本海中部地震のときは、東北地方と北海道とを分けてそれぞれの警報を伝えていた。これは、北海道の担当は札幌管区気象台、東北地方は仙台管区気象台と区域の担当が違うことが要因であろう。そのため、北海道の日本海側の津波警報の放送が、おおよそ2分遅れてしまうことになった。しかし、今回は「北海道から東北地方にかけての日本海沿岸に」という具合に、津波警報の出ている地域をまとめて報じている。こういった改善は評価できる点であろう。

しかし、今回の津波警報の放送について、次のような問題点も指摘できるのではないだろうか。

というのは、いち早く臨時ニュースに切り替えたのはよかったが、放送開始時に肝心の津波警報の内容が迅速かつ正確には伝わっていないのである。

まず、東京からの全中放送のはじまりのさい、「津波警報」というタイトルの表示が約20秒間も続いていた。この表示は長すぎるのではないだろうか。

釧路沖地震のさいの臨時ニュースでは、「地震情報」のタイトルがすぐに終わり(約2秒間)、7波一斉の合図であるチャイムが鳴り終わる前に、すでにアナウンサーが情報を伝えていた。もっとも、今回は緊急警報放送による放送だったため、その関係があったのかもしれないが、「津波警報」のタイトルを20秒間流し、「津波警報」の文字を強調して、肝心の「どの地域に発令されたのか」という情報が20秒も遅れたのは、本末転倒といえるかもしれない。

そして、今回の津波のなかでもっとも警戒すべき「北海道日本海側の大津波警報」が、地図表示上では伝えられていながら、アナウンサーが口頭でその情報を伝えるのに時間がかかり、アナウンサーが口頭で津波警報に言及したのは、実に放送開始から1分35秒後のことだったのである。そのあいだは情報が錯綜していたのだろうが、「北海道の

太平洋沿岸に津波警報」と第1に伝え、しかも「太平洋沿岸に大津波」と間違った情報が流れている。このときには、津波予報の地図の表示には、すでに北海道の日本海沿岸に津波警報が示されているが、しかし、この段階では7波一斉の放送であり、ラジオの聴取者もいるのである。したがって、ラジオを聞いていた人には1分35秒間、日本海側の津波警報が知らされていなかったことになる。

また、その後に出された津波注意報や警報はかなり速く伝わってはいるものの、まず、それが地図に表示され、それから1～2分してアナウンスしている。たとえば、13日0時12分、気象庁は新潟県から福井県までの沿岸（6区・10区）に対する津波注意報を津波警報に切り替えているが、地図表示には0時12分55秒に「津波警報」表示がされているものの、口頭で伝えたのは0時16分で、実に3分近くの差があった。おそらくこれは、地図はアデスと直結しているためすぐに表示されるが、アナウンサーのコメントは確認をとったり原稿を作成するために、どうしても時間がかかってしまうということであろう。この点については、確認作業を簡略したり、地図表示を読み取って伝え、原稿作成の時間をなくすなどで、すこしでも時間の短縮を考えていくことが望まれる。

また、アナウンサーの発言を子細にみていくと、「ごらんの沿岸に」と伝えているなど、ラジオ聴取者には理解できない表現もあった。今回の奥尻町のように、被災して停電になっている地域ではテレビの視聴が不可能な人が多いので、ラジオ聴取者のことも考慮した放送を心がけていかなければならないのではないだろうか。

それから、「津波警報」の内容を説明するさいに、「高いところで3メートル以上」とか「1メートル程度」という表現を使っているが、これも再考の必要があるだろう。気象台が発表する予報文には、「オオツナミ」の警報が「高いところで約3メートル」、「ツナミ」が「高いところで約2メートル」と明示されており、これに基づいて放送文が作られたようであるが、今回の地震による津波は、高いところでは30メートルに達したところもあり、「3メートル以上」と表現しているとはいえ、その格差が大きすぎる。

また、「1メートル」とか「3メートル」の波というと、その情報を受け取る人々は「たいしたことはない」というイメージを持ちやすい。しかしもちろん、台風などで海が荒れた場合の1メートルの波と、津波による1メートルの波では、同じ1メートルでも、そのエネルギーは津波のほうがはるかに強い。しかし、そういう津波の破壊力を知らしめるような表現は見当たらなかった。

さらにまた、「今までに津波の被害の受けたようなところや特に津波が大きくなりやすいところでは厳重な警戒を要します」という表現も、一考を要するかもしれない。これでは、「これまで津波の被害を受けていないところは津波に対する警戒をそれほどしなくてもよい」と受けとられてしまう可能性があるからである。

当然のことながら、津波警報を伝える場合は「人々に危険を認知させること」が大きな目的になる。したがって、津波の高さを明示することと同時に、津波の破壊力やスピードを強調することが大事であり、また、「どんな地域が特に危険か」ということもたしかに大切ではあるが、一方では、「海に面しているところはすべて津波の危険性があ

る」ということを人々に認識させることも大事なことであろう。

このことは、津波警報の放送文の課題であると同時に、気象台の予報文を見直す必要性を示しているのではないだろうか。

それから、NHKの場合、津波警報・注意報を伝える地図の表示は「津波警報＝赤」「津波注意報＝黄」の２種類しかなく、「オオツナミ」と「ツナミ」の区別がつかなかった。気象台の予報文では「ツナミ」も「オオツナミ」も「津波警報」に分類されており、「津波警報」も「大津波警報」もどちらも警戒をしなければならないものであるが、表示する場合には、もっと明確に示す必要があると思われる。ただしその後、NHKでは、「オオツナミ」の警報が出た場合、警報の赤ラインに斜線を入れることになった。

次に、津波警報伝達後の放送の問題点にも若干触れておきたい。

この点で第１に言っておくべきなのは、津波の到達予想時刻と検潮所の波高を表示したことであらう。

今回の災害では、各地における津波到達予想時刻や、実際の到達時刻がしばしば放送された。津波到達予想時刻についていえば、地震から１９分後の２２時４６分に、「さきほど、札幌管区気象台から北海道南西沖の地震による津波到達予想時刻が発表されました」という前置きで、函館１１時２０分、稚内１１時５０分、浦河１３日０時００分、釧路０時４０分、根室０時５０分という情報が流されているし、２２時５６分過ぎには、以下のような各地の到達予想時間が、フリップで放送されている。

「津波の到達予想時刻」

函館 １２日２３時２０分
稚内 １２日２３時５０分
浦河 １３日００時００分
釧路 １３日００時４０分
根室 １３日００時５０分

「津波の到達予想時刻」

深浦 １２日２２時４５分
秋田 １２日２３時２２分
酒田 １２日２３時２５分
青森 １２日２３時３６分
八戸 １３日００時１７分
宮古 １３日００時２７分

この予想時刻は、後に発表された実際の津波到達時刻（深浦１２日２２時４７分、秋田１２日２３時２７分、函館１２日２３時３３分、稚内１３日００時００分など）とそんなに相違がなく、こうした時刻が発表されれば、行政機関や住民が対応するうえで非常に有益な情報であらう。

しかし問題は、こうした到達予想時刻が、実際に観測された津波の波高と時間的に近接して発表されたことである。つまり今回の災害では、検潮所で観測された津波の波高もしばしば公表されており、たとえば、２２時５９分に「午後１０時４０分に青森県の深浦で２５ｃｍの津波」とまず最初に報じられているし、その後も、「能代で３ｃｍ」（２３時１４分）、「江差で５０－１００ｃｍ」（２３時２６分）、「秋田で２７ｃｍ」（２３時３７分）、「函館で１０ｃｍ」（２３時５０分）など、次々に各地の潮位データが公表されている。

けれども、今回の災害の後、いろいろなところで指摘されたように、こうした検潮所

の測定値と、実際の津波の高さは大きく異なっており、こうしたデータをはるかに上回る規模の津波が各地を襲ったのである。そこで、放送の中で、この検潮所の測定値を津波の高さとして伝えてしまうと、人々に誤解を与え、津波に対する警戒心が薄れてしまうおそれがあるのではないと思われる。それどころか、潮位記録を知っていた津波ではないと考え、津波到達予想時刻にわざわざ津波を見物に港に行った人たちもあったと聞いている。

そこで、こうした情報を発表するのであれば、検潮所の測定値はかなり低いけれども、地形によっては陸上に遡上するとはるかに大きな津波になることもあるから警戒するように、という注意がぜひとも必要であろう。もちろん、こうした情報を放送したのは、NHKにかぎったことではなかった。

次に、これもNHKだけではないが、津波警報が発令されている地域の海岸や港などから中継して状況を伝える、「津波実況」の問題もあった。

今回もNHKでは、秋田港、函館港、室蘭港フェリー埠頭、青森港などの現場に記者やアナウンサーを派遣して、海面の変化の状況などをレポートしていた。そのレポートをみると、函館港からの放送のように、自分は（津波の危険がない）高台から取材しているとくりかえし述べていたレポートもあったが、なかには、まかり間違えばレポーター自身の安全も脅かされるような場所からの放送もあった。以下は、そうした例である。

○北海道・石狩湾新港からの中継（7月12日 23時48分）

アナウンサー「札幌の北20キロ、石狩町の石狩湾新港東埠頭にきています。カレイさし網漁船など大小あわせまして5、60隻が停泊しているんですけども、石狩消防署の職員によりますと、（津波は）11時10分に到着しました。その後3回潮位の変化があったそうです。・・・（中略）・・・現在、一般車両のこの埠頭への進入は、通行止めになっておりまして、入れない状態になっているんですが、漁船の関係者の方、船が心配で、現在この岸壁に皆さん集まっているという状況です」

○北海道・石狩湾新港からの中継（7月13日 1時37分）

アナウンサー「現在ですね、（と岸壁から身をのりだして水面を手で示しながら）この岸壁の所から30センチのところまで、いま40センチぐらいに下がっていますね、水がグーッと猛烈な勢いで上がってきました、石狩湾新港の東埠頭です。0時すぎに一度、（水面を手で示しながら）このあたり20センチというところまできました。1時すぎにここまで来ました。ギリギリまで来たんです。そして、いま3回目、水位の上昇がみられました・・・（以下略）」

○北海道・岩内港からの中継（7月13日 2時4分）

アナウンサー「日本海に突き出た積丹半島の付け根にあります岩内港です。津波の規模というものはだいぶおさまってきた様子です。しかし、まだ危険が去らないということで、私の立っているこの岸壁も、まだ一般の住民の方の立ち入りは禁止されているところなんです。この岩内港なんですけれども、地震発生後40分ぐらいして11時頃に津波の第1波が観測されたということです。そして第2波、これが最大のものなんです。高低差3メートル50センチの津波がこの岩内港に押し寄せまして、漁船2隻がこの岸壁にのりあげられて被害を受けました。現在までに5回から6回くらい、

その潮位の変化がみられ、現在も続いています・・・（以下略）」

このように、危険が予想される現場からの中継は、何も津波だけでなく台風中継などでもしばしばあるけれども、場合によっては、急激に津波が押し寄せ生命の危険にさらされるなど、記者やアナウンサー、カメラマンなどが犠牲になってしまうケースがないとはいえない。その不幸な事例の典型は1991年の雲仙普賢岳のケースであり、このときには多くの痛ましい犠牲者を生じてしまったが、台風が来たとき暴風の中をレポートするとか、今回のように津波警報が出ている地域の港に取材に行くとかいうやり方は、もうそろそろ卒業してもいいのではないだろうか。

もう一つの問題は、町長や役場職員などに電話取材したさい、報道機関の側から「電話を切らないで」と依頼したことである。たとえば、今回の災害ではテレビ画面の中で、次のようなやりとりがあった。

○NHK東京－奥尻町役場（7月13日 0時52分頃）

アナウンサー「越森さん、町長さん。お忙しいところ恐縮ですが、またですね、たとえばそこにどういふ方が行っているのか、身内の方もいるかもしれません。情報をいただきたいのですね、ぜひ、電話はそのままにしておいていただきますか。切らないようにしていただけますか」

越森奥尻町長「わかりました」

アナウンサー「お願いいたします。また、新しい情報が入り次第お伝え下さい」

○NHK東京－奥尻町役場（7月13日 1時頃）

アナウンサー「越森さん、またですね、新しい情報が入り次第お伝えいただきたいと思いますので、電話はそのままにお願いいたします」

越森奥尻町長「切らないでおきますから」

アナウンサー「はい、お願いいたします」

越森奥尻町長「誰か必ずつけておきます」

アナウンサー「お願いいたします。気をつけて」

たしかに、災害時のような場合、電話は一度切ってしまうとふたたびつながるのが困難になるから、いったん電話を切ったらもうつながらないという事態も十分に考えられる。そこで、多くの聴取者に情報を伝えなければならない報道機関としては、一度つながった電話を切りたくない気持ちは十分にわかる。しかし、今回の災害のように、多数の死傷者が出た現場はそれこそ修羅場であって、行政機関はマスコミに長いあいだ付き合っていられないというのが本音であろうし、むしろ行政機関には防災業務に専念してもらうのが筋というものであろう。

そんなときに、役場での電話を「切らないで」と依頼することは、各方面の対応に追われる役場の仕事の足かせになる。また、限られた電話を独占してしまえば、他の防災機関や報道機関が情報を得られないという問題も生じるであろう。現場の生々しい声を伝えることが報道の一つの役割であるとすれば、もっと防災業務の負荷のない一般の人たちに取材すれば、それで十分ではないだろうか。

5. 放送はどう対応したかー民間放送の場合

(1) 北海道内の民間放送

以上、津波警報の放送を中心にして、NHKの対応について述べてきた。次に、民間放送の対応をみていきたい。

地震が起こった12日午後10時17分、北海道の民間放送のテレビは、すべて東京からの番組を放送中であった。そこで、NHKのように地震発生直後から番組を中断して地震関係の放送をした局はなく、ほとんどはスーパー・テロップによる速報が中心になった。

ただし、ラジオは自社制作の番組を放送中に地震が発生したため、地震発生直後から地震関係の放送をしている。

北海道内の民間放送は、NHK札幌局のように直接L-アデスから津波警報を入手できる局はない。ただし、HBC・STV・UHBは気象協会を、またHTBはウエザー・ニュースを経由してアデスの情報が入手できるようになっており、警報の入手に関しては、独自にアデス端末をもっているNHKと大きな時間差はないといわれている。なお、HBC・STVの2局は、気象台の同報ファックスからも直接警報が入ることになっており、実際に今回も22時27分に情報が送られている。

(以下の文中の放送時間は、当時のビデオテープからの計測および各放送局の関係者の話にもとづいている。若干の誤差があることをあらかじめお断りしておく)

(1-1) HBC北海道放送

まず、HBC北海道放送からはじめる。HBCは、テレビとラジオ(AM)の併設局である。地震が起こったとき、他の局と同じく、HBCも選挙前でふつうよりも多くの職員がいた。しかし、地震後の対応はテレビとラジオはそれぞれ異なっており、NHKのようにテレビ・ラジオ同時放送は行わず、それぞれ独自の番組を放送した。

このうちHBCテレビは、地震当時、東京・TBSからの番組「月曜ドラマスペシャル・黒い履歴書」を放送していた。

そして、地震速報の第1報は、HBCからではなく、TBSから送られる「JNN情報システム」と呼ばれるニュース速報システムによるテロップ放送で、その放送時間は22時26分00秒であった。次に、22時29分00秒、HBCの北海道ローカルのニュース速報(テロップ)で、「津波警報」の第1報を放送している。これは、札幌管区気象台から同報ファックスが届いて2分後である。つまり、同局のテレビの津波警報は、地震発生から12分、警報発令から7分後に放送されたことになる。その後も、21時41分15秒から22時43分35秒の2分20秒のあいだ、番組を中断して、HBCローカルのニュース速報をアナウンサーの顔出しで放送し。次に、22時56分53秒から22時58分38秒の天気予報枠を報道特別番組に切り替えて放送、続いて23時から、TBSの定時ニュース「筑紫哲也ニュース23」となった。

一方、ラジオのほうはどうだったかといえば、同局のラジオは、津波警報を気象台か

らではなく気象協会から得た。津波警報は、気象協会のコンピューターが直結した情報システム“M I C O S”（「マイコス」Meteorological Information Comprehensive Online Service）によって入った。その端末はスタジオのすぐ近くにある。

HBCラジオでは当夜、リクエスト番組「ベストテンほっかいどう」を生放送中であった。ちょうど「ゲームコーナー」の中で地震を感じ、担当していたアナウンサーが、（マニュアルにあるとおり）即座に火の元などの注意を呼びかけたという。そして、リスナーからの情報も入ってきていた22時23分、各地の震度を含んだ地震速報を放送。これは、テレビよりも3～4分早い放送となった。

次いで、22時25分に「津波警報」を放送。この放送は、テレビよりも4分早かった。このように、ラジオのほうは気象協会から津波警報を知ったが、気象協会からの情報を得る装置がスタジオのすぐ近くにあったことが、速やかな情報伝達の大きな要因となったようである。

それから22時35分、函館放送局と結んで函館の状況を放送し、22時38分、ふたたび津波警報を放送している。その後も、ラジオはほとんど休みなく地震関係の放送を翌日まで続けたが、なかでも、23時すぎからJRN（JAPAN RADIO NETWORK、TBSラジオをキーステーションとするラジオネットワーク）加盟の東北地方6局に、HBCの放送を送出したのは異例のことだったようである。

他の民間放送とくらべると、HBCはもっとも早く対応できたといえるが、しかし、津波警報の放送に関しては、テレビとラジオとの間に4分の差がある。この要因としては、次のようなことが考えられる。

まず第1は、当時の番組編成である。テレビのほうは、東京のTBSからのドラマを放送中であり、ラジオはHBC自社制作のリクエスト番組を生放送中であった。つまり、ラジオのほうは比較的早くローカル情報を流すことができた、ということである。次に、テレビとラジオの特性の差があるだろう。つまり、テレビは映像がなければならず、今回の場合でいえばテロップニュースのための字幕作りをしなければならない。しかし、ラジオの場合は音声だけだから、字幕を作るような手間はなく、すぐに放送ができる。そして3番目に、情報ルートの問題があるだろう。テレビの場合は、札幌管区气象台からの同報ファックスによって情報が入ったのだが、これは前述の通り、警報の発令から5分かかっている。しかし、ラジオの場合、アデス情報がはいる気象協会から津波警報を得たため、入手がテレビよりも早くなったのである。

（1-2）STV札幌テレビ放送

HBCと同じく、STV札幌テレビ放送も、テレビとラジオ（AM）併設局である。そしてまた、STVもテレビとラジオの同時放送は行っていない。

まず、テレビについて述べることにする。地震発生時には、STVテレビは、NTV系列全国ネットの番組「関口宏のびっくりトーク ハトがでますよ」（大阪・よみうりテレビ制作）を放送中であった。ふつうはこの時間帯には2人ぐらいしかいないが、選挙前ということもあり、局舎内には報道スタッフ30人中の10人がいた。

今回の災害では、STVは独自のテロップをすぐには出さなかったという。というの

は、いつもは、東京のNTVから、NNN加盟各局に送られる「NNN報道情報システム」のテロップ・ニュースのほうが早いため、今回も、東京からの情報を待つかたちになったのである。

そして、22時20分、NNN報道情報システムによる地震速報の第1報が流され、22時21分には第2報が放送された。このように、地震速報はそんなに遅れなかったが、しかし、「津波警報」の第1報は、NTVが情報を流すのに時間かかって、22時56分10秒に初めて放送されている。これもテロップ・ニュースだったが、実に、地震発生から39分、警報発令から34分も経過していた。

次に、ラジオのほうであるが、STVラジオはHBCと同様、気象協会のマイコスをもち、その端末がスタジオの中にあるため、今回も気象協会から津波警報を得た。

地震発生当時、ラジオは自社制作の生放送のリクエスト番組「船守さちこの何はなくとも歌謡曲」を放送中であった。地震が発生したので、まず地震の情報を流し、次に曲を1曲流している最中に津波警報を受信したため、すぐにこれを放送したという。津波警報の放送時間ははっきりとはわからないが、この番組は22時から22時29分までの放送で、地震発生から番組の終わりまでに3回津波警報を流していることから、警報発令後、かなり早い時間に伝達したと考えられる。ラジオがかなり早い対応ができたのは、気象協会からの警報がスタジオの中で受け取れたこともあるようである。

その後、ラジオでは、22時30分から23時まで政見放送（4人）を流すことになっていたが、2人放送した時点で中断し、5分間地震関係の情報を流した後、ふたたび政見放送を流し、3人目が終わったところで地震関係の放送をずっと継続することに決め、翌日午前3時まで連続で放送を行ったという。

STVでは、テレビの場合は札幌管区气象台から警報が入ってくるが、通常はアデスのあるNTVからの情報のほうが早いので、今回もNTV情報に頼った。しかしNTVからの情報が遅れたため、結果的に津波警報伝達も遅れてしまったようである。けれどもラジオの場合、自社によるラジオ編成や、音声だけで対応できるというラジオの特性、および情報ルートという、3つの大きな理由から、HBCと同様に、津波警報を速やかに伝えることができたと考えられる。

（1-3）HTB北海道テレビ放送

HTB北海道テレビ放送は、テレビ単営局である。地震が起こった22時17分という時間は、ふだんなら報道にはほとんど人がいない時間であるが、この日は選挙前ということで、5人のスタッフがいた。地震発生時、HTBではちょうど東京・テレビ朝日からの「ニュースステーション」を放送中であり、ニュースの生放送中にテロップによるニュース速報を流すことは原則的にしないため、すべて東京からのニュースに任せかたちとなった。

そのため、HTBでの地震関連情報の第1報は、「ニュースステーション」の中でキャスターが伝えた22時29分であった。この放送では、震度とともに「津波警報」を地図入りで報じている。しかし、このときは、日本海側の「オオツナミ」は報じておらず、どちらかといえば太平洋側の「ツナミ」を強調したもので、放送時間も震度情報を含め

て1分間であった。

次に、「ニュースステーション」は22時36分30秒から約40秒間、地震情報の第2報を伝えた。ここでも震度の後、津波警報を伝えているが、この時点でもまだ「オオツナミ」は報じられていない。日本海側の「オオツナミ」が報じられたのは、地震情報第3報を伝えた22時56分であった。

なお、HTBには、札幌管区气象台からの情報は伝達されず、気象情報会社「ウェザーニューズ」を経由して地震関連情報が入ってくる（ANN加盟各社がここから情報を得ている）。

（1-4）UHB北海道文化放送

UHB北海道文化放送も、HTBと同じく、テレビ単営局である。地震当夜、UHBには当夜、選挙前だったので4-5人の報道スタッフがおり、フジテレビ系列全国ネットのドラマ「サスペンス魔・隣りの女」（大阪・関西テレビ制作）を放送中であった。

UHBには、札幌管区气象台から津波警報が直接に入るのではなく、気象協会からの情報システム“マイコス”によって伝達された。しかも、気象協会のアデスとマイコスがつながっているため、津波警報は、発令されてすぐに情報が入っている。そこで、UHBでは、UHBローカルで、テロップによる地震情報の第1報を22時28分50秒に報じ、そのさい「津波警報」を伝えている。これは、津波警報の発令から6分後のことであった。また、22時29分30秒にテロップで第2報を伝えた。さらに、22時44分45秒と22時45分30秒に、フジテレビからの「フジテレビニュース速報システム」によるテロップ・ニュースで、もう一度津波警報を放送している。最後に、北海道の各放送局の津波警報の放送時間を、以下にまとめておく。

○北海道内各放送局の津波警報伝達時間及び伝達方法

放送局名	放送時間	発信局	放送方法
NHK札幌	22:24'27	NHK札幌	番組中断・アナウンス (総合テレビ・ラジオ第1・FM3波一斉)
HBCテレビ	22:29'00	HBC	スーパー・テロップ
HBCラジオ	22:25'00	HBC	生放送中アナウンス
STVテレビ	22:56'10	NTV(東京)	スーパー・テロップ
STVラジオ	22:25頃	STV	生放送中アナウンス
北海道テレビ	22:29'00 (津波警報) 22:56'00 (日本海側の大津波警報)	ANB(東京)	生放送中アナウンス
北海道文化放送	22:28'50	北海道文化放送	スーパー・テロップ

(2) 北海道の民間放送の問題点

北海道内の民間放送の対応をみると、HBCラジオやSTVラジオは、比較的早く津波警報を放送できた。しかしテレビの場合は、UHBが22時28分50秒、HBCが22時29分00秒と、この2局はほぼ同時に放送しているが、HTBテレビは東京から22時29分45秒に津波警報の報道はあったものの、日本海側の大津波警報を伝えたのは22時56分であった。またSTVテレビも、津波警報の放送は22時56分とかなり遅いものになってしまった。

同じ民間放送でも、津波警報を伝達するのに27分近い差が出てしまったのである。このように大きな差が出たのはどこに要因があるのだろうか。

まず第1に、今回の災害において「自局が対応したか東京に依存したか」ということが、大きな要因になっている。これまで述べてきたように、UHBテレビとHBCテレビは津波警報を受け、すぐに自局でテロップを作成して津波警報を伝えたものの、HTBテレビとSTVテレビは自局で情報を伝えず、東京からの報道を待つかたちとなり、このことが結局、津波警報の伝達を遅くしてしまったことになった。

HTBとSTVの対応が遅れてしまったことには、それぞれの事情があった。

つまり、HTBテレビでは、東京・テレビ朝日からの「ニュースステーション」を放送中であった。同局ではいままで、生のニュース番組を放送中にテロップで別のニュースを流すことはあまり行わず、また、人材や情報の関係もあって番組を中断するのもむずかしいので、結局、ニュースを放送しているテレビ朝日の対応に任せるかたちになったのである。また、STVテレビの場合にも、全国ネットの番組を放送中ということと、通常は札幌から流すより東京から送られるニュース速報のほうが早く入って来ることもあって、東京からの情報に頼ったかたちになってしまった。

しかし一方では、津波警報を独自に放送したUHBテレビもHBCテレビも、津波警報の発令からそれを報道するまで7分近くかかっている。たしかにテレビの場合、テロップを作成する手間などもあり、どうしてもある程度の時間が必要になるが、先にも述べたように津波は1分1秒を争うものであり、事前の準備を充実するなどによって、さらに速やかな対応が必要になるのではないだろうか。

(3) 東京の民間放送局の対応

(3-1) 放送の内容

これまで述べてきたように、北海道内の民間放送テレビ局は、地震関連情報の伝達に関して東京からの情報にたよることが少なくなく、今回の地震でも、一部にその傾向が見られた。では、東京の各局はどのように津波警報を伝えたのだろうか。

まず、ふだん在京の放送各局がどのようなルートで地震関連情報を得ているかをみると、NTVとTBSは気象庁からアデスによって直接に情報を受けとっており、またフジテレビは気象協会から、テレビ朝日はウエザーニュースから情報を得ている。ただし、先に述べたように、気象協会にもウエザーニュースにもアデスがあるから、気象庁から直接入る情報も気象協会やウエザーニュースから入る情報も、それほど時間の差はない

という。

さて、今回の災害において、NTVは、まず22時23分10秒と22時24分10秒に、各地の震度をテロップで伝えている。この震度速報は、在京のテレビ局の中で一番早かった。

しかし、その後は地震情報が放送されず、最初の放送から30分以上経過した22時56分20秒、「スポーツアイランド」という5分間番組の中で、テロップによって津波警報がはじめて報じられた。その文面は次のようなものであった。

「NNNニュース速報／気象庁は北海道から東北地方の日本海沿岸に高さ3mの大津波、／太平洋側に高さ2mの津波の来襲を予報した」

また、同じ文面で、この30秒後の22時56分50秒にも同じテロップを流している。しかし、NTVの場合には、津波警報の内容は伝えているものの、肝心の「津波警報」という言葉は使用されていない。そしてその後、23時からの定時ニュース「NNNきょうの出来事」において、津波警報を伝えている。このように、NTVは、震度速報が一番早かったものの、津波警報が一番遅くなってしまったのである。

次に、TBSをみると、同局は22時25分50秒と22時26分50秒に、まずテロップで震度速報を伝えた。そして、22時33分32秒と同52秒に、津波警報を放送している。これはテロップで、次のようなものであった。

「JNNニュース速報／北海道 東北地方に津波警報が発令されました」

TBSは、さらに22時40分20秒と同50秒、津波警報を次のようなテロップで伝えた。

「JNNニュース速報／今夜10時17分ごろ 北海道・東北地方に大きな地震／震源地は北海道南西沖 地震の規模はマグニチュード7.8／この地震で北海道東北地方に津波警報が発令されています」

ただし、ここでは「大津波警報（オオツナミ）」のテロップは放送せず、22時55分30秒から約2分間、通常番組をやめて地震津波関係のニュースをアナウンサーの顔出しで放送したときに、はじめて大津波警報を伝えている。その後、23時から「筑紫哲也 NEWS23」でも地震・津波関係の情報を放送した。

一方、フジテレビは22時25分15秒と、同40秒に震度速報をテロップで放送。そして、22時34分07秒と、同32秒に津波警報を次のようなテロップで放送した。

「FNN地震速報／次の地域に津波警報が発令 津波が予想されます／北海道の太平洋沿岸、日本海沿岸、東北地方沿岸」

次いで、22時40分00秒と同45秒、および22時43分00秒と同50秒には大津波警報をはじめとする津波予報を、次のようなテロップで伝えている。

「FNN地震情報／次の地域に大津波警報が発令 津波が予想されます／北海道の日本海沿岸 東北地方の日本海沿岸／次の地域に津波警報が発令 北海道太平洋側 東北太平洋側／次の地方に津波注意報が発令 北海道オホーツク海側 中部地方日本海沿岸」

さらに同局は、22時51分05秒と同25秒、22時56分40秒と22時57分10秒に今度は津波の到達予想時刻を放送し、また23時からの定時ニュース「FNN

ニュースCOM」でも、地震・津波関係の情報を放送した。

最後に、テレビ朝日は、NHKを含めた在京放送局の中でただ一つ、生放送でしかもニュース番組である「ニュースステーション」を放送していた。

この夜は総選挙前であり、ちょうど選挙関係の解説をしている最中に、キャスターが地震の第1報を伝えた。その時刻は、22時29分45秒。ちょうど、NHKが緊急警報放送を全中7波ではじめたところである。そして、この1報のなかで、すでに地図表示を使いながら津波警報を伝えている。この第1報は次のような内容で約1分間伝えられた。

「今夜10時17分頃、東北から北海道にかけてかなり大きな地震がありました。青森県の日本海側にある深浦町の震度5を最高に・・・（各地の震度・中略）・・・それから先ほど北海道と東北地方に津波警報が出ました。先ほど北海道と東北地方に津波警報が出ました。・・・（中略）・・・それから、北海道と東北地方、今映像が出ていますが、北海道から東北地方の太平洋からずっとですが、津軽海峡にかけて北海道と東北地方、津波警報が出ております。津波警報が出ております。十分ご注意ください」

テレビ朝日の震度速報は、民放4局の中で一番遅かったものの、生放送のニュースの最中であつたこともあり、津波警報のほうは民放の中でもっとも早く伝えられた。しかし、この津波警報は太平洋側を重視したもので、日本海側の大津波警報は口頭では触れられていない。

次いで、地震に関する第2報は22時37分25秒から約40秒間放送された。このとき、キャスターは次のようにコメントしている。

「今夜10時17分頃、東北から北海道にかけてかなり大きな地震がありました。青森県の日本海側にある深浦の震度5を最高に・・・（各地の震度・中略）・・・それからご覧の地域、北海道と東北地方に津波警報が出ています。ご覧のところに警報が出ています。黄色のところは注意報、オレンジ色のところ、津波警報が出ています。オレンジ色で海岸に近い所にお住まいの方十分にお気を付け下さい。津波警報が出ております。高いところに行った方がいいかもしれませんね。ご覧のところで津波警報並びに津波注意報が出ています」

そして、第3報は22時56分10秒から、青森と結びながら約4分30秒間伝えられ、ここで初めて口頭で「大津波警報」が伝えられることになった。

「・・・夜10時17分頃、東北から北海道にかけてかなり大きな地震がありました。青森県の日本海側の深浦町と小樽で震度5を記録したのを最高に・・・（各地の震度・中略）・・・また、この地震のため津波が起こる可能性があります。北海道と東北の日本海側に大津波警報が、太平洋側には津波警報が出ております。現在、北海道と東北の日本海側に大津波警報が、太平洋側には津波警報が出ています。高いところでは3メートル以上の津波が起こる可能性があります。札幌気象台によりますと津波の第1波は函館で午後11時20分、津波の第1波は函館で午後11時20分、稚内で11時50分の見込みです。・・・（中略）・・・この大津波警報というのを初めてみましたけれども、こういうのがあるんですね。今、北海道と東

北の日本海側に大津波警報が、太平洋側には津波警報が出ています。・・・（以下略）」

テレビ朝日の地震放送はさらに続き、23時06分45秒から3分間、札幌と結んで第4報が放送され、また23時11分45秒から番組の終わりまで第5報が伝えられた。

（3－2）津波警報の放送における問題点

次に、これら在京の民間放送の津波警報放送について、いくつかの問題点を指摘しておきたい。

まず第1点は、テロップによる速報の問題である。つまり、テロップによる速報のシステムは震度に対しては速やかに対応できたが、津波警報にはすぐに対応できなかった、ということである。

局によって違いもあるが、震度速報の場合は過去にも多くの経験があり、どこかで地震があり各地の震度情報が入ってきたときには警報音などで知らされ、すぐ対応するシステムができています。しかし、津波警報は発令の回数が非常に少ないため、警報が入ってもそれを知らせるための音などは鳴らないため、誰かが情報が表示されるディスプレイなどを見ていないと、警報の発令がわからない場合もある。また震度に関しては、情報が入ると自動的に文字が作成され、それがテロップで流せるようになっているが、津波警報の場合は、自動的に文字が作成されず、入ってきた情報をもとにテロップを作らなければならないところもある。また局によっては、津波警報が自動的に文字が作成できても、送られてくる情報文が放送では視聴者にわかりにくいものもあるため、結局新しく作ることもある。

このように、現在の各放送局の速報システムは、震度速報は早くても津波警報の速報には時間がかかってしまう、ということが指摘できるだろう。

また、テロップについては、その文章表現の問題もある。

今回の災害では、テレビ朝日以外の局はテロップで津波警報を伝えている。そして、TBSとフジテレビは「津波警報」と明示したが、一方、NTVは「気象庁は北海道から東北地方の日本海沿岸に高さ3mの大津波、太平洋側に高さ2mの津波の来襲を予報した」と、津波警報という名称を使わずに、警報の内容を示した。

これは、評価が分かれるのではないか。NTVのような方式は、津波警報の内容をかみくだいて具体的に示し、わかりやすくなったという面がある。しかし、一方で、「警報」を使わず「予報」と表記してしまったため、緊急性が感じられなくなるという面もあるからである。

また、各局のテロップには「警報」が発令されたことは明示しても、津波に対する避難の呼びかけなど、津波に対する具体的な行動をはっきりと示したものはなかった（ただし、テレビ朝日の「ニュースステーション」では、キャスターが22時37分に1度だけ、「高いところに行った方がいいかもしれませんね」と口頭で伝えている）。津波警報が発令された場合、警報が発令された事実だけでなく、津波襲来の危険がある地域の住民に、高いところへ逃げるように指示する文を明示することも大事なことのように思える。しかし、一般にテロップは、短く限られた字数で作成することになっている。

そのため、テロップでどう伝えるかという問題は大切な検討課題になるのではないだろうか。

津波警報の放送にかかわる第2点は、地方局に対する認識の問題である。

民間放送の場合は、NHKのように全国組織ではない。ネットワークを結び協力体制をとってはいるものの、それぞれが別会社である。そのため、ネットワークにおけるキー局とローカル局との役割が不分明のところもあり、キー局が各放送局に判断をまかせてしまったり、逆に、ローカル局が、人材や資材や情報システムの長けているキー局に緊急時の判断を任せてしまったりする。

今回も、先に述べたように、TBS系のHBCやフジテレビ系のUHBはローカルで対応したものの、NTV系のSTVやテレビ朝日系のHTBは、独自でローカル情報を出さず、東京の情報に任せてしまったため、結果的に情報が遅れてしまった。

とりわけ、NTVは津波警報の伝達が他局にくらべ大幅に遅れてしまった。NTVにはアデスがつながっており、情報はかなり早く入って来るはずである。その証拠に、震度速報は民間放送の中では一番早かったのである。ところが、津波警報は結果的にもっとも遅くなってしまった。このため、系列局のSTVは津波警報伝達が大幅に遅れる結果となった。NTVとしては、テロップは基本的に自局のエリア向けに出すことから、津波警報は札幌で出すものと考えていたようである。一方、STVとしては、ふつうは自局がテロップを出すよりNTVからの情報が早いので、NTVからの情報を待っていた。こういう認識の行き違いが、津波警報伝達を大幅に遅らせてしまったようである。

また、テレビ朝日系列の場合は、何度も述べたように全国向けのニュース番組「ニュースステーション」の放送中であったため、HTBがニュース番組中にローカルで別のニュースを流すという考えをしなかったことが、日本海側の津波警報伝達を遅らせてしまったといえよう。

要するに、非常時に情報をどこが流すかという連絡や、全国ニュース放送中に地方で災害が起こった場合にどのように対応するかなど、ふだんからキー局とローカル局との連絡を密にし、非常時における地方局についての認識を明確にしておくことが大事ではないだろうか。

津波警報の放送に関する第1の問題点は、津波に対する認識が全体的に低かったということであろう。それは、各局の津波警報に対する対応と、とくに警報を放送する時間が短かったことから推察できる。

各局の放送をみると、津波警報について放送する時間がいずれも非常に短いという印象を受ける。NHKがくどいほど警報の放送をくりかえしていたのとは大きな相違があった。テロップニュースの場合、1回がせいぜい数十秒である。したがって、頻繁に出していなければ、視聴者が見逃してしまう可能性も大きいのである。

今回の災害では、津波に関係したテロップは、TBSが22時33分から22時55分までに4回、NTVは22時56分前後に2回放送した。また、フジテレビは比較的頻繁にテロップを出し、津波警報関係では、22時34分の第1報から23時からの定時ニュースまでに10回流し、しかも他局では流さなかった津波注意報も伝えている。ただし、各局とも津波警報発令から10分以上たって第1報のテロップを流しており、

速報面での対応はあまり早くなかったように思う。

たしかに、民間放送の場合には、CMの関係などから、NHKのように番組を中断して放送することは難しい面もある。それであれば、せめてテロップを流し続けるような、視聴者が情報を聞き漏らさないための工夫が必要となるのではないだろうか。

警報の放送時間という点では、この時間帯で唯一の生放送の定時ニュース番組であった「ニュースステーション」は、さらに問題が大きい。テレビ朝日は、民間放送では一番早く、22時29分に津波警報の第1報を伝えたものの、そのときは日本海側の大津波警報は強調されず、しかも1分弱で終えてしまった。第2報はそれから8分後の22時37分で、約40秒。日本海側の大津波警報をはじめて伝えた22時56分の第3報は、4分30秒。第4報が23時06分45秒から3分間。第5報が23時11分45秒から1分間。つまり、地震の第1報から番組終了まで約45分あったが、そのうち地震関係のニュースは合計しておよそ10分間であった。

今回の災害があれほど大惨事になったことを考えると、この放送時間はあまりに短いのではないだろうか。地震発生時に定時ニュースを放送していたというのは、他局にくらべてはるかに恵まれていた状態であった。しかも、日本海側の大津波警報を伝えなかったにしても、22時29分の段階で、すでに津波警報は入っていた。ほかに緊急を要するニュースがあったなら別であるが、人命にかかわる災害の危険性を警告した情報が入っていながら、選挙の世論調査の分析やプロ野球オールスター戦のファン投票の結果や釣りの特集などを、はたして放送する必要があったろうか。これでは、津波に対する認識の不足を指摘されても仕方がないような気がする。

5 章

北海道南西沖地震と災害情報

前の章では、北海道南西沖地震において、津波警報がどのように伝えられたかについてみてきた。津波警報の発令は異例ともいえる早さだったが、残念ながら、発令された津波警報を伝達する過程で多くの問題が発生し、結果として警報が住民に到達するまで相当な時間を要してしまった。

しかし、今回の災害では、津波警報のほかにも災害情報にかかわるいくつかの問題点が浮き彫りになっている。ここでは、そうした問題として、

1. 大災害の後、奥尻町では地震によるケーブルの断線と交換施設の故障のために、かなりの時期にわたって110番・119番の緊急通報が不可能になったこと
2. 奥尻町では、町役場の職員が地震直後に津波の来襲を予想して、緊急に同報無線から津波からの避難をよびかけたが、混乱のさなかだったためあまり多くに人の耳に達しなかったこと
3. 災害後、最初は渡島半島の乙部町と熊石町で「また大地震が来る」という流言が、次には、奥尻町で「また大津波が来る」という流言が広がり、とくに奥尻町の場合には、それに惑わされてかなりの住民が実際に高台に避難してしまったことも3つについて、ややくわしく触れてみたい。

1. 緊急通報ができなかった（110番・119番の不通）

地震や台風など大規模な自然災害が発生すると、たとえ施設に物的な被害がなくても、電話が一時的に不通になることが少なくない。火災や救急の通報、あるいは家族や親戚・知人の安否の確認のため、多くの人々がいっせいに電話に殺到するからである。このように、災害時に電話が一時的に大混雑する現象を「異常輻輳」と呼ぶ。

たとえば、1993年1月15日に発生した釧路沖地震では、この電話の異常輻輳のために、市民のあいだの連絡ばかりでなく、110番や119番通報が困難になり、防災機関の情報収集や防災活動に大きな支障をきたした。そして、もし東京・大阪・名古屋などの大都市、あるいはその周辺で大災害が発生すれば、電話による火災・救急の緊急通報はずっと深刻になることも予想され、災害時の緊急通報をどうすべきかという問題があらためてローズアップされたのである。

ところが北海道南西沖地震では、これとは別の深刻な事態が発生してしまった。異常輻輳は、電話施設に被害がないのに市民が電話に殺到するために発生する一種の機能障害であるが、今回の地震では電話施設およびケーブルに被害が発生して、そもそも緊急

通報が物理的に不可能になってしまった。しかも、110番と119番の受付電話には、正体不明の呼び出し音が災害直後から17時間も鳴り続ける、という事態が発生したのである。

つまり、今回の災害では、地震と津波によってもっとも大きな被害を受けた奥尻島の青苗地区と、消防署がある奥尻地区、および警察署がある対岸の江差町を結ぶ電話回線が切断され、青苗地区から外部に通じる電話がきわめてかかりにくくなった。また、消防署と警察署の通報受付台では、呼び出し音が鳴っているのに署員が受話器を取りあげるとだれも出ない、という無言電話のようなものが連続的にかかり続け、対応した署員がたいへん混乱してしまった。

どうしてこのような事態が起こってしまったのだろうか。以下は、このことを報じたNHKニュースと、筆者らがNTTに行なった聞き取り調査によって判明した事実である。

まず、青苗地区から外部への電話がまったくできなくなったのはなぜか、ということから始めよう。

災害前、青苗地区と外部を結ぶ電話回線は2つあった。一つは、青苗地区と奥尻地区を結ぶ光ケーブルのルート、もう一つは、青苗の交換所から対岸の渡島半島の大成町久遠まで海底光ケーブルを経由した後、ふたたび無線で奥尻地区の奥尻交換所にいたる迂回ルートである。青苗地区からの電話は、このどちらかのルートを伝わって奥尻まで行き、そこから外部に接続されるわけである。

このように、青苗地区からのルートは2つあり、もし何らかの理由で一方が切断されても、ただちにもう一方のルートに切り替えられて、通話が確保される仕組みになっていた。これは「回線の二重化」といわれ、現在、日本全国の電話網のほとんどはこうした二重化（重要な回線はもっと多重化されている）の措置がある。そのため、大災害が起こっても（電話の端末や家庭への引込線が被害を受けないかぎり）被災地からの電話が完全に断絶するということは、最近ではまったくなかった。ところが、今回はそれが起こってしまったのである。

つまり、第1のルートである青苗と奥尻を結ぶ光ケーブルは、4カ所で切断されてしまった。この光ケーブルは電柱を伝わる架空のケーブルだが、津波や土砂崩れによって電柱がなぎ倒され、ケーブルが切れてしまった。一般に、重要幹線のケーブルは安全のために地下に埋設されるが、地震のときには地下ケーブルが切断されることも多く、たとえ架空ケーブルが地下化されていたとしても、それが切断されなかったという保証はない。したがって、このケーブルの切断はやむを得なかったといえるかもしれない。

そして、もう一つのルートの海底ケーブルは、海底ケーブル自体の被害はなかったが、このルートの出発点である青苗交換所の伝送装置の回路の一部が、地震の揺れではずれ、故障してしまった。そのため、海底ケーブル・ルートも、かなりの部分が断絶してしまったのである。この伝送装置は比較的新しいものだったようだが、こうした装置の耐震性についてもう一度点検する必要があるかもしれない。

以上、要するに、青苗地区からの2つの電話回線がともに障害を受けたため、青苗から電話が外部にほとんどかけられなくなり、青苗地区は情報面で孤立状態におかれてし

まったのである。

一方、「無言電話」で職員が混乱した件はどういう事情だったのだろうか。

ここでは、110番や119番の電話接続の仕組みが一般加入電話とちがっている、ということが重要である。

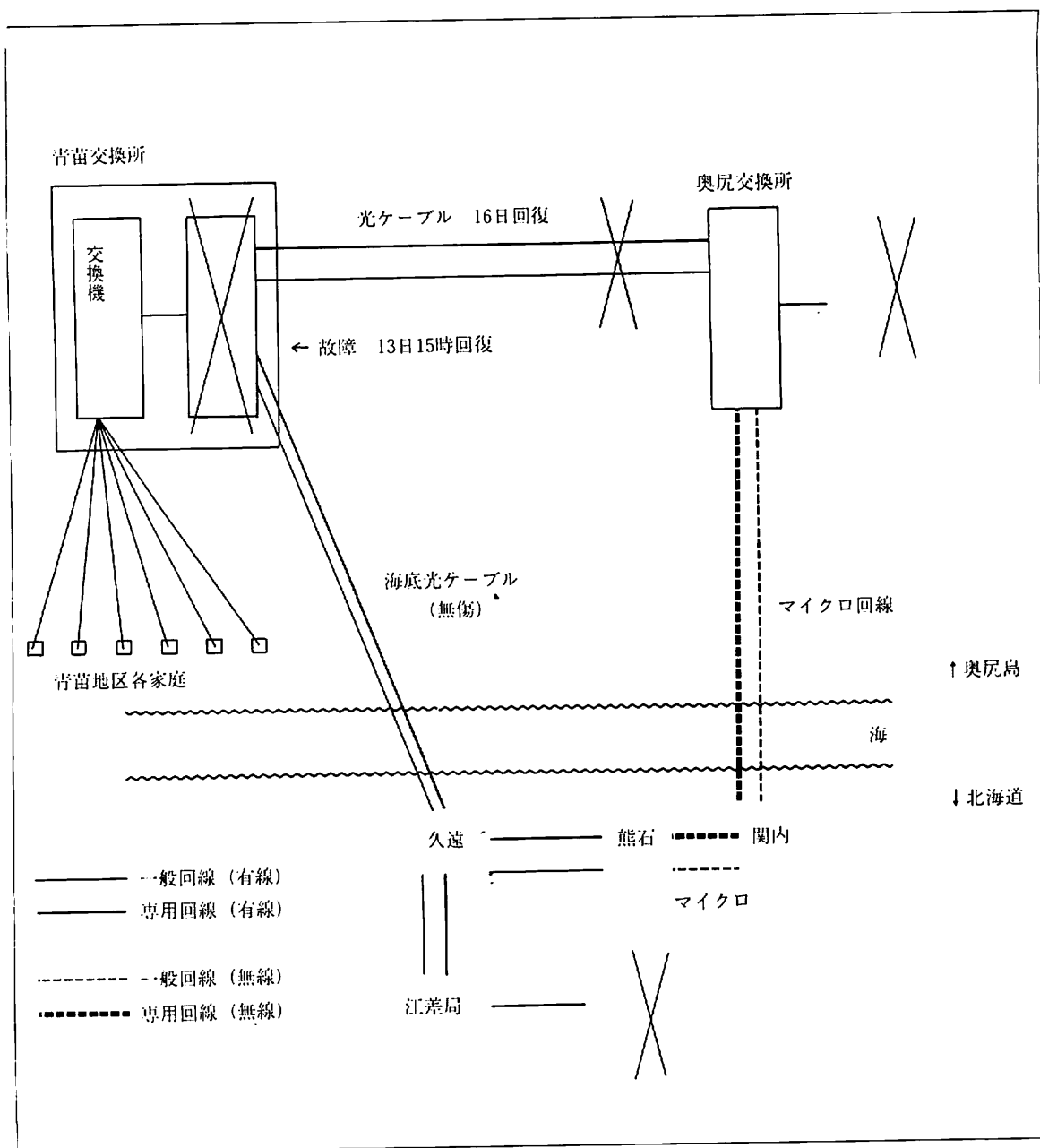
たとえば、A電話局に收容されている一般加入電話からB局の一般加入電話に電話するときは、A局の一般回線からA局の交換所を経て市外回線を通り、ふたたびB局の交換所からB局の一般回線を経て電話がつながる。ところが、110番や119番は、通報者が心理的動揺とか何か事故などがあって電話を切ってしまっても、受付台から、その通報電話をもう一度呼び出せる機能がついている。また、緊急通報は重要通信だということもあって、110番・119番の緊急電話は、付近の電話交換局に入った後は専用線で受付台までつながるようになっている。つまり、先の例でいえば、A電話局からB局の交換所までは一般加入電話と同じ経路をたどるが、B局からは専用線で消防・警察までつながるわけである。

もちろん、もしこの専用線が不通になれば、自動的に一般回線に迂回するシステムになっているが、そのさいは、専用線が不通になった段階で故障を知らせるために、消防署や警察署の受付台の電話が、間隔をおいて鳴り続けるようになっている。いままで述べてきたように、今回の災害では、青苗地区と奥尻地区を結ぶ架空の光ケーブルが断線してしまった。そして、このケーブルには一般回線ばかりでなく奥尻消防とつながる専用線も含まれていた。また、迂回ルート of 海底ケーブルも、青苗交換所の伝送装置が故障して不通になってしまった。つまり、2つのルートとも、専用線まで不通になってしまったのである。そこで、消防や警察では専用線の不通を知らせる呼び出し音が鳴ることになる。今回の災害で「無言電話」がくり返しなかったのは、実はその故障を知らせるためのベルだったのである（図1）。

しかし、こうした仕組みは緊急通報の受付を担当する職員には知られておらず、奥尻消防署や江差警察署で混乱を引き起こすことになった。ふだんから110番や119番にはいたずら電話がかかるが、このように、災害時の無言電話は専用回線の故障を意味していることもある。そこでもし、災害時に無言電話がくり返しかかるようであれば、緊急通報の受付担当者は、回線の故障を念頭において電話局に問い合わせるなどの対応をする必要がある。

なお、NHKのニュースでは、インタビューに答えた奥尻消防署の職員は、呼び出し音は間隔を開けずに鳴り続けたと言っていたが、NTTによれば、ベルは間隔をおいて鳴るはずだという。どちらが正しいにせよ、災害時には、限られた受付台や限られた職員で、膨大な緊急通報に対応しなくてはならない。そうしたときに、回線の故障を知らせるベルが何度も鳴ったのでは混乱は増すばかりであろう。これを契機に、電話局としても、回線の故障を伝えるのにベルを鳴らすのがはたして適切なのか、また適切だとしてもその鳴らし方はいままで通りでいいのか、などをもう一度検討しておく必要があると思われる。

図1. 110番・119番の不通概念



(なお、青苗地区の一般回線の一部は、別の伝送装置から海底ケーブルを通して、他の地域につながっていた)

2. 同報無線は役だったかー同報無線の自動放送をー

北海道南西沖地震によって大きな被害を受けた北海道桧山支庁管内には、同報無線を備えた町村がいくつかあった。同報無線は、正式には「市町村防災行政無線固定系」と呼ばれ、市町村から住民に災害情報や行政情報を伝達するためのシステムであるが、今回の災害では、津波警報をふくむ各種の災害情報の伝達とそれにとまなう住民の避難行動という点で、まったく対照的ともいえる2つのケースがみられた。

それは、熊石町と奥尻町である。

熊石町では、地震から8分後の午後10時25分に、早くも同報無線を使って津波警報を放送し、これを聞いた多くの住民がいっせいに高台に避難した。町民が津波警報を聞いた情報源としては、テレビ・ラジオを大きく引き離して防災無線が第1位になっており、また今回の災害において同報無線が役に立ったと評価する人も非常に多かった。幸い熊石町には津波は来襲せず、被害はなかったけれども、もし近傍の瀬棚町や大成町を襲ったような大津波が熊石町にも来襲し、しかも同報無線を使った適切な情報伝達が行なわれなかったとしたら、あるいはここでも大被害が出ていたかもしれない。

一方、奥尻町にも、戸別受信機と屋外拡声機の双方をもつ同報無線システムがあった。しかし奥尻町には、巨大な津波が地震の5分後に来襲したため、2章でくわしく触れたような大惨事が起こってしまった。いままでにない大地震だったことから、大きな津波が来るかもしれないと直感した町役場の職員が、すぐに役場にかけつけ、地震からほぼ3分後に、「津波の恐れがあるので避難してください」という放送を同報無線から流したが、大地震後の混乱もあって、結局あまり多くの人の耳に届かず、被害を防ぐことが出来なかったのである。

以下、筆者らのアンケート調査の結果なども紹介しながら、今回の災害において同報無線がどのような機能を果たしたのか、今後改善すべきことは何なのかについて述べていきたい。

まず、熊石町の状況からはじめよう。

北海道電気通信管理局の資料によれば、平成4年末現在で、熊石町には屋外の拡声機が22機設置され、さらに各家庭に戸別受信機が1700台設置されていた。熊石町の人口は4832人で1684世帯（平成5年11月現在）であるから、戸別受信機は全世帯に設置されていた計算になる。今回の地震では、この防災無線が大きな役割を果たすことになった。

熊石町では、ふだんから夜間は役場に人がいなくなるので、消防に運営を任せることにしており、地震発生時にも防災無線は消防署が管理していたという。そして、10時17分に地震発生。しかし、10時24分に津波警報を確認した消防署では、これを受けて、早くも10時25分に防災無線を使った放送を行っている。4章でも触れたように、正式に桧山支庁から津波警報が入るのは午後11時すぎだから、10時24分の警報確認は、おそらくNHKニュースによるものと考えられる。このすばやい対応は、夜間は防災無線を消防が管轄するという方式が生みだしたものといえるだろう。

防災無線の放送は、最初は「ただいま地震を感じました。津波の恐れがありますので、高台に避難して下さい」というものだったが、津波警報発令後は、「只今、大津波警報が発令になりました。至急高台地又は高台の避難所に避難して下さい」となった。その後、町では内容は少しづつ違うが、ほぼ同様の放送を1分から5分間隔で、午前1時までに繰り返し繰り返し放送したという。町では、この放送で避難した人がかなりあったようだとみている。また、いったん高台に避難した人の中には、何ごともないようなので高台から家に戻ろうとした人もあったが、「引き続き津波警報が発令中です。避難場所で待機して下さい」という放送によって、繰り返し津波の危険を放送したために、多くの人が午前4時頃まで高台に避難し続けたという。津波警報は、地震の翌朝7時に解除されたが、町の記録によれば、それまでのあいだ延べ47回にわたる放送が行なわれている。

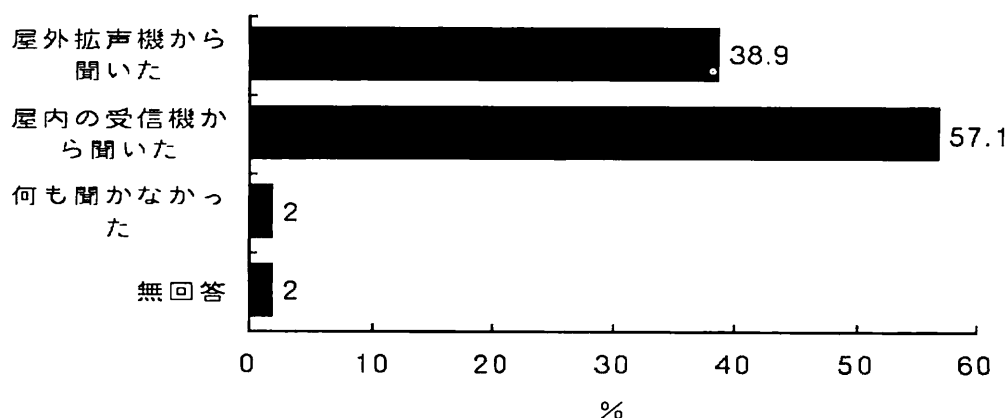
○北海道南西沖地震に係る防災行政無線の活用状況（熊石町提供資料）

防災放送	47回
地震発生	5回
津波警報発令	5回
避難命令	35回
避難命令解除	2回

ところで、こうした防災無線の放送を住民はどのように受けとめたのだろうか。

筆者らのアンケート調査によると、ほとんどの町民が地震の起こった夜に防災無線の放送を聞いていることがわかる。つまり、屋内の受信機から聞いた人が57.1%、屋外拡声機から聞いた人が38.9%で、何も聞かなかったと答えた人はわずか2%にすぎなかったのである（図2）。

図2. 災害の当夜、防災無線の放送を聞いたか（熊石町 N=352人）



また、住民に対して、ふだん同報無線がどのくらい聞き取れるかをたずねたところ、戸別受信機は94.9%の人がいつでも聞こえる状態になっていたと答えたばかりでなく、屋外拡声機も、72.4%の人が内容はほとんど全部聞き取れる状態であったと答えていた。これらの結果から、今回の災害において多くの人が防災無線を聞いた背景には、ふだんから比較的良く聞こえる優れた防災無線施設を備えていたことがあるといえるだろう。また、50回近く繰り返し放送をしたということも、同報無線を聞いた人が多い要因となっていると考えられる。

さらに、津波警報を聞いたかどうか町民にたずねたところ、93.2%もの人が警報を聞いたと答えた。また、その警報はどのようにして知ったかをたずねると、68%の人が防災無線の戸別受信機から、47.6%が防災無線の屋外拡声機から聞いたと答えている。一方、NHKテレビから知った人は18%、NHKラジオから知った人は15.9%となっており、テレビ・ラジオから聞いた人より防災無線から聞いた人が圧倒的に多くなっているのは注目すべきことであろう（表1）。要するに、熊石町では住民への津波警報の伝達が迅速に行われ、その主役は防災無線であったといえる。さらに、防災無線の中でも戸別受信機の効果が大きかったともいえよう。

表1. 津波警報をどこから聞いたか（熊石町 N=328人）

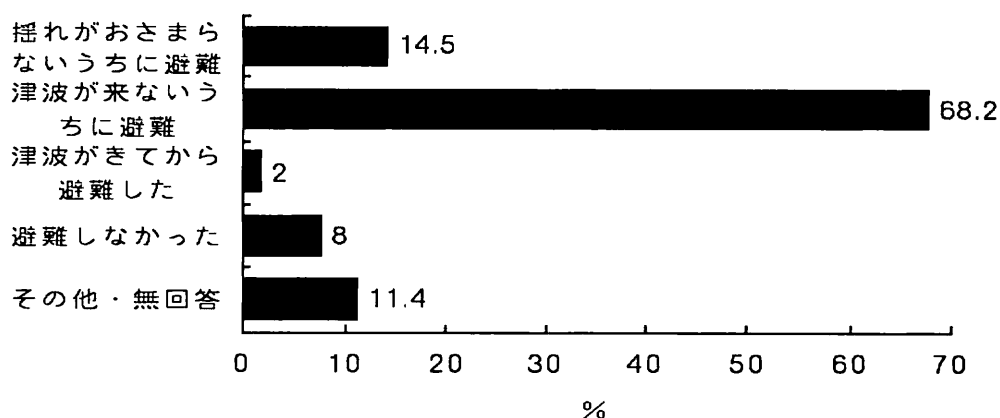
	N	%
民放テレビから	9	2.7
NHKテレビから	59	18.0
民放ラジオから	27	8.2
NHKラジオから	52	15.9
防災無線の戸別受信機	223	68.0
防災無線の屋外拡声機	156	47.6
警察や消防から	27	8.2
家族や近所の人から	16	4.9
その他	7	2.1
無回答	1	0.3

また、熊石町では、結果として津波が来襲しなかったけれども、地震後ほとんどの住民が避難している。そのうち、まだ揺れがおさまらないうちに避難した人は14.5%、揺れがおさまる前に津波がくる前に避難した人が68.2%、津波が来てから避難しはじめた人が2%で、避難しなかったと答えた人はわずか8%であった（図3）。

これらの結果をみると、津波警報が防災無線によって迅速に伝えられ、また住民の避難のきっかけとして防災無線が大きな役割をはたしたと考えられる。さらに、町役場でも話してくれたが、いったん避難した人が警戒を解くことなく慎重な行動がとれたのも、防災無線の効果といえるだろう。

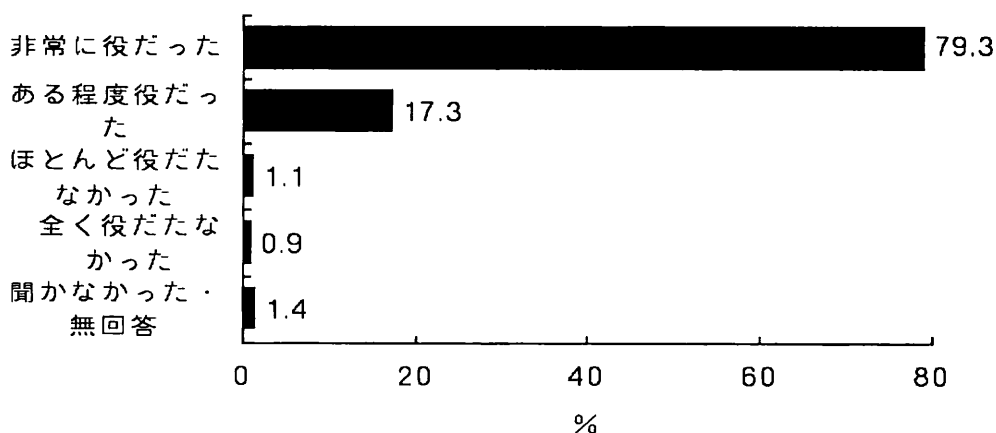
そこで、当然であるが、このように活躍した防災無線に対する住民の評価もきわめて

図3. 避難の時期（熊石町 N=352人）



高いものになっている。つまり、地震当夜から翌朝までのあいだに防災無線は役にたったかとなぜかところ、79.3%の人が非常に役にたったと答え、17.3%がある程度役にたったと答えた。逆に、ほとんど役にたたなかったという人はわずか1.1%、全く役にたたなかったという人は0.9%にすぎなかったのである（図4）。

図4. 防災無線の評価（熊石町 N=325人）



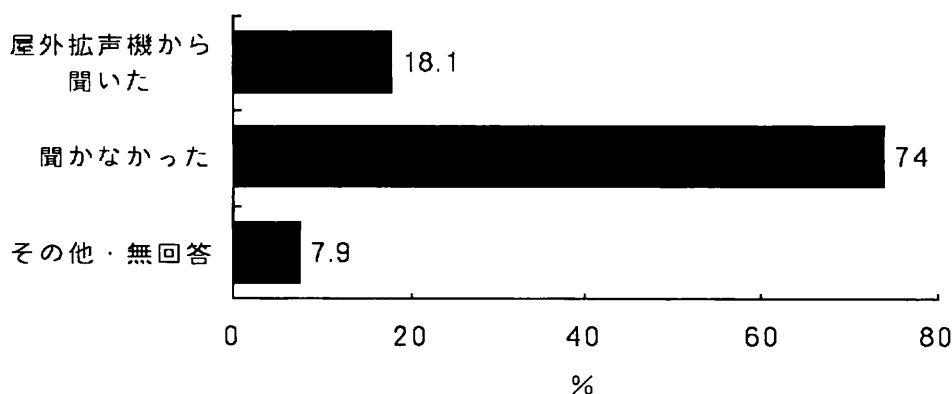
一方、今回の災害でもっとも大きな被害を受けた奥尻町ではどうだっただろうか。地震の前、奥尻町では、町内に屋外の拡声機を22機設置し、さらに住宅内に置く戸別受信機を1146戸に設置して、日頃から情報の伝達を行っていた（数字は平成4年度）。

4章でくわしく触れたように、今回の災害では、放送をのぞいて、津波警報の伝達が大幅に遅れてしまった。奥尻町でも、桧山支庁から奥尻町に届いた津波警報を確認したのは、地震後1時間近く経った11時10分頃だったという。しかし、当然のことながら、町としてはそれまでに各種の対応をとっていた。奥尻町企画振興課に対する筆者らの聞き取り調査によると、町では次のような対応をとったという。

つまり、地震の数分後、近くに住む職員が役場につけ、ただちに同報無線で津波に対する警戒と避難を呼びかけた。とっさの放送のこととて放送原稿はなかったが、「ただいま地震がありました。津波の恐れがあるので避難してください」という内容の放送を、3回繰り返したという。この職員によれば、10年前の日本海中部地震のときも奥尻町は津波の被害を受けているので、今回のような大きな地震では、また津波がくるかもしれないと思い、よそから情報が入る前にすばやく放送したという。町役場では、地震後に1分間ほど停電したものの、停電はまもなく回復した。そして、10時30分過ぎに、テレビから津波警報の発令を知り、この情報もすぐに同報無線から放送したという。

ところが、筆者らのアンケート調査から、住民がこのときの同報無線の放送をどのくらい聞いたか調べると、地震の数分後に行なった「津波のおそれがあるから避難してください」という放送を実際に聞いたかどうかについては、74%の人々が「そういう放送は聞かなかった」と答え、聞いたと答えたのはわずか18.1%の住民にすぎなかったのである（図5）。

図5. 災害当夜、防災無線から避難せよという放送を聞いたか（奥尻町 N=352人）



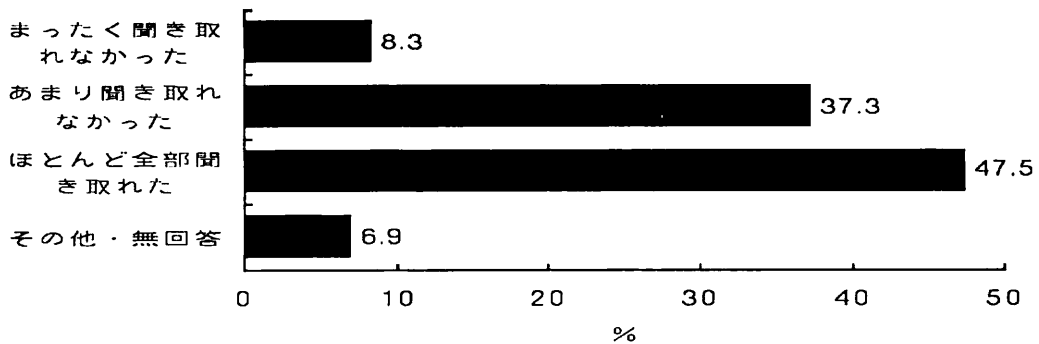
前にも触れたように、奥尻町の多くの住民は10年前の経験から、大地震の直後に津波が来るに違いないと考えていた。しかし、なかには人から津波が来るぞと教えてもらった人も少なくなかったことを考えれば、もしこの同報無線の放送をもっと多くの人が聞いていたらと残念な気がする。

では、どうしてこんなに同報無線の聴取度が低かったのだろうか。

この点については、まず第一に、放送を聞いた人はすべて屋外拡声機から聞いたと答えている点が注目される。戸別受信機から聞いた人は1人もいないのである。その原因は、およそ2つ考えられる。一つは、地震発生後すぐ多くの住民は屋外に出たということである。つまり、別の質問で、地震が起きたときにとっさに何をしたかをたずねたところ、「あわてて外に飛び出した」人が29.4%、「また高台に向けて避難した」人が48.0%もいた。このように、同報無線から放送が流れたとき、ほとんどの人が戸外に出ていたのである。

そして、奥尻町の屋外拡声機の音はふだんからあまり良く聞こえなかったようである。筆者らのアンケートにおいても、屋外拡声機の聞こえ方をたずねたところ「ふだんから放送内容はほとんど全部聞き取れる状態だった」と答えた人は47.5%にすぎず、「ふだんから放送の内容があまり聞き取れなかった」という人が37.3%、「ふだんから放送の内容が全く聞き取れなかった」という人が8.3%であった。つまり、屋外拡声機の声が聞き取れる人は半数たらずだったわけで、これでは今回の地震後の放送があまり聞き取れなかったのもうなずけることである（図6）。

図6. ふだんの屋外拡声機の聴取度（奥尻町 N=204人）



同報無線の放送を聞いた人が少ない第二の原因は、急いで避難した人のうちの多くが車で避難したことである。アンケート調査によれば、避難した人の47.8%は自動車で避難している。そして、住民が自動車で避難中に屋外拡声機で呼びかけても、閉めきった車内とエンジン音などで、放送はほとんど聞こえないはずである。屋外拡声機の意外な盲点ともいえるだろう。車内にいる人への情報伝達のために、電光掲示板の利用なども考えられるべきかもしれない。

このように、町役場の職員がせっかく行なった津波避難の呼びかけも、地震直後の混乱で人々が戸外に出てしまったため戸別受信機が有効にはたらかず、屋外拡声機ももともとあまりよく聞こえなかったため、多くの人の耳には届かなかった。

逆に、熊石町では同報無線はなぜ大きな役割を果たすことができたのだろうか。青苗地区とのもっとも大きな相違は、各家の戸別受信機から聞いた人数の差である。青苗地区にはほとんどの家庭に戸別受信機が設置されていたにもかかわらず、そこから放送を聞いた人は一人もいなかった。それに対して、熊石町では57.1%の人が戸別受信機から放送を聞いている。この違いの理由は、次のようなことらしい。

戸別受信機は、通常は各戸の一般電源によって作動している。そしてそのほかに、停電時にそなえ、バックアップの電源として電池をそなえている。今回の災害でも、熊石町は広範囲にわたって停電が起こった。町場所によっても異なるが、たとえば役場では地震後40分あまりにわたって停電したという。そこで、戸別受信機の電源はバックアップ電池に頼ることになったが、熊石町ではこの電池が正常に機能した。

熊石町が戸別受信機を設置したのは平成2年2月。そして、同年4月から運用を開始

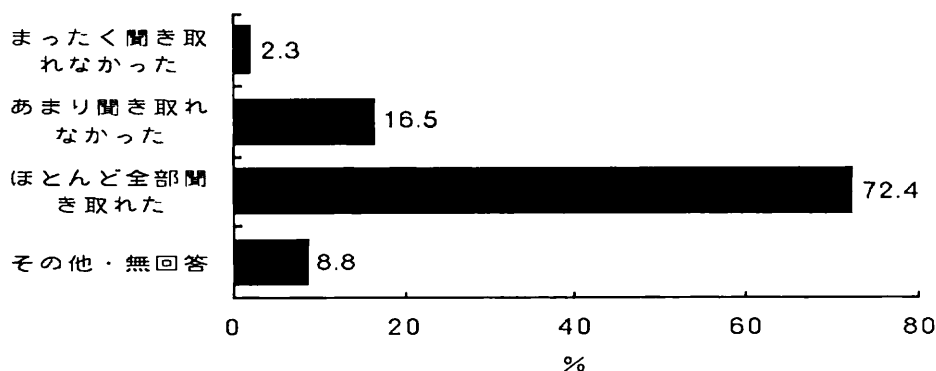
している。設置当初、電気代がかかるというコンセントを抜く住民や、出稼ぎに行くときコンセントを抜いていく住民がいたという。コンセントを抜くとバックアップ電池が使われ、1日か2日で電池切れを起こす。電池切れを起こすと赤いランプが点滅するが、これに対する問い合わせが町にあったという。町では、こうした事例からバックアップ電池の重要性を認識し、設置した2月を中心に1月から3月までと、人が集まるお盆の時期にくり返しくり返し電池の交換を呼びかける放送をしている。たとえ電池切れを起こしていなくても、時期になりましたから電池を交換して下さいというの呼びかけに、かなりの住民がこの時期に電池を交換しているという。そのため、今回の地震による停電時にも、戸別受信機が十分な機能を果たすことができたといえるだろう。防災設備導入後のアフターケアがいかに重要であるか、改めて認識する必要があるだろう。

熊石町において、防災無線をほとんどの人が聞き、津波情報の伝達に大きな役割を果たすことができた原因の第二は、町の放送の仕方にあった。町では、津波からの避難の呼びかけや津波警報を、3分から5分の間隔で合計47回も放送している。この繰り返しのよって、いったんは聞きのがした人も再び聞くことができた。住民への確実な情報伝達には、繰り返し放送が有効だということである。

また、繰り返し放送の効果でもう一つ見逃してはならない点がある。3分から5分間隔で47回も放送したということは、ほとんど一晩中、防災無線が流れ続けたということになる。地震や津波の恐怖におびえながら、暗闇の高台に避難し続けた住民にとって、放送から流れる声は大きな安心感をもたらしたに違いない。事実、町の担当者も放送が住民の不安を取り除いたようだと指摘しているのである。

第三に、青苗地区にくらべて、熊石町では日頃から屋外拡声機の聞こえ方が比較的良好だったようである。つまり、青苗地区では「ふだんから放送内容がほとんど全部聞き取れる状態だった」と答えたのは47.5%と住民の半数以下であったが、熊石町では72.4%にも達しているのである（図7）。こうした屋外拡声機の聴取度の差も、今回の災害における同報無線の聞き取り率に差をもたらしたと考えられる。

図7. ふだんの屋外拡声機の聴取度（熊石町 N=352人）



いままで述べてきたように、奥尻町では津波警報が発令される前に同報無線から住民に避難を呼びかけたが、残念ながら、この放送を聞いた人はあまり多くなかった。しかし、今回のように津波警報が間に合わない場合には、津波警報が出る前に人々に津波への注意を喚起する、こうした呼びかけはぜひとも必要である。とくに、海水浴やマリンスポーツなどのため多くの外来者が海に来ているときに、地震が起こったような状況では、こうした呼びかけがきわめて重要な意味を持ってくるだろう。

実は、いままでたびたび触れてきた10年前の日本海中部地震でも、警報が出る前に、津波への警戒を呼びかけることの重要性が指摘されたのである。周知のように、この地震では津波の被害がいちじるしく、とくに秋田県沿岸では80人を越える死者が生じてしまった。今回の北海道南西沖地震と同じく、このときも「オオツナミ」の警報が発令された。ちがっていたのは、今回は津波警報が地震の5分後に出されたが、奥尻島を襲った津波があまりにも早くて警報が間に合わなかったのにくらべ、日本海中部地震では警報が地震の14分後に出て、その5分後に放送されているが、人的被害が出た男鹿市や能代市には警報の放送直後に大津波が襲っている、ということである。

もし津波警報が出る前に、たとえばテレビやラジオで沿岸地域の人々に津波を警戒して高台に避難するよう呼びかけていたら、あるいは被害が少なくなっていたかもしれない。しかし、当時の放送局の「地震放送マニュアル」には、火の始末やあわてて外に飛び出さないようになどの呼びかけはあったが、津波を警戒するようという呼びかけは含まれていなかった。わずかにNHKラジオで、東海地震が懸念されている静岡県から転動してきたアナウンサーが、アドリブによってこれを呼びかけたただけであった。

このように、日本海中部地震のときは決して十分ではなかったが、津波警報に先だってあらかじめ津波への警戒を呼びかけるのは、テレビ・ラジオなどの放送がもっとも有効である。しかし、これにも例外がある。つまり、今回の災害では、もっとも早く地震情報を流したのはNHK札幌放送局だったが、同局が番組を中断して地震放送に切り替えたのは22時22分53秒であり、地震からおよそ6分後のことだった。つまり、放送が立ち上がるよりも、津波のほうが早く来てしまったのである。

そこで、もう一つの方法が重要になると思われる。

それは、同報無線の放送装置と震度計、およびコンピュータを連結しておき、一定規模の地震動を感知したらコンピュータが作動して、「ただいま大きな地震がありました。津波のおそれがありますから、海岸沿いの人は急いで高台に避難してください」とか「津波のおそれがありますから、海岸沿いの人は厳重に警戒してください」のような音声自動的に流れる仕組みを導入することである。つまり、今回の災害で奥尻町の職員が自発的に行なった動作を、コンピュータにさせるということである。これを、同報無線の「自動放送」と呼ぶ。

現に、東海地震が起こると津波災害が心配される静岡県焼津市では、すでにこのシステムを採用している。

これは「焼津市同報無線地震警報自動放送システム」と呼ばれ、1983年に導入されたものである。このシステムは、同報無線が市役所の1階に設置された2台の地震計（機械式と電気式）と連動しており、地震を感知すると、警報装置が作動して自動的に

防災情報を放送する仕組みになっている。そして、放送文は、震度4～6の3段階別に設定され、地震の強さに応じた放送ができる。その放送文は、次のような内容である。

(1) 震度4程度 (25～80 Gal) のとき

「こちらは広報やいづです。ただいま地震がありました。みなさん、落ち着いて火の始末をしてください」

(2) 震度5程度 (80～250 Gal) のとき

「こちらは広報やいづです。ただいま大きな地震がありました。みなさん、落ち着いて火の始末をしてください。海岸地方では津波に注意してください。テレビやラジオをつけ、落ち着いて行動して下さい。なお新しい情報が入り次第お知らせします」

(3) 震度6程度 (250 Gal) のとき

「こちらは広報やいづです。ただいま大きな地震がありました。みなさん、落ち着いて火の始末をして下さい。海岸地方では津波に十分注意して下さい。テレビやラジオをつけ、自主防の指示に従って落ち着いて行動して下さい。なお新しい情報が入りしだいお知らせします」(焼津市提供資料より)

ここでは、震度5ないし震度6のときに、自動的に津波への注意が放送されることになっている。このシステムは、地震計とコンピュータを備え、また誤作動を防ぐために地震計が機械式と電気式の2台設置されているため、事業費用は960万円とかなり高くなっているが、とくに海浜への多くの観光客をかかえる市町村などでは、その導入を検討する価値のあるシステムだと思われる。

3. 流言の発生

地震や噴火などが起こった直後には、しばしば流言蜚語が広がる。1991年6月3日、雲仙普賢岳の火砕流によって大被害を受けた長崎県島原市では、災害から4日経った6月7日に「また大火砕流が起こる」という流言が広がり、住民の一部が避難するという騒ぎが起こっているし、93年1月の釧路沖地震の後も、「地震雲が出ているからまた大地震が来る」とか「東京の霊能者が地震を予言したそうだ」などという流言が広がり、釧路市民に不安を与えた。

今回の北海道南西沖地震も例外ではなく、津波の再来を予想する流言が広がり、地域住民が高台に避難するという出来事が起こっている。

まず、最初に流言が発生したのは、大災害からほぼ1週間後の7月18日夜であった。

まだ余震が続いている渡島半島の桧山支庁管内の熊石町と乙部町において、「また津波が来る」といううわさがどこからともなく発生し、これを信じた80人ほどの住民が、手に手に荷物をもって高台に避難し、そのまま高台で一夜を明かしたのである。次に紹介するのは、これを報じた新聞記事である(図8)。

「『津波来る』デマ騒ぎ なぜー

大黒柱は出稼ぎに 不安で動いた主婦・老人 乙部・熊石

津波警報も出ていないのに、『津波が来る』との流言が隣近所に駆け巡った。夫や息子は出稼ぎに行ったまま。残された母子、お年寄りたちは高台に逃げた。北海道南西沖地震の余震が続く18日夜、桧山管内乙部、熊石町の2地区で起きた津波のデマ騒ぎ。情報化時代に、住民はなぜ信じたのか。そこには余震におびえながら、主婦や老人だけで家を守る出稼ぎ地帯特有の不安がうかがえる。(江差支局 田村)

「地震雲が出て、津波が来ると、言ってるよ。みんな避難してるよ」。乙部町豊浜地区のA子さん(29)はこの日午後7時、近所のB子さん(70)からこう伝えられた。すぐ貴重品を詰めたリュックサックを背負い、一人娘とともに高台の親類の所へ逃げた。また、電話でうわさを聞いたB子さんも、夫とともに親類の車で鮪(しび)の岬の町民グラウンドに行き、車内で毛布にくるまって夜を明かした。グラウンドに駆け付けた豊浜地区住民は50人ほどになった。

隣接の熊石町泊川地区のC子さん(77)も午後8時ごろ、知人から「豊浜地区で地震が来ると避難している」と聞き、息子の車で3分ほど離れた泊川児童館へ。既に近隣の住民約30人が眠っていた。

逃げた住民は、いずれもテレビなどで津波情報を確認していない。また、だれが『津波が来る』と言ったのかも、はっきりしない。流言だけで、約80人がほんろうされた。

騒ぎのあった両地区は計70世帯、200人ほどの小さな集落。両地区は出稼ぎ地帯でもある。この時期は、夫や息子がアラスカ、カナダに水産加工に行ったり、札幌圏や首都圏の建設現場で働いている。地区住民によると、豊浜では全世帯の8割、泊川でも5割が出稼ぎ家庭だ。

A子さんは『夫がいないし、心細い。また、うわさが出たら、避難すると思います』と疲れた声で話す。大黒柱がいない家庭の不安がにじみでる。．．．（略）」（「北海道新聞」1993年7月21日朝刊）

図8. 熊石町・乙部町の津波さわぎを報じた新聞記事（「北海道新聞」1993年7月21日朝刊）

津波警報も出ていないのに、「津波が来る」との流言が隣近所に駆け巡った。夫や息子は出稼ぎに行ったまま。残された母子、お年寄りたちは高台に逃げた。北海道南西沖地震の余震が続く十八日夜、松山管内乙部、熊石町の二地区で起きた津波のデマ騒ぎ。情報化時代に、住民はなぜ信じたのか。そこには、余震におびえながら、主婦や老人だけで家を守る出稼ぎ地帯特有の不安がうかがえる。

（江差支局 田村大志）

「地震雲が出て、津波が来る」と言ってるよ、みんな避難してよ。乙部町豊浜地区のA子さん（30）はこの月午後七時、近所のB子さん（50）からこう伝えられた。すぐ貴重品を詰めたリュックサックを背負い、一人娘とともに高台の親類の所へ逃げた。

また、電話でうわさを聞いたB子さんも、夫ともに親類の車で峠（しび）の岬の町民グラウンドに行き、車内で毛布にくるまって夜を明かした。グラウンドに駆け付けた豊浜地区住民は

「津波来る」デマ騒ぎなぜ」

大黒柱は出稼ぎに

不安で動いた主婦・老人

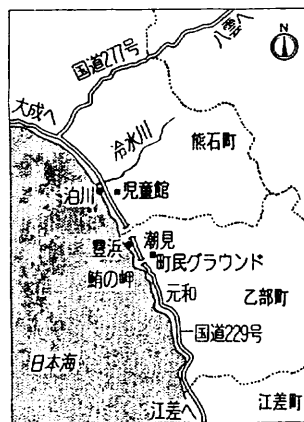
乙部・熊石

五十人ほどになった。隣接の熊石町泊川地区のC子さん（50）も午後八時ごろ、知人から「豊浜地区で地震が来る」と避難していき、聞き、息子の車で三分ほど離れた泊川児童館へ。既に近隣の住民約三十人が眠っていた。

逃げた住民は、いずれもテレビなどで津波情報を確認していない。また、だれが「津波が来る」と言ったのか、ラジオで確認できる

の、はつきりしない。流言だけで、約八十人がほろろと震えた。

騒ぎのあった両地区は計七十世帯、二百人ほどの小さな集落。両地区は出稼ぎ地帯でもある。この時期は、夫や息子がアラスカ、カナダに水産加工に行ったり、札幌圏や首都圏の建設現場で働いている。地区住民によると、豊浜では全世帯の八割、泊川でも五割が出稼ぎ家庭だ。



しかし、流言さわぎはこれにとどまらなかった。それからふたたび1週間ほど経った7月25日朝、今度は奥尻町において、「また大津波が来る」という流言がまたたくまに広がり、かなりの数の住民が高台に避難するとともに、地元消防団なども住民の避難誘導にあたったり、本当に津波が来るのかという問い合わせも奥尻役場や気象台に殺到したという。

これは、当日午前8時37分と39分の2度にわたって震度4の地震が発生したが、この揺れが、大災害の直後に札幌管区気象台が奥尻島に設置していた臨時観測点だけで記録され、他の気象官署では記録されなかったこと、および気象台ではこの地震による津波の心配がないと判断したことなどから、震度に関する地震情報も、津波なしという津波情報も発表しなかったため、不安にかられた人々のあいだに「また津波が来るので

はないか」という話が起こり、これが伝達される過程で、「また津波が来る」と変容して、かなりの数の人たちが避難行動をとったものと考えられる。

また、当日の混乱状況はかなりのものだったらしく、新聞記事は次のように伝えている（図9）。

「奥尻で連続震度4 気象庁は情報流さず 住民ら避難騒ぎ」

北海道南西沖地震に直撃された北海道奥尻町で、25日午前8時37分と同39分の2回、強い地震があり、札幌管区気象台が同島に設置している臨時観測点は、いずれも震度4（中震）を観測。同島青苗地区では、一部住民や警察の捜索隊が高台に避難する騒ぎとなったが、札幌管区気象台は『奥尻島の臨時観測点しか地震を観測できず、地震情報の基準にあわなかった』として、情報を一切、行政当局などに連絡しなかった。

震源は、1度目が北海道南西沖で深さは約5キロ。2度目は奥尻島が震源で深さは約9.9キロ。突然、ぐらぐらと揺れはじめ、2分後に追い打ち。青苗岬にいた人は『余震の中では最も大きく、津波がくると思い高台へ逃げ出した』という。

また、青苗漁港の防波堤付近で捜索準備をしていた北海道警、警視庁などの潜水班も『津波の危険がある』として高台に避難。道警は付近住民にも避難を呼びかけるとともに、海岸一帯で通行規制をしき、海上保安庁の捜索班は逆にボートで沖合いへ避難した。ところが、この間、テレビ・ラジオを通じての地震情報は一切流れず、奥尻町関係者が潮位を確認した結果、『津波の危険はない』と判明。町は午前9時26分、防災無線で『津波の心配はありません』と呼びかけ、騒ぎはおさまった。

地震情報を出さなかった事について、同気象台は『気象台や測候所で有感地震を観測すると、気象業務法に基づき、地震情報を関係機関に発表するが、情報の発表は常設観測点での観測が原則。今回は震度を記録したのが同島に設置された臨時の震度計、地震計だけだったため、発表しなかった』と説明した。

この説明に、地元から『せめて津波の恐れがあるかどうかくらいは知らせて欲しい』と、不満の声があがったため、同気象台は『このままでは不安を与える』として、震度4以上の場合に限り、奥尻島の臨時観測点の観測だけでも情報を出すことを約束した。奥尻島に臨時観測点が設置されたのは今月15日。以来、同島で観測された地震は24日までに約150回を数えたが、すべて震度3（弱震）以下。震度4を観測したのは25日が初めて」（「読売新聞」1993年7月26日朝刊）

「奥尻で二度震度4 津波を警戒し一時避難」

北海道南西沖地震で大きな被害を受けた北海道・奥尻島で、25日午前8時40分ごろ立て続けに震度4（中震）の地震があり、島民らが『津波が来る』として高台に避難する騒ぎがあった。大地震以来、津波を恐れて島民が避難したのは初めて。

また、気象庁による地震・津波速報の発表がなかったため、島民の間に不満の声が起き、気象庁は25日正午から、奥尻島だけで震度4以上の揺れを観測した場合にも速報を出すことを決めた。

「気象庁の速報なし 島民に不満の声」

奥尻島ではこの日午前8時40分頃、2度にわたって強い余震があった。このあと

午前9時頃、初松前地区の道道で、地元消防団員が通行中の車を止め、『津波警報が出ている。高台に避難してほしい』と誘導した。海岸べりで被災者用の仮設住宅を建設中の作業員や、行方不明者を捜索していた警官らも避難し、約50人が海面を見守った。しかし、異状がなかったため20分後には自主的に戻った。

現場の警察官によると、余震のあと警察無線で『青苗港の水位がぐっと下がった。津波がくる恐れがあるので至急住民を避難させろ』という指示が流れたという。しかし、町役場や現地の警察署は『そういう指示を出したことはない』と話している。

札幌管区気象台によると、奥尻町役場の震度計は、午前8時37分と39分にいずれも震度4を記録した。だが、対岸の桧山支庁江差町や後志支庁寿都町などの気象観測所では有感地震が記録されなかった。原則としては震度4以上で速報を出す、震源を特定し、津波情報を出すには複数の観測地点の数値が必要だった」（「朝日新聞」1993年7月26日朝刊）

図9. 奥尻町の津波さわぎを報じた新聞記事（「読売新聞」1993年7月26日朝刊）

奥尻で連続震度4	気象台は 情報流さず 住民ら避難騒ぎ	北海道南西沖地震に直撃された北海道・奥尻島で、二十五日午前八時三十七分と同三十九分の二回、強い地震があり、札幌管区気象台が同島に設置している臨時観測点は、いずれも震度4（中震）を観測。同島青苗地区では、一部住民や警察の捜索隊が高台に避難する騒ぎとなったが、札幌管区気象台は「奥尻島の臨時観測点しか地震を観測できず、地震情報の基準に合わなかった」として、情報を一切、行政当局などに連絡しなかった。 震源は、一度目が北海道南西沖で深さは約五キロ。二度目は奥尻島が震源で深さは約九キロ。突然、ぐらぐらと揺れはじめ、二分後に追いつ打ち。青苗町にいた人は「余震の中では最も大きく、津波が来ると思い高台へ逃げ出した」という。 また、青苗漁港の防波堤付近で捜索準備をしていた水班も津波の危険があるとして高台に避難。道警は「付近住民にも避難を呼びかけ」とともに、海岸一帯で通行規制を敷き、海上保安庁の捜索班は逆にボートで沖合へ避難した。 ところが、この間、テレビ・ラジオを通じての地震情報は一切流れず、奥尻町関係者が潮位を確認した結果、「津波の危険はない」と判明。町は午前九時二十六分、防災無線で「津波の心配はありません」と呼びかけ、騒ぎは収まった。 地震情報を出さなかったことについて、同気象台は「気象台や測候所では有感地震を観測すると、気象業務法に基づき、地震情報を関係機関に発表するが、情報の発表は常設観測点での観測が原則。今回は震度を記録したのが同島に設置された臨時の震度計、地震計だったため、発表しなかった」と説明した。 この説明に、地元から「せめて津波の恐れがあるかどうかくらいは知らせてほしい」と、不満の声が上がったため、同気象台は「このままでは不安を与える」として、震度4以上の場合に限り、奥尻島の臨時観測点の観測だけでも情報を出すことを約束した。奥尻島に臨時観測点が設置されたのは今年十五日。以来、同島で観測された地震は二十四日まで約百五十回を数えたが、すべて震度3（弱震）以下。震度4を観測したのは二十五日が初めて。
-------------------	-----------------------------------	--

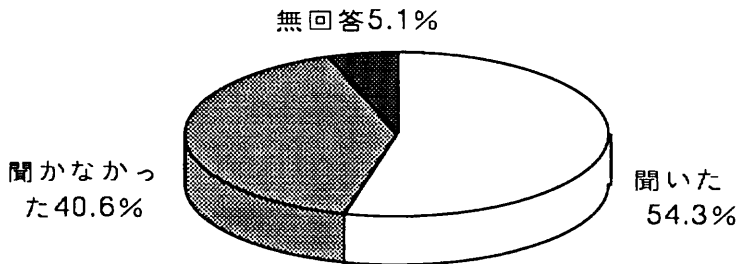
このように、今回の北海道南西沖地震では、新聞に報じられているだけでも2つの流言さわぎがあった。突然の大津波に襲われた人々の心理的ショックと、ふたたび大津波が来るのではないかという不安がその背景にあることは間違いないと思われる。

それでは、人々はこういう流言に対して何を感じ、どう行動したのであろうか。筆者らのアンケート調査から、このことを調べていきたい。

まず、7月18日夜、熊石町と乙部町において広がった流言からみていこう。前にも延べたように、筆者らは、熊石町民に対してアンケート調査を実施した。

その結果を以下に紹介すると、この夜、「また大津波が来る」という話を聞いた人は、54.3%と半数以上にのぼっていた(図10)。

図10. 「また大津波が来る」という話を聞いたか(熊石町 N=352人)



また、その話の内容をくわしく書いてもらったところ、次の(1)、(2)、(3)のタイプが多かったが、少数ながら、(4)のようなものもあった。

(1) ただ単に「地震が来る」、「津波が来る」というもの(例; 1週間後大きい地震がくると話を聞きました; ちょうど1週間後にほぼ同規模の地震が発生し、大津波がくる; また何日かに地震がくるから何か大切な物をカバンに入れておいた方がいいよと話をしました; 近くに住む奥さんが奥尻で被害を受けた母親から電話で、地震が来るから避難した方がよいと言われたそうで、私にも教えてくれた; 乙部町豊浜に住んでいる人が当町泊川地区の親戚の人に、「こちらの地区で大津波が来ると避難している。早く避難した方がいい」との電話が入ったことから泊川地区で避難中との話を聞いた; 再び地震が起こり、震源地はより熊石に近いと予想されるので、南西沖地震に比較にならない程の地震による津波が来るらしい; ○○地区で今夜津波がくるからといま高台に避難しているから、○○地区の方も避難した方がいいと電話で知らされた、と聞いた; 近所で奥さん達や、おばあちゃん達が1週間たって大津波が来て、今度は熊石が被害になると言われ、怖くて落ち着かなかったです)

(2) 「地震雲が出たから地震が来る(その結果、津波も来る)」というもの(例; 地震雲が出た。乙部町で避難している; 地震雲が出たから津波がくると聞いた; 地震雲

が出たので又地震が起こり津波がくる；隣町から「地震雲が出たので又大地震、津波がくる」との情報が入ったが、聞いていないかと親類からその夜、電話があった；近所で地震雲の話が出てきて7月18日の夜に消防団の人が「地震雲が発生した」と言ったという噂が広がり、泊川の人逃げた；7月12日のような地震がまたくる。地震雲が出ているので、近いうちに大地震がおこり、大津波がくる。大島が爆発して大津波がくる；乙部方面の海上に地震雲なるものが現れて多くの人達が見たということで；私の聞いたのは大津波ではなく、奥尻の上の方に地震雲が出たので、又一週間程したら大地震が来ると言う事を聞いた；近日中に再び地震が発生し、津波が来るとの情報が流れて隣町の人達一部が避難をしている事（奥尻島上空に地震雲を見た人が結構いた）；大成町方面で地震雲を見たので又津波が来る聞いた；親戚から電話が来ました、内容は地震雲が出たということです）

（3）「占い師・予言者・神様が地震が来る（その結果、津波も来る）と言った」というもの（例；占い師が予言した；神様が言ったとかで噂と思っていた；どここの神様が、○月○日に地震が来ると言っていたとよく聞きました；神様と呼ばれている人が予言した；神占い；何か予言者が言ったとか、世間の人達はかなり心の中に心配したようです；子供が学校から帰ってきたら、熊石町にいる神様みたいな人が地震が来ると予言したと学校の中で、みんなが話していると言っていた；神様があと何日かで又来るとかという噂が子供達や近所の人達が話していた；神様のおつげと言う事で、高台に避難した人がいたという事；何処かの占い師が大津波が来るので、自分も外国に避難して居るとか、学校でも専らの噂があったと言う；ただ漠然とうわさが流れていた。その人達の話によるとテレビで霊能者が言っていたらしい；江差の神様が乙部沖の地震で津波が来ると、学校で聞いた子供から聞きました）

（4）「温泉の温度が上がったから地震が来る（その結果、津波も来る）」というもの（例；温泉の温度が高くなったから、地震が来る；人から人へと伝わって、奥尻の温泉が100度になった時、地震が起きたから又100度を超えたなど、みんなで気をつけていた）

次に、こうした話をだれから聞いたかたずねたところ、「近所の人から」聞いたという人が圧倒的に多く71.2%を占め、以下、「親戚・知人から」（24.6%）、「職場の人から」（18.8%）と続いていた（表2）。通例のことであるが、この流言が、身近な人たちのパーソナル・コミュニケーション・ネットワークを通じて広がったことがわかる。

さらに、人々がこの話を聞いてどう思ったかについては、「大津波が本当に来ると思った」という人はさすがに少なく、9.9%にすぎなかったが、「ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った」人は、52.9%と過半数にのぼっていた（図11）。大津波再来流言に対する住民の信頼度は、相当に高かったといえよう。

そして最後に、この話を聞いた人たちがどう行動したかをみると、「実際に避難した」という人が20.9%、「避難しなかった」人が67.5%となっており、5人に1人が避難した計算になる（図12）。またこのほか、避難はしなかったが避難の準備をした人が5%程度あった。避難率はかなり高かったことになるが、これも、人々の不安の

大きさを反映した結果と思われる。

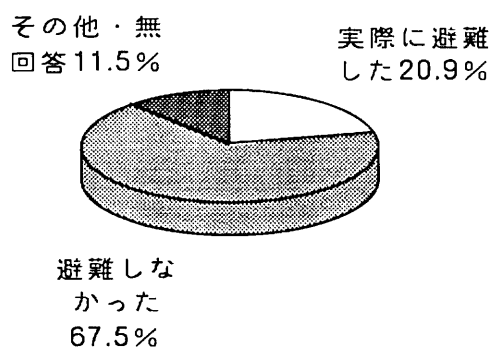
表2. 大津波が来るとい話をだれから聞いたか (熊石町 N=191人)

	N	%
家族から	18	9.4
近所の人から	136	71.2
親戚、知人から	47	24.6
職場の人から	36	18.8
警察や消防から	1	0.5
報道関係者から	8	4.2
その他	5	2.6
無回答	3	1.6

図11. 本当に大津波が来ると思ったか (熊石町 N=191人)



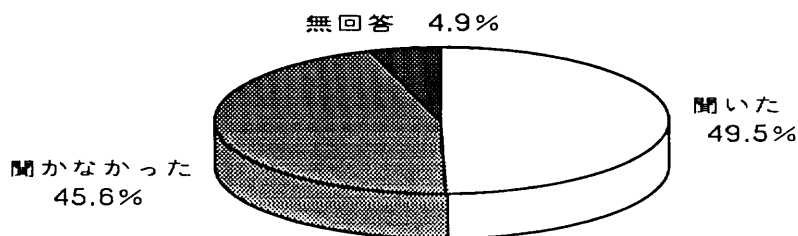
図12. 大津波が来ると聞いて避難したか (熊石町 N=191人)



次に、7月25日朝に起こった奥尻町の津波流言さわぎについて触れていく。

筆者らのアンケート調査によれば、このとき、大津波のうわさについて聞いた住民が49.5%、聞かなかった人が45.6%となっており、熊石町のケースと同様に、住民のほぼ半数がこの話を聞いたと答えている（図13）。

図13. 「また大津波が来る」という話を聞いたか（奥尻町 N=204人）



また、このとき聞いた話の内容は、熊石町の場合とくらべてバリエーションが少なく、「ふたたび津波が来る」、「また津波が来る」というような比較的単純な内容のものが圧倒的に多かったが、なかには「保安庁の船が津波がくると知らせた」、「占い師が地震がくると言ったと聞いた」、「津波警報がきた」、「地震の時は（震度3、4の時）必ずもう一度（津波が）来る」、「10日から12日後に再び地震がある」、「津波が来る、墓地の下へは下らないように」という話を聞いた、「震度4で津波が来る」、「一か月後に大きい余震がくれば地震がおさまる。大きい地震がくれば津波も来る」などというのもあった。

次に、また、その話をだれから聞いたかたずねると、「近所の人から」という人がとび抜けて多く64.4%、次いで、「親戚・知人から」（15.8%）、「家族から」（10.9%）と続いている（表3）。1993年1月に発生した釧路沖地震でも、地震の1-2週間後に、「また大地震が来る」という流言が市民のあいだに広がったが、このときも近所の人から聞いたという人が多かったし、先にみた熊石町の場合も同様であった。こうした流言が、近所の人や知り合いを通じて広がるというのは一般的法則のようである。

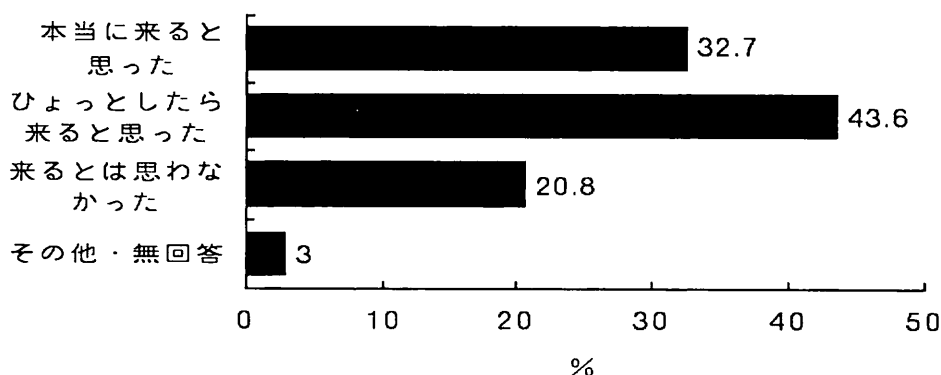
さらに、その話を信じたかどうかに関しては、つい2週間前に大災害があったばかりでまた大きな津波がやってくるのではないかという住民の不安を反映し、「大津波が本当に来ると思った」人が32.7%、「ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った」人が43.6%と、あわせて76%もの人が、このうわさを信じている（図14）。この数字は、熊石町の場合よりもはるかに高い。前述の釧路沖地震のときには、大地震がやってくると信じた人の割合はほぼ35%でこの数字もかなりの高率だったが、今回はそれをもはるかに上回っていた。これは、奥尻町の人々にとって7月12日の大津波

のショックがいちじるしく、また今回のうわさが、すぐ前に起こった2度にわたる震度4の地震をきっかけにして起こったため、そもそも話に信憑性と深刻さがあったことによるものと考えられる。

表3. 大津波が来るという話をだれから聞いたか（奥尻町 N=101人）

	N	%
家族から	11	10.9
近所の人から	65	64.4
親戚、知人から	16	15.8
職場の人から	1	1.0
警察や消防から	1	1.0
報道関係者から	4	4.0
その他	12	11.9
無回答	5	5.0

図14. 本当に大津波が来ると思ったか（奥尻町 N=101人）



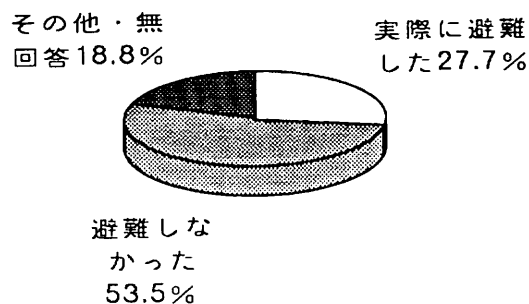
そして最後に、実際の行動であるが、この話を聞いて実際に高台に避難した人も27.7%と、これも、かなり高率になっている（図15）。この数字は熊石町よりも少し多くなっているが、アンケート調査の対象者の多くがすでに高台の避難所に住んでいたことを考え合わせると、相当多くの人がうわさを信じて、もっと安全な場所に避難したということもできる。

一般に、釧路沖地震のような「また大地震が来る」という話の場合には、多くの人はいたとえその話を信じたとしても、せいぜい防災用品を整えとか、枕元に服をおいて寝るとかする程度で、うわさは心理的不安や動揺は招くが、社会的混乱を生み出すようなことは少ない。けれども、津波の流言は別である。

過去にも、1855年の安政江戸地震や、1913年の桜島噴火の後に、大津波再来

の流言が広がり、人々がいっせいに高台に向かって避難するという出来事が起こっており、大津波の流言は避難行動をとまなうことが少なくないので、場合によってはパニックの引き金にもなりかねない。したがって、こうした流言の場合には、とりわけ迅速な打ち消し情報を提供することが必要になるといえよう。

図 15. 大津波が来ると聞いて避難したか（奥尻町 N=101人）



補論

島牧村のオフトーク通信

1. オフトーク通信とは

オフトーク通信とは、電話回線の空き時間を利用し、役場などに設置された情報センターから、各家庭の電話に接続されたスピーカーを通じて、音声などを一方通行に伝達するサービスである。一般的なシステムとしては、有線放送電話に似たものともいえる。

ただし、オフトーク通信の場合はあくまでも電話が優先であり、放送中でも電話がかかってくれば自動的に放送が中断される。また利用者は、情報センターの提供メニューのうちから、最大4チャンネルまでを自由に選択して聞くことができる。また、災害時などの緊急の場合には、チャンネルに関係なく一斉放送をすることもできる。災害時は電話の輻輳で電話は通じないことも多いが、このシステムは1つの交換機内で構成されるために、輻輳による規制を受けることはない。

1988年にはじまったこのサービスは、1993年9月現在、全国で151の情報センターが設置され、21万4000の加入がある。

この新しい通信サービスは、今回はじめて大きな災害に遭遇することになった。次に、災害時にオフトーク通信はどのように機能し、またどのような問題点があったかを、島牧村の事例からみてみよう。

2. 島牧村のオフトーク通信

島牧村がオフトーク通信を導入したのは、1992年10月1日である。有線放送電話の機械の更新を契機に、オフトーク通信を導入する町村が少なくないなかで、島牧村では以前に有線電話放送などの経験はなく、広報紙の延長として住民への行政情報の伝達を目的に導入した。地震前に、全世帯の97%にあたる約900世帯がオフトーク通信に加入していた。その設備・運営費は全額村が負担したが、設備設置費用は5200万円程度ですみ（「北海タイムス」平成4年11月4日）、1端末当たり1カ月500円（900世帯だと年450万円）の運営費がかかるものの、防災無線の戸別受信機を導入するのにくらべると、かなり安い費用だといえる。

島牧村では日常時から「うしお通信」という呼び名のもとで、4チャンネルを使った放送をしている。そのうち1チャンネルでは、1日3回の放送で村からのお知らせ・行事案内・村民のおくやみ・学校やPTAの連絡などを流し、2チャンネルは1チャンネルの再放送。3チャンネルではNHKのFM放送を再送信し、4チャンネルではBGMを流している。通常の放送は、役場の1階にある放送室から行われるが、消防支署にもサブセンターをおき、火災のときにはそこから一斉放送が流される。

オフトーク通信は、各戸に置かれたスピーカー経由の放送が主だが、島牧村では屋外作業中にも聞こえるように、村内の7つの漁港に屋外拡声機型のスピーカーも設置していた。

3. 地震時の対応

村役場での聞き取りによると、津波警報の伝達については、地震によって停電したために、22時30分頃ラジオから大津波警報を知った職員が、それを受けて22時35分頃、オフトーク通信で「大津波警報が発令されました。住民は高台に避難して下さい」という内容で避難を呼びかけたという。これは、地震の18分後の放送ということになる。

地震直後の停電にもかかわらず、オフトーク送信機は予備バッテリーをもち、また家庭の受信機は充電式の予備電池が作動したため、通信することができた。しかし、7つの漁港に設置してある屋外型の受信機は商用電源だけのため、停電が回復するまで放送不能になってしまった。もっとも、そのうち4本は津波のために破壊されていた。

役場では、今回の教訓から

(1) 屋外放送塔に予備バッテリーを装備すること

(2) 新たに40本の放送塔を設置し、屋外でもオフトーク通信が聞こえるようにすること

などを決定したという。

4. 住民の対応

今回の災害を契機に、いままではいらないといていた10世帯からも加入の申し入れがあった。このことから、役場では住民の評判もよかったと考えている。

では、住民は実際に放送にどう対応し、これをどのように評価しているのだろうか。

筆者らのアンケート調査によれば、地震の当夜、オフトーク通信を聞いた人は回答者の約半数であった。具体的にいうと、屋内の受信機から聞いた人が44%、屋外のスピーカーから聞いた人が4.9%であった(図16)。

放送を聞いたというこの人数は、奥尻町の場合より多かったが、熊石町よりは少ない。熊石町ほど聞いた人が少なかった原因としては、放送が地震の10分後と比較的遅かったために、すでに家から避難していた人が多かったことと、屋外拡声機が少なくかつ十分に作動しなかったこと、などが考えられる。一方、停電にもかかわらず、屋内スピーカーから聞いた人が比較的多かったのは、各家に設置されたオフトーク通信端末が充電式の電池でバックアップされていたためと考えられる。この仕組みでは電池交換の必要がないため、停電時に確実なバックアップができたといえよう。

島牧村では、アンケートの回答者182人のうち、74.2%の住民が地震直後に避難していたが、避難した人の約4分の1が、避難のきっかけとしてオフトーク通信での避難の呼びかけをあげている(表4)。具体的には家庭内のオフトーク通信からの呼びかけで避難した人が22.2%、屋外の拡声機からの呼びかけで避難した人が2.2%であった。この数字をみても、今回のオフトーク通信が避難の促進に重要な役割を果たしていたことがわかる。放送を聞いた人自体が住民の半数程度であったことを考えると、聞こえた人に対しては、オフトークからの避難の呼びかけは相当な効果があったといえるだろう。

こうしたことを反映して、住民のオフトーク通信に対する評価も高くなっている。つ

図16. 災害当夜、オフトーク通信の放送を聞いたか（島牧村 N=182人）

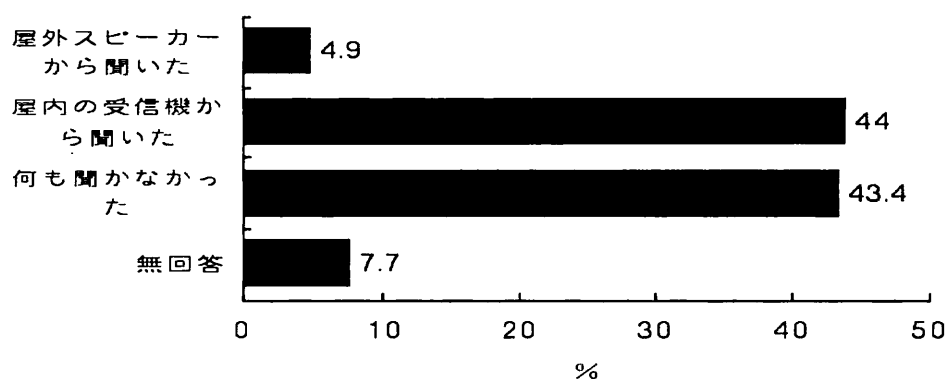


表4. 避難のきっかけ（島牧村 N=135人）

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから	39	28.9
家族が避難しようといったので	35	25.9
親戚や近所の人々が避難するようにいったので	25	18.5
屋外のオフトーク通信スピーカーが避難を呼びかけたので	3	2.2
家庭内のオフトーク通信スピーカーが避難を呼びかけたので	30	22.2
テレビで津波警報を聞いたので	4	3.0
ラジオで津波警報を聞いたので	7	5.2
実際に津波に襲われたので	15	11.1
その他	29	21.5
無回答	3	2.2

まり、地震の夜から翌朝にかけてオフトーク通信は役に立ったかという質問に対して、非常に役に立ったと答えた人は39.6%、ある程度役に立ったとした人は23.1%と過半数の人が役に立ったと答えている（図17）。

一方、注目すべきなのは、地震から一週間の間ではオフトーク通信に対する評価がさらに高くなっている点である。つまり、非常に役に立ったという人が51.1%、ある程度役に立ったとする人が28.6%と、8割もの人が役に立ったと答えているのである（図18）。村ではこの間、LPガスボンベや墓石転倒に対する点検の呼びかけや、被害状況調査の協力の呼びかけなどを放送している。その中でもっとも役に立ったと思われるのは、断水にともなう給水車の派遣場所と時刻の告知放送である。この放送は、グループページング機能を使って地域別に行ったが、給水車が行くと多くの住民がすで

図17. 地震当夜、オフトーク通信は役だったか（島牧村 N=182人）

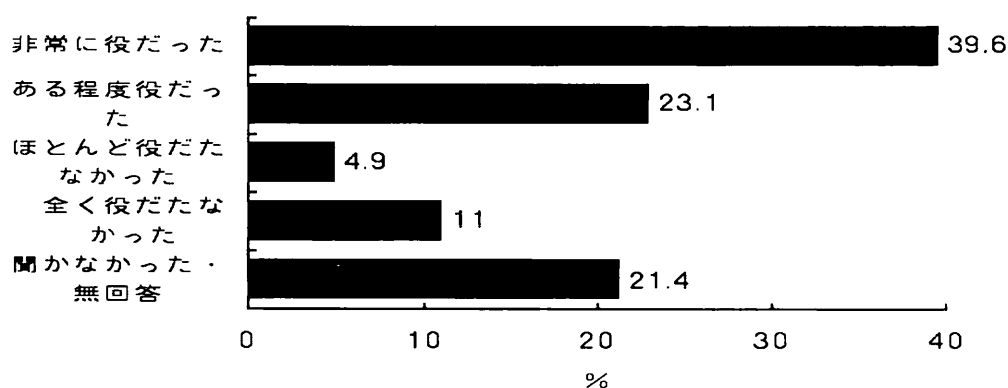
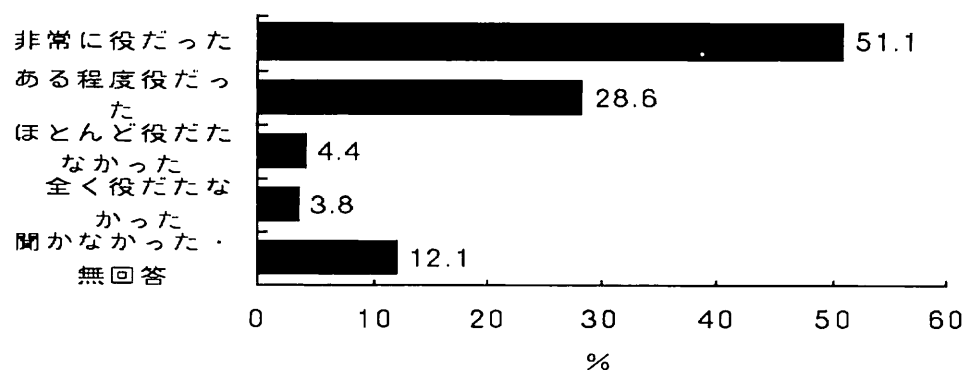


図18. 地震後1週間のあいだ、オフトーク通信は役だったか（島牧村 N=182人）



に集まっており、かなりの人がこの放送を活用したようだ、と村では話している。日常メディアとして日頃から利用されているオフトーク通信が、その特性を生かして災害に対するさまざまな行政情報を提供し、災害の復旧過程で大きな役割を果たした例といえるだろう。

島牧村では、日本海中部地震のときほとんど被害を受けなかった。前回の地震で手痛い被害を受けたために自主的にすばやく避難した奥尻町青苗の人々に比べると、島牧村では避難が遅れがちだった。そんな中で、オフトーク通信が避難を呼びかけたことは避難の促進に重要な貢献をしたといえるだろう。たしかに、津波の第一波は地震後5分程度で到達したため、避難の呼びかけはこれには間に合わなかった。しかし、津波は第二波第三波と襲ってきており、これらに対してはオフトークによる避難の呼びかけは一定の効果があったといえるだろう。オフトーク通信は設置費用が安い点からいっても、災害対策として今後もっと注目されてよいメディアだといえる。

しかし、その一方でいくつかの問題点ないし課題も明らかになった。

その第一は、屋外にいる人のための屋外放送塔の増設である。地震時は外に避難する人が多いために、どうしても室内のオフトークスピーカーだけでは不十分である。第二

に、屋外放送塔に補助電源がないということである。もともとオフトーク通信は日常的に使うことが主だから、そのために電源対策が十分ではなかったのだろうか。

6 章

災害ボランティア活動

1. ボランティア活動の実態と住民の評価

最後の6章では、災害時におけるボランティア活動について考えていく。

今回の災害では、災害直後からさまざまなボランティア活動が行なわれた。たとえば、日本赤十字社は、災害発生の報道がされるいなや活発に動き、最終的には、次のような実績を残している。

○日本赤十字社のボランティア活動 概況

奥尻町、江差町	延1, 800名
炊出し（函館、釧路の各赤十字奉仕団等）	
救援物資仕分け搬送作業（江差赤十字奉仕団等）	
救護所内シャワー付風呂、洗濯機の設置（函館スキーパトロール奉仕団等）	
仮設住宅への電器製品配備（札幌水上安全奉仕団等）	
非常通信伝達訓練（9月1日 無線奉仕団）	
被災者の引越しの手伝い（札幌青年赤十字奉仕団等）	
北海道支部内	延1, 200名
義援金受け付け、領収書発行事務（札幌青年赤十字奉仕団等）	

よく知られているように、日本赤十字社は、災害が発生すると、ただちに医療救護班を派遣するほか、備蓄してある救援物資（毛布、日用品など）の送付を行なう。また、赤十字奉仕団によって、広範なボランティア活動が行われる。赤十字奉仕団は、現在、全国に3, 755団・438万人が登録されている日本最大規模のボランティア組織である（平成4年4月1日現在）。その災害時における活動は、炊き出しなどの救助活動に加え、アマチュア無線奉仕団による通信連絡のほか、看護奉仕団、指圧救護団などの特殊奉仕団による活動が可能である。

また、日本赤十字社は、平成3年に『国内救護体制の整備について』という答申を取りまとめ、続く平成4年には『赤十字防災ボランティア活動推進要項』を定め、災害救護活動に積極的な取り組みを行っている。今回のボランティア活動も、その一環として行なわれたものであった。

次に、地震と津波の被災者たちが、今回のボランティア活動をどのように認識したかを、筆者らのアンケート調査からみていく。ここでは、被害がもっともいちじるしかっ

た奥尻町と対岸の大成町の2つのケースをとりあげよう。

まず、今回の災害において被災者がどのようなボランティア活動を受けたかをたずねると、奥尻町ではもっとも多かったのが、全国各地から寄せられた「義援物資の仕分け・運搬」で、66.2%と半数以上の人ボランティアの恩恵を受けていた。その次が「けがや病気の手当」で、これも48%と、ほぼ半数がボランティアの対象となっており、以下は、「炊事・洗濯の手伝い」（38.7%）、「引っ越しの手伝い」（22.1%）と続いている（表1）。

また、そうした活動のうち、もっともありがたかったものとしては、「義援物資の仕分け・運搬」で56%、次が「けがや病気の手当」の46.7%であり、この両者は住民のほぼ半分があげている（表2）。

表1. どんなボランティア活動をしてもらったか（奥尻町 N=204人）

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	30	14.7
けがや病気の手当	98	48.0
炊事・洗濯の手伝い	79	38.7
義援物資の仕分け・運搬	135	66.2
宅配便関係	29	14.2
掃除	38	18.6
引っ越しの手伝い	45	22.1
話し相手	14	6.9
その他	5	2.5
無回答	22	10.8

表2. もっともありがたかったボランティア活動（奥尻町 N=182人）

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	19	10.4
けがや病気の手当	85	46.7
炊事・洗濯の手伝い	51	28.0
義援物資の仕分け・運搬	102	56.0
宅配便関係	14	7.7
掃除	20	11.0
引っ越しの手伝い	29	15.9
話し相手	14	7.7
その他	5	2.7
無回答	6	3.3

さらに、ボランティア活動をしてくれたのはどのような人たちだったかをたずねると、個人のボランティアと答えた人が34.1%、一方、ボランティア団体という人が89%であり、圧倒的多数が団体をあげていた（図1）。また、その団体名は表3のようになっているが、赤十字と宗教団体がとびぬけて多いことがわかる。これらの結果は、今回の災害でいかに多くのボランティア活動が行なわれたか、そしてその活動がいかに被災者の助けになったかを示すものといえよう。

図1. どこからボランティア活動を受けたか（奥尻町 N=182人）（複数回答）

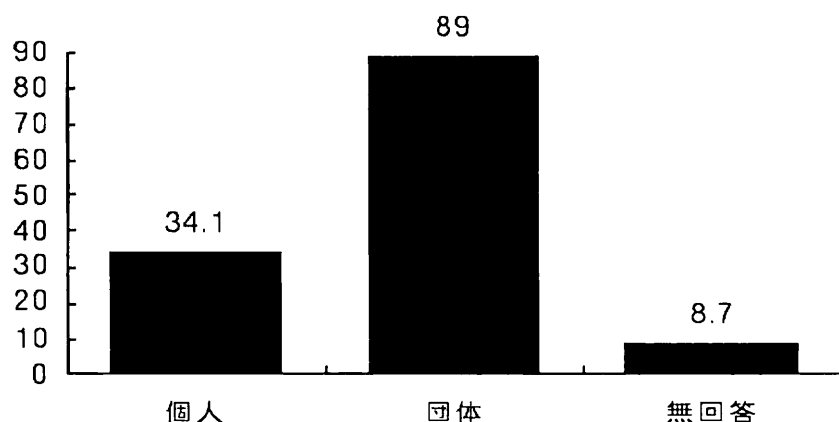


表3. 回答者があげたボランティア組織の名前（奥尻町 N=120）

日本赤十字社	78
宗教団体	21
大学	7
企業	3
コック	2
保母	1
婦人会	6
役場の人	1
地元中学校	1

こうした活動を受けて、ボランティア活動に対する人々の評価もきわめて高く、「ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う」という人が93.1%と、ほぼ全員ともいっていい人たちが、今回のボランティア活動を評価している（図2）。また、今回の経験を踏まえ、災害後のボランティア活動が必要かどうかの一般的な質問に対しても、「個人・団体を問わず絶対必要だと思う」人が67.6%を占めている。なかでも、赤十字や宗教団体などという団体のボランティアの活動が必要と考えられており、

「団体から派遣されるボランティアは必要である」という25.0%を加えれば、これも9割以上の人がその必要性を認識したことになる（図3）。

図2. ボランティア活動は役だったか（奥尻町 N=204人）

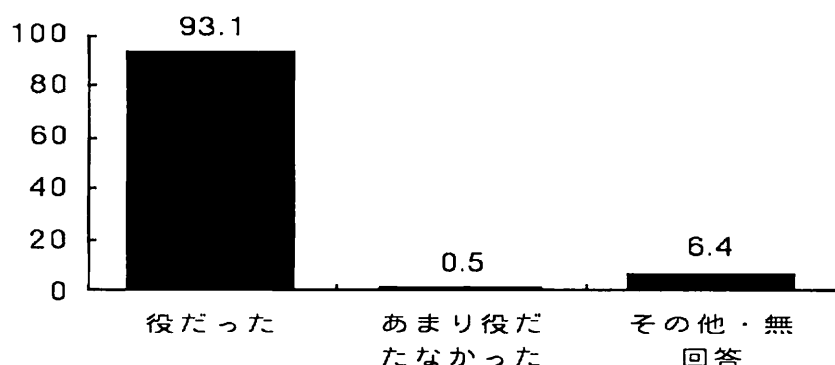
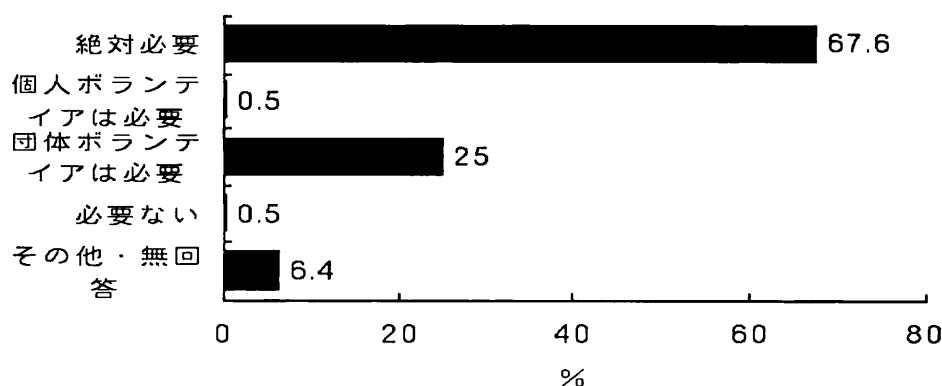


図3. ボランティア活動は必要か（奥尻町 N=204人）



このように、奥尻町には、災害直後から赤十字や宗教団体などのボランティア団体やそうした団体には属さない多くの個人が訪れ、さまざまなボランティア活動を行なった。そしてそれは、被災した奥尻町の多くの住民から感謝され、また高く評価されている。

しかし、大成町の住民の回答をみるとまったくちがった側面がうかがえる。つまり、奥尻町とちがって、大成町ではボランティア活動はあまり活発には行なわれなかったのである。

まず、調査対象者に対し、どのようなボランティア活動を受けたかをたずねると、「自宅周辺のあとかたづけ」（7.0%）、「義援物資の仕分け・運搬」（5.5%）など、多少はボランティア活動が行なわれているが、この数字は、奥尻町の「義援物資の仕分け・運搬」（66.2%）、「けがや病気の手当」（48.0%）、「炊事・洗濯の手伝い」（38.7%）などと比較すると、驚くほど少ないのである（表4）。

一方、ボランティア活動に対する住民の評価は、「ボランティア活動は被災者にとっ

表4. どんなボランティア活動をしてもらったか (大成町 N=200人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	14	7.0
けがや病気の手当	1	0.5
炊事・洗濯の手伝い	9	4.5
義援物資の仕分け・運搬	11	5.5
宅配便関係	1	0.5
掃除	6	3.0
引っ越しの手伝い	7	3.5
話し相手	4	2.0
その他	3	1.5
無回答	174	87.0

図4. ボランティア活動は役だったか (大成町 N=200人)

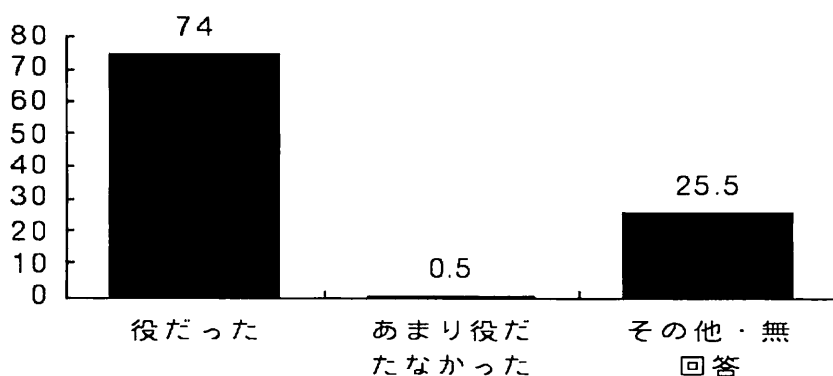
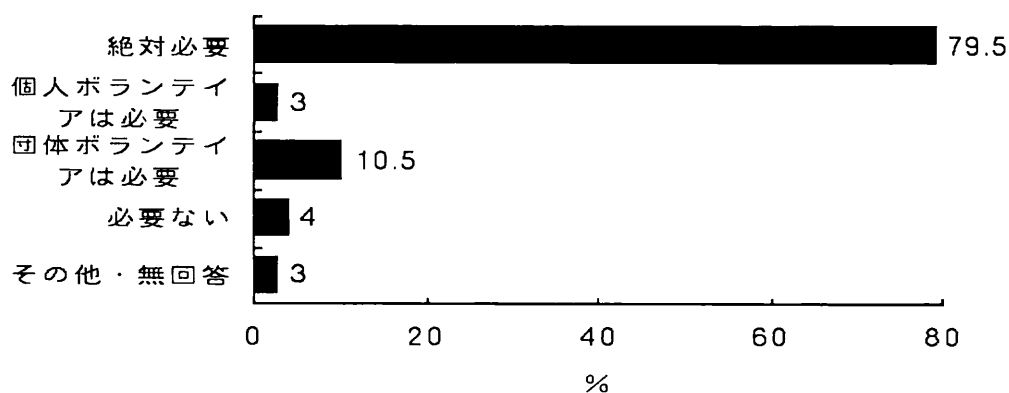


図5. ボランティア活動は必要か (大成町 N=200人)



て役に立ったと思う」という人が74%もあり、奥尻町よりも評価は低いというものの、4人に3人がボランティア活動を高く評価している（図4）。また一般的にもボランティアが「個人・団体を問わず絶対必要だと思う」人が79.5%にのぼっているが、この数字は奥尻町を上回るものでもある（図5）。

つまり、大成町には少数のボランティアが訪れ、その活動が高く評価されているといえよう。あるいは逆に、多くの住民がボランティアを評価しその必要性を認識しているのに、ボランティアの活動はあまり活発でなかったというべきかもしれない。

なぜ、奥尻町と大成町でボランティア活動にこんなに差が出てしまったのかは明白であろう。それは、マスコミ取材についての分析でも述べたように、今回の災害では奥尻町の被害があまりにも甚大だったため、マスコミの関心が奥尻町に集中し、その結果、かなりの被害が出ているにもかかわらず、それ以外の地域への関心が相対的に低くなってしまったためであった。奥尻町の報道が突出し、その惨害が番組や紙面を埋めたため、ボランティアの関心も奥尻町に集中してしまった。たしかに、奥尻町の被害は深刻であり、ボランティア活動が積極的に行なわれることは望ましいにちがいない。しかし、他方では奥尻町に義援金や義援物資が集中し、その管理に大変だったという話もある。今後は、被災地域全体にバランスよく援助の手をのばすような仕組みをボランティア活動にも導入する必要があると思われる。

2. ボランティア活動の問題点

いままで、今回の北海道南西沖地震にさいして、どのようなボランティア活動が行われたのか、そして住民がこれをどう評価しているのかについて概観してきた。そして現実には、ボランティア活動にともなって、さまざまな問題も指摘されている。次に、これらについての分析を試みる。

（1）未成熟なボランティア志願者による被災自治体への負担

まず、今回の災害では、ボランティアの経験が少なく、しかも食料、水、宿舎などを被災自治体に依存するような、いわば未成熟のボランティア志願者が過度に集中した、ということがあった（図6）。

被災直後の自治体は、きわめて多忙である。その状況のなかで、未成熟な参加者に作業の手順などを説明することは人手、時間、手間の面でかえって負担となる。そして、この負担は、ばらばらに来る未成熟な個人の場合により大きくなる。

また被災地は、施設の被害に加えて復旧作業に追われており、宿泊場所、食糧、交通手段などが絶対的に不足しているのが常である。したがって、これらの現地調達を期待して参加するボランティアは、いっそう現地の負担となる。加えて、慣れないゆえ、個々に活動しようとする、役場との連絡も不十分になりがちである。これに対し、経験豊富で現地事情を心得ているボランティアには、テント持参で参加するものがあつた。

図6. 個人ボランティアの実情を報じる新聞記事（「北海道新聞」1993年7月25日）

張

1993年(平成5年)7月25日(日曜日)

個人ボランティア集まるが――

細かな作業指示無理



救援物資などの積み降ろしをグループで手伝う民間ボランティアたち
＝奥尻・青苔中

【奥尻】北稚道南西端の地帯で大きな被害を出した松山管内奥尻町で、各団体などからの派遣ボランティアが救援に動いている。個人ボランティアの申し込みも相次いでいるが、町ではボランティアの宿泊先はおろか、配膳準備さえ十分な手が回らず、困窮も。現地にいらなくなる作業からあきらめ、手際よくさとのボランティアもいる。ボランティアと行政の橋渡しはスムーズには、本格的な復旧作業への強い味方になるはずだが、

一般的にいて、経験の豊富な団体ボランティアのほうが、活発に作業を行っている場合が多い。こうしたことは、住民自身にも認識されており団体参加者のほうが、個人参加者よりも高く評価されているのである。

(2) 不適切な援助物資による被災地自治体への負担

また、援助物資についても同じことがいえるだろう。つまり、被災直後の自治体に、過剰の義捐物資が届くことは、人手、時間、保管場所、手間などの面でかえって負担となることが少なくない（図7）。

とりわけ、個々人から贈られるものは、一つの箱の中に、数種の物資（食料と衣料など）が一緒になって入っている場合が多い。しかも、中身は外からは見えない。こうしたものが膨大に、それも短期間に集中して届く。加えて、この分配は公平でなくてはならない。こうした事情で、その保管、仕分け、分配作業は困難をきわめ、場所、人手、時間の面で莫大な負担となる。アンケート結果でも見たように、多くのボランティアがこの作業に従事していたのはこうした背景があるわけである。

他方、多くの企業からの義捐物資は、同一のものがまとめて届けられ、数量も把握しやすい。

なお、今回の災害では、着古した衣類などが大量に現地に送られた。このように、明

らかに使用に堪え難い物資は役にたたないだけではなく、被災者をますますみじめな気持ちに追い込むという精神的なマイナス効果を持つてしまうのである。

図7. 使えない救援物資（「北海道新聞」1993年8月5日）

善意に悲鳴

こうした状態は、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

処分に頭痛める町 段ボール10箱ついに焼却

道、札幌へ
仕分け

古くて使えない衣類
多過ぎて...

7・12
奥尻震災

全国から送られた大量の衣類を仕分けするボランティアたち。汚れた衣類は処分できない物も多い。

4日午後1時30分、奥尻中
木浦徳二

【奥尻】北海道南西沖地震最大の被災地、松山町奥尻町に、全国から続々と救援物資が届いているが、汚れたものが多く、古くて使えない衣類も多く、同町では「善意の物資を勝手に処分できないし」と頭を痛めている。被災者に渡せない状態の衣類だけで、すでに段ボール三百個分以上、保管場所に困った担当者、思いあまってこうした段ボールの一部を併却処分する一掃も、車載を重視した道は、面影のJ良五楼駅などに保管されている救援物資をいったん札幌に集め、事前に仕分けした上で、必要なものを奥尻町に送ることを決めた。

松山地方振興対策本部に、中、奥尻町の一方所で仕分の段ボール十個分が、町内に回すことも検討したが、よると、奥尻町に送られたけしているが、約八割方が、この併却場で処分され、約三万五千個分、奥尻、れがひび物多い。町担当者「町として、一掃したいのだから、必要なら奥尻に送るべきだ」

(3) 地域間格差の問題

一般に、経済的に豊かな社会における災害では、被災地に対して救援の集中現象が起こることは、以前から指摘されていた。今回の北海道南西沖地震も例外ではなく、奥尻島において、顕著で極度の集中現象が発生した。しかし一方、周辺の被災地では、まったく逆の状況が見られた。

集中現象とは、被災の中心地域に人員、物資、情報などが集中することである。まず被害が大きいために、マスコミが集中し、膨大な量の被害報道が行なわれる。そして、

そのマスコミの発信した情報によって、多くのボランティアや義捐物資・義捐金などが集まる。これには、十分な援助が届くなどのメリットがあるが、過剰による問題も発生することは先に述べたとおりである。

しかし、その反面、今回の災害ではマスコミの焦点にならなかった対岸の渡島半島の町村は、被害が大きい割に救援もボランティアも少なかった。ふつう、人の移動を左右する主な要因は、交通事情など地理的なものである。その点、奥尻町は離島であり、大成町など他の被災地とくらべると地理的には不利な条件にある。にもかかわらず、さきのアンケートで見たように、奥尻町にはボランティアや救援物資が殺到し、その弊害も出てきているのに、一方、大成町への援助はかなり少なかったのである。

このような相違が現われた大きな原因は、おそらくマスコミ報道が奥尻島、とりわけ青苗地区に集中したことにあると思われる。ボランティアが参加を決断するとき、あるいは救援物資を送ろうとするとき、遠隔の被災地の情報はマスコミを通じて得るしかないから、その決断に与えるマスコミの影響は非常に大きい。今回の災害では、奥尻町の被害が圧倒的に大きかったから、マスコミ報道が奥尻町に集中するのはある意味で当然であるが、対岸の渡島半島でも20人を越える犠牲者が出ているのであって、もっとバランスのとれた報道が望ましかったように思う。そうすれば、ボランティアや救援物資の集中という問題も別の展開をしたかもしれない。

(4) 物資以外の援助の不足と長期にわたる援助の必要性

災害の被災地に対してどんな援助が必要であるかということは、時間経過とともに変わっていく。たとえば、医療面では、被災直後は外科医が多数必要となる。しかし、やがて生活環境の変化による内科的な問題、あるいは常備薬の不足などが問題化する。そして、仮設住宅生活が長期化するにつれストレスがこうじ、また将来に対する不安からも神経精神面での医療が必要となっていく。

しかし、今回の災害も含めて、現状での援助の形は物資や金銭によるものが主である。そうした物資による援助は、被災直後には大量になされるが、やがては減っていく。一方、それ以外の面での援助は、あまり配慮されてこなかったという気がする。たとえば、先の精神面でのケアはあまり行われてこなかった。しかし、こういう面での配慮が必要なのは、さきのアンケート結果のなかで、ボランティアに「話し相手になってもらった」という被災者14名のうち、14名全員がこのボランティア活動をありがたかったと評価していることからわかるだろう。ちなみに、全員に評価された活動はこれだけだったのである。さらにまた、保険や行政府による援助制度など、専門知識の必要となる分野についてのサポートも不足しているといえよう。

今後は、被災から時間が経過してからのこうした援助のあり方をもっと考えるべきであろう。そして、こうした面でこそ、被災者自身と同じふつうの市民が参加し共感できるボランティア活動の持つ意味は大きい。

(5) 能力の発揮が不十分・ノウハウの蓄積がない

これは、個人単位の参加者の場合に顕著である。また、各団体でも各々では蓄積がな

されていても、相互の交流は少ない場合が多い。たとえば アマチュア無線、運転免許などである。

3. 今後の課題

以上、北海道南西沖地震のときのボランティア活動について述べてきた。

ボランティアの育成という観点にたてば、外部社会による援助の形式に差をつけないことが重要である。つまり、その参加形態は、現地でのボランティア活動、義捐物資や義捐金の送付などなんでもいいし、その参加者も個人から企業まで、いずれもその基本に各人の誠実さがあれば、これらに優劣はない。また、多少は問題があると考えられるボランティアや援助物資も、可能な限り受け入れ、包容し育てていく必要がある。また、行政機関も、いたずらに問題を指摘して非難するだけでなく、これを育成していこうという姿勢が必要であろう。

しかし、救援の形態やボランティアの実態をこれで良いとするわけにはいかない。では、今後は、どうあるべきなのか。以下、多少の提言をしておきたい。

(1) ボランティア活動の円滑な実施

この点では、なんといっても、被災現地におけるボランティア活動の調整機関（ボランティアの受け付け、仕事の割り振りなどを行なう）を設けることが重要であろう。この組織は、ボランティア自身で運営することが望ましいし、運営の主体になる人材は平常から行政機関と連絡をもつことも必要である。そして、場合によっては、偶発的に訪れる未成熟の参加者（個人及び団体）に対して、この機関で訓練やインストラクションを行ない、その後にボランティア活動に従事してもらう。とくに、被災地の行政機関に迷惑をかけないこと、過大な負担をかけないことが重要である。

(2) ボランティアの育成

平常時にボランティア志望者の育成強化をしておくこと。

たとえば、日本赤十字社の取り組みがその一例である。いかにその概要を示すと、赤十字社では、赤十字奉仕団員に対して 本社（東京）において、防災ボランティアリーダーになりうる人員を養成している。このボランティアリーダーとは、被災自治体とボランティアとのあいだ、あるいは各種ボランティア同士の連絡調整を行うものである。また、奉仕団以外のものに対して、事前に研修などを行ない、登録する個人および団体に対して、適時研修会を開くほか、日本赤十字社から講師の派遣をするなどの試みがある。

(3) 過剰援助物資に対する対策

今回の災害のように、大量の救援物資が一箇所に集中し、しかもなかには使用に堪え

ないようなものも含まれていたという実態を見て、個々人からの義捐物資は規制すべきとの声もある。それほど、この問題は、関係機関の負担となったのも事実である。しかし、それは多くの善意を反古にってしまうものであり、現実には規制などは困難であろう。そこで、以下のような対策を考えたらどうだろうか。

つまり、救援物資に関するシステムを作るということである。

まず第1に、被災した人たちがどのようなものをどの程度必要としているのか、を把握する必要がある。必要物資は、被災地の気候や風土、季節などによって大きく変わるかもしれない。また、離島などでは離島という事情も考慮する必要があるだろう。さらに、被害が広範囲に及ぶときには、人々からの救援物資がある地域に集中したり、別の地域が見落とされるかもしれない。これはマスコミ報道に左右される面が大きいから、援助の必要性についての報道はできるかぎり公平であることが望まれる。加えて、時期的に必要とされるものは変わって来る。被災直後と、時間がたった後では被災者が必要とするものは異なるだろう。

第2に、救援物資を被災現地に直接集めず、近接地に物資を一度集積することも考えねばならない。物資の送り先を現地に直接でなく、数カ所の近接地にするのである。それには、物資の保管や人員の受入が容易なある程度大きな町が望ましいかもしれない。また、その作業に従事するボランティアも、これにあわせて配置されれば効率をよくすることができよう。つまり、物資が集積される隣接地で初心者ボランティアを受け、かつ教育するのである。これにより、被災地での人員や保管スペースなどの負担を大きく軽減することができ、効率をあげることが可能になるであろう。

7 章

アンケート調査にみる住民の行動

ー奥尻町の場合ー

いままでも、各章のなかで、筆者らが実施したアンケート調査の結果に触れながら議論してきたが、以下の7章、8章では、かなり重複するけれども、そのアンケート調査結果の全体的な内容について紹介していきたい。

筆者らは、平成5年10月下旬に、奥尻町はじめ、対岸の渡島半島にある大成町、熊石町、および島牧村の3町1村を対象にアンケート調査を行なった。このうち、奥尻町、大成町、島牧村は地震直後に来襲した津波の被害が甚大だったところである。熊石町は津波被害は免れたが、ここには同報無線があること、また地震の後に「また大地震がある」などという流言が広がったことなどのために、アンケートの対象地域として選定した。なお、奥尻町と大成町については、調査員による個別面接法による調査、熊石町と島牧村については、留め置き自記式の調査を行なった。

この6章では、まず奥尻町の住民に対する調査結果を紹介したい。

調査の概要と回答者の属性は、以下のとおりである。

表1. 奥尻町住民調査の概

調査目的；1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震において津波被害がいちじるしかった、北海道桧山支庁管内の奥尻町において、地震時の行動や津波に対する避難行動、津波意識などを調査した。
調査期間；平成5年10月29日－31日
調査対象地域；奥尻町青苗地区住民の仮設住宅における265世帯のうち204人
調査方法；調査員による個別面接法

1. 地震・津波の被害状況

まず最初に、アンケート調査の対象になった人たちが地震と津波によってどのような被害を受けたかをみると、奥尻町では、「津波によって自宅が全壊（半壊）した」人が

63.2%、「津波による浸水があり、後に火災によって全壊した」人が12.3%、「津波被害はなかったが、火災によって全焼した」人が18.6%となっており、被害が壊滅的だったことがわかる（表2）。

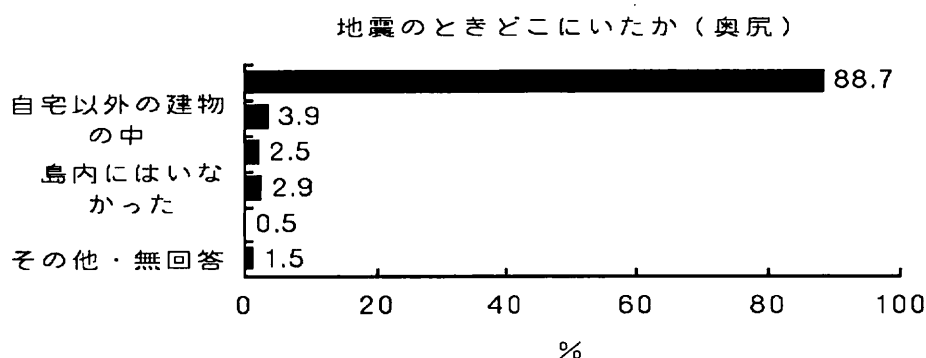
表2. 地震・津波の被害（奥尻町 N=204人）

	N	%
津波によって自宅が全壊（半壊）した	129	63.2
津波による浸水があり、後に火災によって全壊した	25	12.3
津波被害はなかったが、火災によって全焼した	38	18.6
地震の揺れで家が壊れた	7	3.4
地震の揺れで家具が倒れた		
その他	1	0.5
被害はとくになかった		
無回答	4	2.0

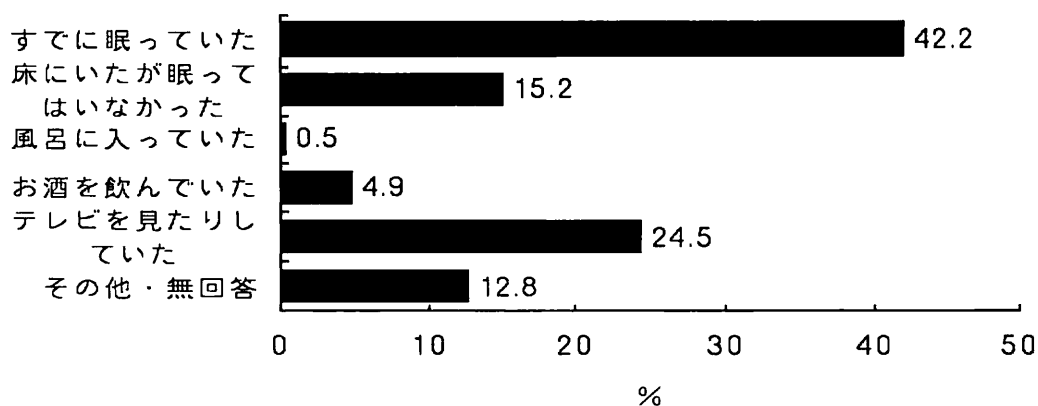
2. 地震時にいた場所としていたこと、地震直後の行動・心理

地震が発生した7月12日午後10時17分、多くの人はずでに自宅で床についていた（「自宅にいた」人88.7%、「すでに眠っていた」人42.2%、「床に入っていたが眠ってはいなかった」人15.2%）（図1）。

図1. 地震のときどこにいたか・何をしていたか（奥尻町 N=204人）



何をしていたか（奥尻）



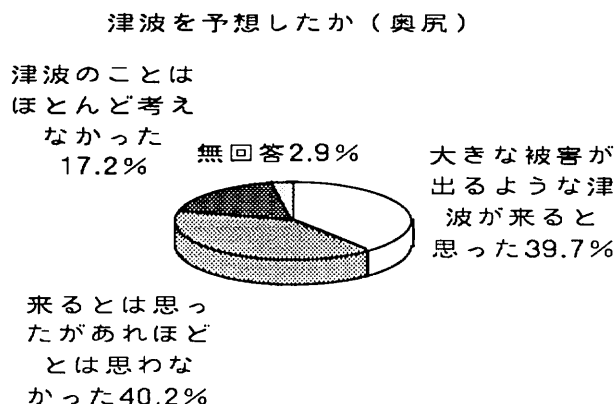
しかし、地震直後の行動は非常に迅速であり、とくに「家族に逃げようと声をかけた」人（33.3%）と、「高台に向けて避難した」人（48.0%）の割合が非常に多くなっている（表3）。

表3. 地震時にとっさにしたこと（奥尻町 N=204人）

	N	%
あわてて外に飛び出した	60	29.4
家族に逃げようと声をかけた	68	33.3
高台に向けて避難した	98	48.0
火の始末をしようとした	37	18.1
窓や戸をあけて外の様子を見た	6	2.9
室内を片づけた	4	2.0
服を着た・着替えた	27	13.2
家具などが倒れないように押さえた	21	10.3
頑丈なものにつかまって身をささえた	17	8.3
子どもや老人・病人などを気づかった	42	20.6
机の下などに身を伏せた	18	8.8
海や船のようすを見に行った	5	2.5
何もできずぼう然としていた	32	15.7
無我夢中だったので覚えていない	10	4.9
その他	15	7.4
無回答	6	2.9

これらの行動は、津波を予想した避難に深く関係しているが、地震の直後、津波をとっさに予想したかどうかたずねると、奥尻町では、地震直後に、「大きな被害が出るような津波が来ると思った」人が39.7%とほぼ4割を占め、「津波のことはほとんど考えなかった」人の17.2%を大きく上回っている（図2）。また、津波を予想した人

図2. 地震直後に津波を予想したか（奥尻町 N=204人）



の切迫感をみても、津波は「すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った」人が60.7%と半数をかなり上回り、「津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った」人（18.4%）や、「日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った」人（9.8%）を大きく引き離している（表4）。

表4. 津波への切迫感（奥尻町 N=204人）

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	99	60.7
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	30	18.4
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	16	9.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	1	0.6
その他	8	4.9
無回答	9	5.5

このように、奥尻町では地震直後に津波を予想した人が少なくなかったが、その大きな理由は、10年前の日本海中部地震における被害体験である。つまり、アンケート調査のなかでどうして地震の後に津波が来ると思ったのかをたずねたところ、「10年前の日本海中部地震のとき自分で津波を経験したから」という人が72.4%と圧倒的多数を占めていた（表5）。また別の質問で、10年前の津波経験が今回の避難行動にど

表5. なぜ地震直後に津波が来ると思ったか（奥尻町 N=163人）

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	118	72.4
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話聞いていたから	24	14.7
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	12	7.4
その他	8	4.9
無回答	1	0.6

んな影響を与えたかをたずねても、「日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う」という人が52%と半数を越えていたのである（表6）。

表6. 日本海中部地震の経験が避難行動に影響したか（奥尻町 N=204人）

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う	106	52.0
日本海中部地震の経験がかえってわざわざ、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う	15	7.4
日本海中部地震の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	27	13.2
日本海中部地震の経験はない	43	21.1
その他	6	2.9
無回答	7	3.4

筆者らは、津波から辛くも逃れた人たちから、今回の災害では、10年前の日本海中部地震にくらべての地震の揺れが格段に大きかったことから、10年前よりも大きな津波がもっと早く襲ってくると直感して懸命に避難したという話をしばしば聞いたが、上のアンケート結果は、調査対象になった多くの人々が直感的にそのように考えたことを示唆している。

しかし、10年前の津波経験が必ずしも有効に働いたとはいえないケースもある。というのは、10年前には地震の約30分後に津波が襲ってきていることから、地震直後に津波の到来を予想しながら、「日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った」人が9.8%と、ほぼ1割にのぼっていたし、また、津波経験が今回の避難にどう影響したかという質問でも、「日本海中部地震の経験がかえってわざわざいして、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う」という人が7.4%いたからである。全体的にみれば、津波経験が被害の減少に大きく寄与したことは間違いないけれども、部分的には経験がマイナスに作用したケースもあった。災害経験を大事にすることはいいが、わずか数十年から数百年の災害経験を絶対視することなく、経験に科学的検討を加えて後世に伝えていくことが必要であろう。

3. 避難行動の実態

奥尻町の多くの人々は地震直後に津波の来襲を予測し、いっせいに高台へ避難を開始した。その避難行動は、非常に迅速であった。

つまり、まず、地震の後どのくらいしてから避難をはじめたかをたずねたところ、「まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた」人が23%、「揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた」人が54.9%と、ほぼ8割の人が緊急避難しており、避難するより早く津波が来てしまった人は2割弱である（図3）。

また、避難した人の平均避難時間は、地震の5.3分後であった。

今回の津波災害は、多くの人が就寝していた午後10時過ぎに発生したこと、地震の5分後には津波が来襲し、津波警報も間に合わなかったことを考え合わせると、その避難がきわめて早かったことがわかる。

次に、住民が避難を決断した理由をみると、ここでも10年前の津波経験が有効に機能しており、「日本海中部地震の経験から、また津波がくと思ったから」が50.5%と半数にのぼっている。これは、自分で避難を決断した人々であるが、そのほか、「家族が避難しようといったので」（39.0%）、「親戚や近所の人が避難するようにいったので」（19.8%）という理由のなかにも、過去経験にもとづくものが少なくなかったと思われる（表7）。

次に、避難の手段と避難形態をみると、避難手段としては、「自動車に乗って避難した」人がもっとも多く47.1%を占め、次いで「走って避難した」（28.6%）、

図3. 避難の時期（奥尻町 N=204人）

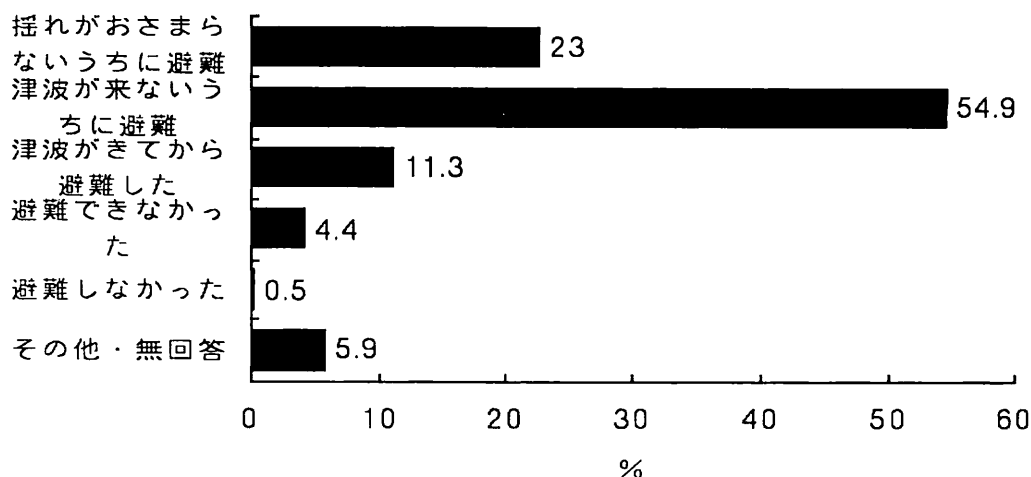


表7. 避難を決断したきっかけ（奥尻町 N=182人）

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから	92	50.5
家族が避難しようといったので	71	39.0
親戚や近所の人が避難するようにいったので	36	19.8
屋外の防災無線拡声機から避難を呼びかけたので	3	1.6
室内の防災無線戸別受信機で避難を呼びかけたので		
テレビで津波警報を聞いたので		
ラジオで津波警報を聞いたので		
実際に津波に襲われたので	2	1.1
その他	21	11.5
無回答	2	1.1

「歩いて避難した」（22.0%）となっていた。また、避難形態としては、「家族全員で避難した」が65.4%と最大で、以下、「近所の人や親戚と一緒に避難した」（18.1%）、「一人だけで避難した」（12.6%）と続いていた（図4）。

このように、多くの人は自動車を使い、集団で避難している。また、徒歩で避難した人も少なくなかった。しかし一方、今回の災害では、歩いて避難したり、自動車を使って避難した人が津波の犠牲になったケースも少なくなかった。その分析は別の場所でおいたが、おそらく津波の難を免れた人たちは、犠牲者にくらべ、とるものもとらずに着のみ着のままで迅速に避難したのであろう。たとえば、調査対象者に避難すると

図4. どんな手段で避難したか・だれと避難したか（奥尻町 N=182人）

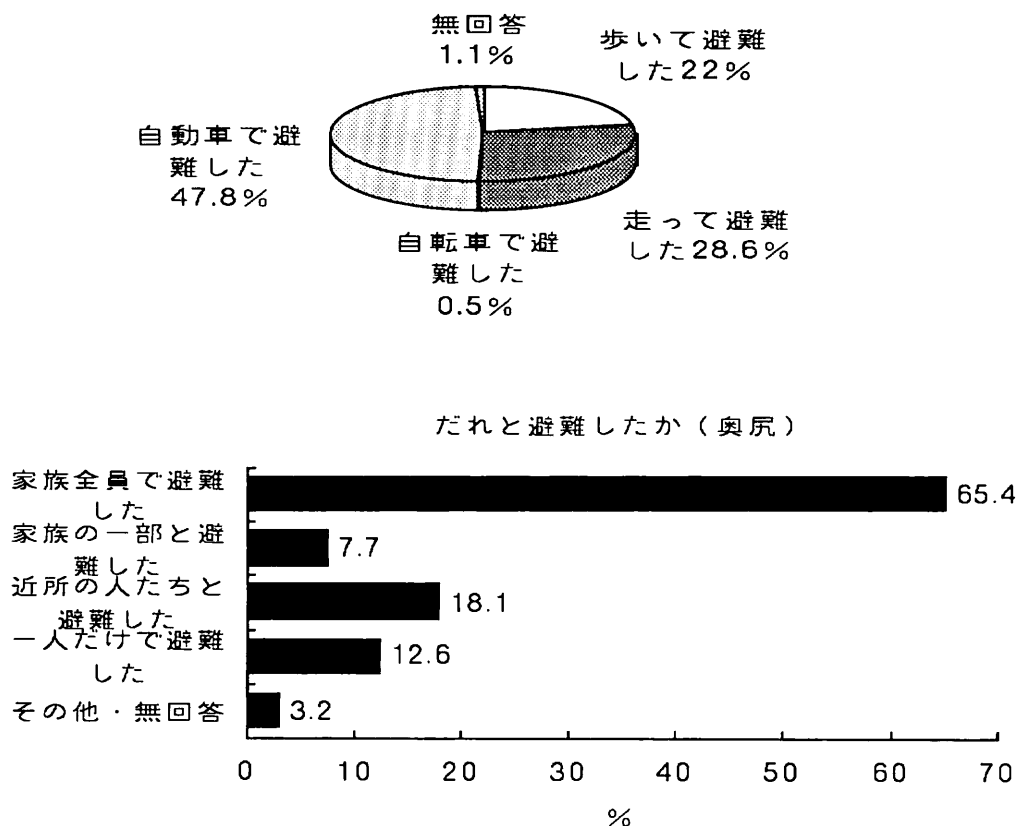
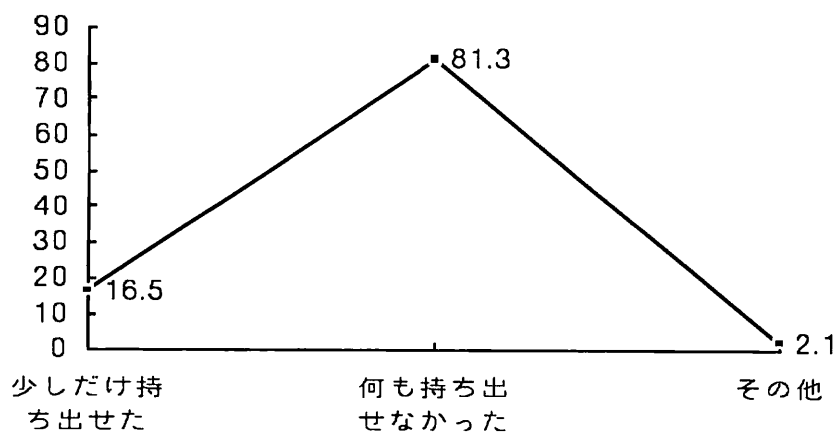


図5. 避難時の持ち出し品（奥尻町 N=182人）



き何を持ち出したかをたずねたところ、「かなりのものを持ち出すことができた」人はゼロ、「少しだけ持ち出せた」人は16.5%と非常に少なく、一方、「何も持ち出せなかった」人が81.3%と圧倒的多数を占めていたのである（図5）。

しかし、多くの人は、それでもかなりせっぱつまった状況で避難している。アンケート調査では、避難したときの周囲の状況をたずねたが、その答えをみると、「ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった」という人が61.5%で、「死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった」人（29.1%）を大きく上回っている（図6）。

図6. 避難時の状況（奥尻町 N=182人）

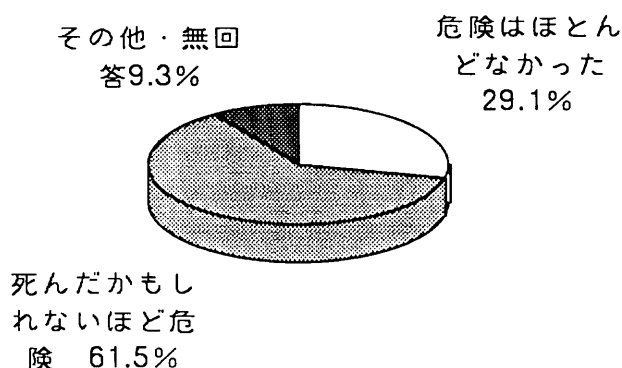


表8. 実際に津波に襲われたかどうか（奥尻町 N=204人）

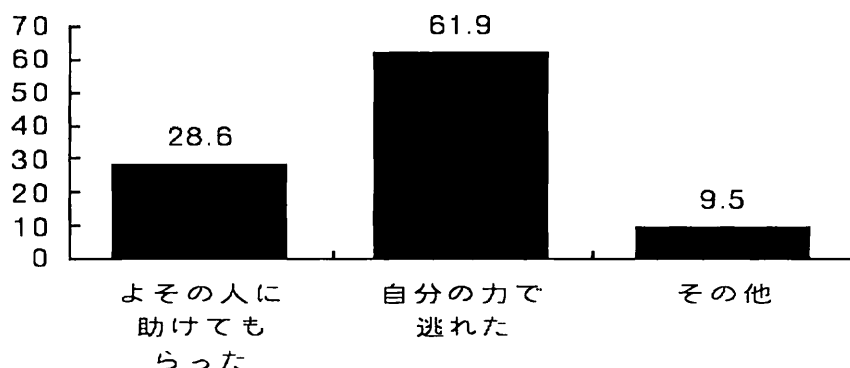
	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	12	5.9
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.4
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	58	28.4
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	114	55.9
その他	5	2.5
無回答	6	2.9

また、避難するとき実際に津波に襲われたかどうかをみると、「津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった」人が55.9%と過半数を占めているが、一

方、「避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした」人（4.4%）や、「津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た」人（28.4%）もけっして少なくないのである（表8）。

なお、実際に津波に襲われた人たちに対し、その後どうしたかをたずねると、「自分の力で津波から逃れた」という人が61.9%、一方、「よその人に助けられた」という人が28.6%で、ほぼ4人に1人が他人に救助されている（図7）。

図7. 津波からどうして脱出したか（奥尻町 N=21人）



なお、青苗地区の回答者が、実際にどの経路をたどって避難したかを図8に示しておく。この図の道路中央の黒線が避難経路を示しており、線が太いほど多くの人が避難したことを意味している。

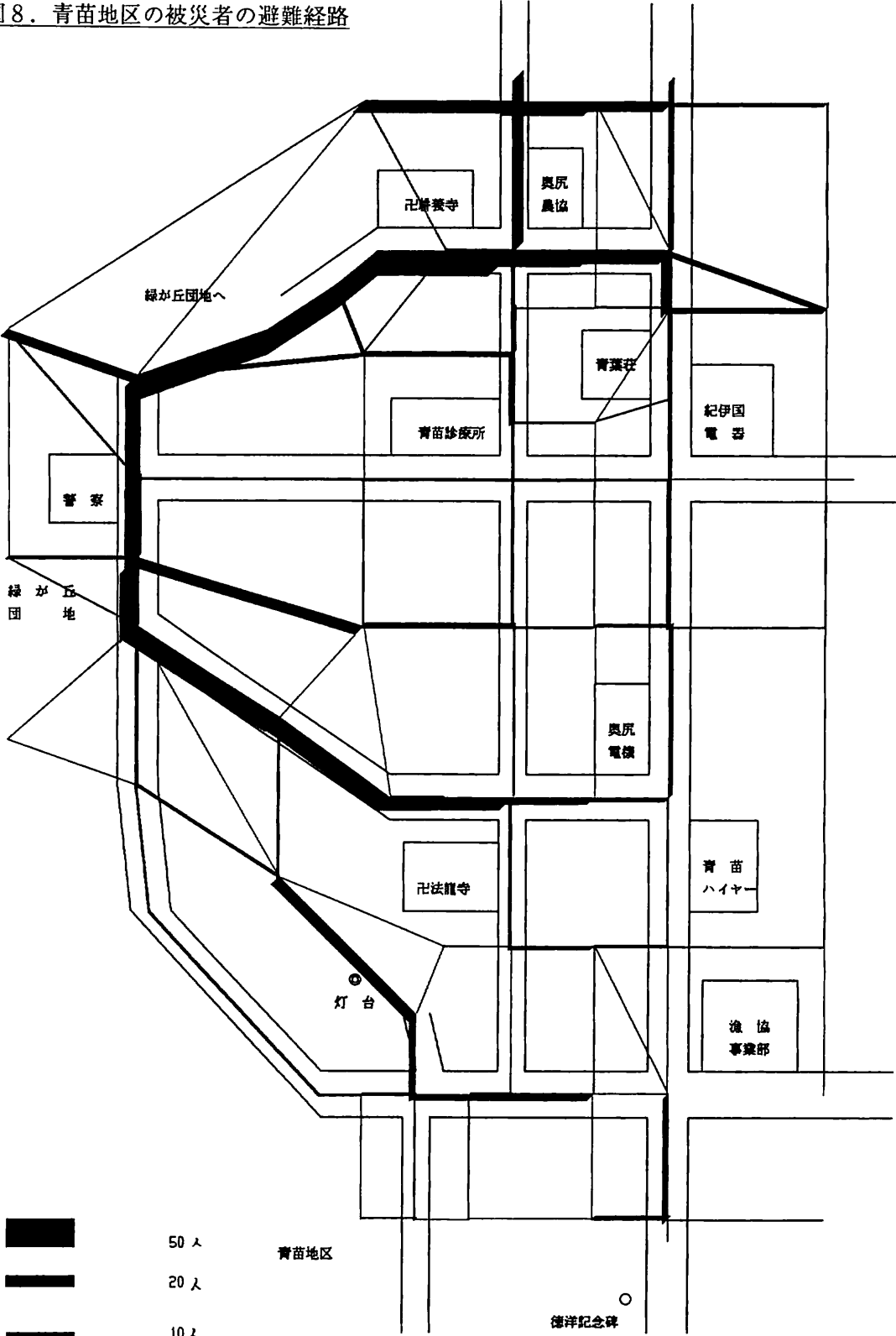
4. 津波の知識

今回の災害では、奥尻町の人々の多くが地震直後に津波の来襲を予想した。前述のように、これは、10年前の日本海中部地震の経験が大きく寄与していた。つまり、強い地震が来たら津波に注意せよという津波防災の基本を、多くの人が知っていたわけで、もし10年前の津波経験がなく地震と津波をむすびつける知識が徹底していなかったら、おそらく被害はもっと大きくなっていただろうと思われる。

しかし、子細にみると、津波についての知識がもっとあったならば被害が減っていたのではないと思われるケースがある。

たとえば、奥尻町における犠牲者のなかにはなかったようであるが、やはり大きな被害を出した渡島半島の瀬棚町、大成町、島牧村などでは、地震が来たら津波に注意せよということは知っていながら、大切な財産である船を固定するとかボートを陸揚げするとかの理由で、わざわざ海に出かけて津波の犠牲になるというケースが少なかった。このタイプの被害は、実は10年前の日本海中部地震でもみられたものである。津波は、

図8. 青苗地区の被災者の避難経路



木造家屋をばらばらに粉碎してしまうほどの巨大な破壊力を持っている。したがって、津波が予想されるときは、いかに大切な財産とはいえ、船やボートを守るために海に向かうということはかなり危険な行為であり、場合によっては命取りになるかもしれない。もし、多くの人が津波の持つ破壊力を十分理解していたならば、おそらくこうした行為は行わなかったにちがいない。つまり、われわれは地震と津波をむすびつける知識と同時に、津波の破壊力についての知識を持たねばならない。人々はどの程度このことを知っていたのだろうか。

そこで、アンケートにこの質問を入れてみた。その回答をみると、「10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた」という人が32.8%、「実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた」人が9.3%と。あわせて4割がこのことを知っていたが、一方、「津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった」という人が52%と半数を越えていたのである（表9）。

表9. 津波の破壊力についての知識（奥尻町 N=204人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	67	32.8
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	19	9.3
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	106	52.0
その他	5	2.5
無回答	7	3.4

津波の知識についてはもう一つ重要なことがある。それは津波のスピードである。

今回の災害では、せっかく津波を予想して避難しながら、徒歩でゆっくり高台に向かったため津波に追いつかれて犠牲になった人々も少なくなかった。周知のように、津波のスピードは猛烈である。1960年のチリ地震津波では、遠く南米のチリで起こった地震による津波が、22時間かかって日本列島の太平洋岸に達したために大被害が起こっているが、これはまるでジェット機なみのスピードである。それほどでなくとも、津波のスピードは猛烈であるから、沖合に津波を目撃してから避難しても間に合わないことが少なくない。そこで、津波の避難にはとにかく急いで逃げる、という迅速さが必要なのである。もし、このことが徹底されていたならば、あるいは徒歩で避難する人は少なくなり、犠牲者は減少していたかもしれない。

では、人々は津波の持つスピードについてどのくらいの知識があったのだろうか。アンケート調査の回答をみると、「10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた」という人が22.1%、「実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた」人が8.3%と、あわせて3割、一方、「津波がこんなにスピードがあるとは

知らなかった」という人が59.3%になっており、ここでも半数以上の人が津波のスピードについて知っていなかったのである（表10）。今後は、津波への避難を促進し、人的被害を軽減するためには、地震＝津波という知識を徹底するとともに、津波の持つ破壊力とスピードを人々に知ってもらうような広報活動が必要になろう。

表10. 津波のスピードについての知識（奥尻町 N=204人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	45	22.1
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	17	8.3
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	121	59.3
その他	13	6.4
無回答	8	3.9

5. 防災無線と住民の行動

奥尻町には、以前から同報無線が設置されていた。これは、正式には「市町村防災行政無線固定系」と呼ばれ、町から住民に災害情報や行政情報を伝達するためのシステムである。奥尻町では、町内に屋外の拡声機を22機設置し、さらに住宅内に置く戸別受信機を1146戸に設置して、日頃から情報の伝達を行っていた。

4章でくわしく触れたように、今回の災害では、放送をのぞいて、津波警報の伝達が大幅に遅れた。奥尻町でも、桧山支庁から奥尻町に届いた津波警報を確認したのは地震後1時間近く経った11時10分頃だったという。しかし、当然のことながら、町としてはそれまでに各種の対応を取っていた。

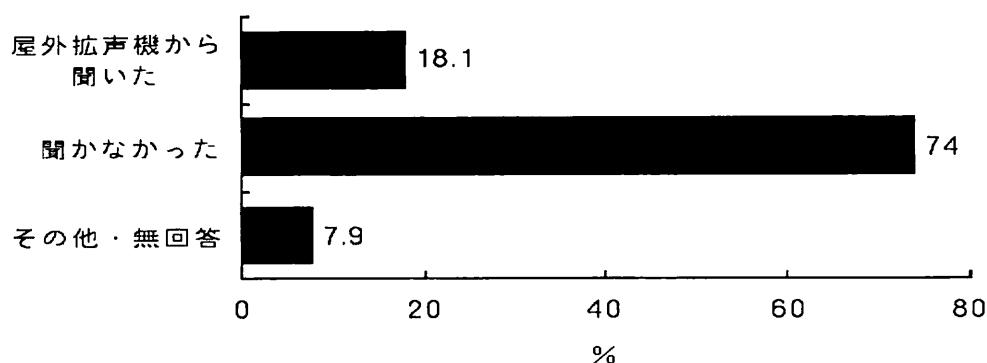
奥尻町における筆者らの聞き取り調査によると、町では次のような対応を取ったという。

つまり、地震の数分後、近くに住む職員が役場につけ、ただちに同報無線で津波に対する警戒と避難を呼びかけた。とっさの放送のこととて放送原稿はなかったが、「ただいま地震がありました。津波の恐れがあるので避難してください」という内容の放送を、3回繰り返したという。この職員によれば、10年前の日本海中部地震のときも奥尻町は津波の被害を受けているので、今回のような大地震では、また津波がくるかもしれないと思い、よそから情報が入る前にすばやく放送したという。町役場では、地震後に1分間ほど停電したものの、停電はまもなく回復した。そして、10時30分過

ぎに、テレビから津波警報の発令を知り、この情報もすぐに同報無線から放送している。

ところで、筆者らのアンケート調査から、住民がこのときの同報無線の放送をどのくらい聞いたか調べると、地震の数分後に行なった「津波のおそれがあるから避難してください」という放送を実際に聞いたかどうかについては、74%の人々が「そういう放送は聞かなかった」と答え、聞いたと答えたのはわずか18.1%の住民にすぎなかったのである（図9）。

図9. 避難を呼びかける同報無線（防災無線）放送を聞いたか（奥尻町 N=204人）



前にも触れたように、奥尻町の多くの住民は、10年前の経験から大地震の直後に津波が来るに違いないと考えていた。しかし、なかには人から津波が来るぞと教えてもらった人も少なくなかったことを考えれば、もしこの同報無線の放送をもっと多くの人が聞いていたらと残念な気がする。

では、どうしてこんなに同報無線の聴取度が低かったのだろうか。

この点については、まず第一に、放送を聞いた人はすべて屋外拡声機から聞いたと答えている点が注目される。戸別受信機から聞いた人は1人もいないのである。回答者の76.4%の家庭に戸別受信機があり、しかも故障もなく音量も絞ったりせず、いつも良く聞こえていたという人が68.1%もいた（表11）。

表11. ふだんの戸別受信機の聴取度（奥尻町 N=204人）

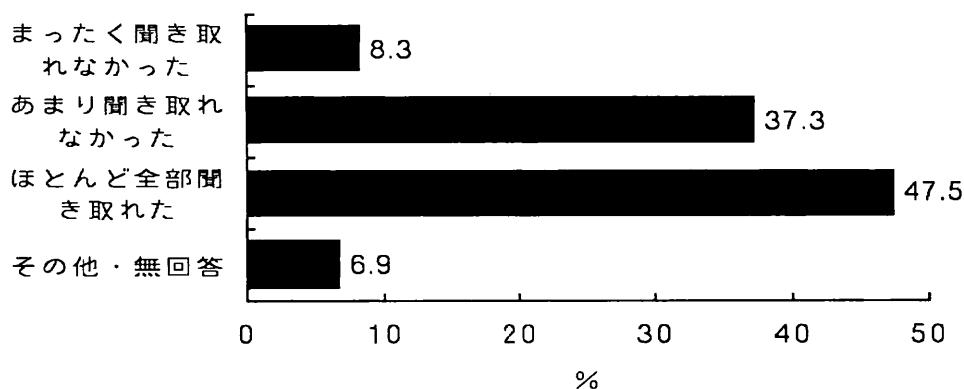
	N	%
戸別受信機があって、いつでも聞こえる状態になっていた	139	68.1
戸別受信機はあったが、音がしぼってあったり故障などで聞こえない状態だった	17	8.3
戸別受信機はなかった	39	19.1
その他		
無回答	9	4.9

にもかかわらず、どうして戸別受信機から聞いた人がいなかったかという、その原因は、およそ2つ考えられる。

一つは、地震発生後すぐ多くの住民は屋外に出たということである。つまり、別の質問で、地震が起きたときにとっさに何をしたかをたずねたところ、「あわてて外に飛び出した」人が29.4%、また「高台に向けて避難した」人が48%もいた。このように、同報無線から放送が流れたとき、ほとんどの人が戸外に出ていたのである。

そして、奥尻町の屋外拡声機の音はふだんからあまり良く聞こえなかったようである。筆者らのアンケートにおいても、屋外拡声機の聞こえ方をたずねたところ「ふだんから放送内容はほとんど全部聞き取れる状態だった」と答えた人は47.5%にすぎず、「ふだんから放送の内容があまり聞き取れなかった」という人が37.3%、「ふだんから放送の内容が全く聞き取れなかった」という人が8.3%であった(図10)。つまり、屋外拡声機の声が聞き取れる人は半数たらずだったわけで、これでは今回の地震後の放送があまり聞き取れなかったのもうなずけることである。

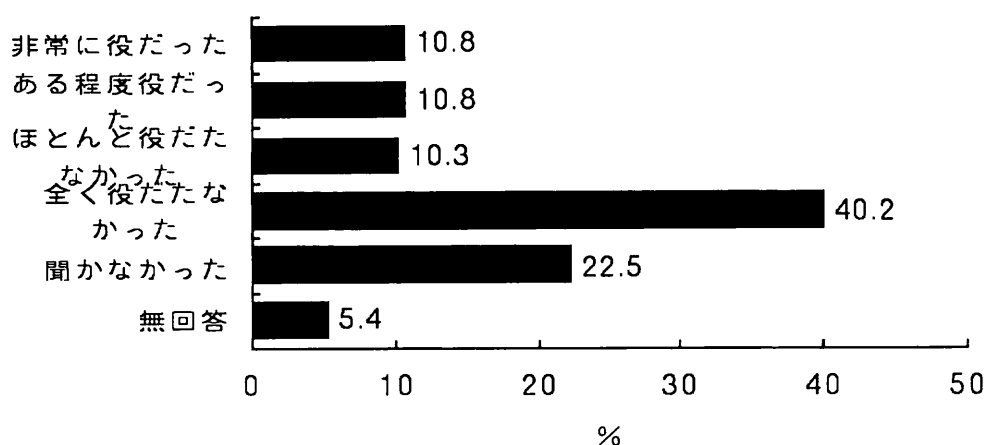
図10. ふだんの屋外拡声機の聴取度(奥尻町 N=204人)



防災無線を聞いた人が少ない原因の第二は、急いで避難した人のうちの多くが車で避難したことである。アンケートによれば、避難した人の約半数(47.8%)は自動車での避難している。自動車での避難中に屋外拡声機で呼びかけても、閉めきった車内とエンジン音などでほとんど聞こえないはずである。屋外拡声機の意外な盲点である。車内にいる人への情報伝達のための電光掲示板の利用なども考えられるべきかもしれない。

さて、こうした防災無線の効果と住民の評価であるが、放送を聞いた人がそもそも少ないことと、日本海中部地震の経験でとっさに避難した人が多かったために、その効果に対する評価はあまり高いとはいえない。たとえば、防災無線の放送が避難のきっかけになった人はわずか3人で、全体の1.6%にすぎなかったし、また、地震から火災が収束するまでのあいだに、防災無線が「非常に役にたった」という人と「ある程度役にたった」という人がともに10.8%と、同報無線を評価する人は合わせて2割程度であり、これは後に触れるマスコミへの評価に遠く及ばないのである(図11)。

図11. 地震から火災が収束するまでの期間の同報無線の評価（奥尻町 N=204人）



6. 住民の電話行動

次に、電話についての質問に触れる。

まず、地震発生から火災がおさまるまでどこかに電話をかけたかどうかたずねたところ、今回の災害において特徴的だったのは、32.4%の人が「電話をかけようと思ったが、電話がなかった」と答えていることである。これは、直接的には住民が高台に避難したためと考えられるが、家に戻っても津波や火災によって電話がなかったためでもある。また、大災害後のことであるから、電話の疎通状況も悪く、「電話をかけて全ての相手に通じた」人が4.4%にすぎず、「電話をかけたが一部しか通じなかった」人（1.5%）と「電話をかけたが一つも通じなかった」人（17.2%）を合わせると2割近くになっている（図12）。

これは、第1にケーブルの切断や交換施設の故障などにより、青苗地区と外部とのあいだの電話が支障をきたしたこと。第2に、通話相手の電話が地震の被害にあったこと。そして第3に、電話の異常輻輳があったことなどが考えられる。最近では、災害時の電話でいつも問題になるのは異常輻輳であるが、津波の被害にあった青苗地区の場合、輻輳に加えて、設備面での被害が問題を引き起こしたようである。

そして、このように、電話連絡が困難になった結果として、「電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった」と答えた人が41.7%もいた。そのほか、電話に関する問題として、仮設電話をマスコミの人が使ったために自分達が使えなかった、と不満をもらす住民も6.9%いた。ただし、5章で述べたように、青苗地区では119番や110番通報が不通になったが、実際にそれらに電話したが通じなかったという人は、回答者中ただ1人であった（表12）。

図 1 2 . 地震発生から火災がおさまるまでの電話の疎通状況（奥尻町 N = 2 0 4 人）

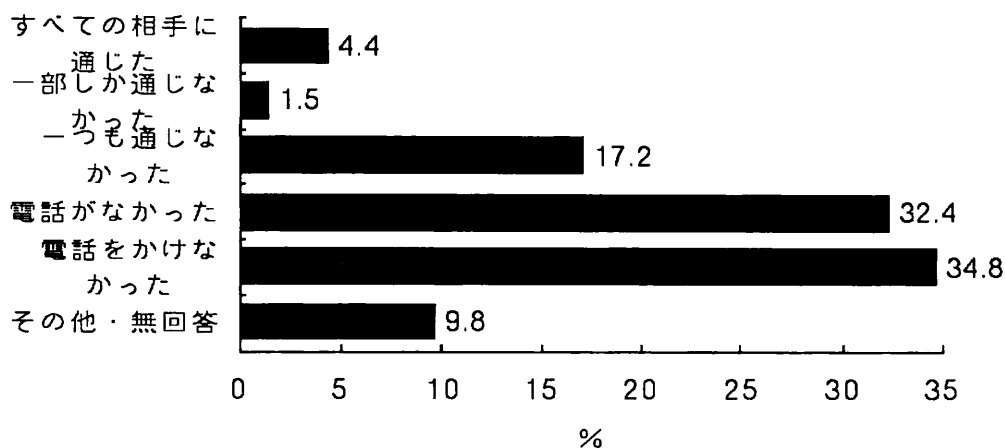


表 1 2 . 今回の災害において、電話について感じたこと（奥尻町 N = 2 0 4 人）

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	1	0.5
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が島外からたくさんかかってきた	85	41.7
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	85	41.7
無料の公衆電話を多くのマスコミの人が使って自分たちが使えなかった	14	6.9
流失や焼失した家に電話すると避難所の電話番号を伝えるサービスを利用した	20	9.8
無回答	64	31.4

7. マス・メディアの活動に対する評価

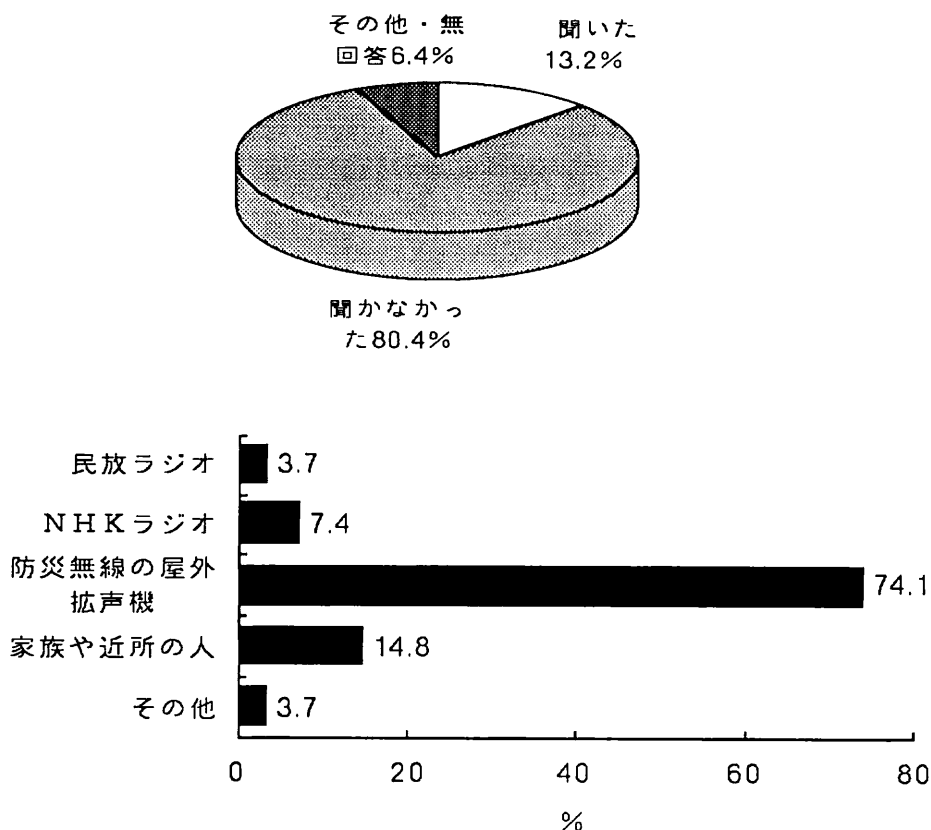
7-1. 避難行動と放送

次に、マス・メディアに関する回答についてみていきたい。

まず、津波警報関係からはじめると、地震のあと、避難するきっかけになったものは何かという質問に対して、「テレビもしくはラジオの津波警報を聞いたので」と答えた人は、奥尻町ではゼロであった（表7参照）。奥尻町の場合、とくに南端の青苗地区で

は、地震発生から5分程度で津波が襲っているから、これはある意味で当然である。しかし一方、津波警報を聞いた人のなかで「津波警報をどのように知ったか」という質問に対する回答をみると、津波警報を聞いたという人の実数自体が少ないが（204人中27人）が、「NHKラジオ」が7.4%、「民放ラジオ」が3.7%となっており、あわせて11.1%がラジオから津波警報を得たことがわかる（図13）。調査対象者のほとんどが、地震後停電していると答えていることもあり、「テレビ」という回答はなかった。

図13. 津波警報の聴取の有無とその情報源（奥尻町）



7-2. 住民の情報ニーズとマスコミへの評価

次に、地震のあと1週間くらいのあいだ知りたかった情報は何だったかというかたちで、人々の情報ニーズをたずねたところ、一番多かったのが「家族や知人の安否」で、49.5%と他の項目にくらべてはるかに多く、全体の半数近くを占めている。これは、奥尻島ではとくに地震後すぐ津波が襲い、多くの人々が亡くなったり行方不明になったためであろう。次に多いのが「食料や生活物資について」で30.4%、以下、「水道・

ガス・電気・電話の復旧の見通しについて」、「余震や津波の今後の見通しについて」が同数で28.4%、「行方不明者の救出・捜索活動について」が26%、「地震・津波の規模や発生場所について」が25.5%の順になっていた（表13）。

大まかにいって、奥尻町では、人々の安否や食料・物資、ライフラインなど、安否情報・生活情報・復旧情報のニーズが高かった。これは、奥尻の場合、青苗地区のように1地区のほとんどの世帯が大きな被害を受け、人的被害や住居被害が甚大であり、助かった人でも、家や家財を失い、避難所生活を余儀なくされた人が多く、安否情報や生活情報・復旧情報のニーズが高まったのであろう。

表13. 地震後1週間くらいの住民の情報ニーズ（奥尻町 N=204人）

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	52	25.5
余震や津波の今後の見通しについて	58	28.4
地震・津波の被害について	41	20.1
家族や知人の安否について	101	49.5
行方不明者の救出・捜索活動について	53	26.0
国や道や町のとっている対策について	36	17.6
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	58	28.4
食料や生活物資について	62	30.4
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	35	17.2
奥尻島以外の地域の様子について	40	19.6
その他	16	7.8
特になかった	11	5.4
無回答	12	5.9

さて、そうした情報をマス・メディアはどのように伝え、住民がそれをどう評価したであろうか。

まず、住民が知りたかった情報をもっともよく伝えたものは何かをたずねると、一番多かったのは、マス・メディアではなく、「家族や近所の人から直接聞いたこと」で、30.4%であった。次が「NHKテレビ」で23.5%、以下、「新聞」10.3%、「NHKラジオ」7.8%、「民放テレビ」2.9%、「民放ラジオ」2.0%と続いていた（表14）。

8章で述べるように、対岸の渡島半島などではマスコミの評価はもっと高いが、奥尻町で評価があまり高くなかった理由は、家財の被害が大きく、テレビ・ラジオ自体が紛失・破損した人が多かったであろうし、避難所生活している人にとっては、落ち着いてテレビ・ラジオを視聴・聴収することは難しいであろうと思われ、こういったことから、

表14. 知りたい情報をもっともよく伝えたメディア（奥尻町 N=204人）

	N	%
民放ラジオ	4	2.0
NHKラジオ	16	7.8
民放テレビ	6	2.9
NHKテレビ	48	23.5
新聞	21	10.3
防災無線	10	4.9
警察や消防の話	3	1.5
家族や近所の人から直接聞いたこと	62	30.4
他人との電話での話	1	0.5
その他	10	4.9
無回答	23	11.3

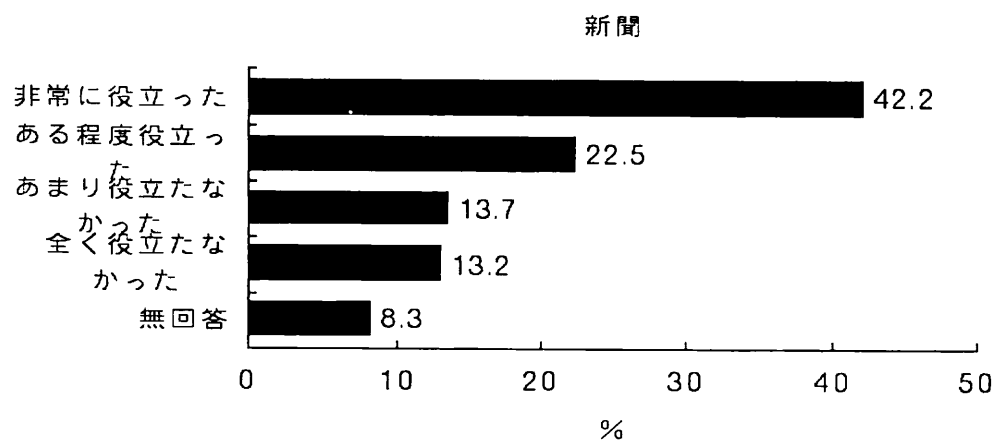
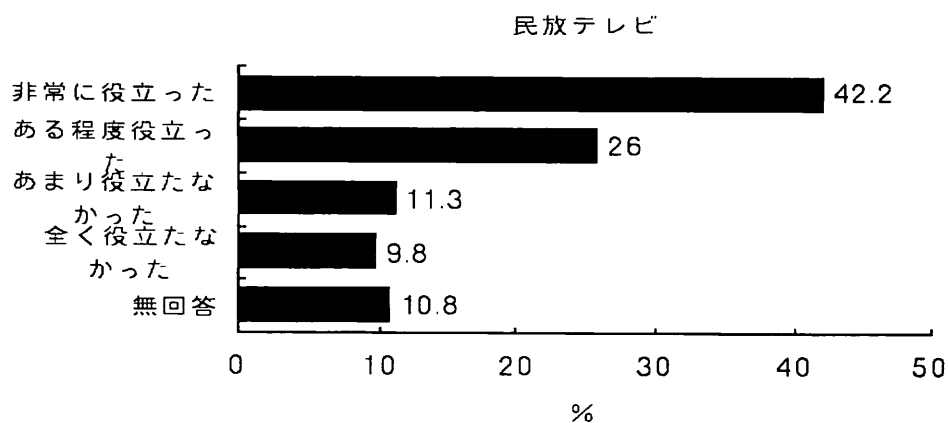
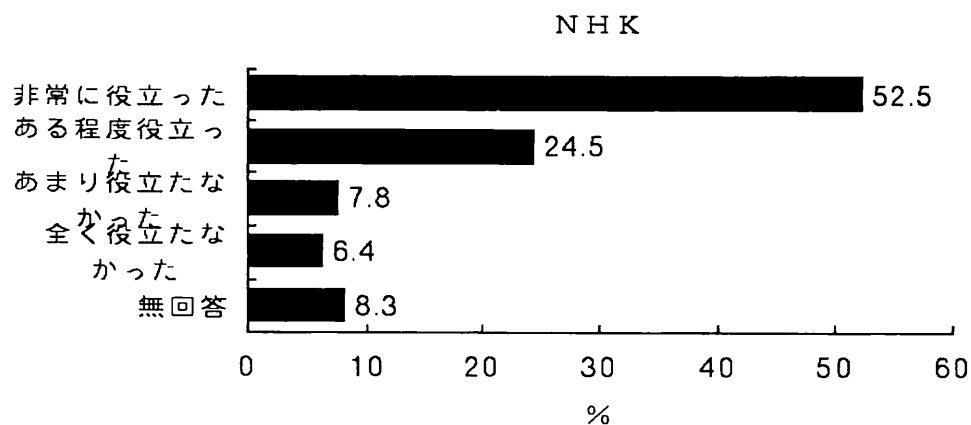
テレビ・ラジオ自体の接触率そのものが低かったことが考えられる。

そして、もう一つには、奥尻町において、住民が知りたい情報がテレビ・ラジオから得られなかったという点が指摘できるのではないかと。前述した「地震後の1週間くらいのあいだに知りたかった情報」をみると、情報ニーズが高かったのは、安否情報や生活情報、復旧情報であった。たしかに、地震や津波に関する報道は、連日テレビやラジオで放送されてはいたが、被災者もしくは被災地域の住民に対してきめ細かく詳しい情報が報道されていたかとなると、必ずしもそうはいえないであろう。たしかに、NHKのラジオでは安否情報が放送されてはいるが、全体的には、被災地向けの情報というよりも被災地以外の地方や全国向けに被災地の様子を伝える情報が主であったようである。そのため、奥尻の住民のニーズに放送が十分応えていなかったといえるのではないだろうか。

次は、NHKテレビ、民放テレビ、新聞の3つのメディア報道が今回の災害でどのくらい役にたったかについて、である。

その回答をみると、まずNHKテレビに関しては、「非常に役にたった」という人が52.5%、「ある程度役にたった」人が24.5%と、合計77%の人が評価している。一方、民放テレビに関しては、「非常に役にたった」が42.2%、「ある程度役にたった」が26%で、合計68.2%、そして新聞に関しては、「非常に役にたった」が42.2%、「ある程度役にたった」が22.5%で、合計して64.7%の評価率であった。逆に、「役にたたなかった」という回答（「あまり」「全く」の合計）は、NHKテレビが14.2%、民放テレビが21.1%、新聞が26.9%であった。以上のように、それぞれのマスコミが役に立ったかを個別に聞くと、おおむね評価が高いといえよう（図14）。

図14. 災害報道においてマスコミは役だったか（奥尻町 N=204人）



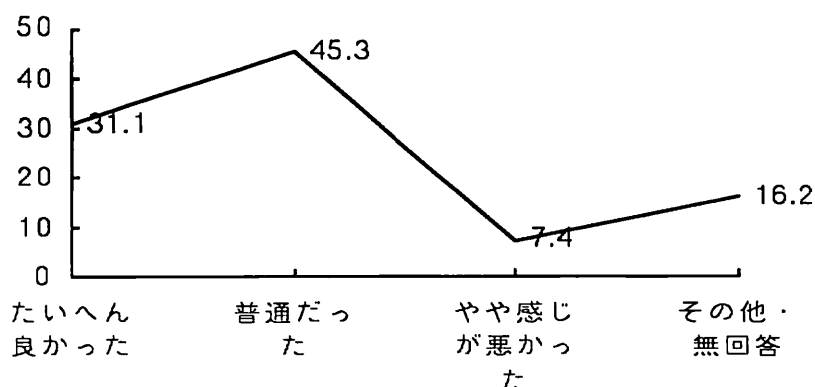
次は、マスコミ取材に関する質問である。まず、「マスコミの取材を受けたか」という質問に対しては、「自分自身が取材された」、「家族が取材された」、「誰かが取材されたのを見た」の合計は90.7%であった。なかでも、「自分自身が取材された」と回答した人が72.5%を占めていた。この数値からみて、奥尻島にマスコミの取材が実にたくさん集まったことがうかがえる。とくに「自分自身が取材された」と答えた人の72.5%という数値は、いままでに例のない高さと思われる（表15）。

次に、そのマスコミの「取材態度」に関する質問では、「たいへん良かった」という人が31.1%、「まあ普通だった」という人が45.3%と、取材態度を評価する人がかなり多かった。しかし一方、「やや感じが悪かった」と回答した人も7.4%いた。これは、奥尻島への取材集中がある程度のマイナス面があったことの反映であろう（図15）。

表15. 今回の災害で、マスコミに取材されたか（奥尻町 N=204人）

	N	%
自分自身が取材された	148	72.5
自分は取材されなかったが、家族が取材された	15	7.4
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのを見たことがある	22	10.8
取材された経験もないし、取材のシーンを見たこともない	8	3.9
その他	4	2.0
無回答	7	3.4

図15. 取材を受けたときの取材態度はどうだったか（奥尻町 N=148人）



最後に、今回の災害をテレビや新聞は適切に伝えていたと思うかどうかたずねた質問では、「適切に伝えていた」と答えた人が65.7%、「実際はもっと悲惨なのにそれを十分に伝えていなかった」と答えた人が21.1%という結果であり、多くの人は報道の仕方について異論を唱えていないが、それでも5人に1人の割合で報道のやりかたに批判を持っていた（表16）。

表16. テレビや新聞は被害の実態をどう伝えたか（奥尻町 N=204人）

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	5	2.5
適切に伝えていた	134	65.7
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	43	21.1
その他	10	4.9
無回答	12	5.9

8. 大津波来襲のうわさ

大災害からはほぼ2週間が経過した7月25日午前9時頃、その直前に2度続いた震度4の地震にショックを受けた住民のあいだに、「また大津波が来る」という話がどこからともなく発生し、青苗地区の住民のなかには、あわてて高台に避難する人が少なかった。また、本当に津波が来るのかという問い合わせも奥尻役場や気象台に殺到したという。

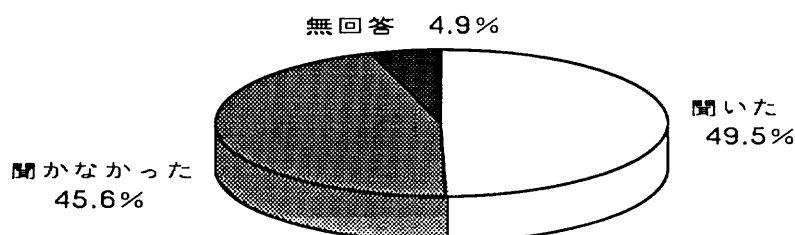
これは、当日午前8時37分と39分の2度にわたって震度4の地震が発生したが、この揺れが、大災害の直後に札幌管区気象台が奥尻島に設置していた臨時観測点だけで記録され、他の気象官署では記録されなかったこと、および気象台ではこの地震による津波の心配がないと判断したことなどから、震度に関する地震情報も、津波なしという津波情報も発表しなかったため、多くの人が津波の来襲をおそれて避難行動をとったものであった。

筆者らのアンケート調査によれば、このとき、大津波のうわさについて聞いた住民が49.5%、聞かなかった人が45.6%となっており、熊石町のケースと同様に、住民のほぼ半数がこの話を聞いたと答えている（図16）。

また、このとき聞いた話の内容は、「ふたたび津波が来る」、「また津波が来る」というような比較的単純な内容のものが圧倒的に多かったが、なかには「保安庁の船が津波がくると知らせた」、「占い師が地震がくると言ったと聞いた」、「津波警報がきた」、「地震の時は（震度3、4の時）必ずもう一度（津波が）来る」、「10日から12日後に再び地震がある」、「津波が来る、墓地の下へは下らないように」という話を聞いた、

「震度4で津波が来る」、「1か月後に大きい余震がくれば地震がおさまる。大きい地震がくれば津波も来る」などというのもあった。

図16. 「また大津波が来る」という話を聞いたか（奥尻町 N=204人）



次に、その話をだれから聞いたかたずねると、「近所の人から」という人がとび抜けて多く64.4%、次いで、「親戚・知人から」（15.8%）、「家族から」（10.9%）と続いている（表17）。1993年1月に発生した釧路沖地震でも、地震の1～2週間後に、「また大地震が来る」という流言が市民のあいだに広がったが、このときも近所の人から聞いたという人が多かった。こうした流言が、近所の人や知り合いを通じて広がるというのは一般的法則のようである。

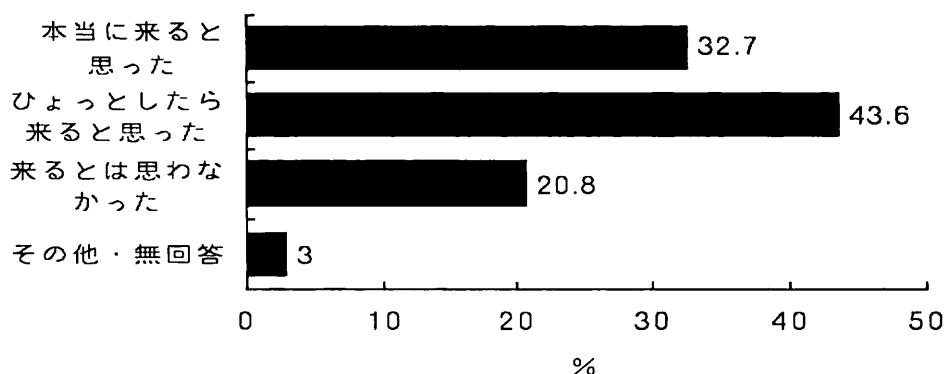
表17. 大津波が来るという話をだれから聞いたか（奥尻町 N=101人）

	N	%
家族から	11	10.9
近所の人から	65	64.4
親戚・知人から	16	15.8
職場の人から	1	1.0
警察や消防から	1	1.0
報道関係者から	4	4.0
その他	12	11.9
無回答	5	5.0

さらに、その話を信じたかどうかに関しては、つい2週間前に大災害があったばかりでまた大きな津波がやってくるのではないかと住民の不安を反映し、「大津波が本当に来るといった」人が32.7%、「ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った」人が43.6%と、あわせて76%もの人が、このうわさを信じている（図17）。

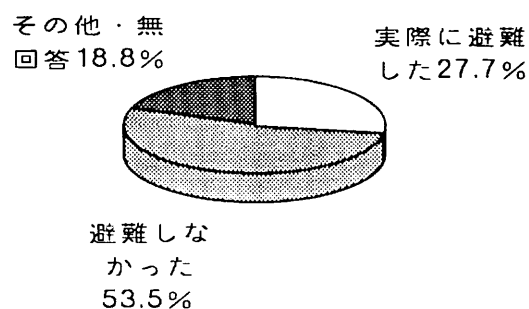
前述の釧路沖地震のときには、大地震がやってくると信じた人の割合はほぼ35%でこの数字もかなりの高率だったが、今回はそれをもはるかに上回っていた。これは、奥尻町の人々にとって7月12日の大津波のショックがいちじるしく、また今回のうわさが、すぐ前に起こった2度にわたる震度4の地震をきっかけにして起こったため、そもそも話に信憑性と深刻さがあったことによるものと考えられる。

図17. 本当に大津波が来ると思ったか（奥尻町 N=101人）



そして最後に、実際の行動であるが、この話を聞いて実際に高台に避難した人も27.7%と、これも、かなり高率になっている（図18）。アンケート調査の対象者の多くがすでに高台の避難所に住んでいたことを考え合わせると、相当多くの人がうわさを信じて、もっと安全な場所に避難したということもできる。

図18. 大津波が来ると聞いて避難したか（奥尻町 N=101人）



一般に、釧路沖地震のような「また大地震が来る」という話の場合には、多くの人はいたとえその話を信じたとしても、せいぜい防災用品を整えとか、枕元に服をおいて寝

るとかする程度で、うわさは心理的には不安や動揺は招くが、社会的混乱を生み出すようなことは少ない。けれども、津波の流言は別である。

過去にも、1855年の安政江戸地震や、1913年の桜島噴火の後に、大津波再来の流言が広がり、人々がいっせいに高台に向かって避難するという出来事が起こっており、大津波の流言は避難行動をとまなうことが少なくないので、場合によってはパニックの引き金にもなりかねない。したがって、こうした流言の場合には、とりわけ迅速な打ち消し情報を提供することが必要になるといえよう。

9. 防災ボランティア活動

今回の災害では、災害の直後から赤十字や民間ボランティアが被災地に訪れ、活発なボランティア活動を行なった。そこで、調査対象者に対し、どのようなボランティア活動を受けたかをたずねると、もっとも多かったのが、全国各地から寄せられた「義援物資の仕分け・運搬」で、66.2%と半数以上の人ボランティアの恩恵を受けている。その次が「けがや病気の手当」で、これも48%と、ほぼ半数がボランティアの対象となっており、以下、「炊事・洗濯の手伝い」（38.7%）、「引っ越しの手伝い」（22.1%）と続いている（表18）。

表18. どんなボランティア活動をしてもらったか（奥尻町 N=204人）

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	30	14.7
けがや病気の手当	98	48.0
炊事・洗濯の手伝い	79	38.7
義援物資の仕分け・運搬	135	66.2
宅配便関係	29	14.2
掃除	38	18.6
引っ越しの手伝い	45	22.1
話し相手	14	6.9
その他	5	2.5
無回答	22	10.8

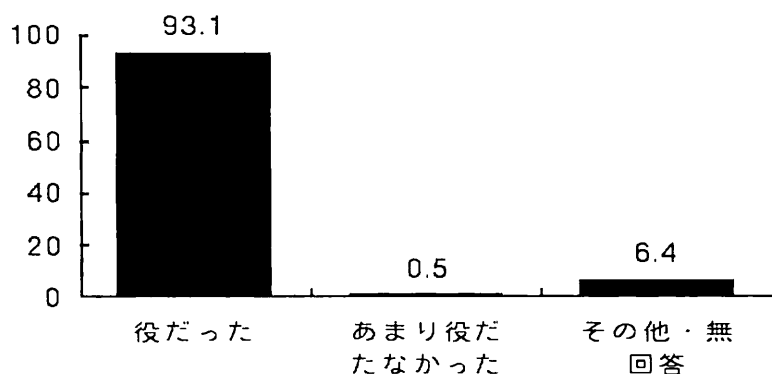
また、そうしたボランティア活動のうち、住民がもっともありがたかったものとしてあげたのは、「義援物資の仕分け・運搬」で56%、次が「けがや病気の手当」の46.7%であり、この両者は住民のほぼ半分があげている。これらの結果は、今回の災害でいかに多くのボランティア活動が行なわれたか、そしてその活動がいかに被災者の助けになったかを示すものといえよう（表19）。

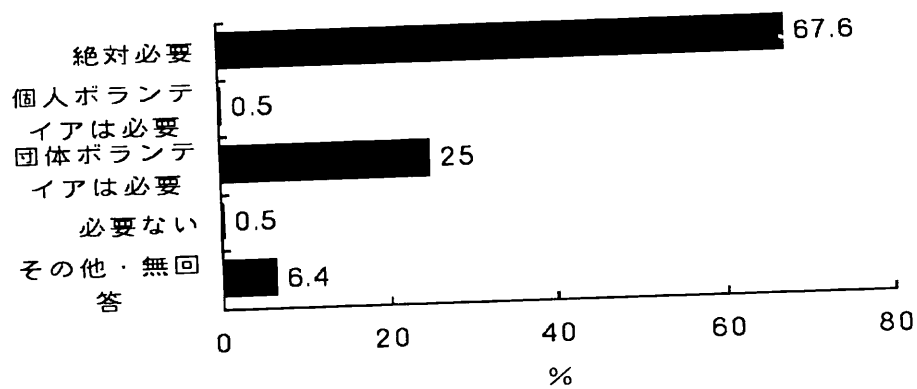
表19. もっともありがたかったボランティア活動（奥尻町 N=182人）

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	19	10.4
けがや病気の手当	85	46.7
炊事・洗濯の手伝い	51	28.0
義援物資の仕分け・運搬	102	56.0
宅配便関係	14	7.7
掃除	20	11.0
引っ越しの手伝い	29	15.9
話し相手	14	7.7
その他	5	2.7
無回答	6	3.3

こうした活動を受けて、ボランティア活動に対する人々の評価もきわめて高く、「ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う」という人が93.1%と、ほぼ全員ともいい人たちが、今回のボランティア活動の評価している。また、今回の経験を踏まえ、災害後のボランティア活動が必要かどうかの一般的な質問に対しても、「個人・団体を問わず絶対必要だと思う」人が67.6%を占めている。なかでも、赤十字や宗教団体などという団体のボランティアの活動が必要と考えられており、「団体から派遣されるボランティアは必要である」という25%を加えれば、これも9割以上の人がその必要性を認識したことになる（図19）。

図19. 防災ボランティア活動に対する評価（奥尻町 N=182人）





8 章

アンケート調査にみる住民の行動 ―渡島半島の町村の場合―

最後に、渡島半島の町村に対するアンケート調査の結果を紹介していく。

筆者らは、渡島半島西部沿岸の桧山支庁管内の大成町、熊石町、および後志支庁管内島牧村の3町村に対しても、アンケート調査を実施した。ここでは、これらの調査のうち、そのエッセンスをとりあげることにはしたい。

まず、調査の概要を以下に示しておく。

表1. 渡島半島の町村に対するアンケート調査の概要

調査目的；1993年7月12日に発生した北海道南西沖地震において、津波被害を受けた大成町、島牧村において、地震時の行動や津波に対する避難行動、津波意識などを調査した。 また、津波被害はなかったが、同報無線をもち住民の避難行動も迅速だった一方、災害後に流言蜚語が発生した熊石町において、同報無線の聴取実態、避難行動、流言への対応などを調査した。
調査期間；（大成町）平成5年10月29日－31日 （熊石町・島牧村）平成5年11月10日－20日
調査対象地域；大成町は被害が著しかった久遠・上浦地区などの200人 島牧村は被害地区の住民182人 熊石町は町内全域から352人
調査方法；大成町は、調査員による個別面接法 熊石町・島牧村は町村役場に調査票の配付を依頼し、回答者に郵送で返送してもらう方式をとった。

1. 地震・津波の被害状況

まず、アンケート調査の対象になった人たちが地震と津波によってどんな被害を受けたかをみると、大成町では「津波によって自宅が全壊した」人が4.5%、「津波によ

て自宅が半壊または一部損壊した」人が2.5%。一方、「被害はとくになかった」人が74%であり、奥尻町とくらべると被害はずっと少なかった。また、島牧村では、津波によって自宅が全壊した人は8.2%、半壊または一部損壊した人が6.6%となっており、大成町よりは多少被害が大きくなっていた（表2）。

表2. 地震・津波の被害（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
津波によって自宅が全壊した	9	4.5
津波によって自宅が半壊または一部損壊した	5	2.5
津波によって床上浸水があった	2	1.0
津波によって床下浸水があった	7	3.5
地震の揺れで家が壊れたり家具が倒れりした	4	2.0
その他	23	11.5
被害はとくになかった	148	74.0
無回答	2	1.0

	N	%
津波によって自宅が全壊した	15	8.2
津波によって自宅が半壊または一部損壊した	12	6.6
津波によって床上浸水があった	15	8.2
津波によって床下浸水があった	13	7.1
地震の揺れで家が壊れたり家具が倒れりした	8	4.4
その他	24	13.2
被害はとくになかった	90	49.5
無回答	5	2.7

2. 地震時にいた場所としていたこと、地震直後の行動・心理

次に、地震が発生したときにいた場所と、そのときしていた行動としては、大成町・島牧村とも、奥尻町と同じく、多く的人是で自宅に床についていた。つまり、「自宅にいた」人は大成町が95%、島牧村が90.7%であり、そのとき「すでに眠っていた」人が大成町44%、島牧村40.7%、また「床に入っていたが眠ってはいなかった」人が大成町17%、島牧村23.1%となっている（図1）（図2）。

しかし、地震直後の行動は奥尻の場合とはかなりちがっており、奥尻町では、「家族に逃げようと声をかけた」、「高台に向けて避難した」などが多かったが、一方、大成

図1. 地震のときどこにいたか（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

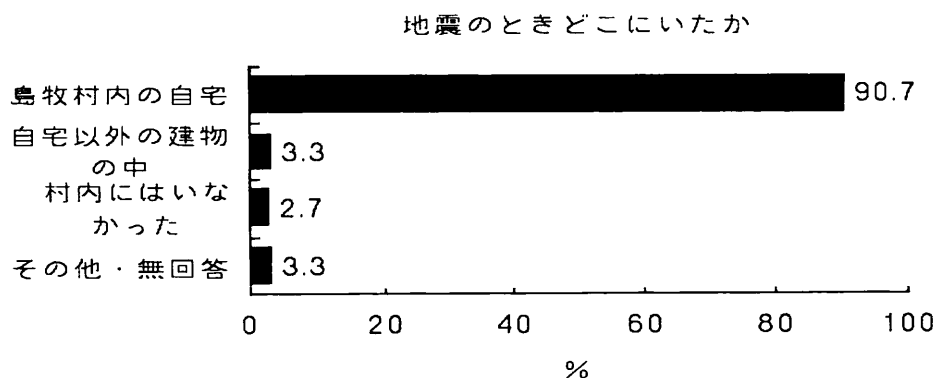
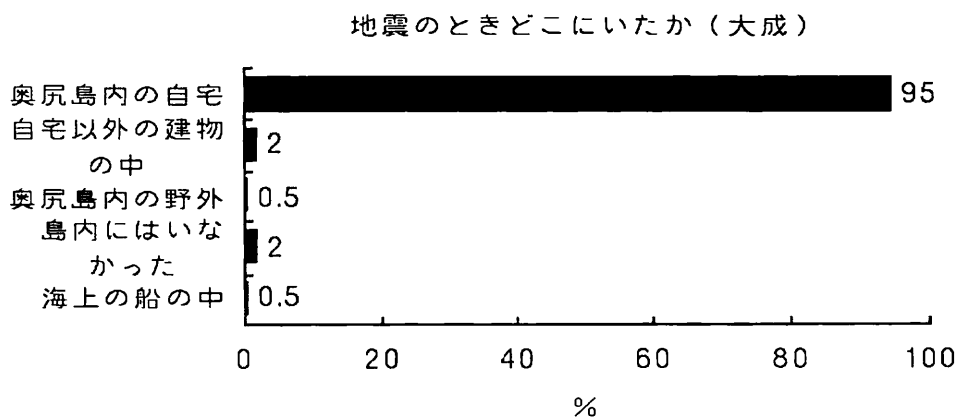
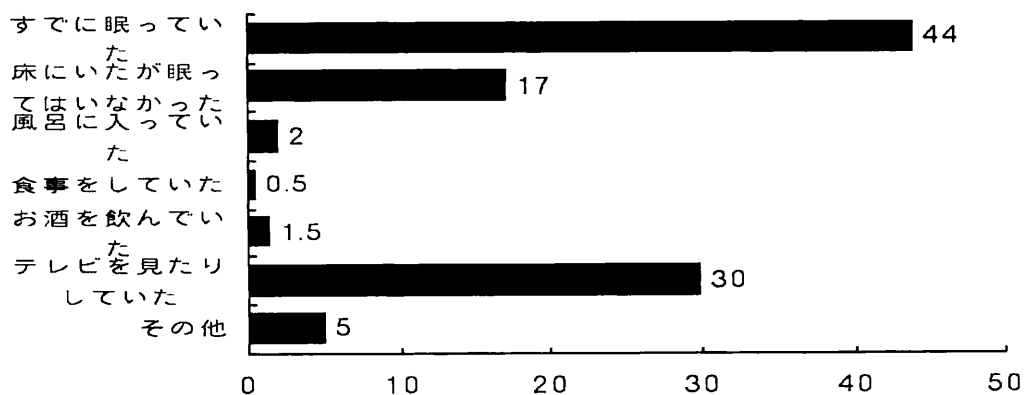
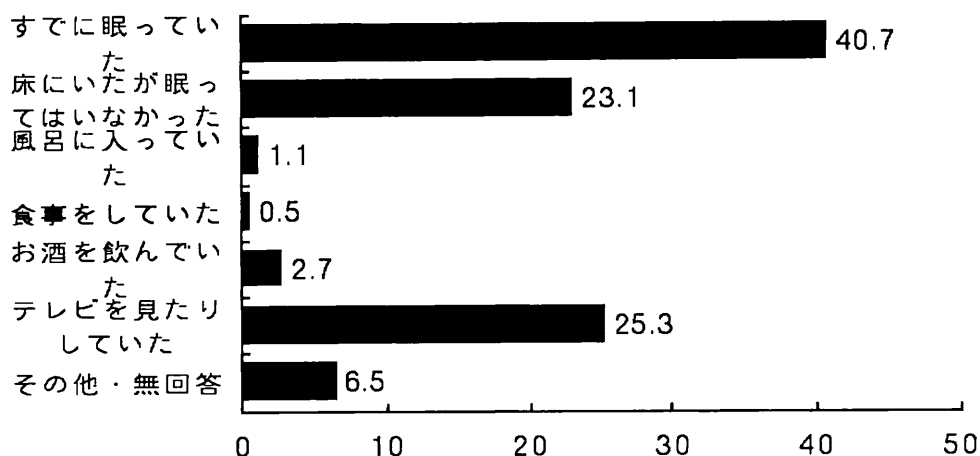


図2. 地震のとき何をしていたか（前；大成町 N=200人 後；島牧村 N=182人）





町や島牧村では、これらの行動は比較的少なかった（「家族に逃げようと声をかけた」が大成町 17.5%、島牧村 34.1%。「高台に向けて避難した」が大成町 8.5%、島牧村 24.7%）（表 3）。これらは、津波を予想した行動といえるが、奥尻町の場合より津波を予想した人が少なかったことの現われと理解できる。

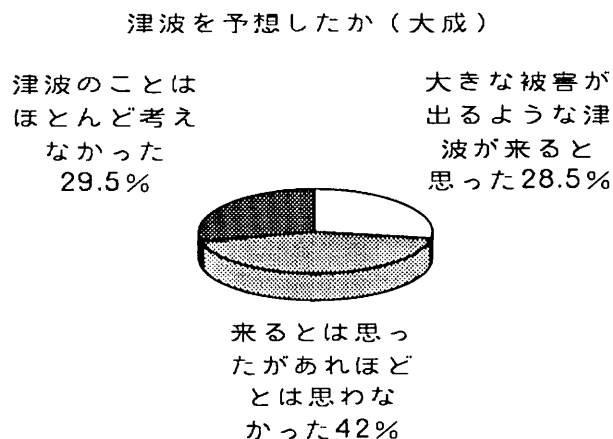
表 3. 地震時にとっさにしたこと（前；大成町 N = 200 人 後；島牧村 N = 182 人）

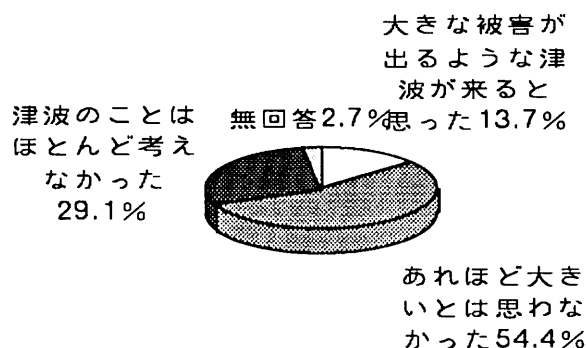
	N	%
あわてて外に飛び出した	71	35.5
家族に逃げようと声をかけた	35	17.5
高台に向けて避難した	17	8.5
火の始末をしようとした	46	23.0
窓や戸をあけて外の様子を見た	30	15.0
室内を片づけた	2	1.0
服を着た・着替えた	48	24.0
家具などが倒れないように押さえた	18	9.0
頑丈なものにつかまって身をささえた	3	1.5
子どもや老人・病人などを気づかった	37	18.5
机の下などに身を伏せた	10	5.0
海や船のようすを見に行った	11	5.5
何もできずぼう然としていた	23	11.5
無我夢中だったので覚えていない	6	3.0
その他	24	12.0

	N	%
あわてて外に飛び出した	33	18.1
家族に逃げようと声をかけた	62	34.1
高台に向けて避難した	45	24.7
火の始末をしようとした	40	22.0
窓や戸をあけて外の様子を見た	48	26.4
室内を片づけた	7	3.8
服を着た・着替えた	65	35.7
家具などが倒れないように押さえた	18	9.9
頑丈なものにつかまって身をささえた	16	8.8
子どもや老人・病人などを気づかった	32	17.6
机の下などに身を伏せた	7	3.8
海や船のようすを見に行った	21	11.5
何もできずぼう然としていた	29	15.9
無我夢中だったので覚えていない	3	1.6
その他	12	6.6
無回答	3	1.6

また、地震の直後、津波をとっさに予想したかどうかたずねると、大成町では、大津波を予想した人が28.5%、津波を予想しなかった人が29.5%、また島牧村では、予想した人が13.7%、予想しなかった人が29.1%となっており、奥尻町にくらべると津波を予想した割合はずっと少ない（図3）。

図3. 地震直後に津波を予想したか（前；大成町 N=200人 後；島牧村 N=182人）





さらに、津波の切迫感についても、奥尻町では津波がすぐ来ると思った人が多かったが、大成町では、「すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った」人が18.4%、「津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った」人が46.1%、また島牧村では切迫感を持った人が14.5%、多少の余裕があると思った人が21%であり、津波の切迫感も奥尻町のほうがずっと高くなっている（表4）。

別のところで述べたように、奥尻町において津波を予想した人が多かった理由としては、10年前の日本海中部地震における被害体験が大きかったが、一方、大成町や島牧村では、10年前にも津波被害はあったが奥尻にくらべると被害の程度が小さかったこともあって、過去の経験から地震直後の津波を予想した人は大成町40.4%、島牧村38.7%と、どちらも過半数を割っていた（表5）。

表4. 津波への切迫感（前；大成町 N=141人 後；島牧村 N=124人）

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	26	18.4
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	65	46.1
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	18	12.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	11	7.8
その他	2	1.4
無回答	19	13.5

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	18	14.5
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	26	21.0
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	33	26.6
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	19	15.3
その他	6	4.8
無回答	22	17.7

表5. なぜ地震直後に津波が来ると思ったか（上；大成町 N=141人 下；島牧村 N=124人）

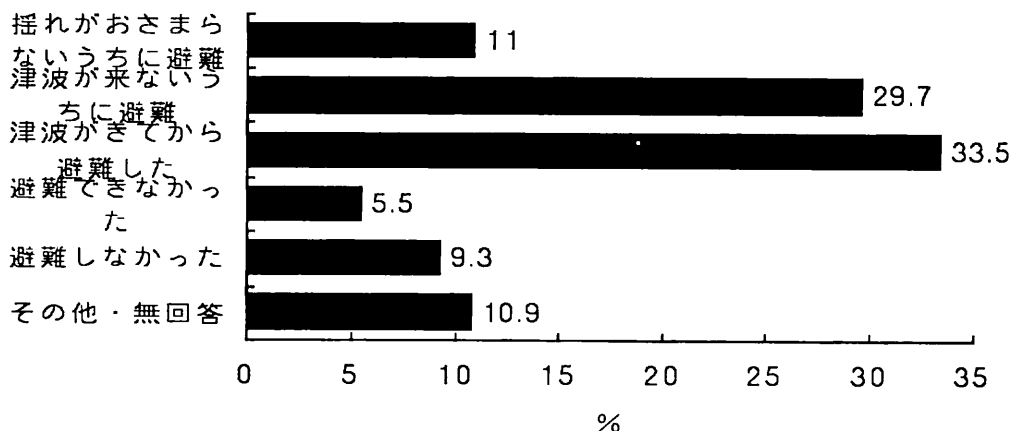
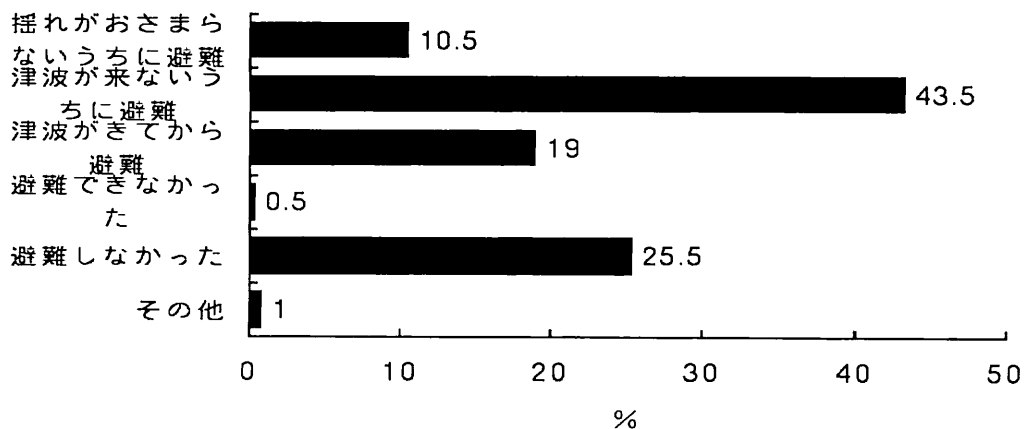
	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	57	40.4
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話を聞いていたから	21	14.9
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	55	39.0
その他	7	5.0
無回答	1	0.7

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	48	38.7
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話を聞いていたから	29	23.4
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	31	25.0
その他	9	7.3
無回答	7	5.6

3. 避難行動の実態

次に、避難行動の実態について触れていく。奥尻町にくらべて大成町や島牧村の人々の避難行動はそれほど迅速ではないが、それでも「まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた」人は大成町が10.5%、島牧村が11%、「揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた」人が大成町43.5%、島牧村29.7%と、大成町であわせて5割、島牧村でも4割を超える住民が、津波にそなえて事前に避難している。また、避難した人たちの平均避難時間は、大成町が地震の7.8分後、島牧村が11.3分後となっており、津波警報が発令されたのが地震の5分後、それが放送されたのが7.5分後だったから、大成町では多くの人は津波警報が放送されたのとはほぼ同時に、また島牧村ではその4分後に避難したことになり、避難はかなり早かったともいえる（図4）。

図4. 避難の時期（前；大成町 N=141人 後；島牧村 N=124人）



次に、避難を決断した理由としては、大成町では、「親戚や近所の人が避難するようにいったので」というのがもっとも多く34.9%を占め、次いで、「家族が避難しようといったので」が32.2%と続き、奥尻町で一番多かった「日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから」が28.1%と、奥尻町のほぼ半分だった。大成町でも10年前の日本海中部地震の経験が生きているといえるが、避難を自分で決断したというより人から勧められたという回答が多かったのが特徴である。

一方、島牧村では、奥尻町と同じく「日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから」が28.9%ともっとも多く、次に家族が避難しようといったという回答が続いているが、特徴的なのは、「家庭内のオフトーク通信スピーカーが避難を呼びかけたので」という回答が22.2%と第3位を占めていることである。

表6. 避難を決断したきっかけ（上；大成町 N=146人 下；島牧村 N=124人）

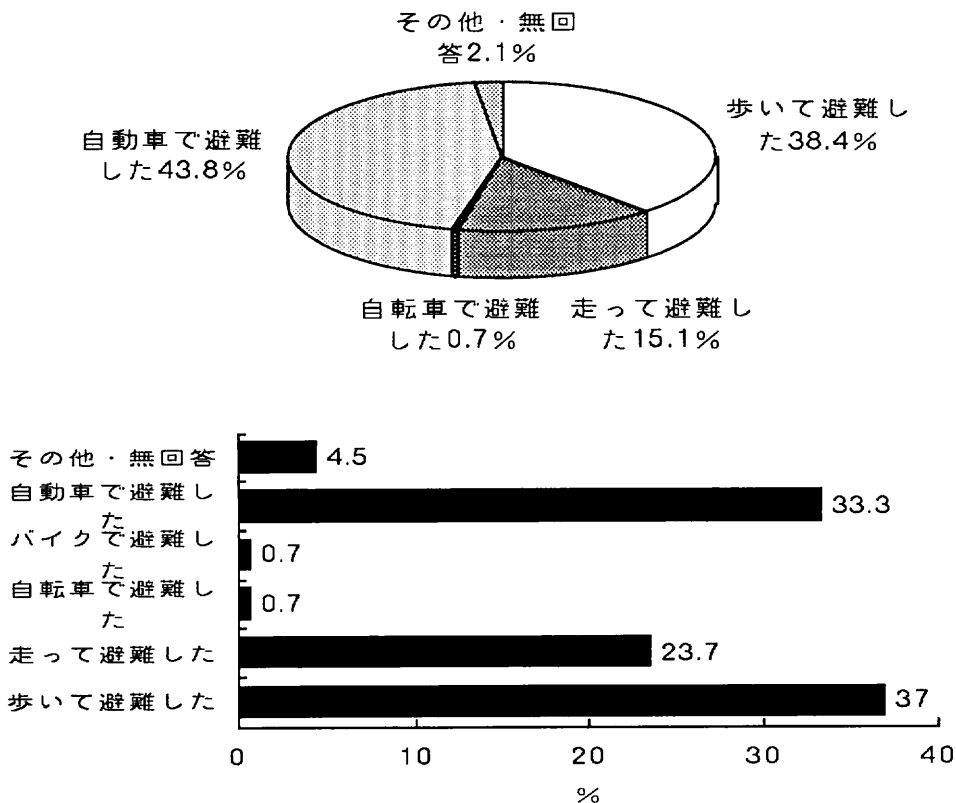
	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	41	28.1
家族が避難しようといったので	47	32.2
親戚や近所の人が避難するようにいったので	51	34.9
テレビで津波警報を聞いたので	1	0.7
ラジオで津波警報を聞いたので	12	8.2
実際に津波に襲われたので	10	6.8
その他	18	12.3

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	39	28.9
家族が避難しようといったので	35	25.9
親戚や近所の人が避難するようにいったので	25	18.5
屋外のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	3	2.2
家庭内のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	30	22.2
テレビで津波警報を聞いたので	4	3.0
ラジオで津波警報を聞いたので	7	5.2
実際に津波に襲われたので	15	11.1
その他	29	21.5
無回答	3	2.2

しかし、大成町・島牧村の避難手段と避難形態は、奥尻の場合とさほど変わらない。つまり、避難手段は、大成町では「自動車に乗って避難した」人が43.8%ともっとも多く、島牧村では1位ではないが33.3%を占めていた。また、避難形態も大成町では「家族全員で避難した」人が72.6%、島牧村では69.6%と最大だった（図5）。

ただし、大成町では避難手段の2位と3位が、「歩いて避難した」（38.4%）、「走って避難した」（15.1%）と逆転しているし、島牧村では歩いて避難した人が37%と最大になっている（図6）。これは、同じく津波を予想しても、奥尻町にくらべると、大成町の人々のほうが切迫感が小さかったことの現われであると思われる。

図5. どんな手段で避難したか（前；大成町 N=146人 後；島牧村 N=124人）



そして、津波が奥尻町より数分遅れて到来したこともあり、渡島半島の避難状況も、奥尻にくらべれば深刻さの度合いは小さい。たとえば、避難時に何を持ち出したかをみると、「かなりのものを持ち出すことができた」人はさすがに少なく大成町0.7%、島牧村1.5%にすぎないが、「少しだけ持ち出せた」人は大成町が47.9%と半数近くあるし、島牧村でも31.9%と3割を越えている（図7）。また、避難するとき

図6. だれと避難したか（上；大成町 N=146人 下；島牧村 N=124人）

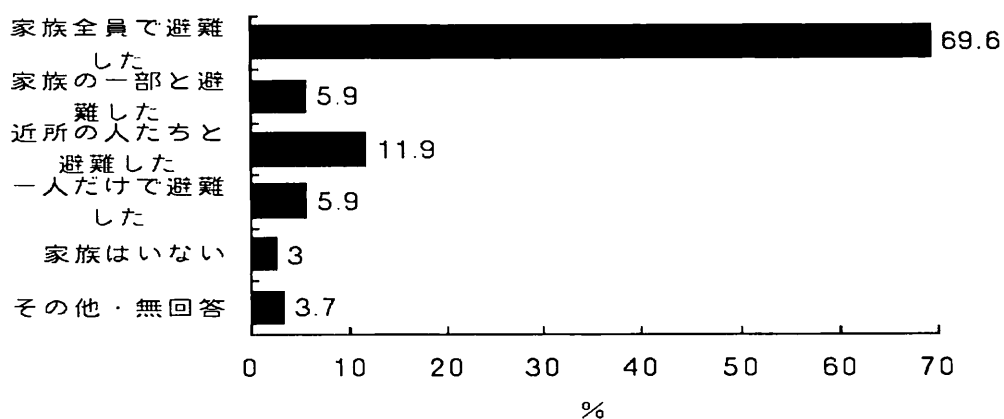
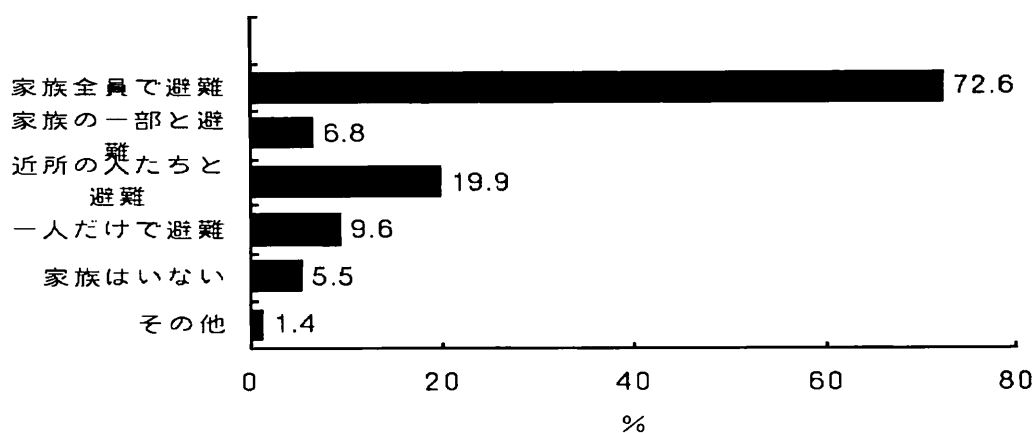
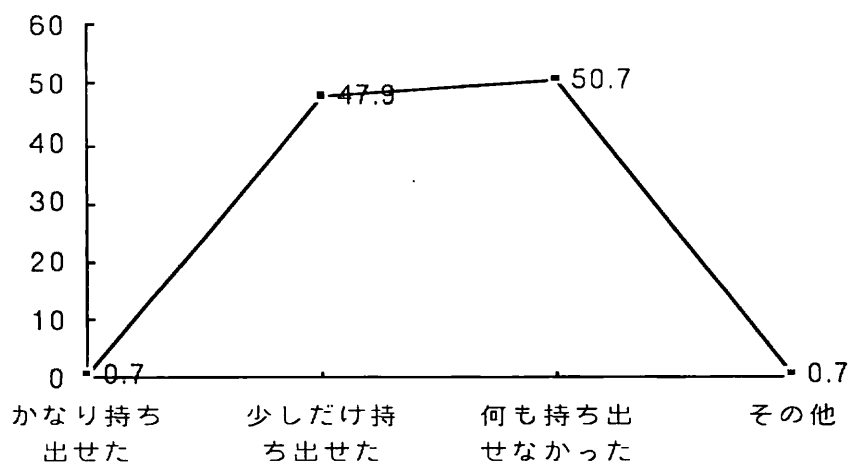


図7. 避難時の持ち出し品（前；大成町 N=146人 後；島牧村 N=124人）



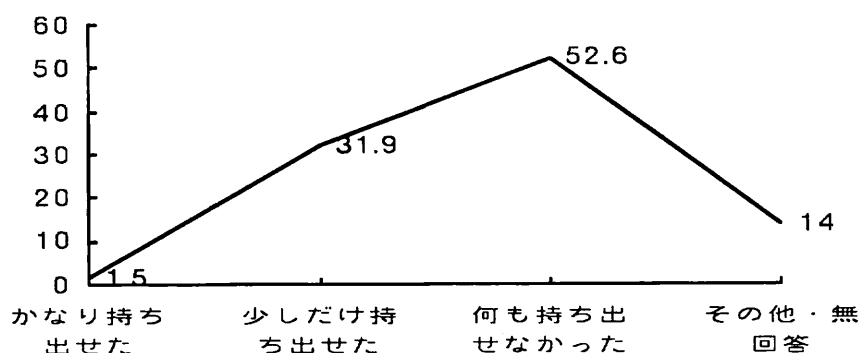
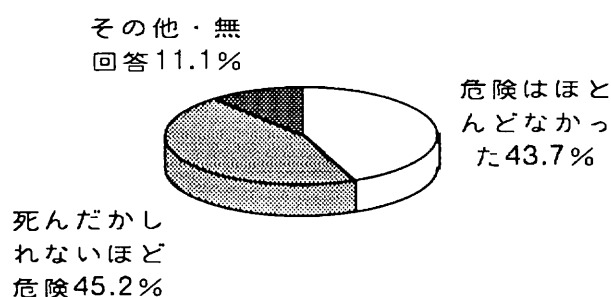
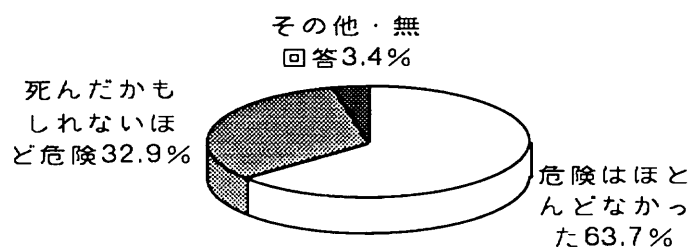


図8. 避難時の状況 (上; 大成町 N=146人 下; 島牧村 N=124人)



「ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった」という人が32.9%あったが、「死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった」人が63.7%でずっと多くなっている。ただし、島牧村はもう少し深刻で、危険な状態だったという人が45.2%、危険はほとんどなかったという人が43.7%とほぼ同率であった(図8)。

これは、避難するとき実際に津波に襲われたかどうかでも同じで、どちらかといえば大成町より島牧村のほうが深刻だったようで、大成町では、「津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た」人が12%あったものの、「津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった」人が79.5%と圧倒的多数を占めていたのに対し、島牧村では、前者も後者も37.4%の同率であった（表7）。こうした結果は、渡島半島においても避難はかなり切迫していたが、奥尻町にくらべるとその度合いは小さかったこと、しかし、大成町と島牧村をくらべると島牧村のほうが切迫していたことを示すものである。

表7. 実際に津波に襲われたかどうか（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	6	3.0
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.5
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	24	12.0
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	159	79.5
その他	2	1.0

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	15	8.2
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.9
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	68	37.4
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	68	37.4
その他	18	9.9
無回答	4	2.2

4. 津波の知識

他の箇所でも触れたように、今回の災害では、奥尻町の人々は地震直後に津波の来襲を予想し、とにかく懸命に避難しようとした。しかし、いろいろな理由から避難が不可能だったり避難が遅れたり、いったん避難しながらふたたび自宅に戻ったりして、大きな人的被害を出してしまった。

ところが、渡島半島の瀬棚町、大成町、島牧村などでは、地震が来たら津波に注意せよということは知っていながら、船を固定するとかボートを陸揚げするとかの理由で、わざわざ海に出かけて津波の犠牲になるというケースが少なくなかった。津波は、木造家屋をばらばらに粉碎してしまうほどの巨大な破壊力を持っている。津波が予想されるときに、いかに大切な財産とはいえ、船やボートを守るために海に向かうということはかなり危険な行為であり、場合によっては命取りになるかもしれない。そしてもし、多くの人が津波の持つ破壊力を十分理解していたならば、おそらくこうした行為は行わなかったにちがいない。つまり、われわれは地震と津波をむすびつける知識と同時に、津波の破壊力についての知識を持たねばならない。人々はどの程度このことを知っていたのだろうか。

表8. 津波の破壊力についての知識（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	29	14.5
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	57	28.5
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	114	57.0

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	21	11.5
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	45	24.7
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	106	58.2
その他	2	1.1
無回答	8	4.4

この点について、アンケート調査の回答をみると、「10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた」という人が大成町で14.5%、島牧村で11.5%、「実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた」人が大成町で28.5%、島牧村で24.7%と、あわせてだいたい4割がこのことを知っていた。直接経験から津波の破壊力を知っていた人は奥尻町のほぼ半分であるが、こうした知識を持っている人の全体的割合はそんなにちがいはない。しかし、「津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった」人が大成町57.0%、島牧村58.2%と、いずれも半数を越えているのは、やはり問題であるといえよう（表8）。

次に、津波のスピードについての知識であるが、今回の災害では、とくに奥尻町において、せっかく津波を予想して避難しながら、徒歩でゆっくり高台に向かったため津波に追いつかれて犠牲になった人々も少なくなかった。これは、津波が猛烈なスピードを持ち、うっかりすれば避難の途中で津波に追いつかれてしまうという知識が、残念ながら不十分だったためと考えられる。

渡島半島の人々は、津波の持つスピードについてどのくらいの知識があったのだろうか。アンケート調査の回答をみると、「10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた」という人が大成町で7.5%、島牧村で11%、「実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた」人が大成町で12.5%、島牧村で8.2%と、知識のある人は、いずれも合計して2割であった。一方、「津波がこんなにスピー

表9. 津波のスピードについての知識（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	15	7.5
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	25	12.5
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	160	80.0

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	20	11.0
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	15	8.2
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	141	77.5
無回答	6	3.3

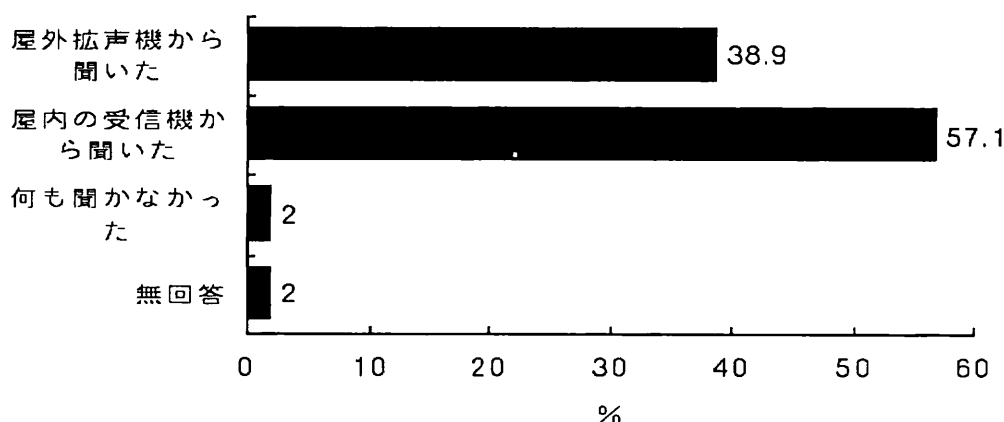
ドがあるとは知らなかった」という人が大成町 80 %、島牧村 77.5 % の高率にのぼっており、奥尻町の人々にくらべてもはるかに知識がないのである（表 9）。今後、津波への避難を促進し、人的被害を軽減するためには、地震＝津波という知識を徹底するとともに、津波の持つ破壊力とスピードを人々に知ってもらうような広報活動が必要になるだろう。

5. 防災無線・オフトーク通信と住民の行動

前にも触れたように、奥尻町と渡島半島の熊石町には、屋外拡声機と戸別受信機とともにそなえて防災無線（同報無線）システムがあった。奥尻町の防災無線についてはすでに述べたので、ここでは熊石町の防災無線を住民がどのように聞き、どのように評価しているかについて紹介していきたい。

アンケート調査によると、熊石町では、ほとんどの町民が地震の起こった夜に防災無線の放送を聞いていることがわかる。つまり、屋内の受信機から聞いた人が 57.1 %、屋外拡声機から聞いた人が 38.9 % で、何も聞かなかったと答えた人はわずか 2 % にすぎなかったのである（図 9）。

図 9. 災害の当夜、防災無線の放送を聞いたか（熊石町 N = 352 人）



また、住民に対して、ふだん同報無線がどのくらい聞き取れるかをたずねたところ、戸別受信機は 94.9 % の人がいつでも聞こえる状態になっていたと答えたばかりでなく、屋外拡声機も、72.4 % の人が内容はほとんど全部聞き取れる状態であったと答えていた。これらの結果から、今回の災害において多くの人が防災無線を聞いた背景には、ふだんから比較的良く聞こえる優れた防災無線施設を備えていたことがあるといえるだろう。また、4 章でも触れたように、当夜、50 回近く繰り返し放送をしたということも、同報無線を聞いた人が多い要因となっていると考えられる。

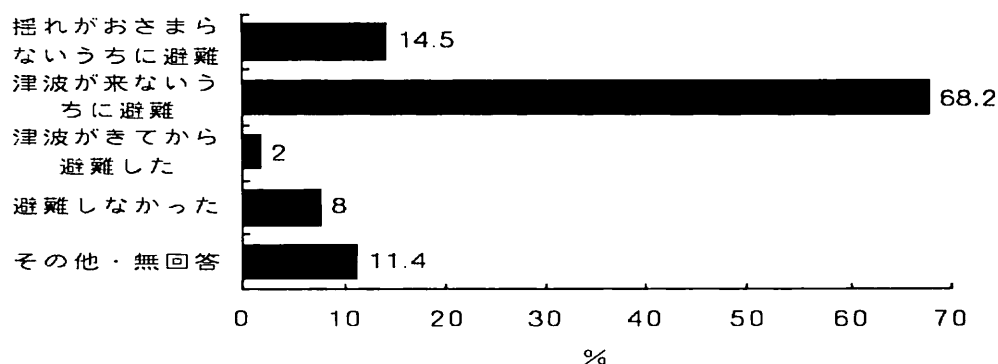
さらに、津波警報を聞いたかどうか町民にたずねたところ、93.2%の人が警報を聞いたと答えていたが、その警報はどのようにして知ったかをたずねると、68%の人が防災無線の戸別受信機から、47.6%の人が防災無線の屋外拡声機から聞いたと答えている。一方、NHKテレビから知った人は18%、NHKラジオから知った人は、15.9%となっており、テレビ・ラジオから聞いた人より防災無線から聞いた人が圧倒的に多くなっているのは注目すべきことであろう（表10）。要するに、熊石町では住民への津波警報の伝達が迅速に行われ、その主役は防災無線であったといえるのである。さらに、防災無線の中でも戸別受信機の効果が大きかったといえる。

表10. 津波警報をどこから聞いたか（熊石町 N=328人）

	N	%
民放テレビから	9	2.7
NHKテレビから	59	18.0
民放ラジオから	27	8.2
NHKラジオから	52	15.9
防災無線の戸別受信機	223	68.0
防災無線の屋外拡声機	156	47.6
警察や消防から	27	8.2
家族や近所の人から	16	4.9
その他	7	2.1
無回答	1	0.3

また、熊石町では、結果として津波が来襲しなかったけれども、地震後ほとんどの住民が避難している。そのうち、まだ揺れがおさまらないうちに避難した人は14.5%、揺れがおさまらず津波がくる前に避難した人が68.2%、津波が来てから避難しはじめた人が2%で、避難しなかったと答えた人はわずか8%であった（図10）。

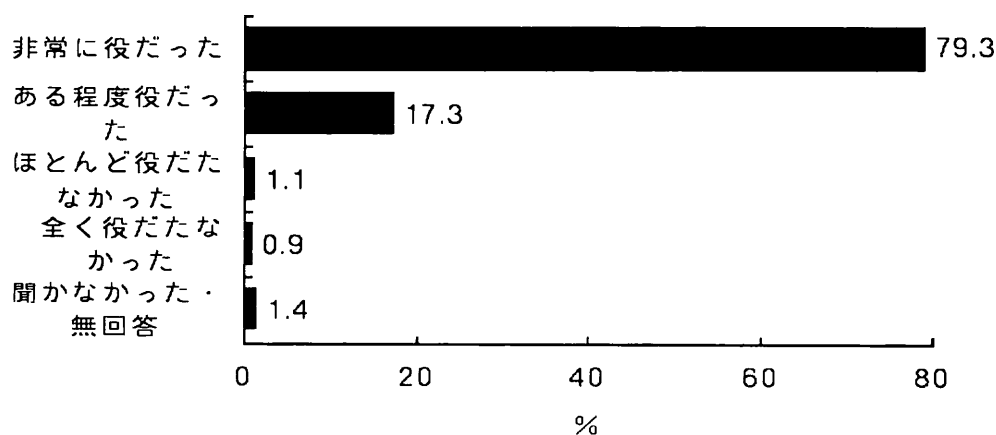
図10. 避難の時期（熊石町 N=352人）



これらの結果をみると、津波警報が防災無線によって迅速に伝えられ、また住民の避難のきっかけとして防災無線が大きな役割をはたしたと考えられる。さらに、町役場でも話してくれたが、いったん避難した人が警戒を解くことなく慎重な行動をとれたのも、防災無線の効果といえるだろう。

そこで、当然であるが、このように活躍した防災無線に対する住民の評価もきわめて高いものになっている。つまり、地震当夜から翌朝までのあいだに防災無線は役にたったかとたずねたところ、79.3%もの人が非常に役にたったと答え、17.3%がある程度役にたったと答えた。逆に、ほとんど役にたたなかったとした人はわずか1.1%、全く役にたたなかったとした人は0.9%にすぎなかったのである（図11）。

図11. 防災無線の評価（熊石町 N=325人）

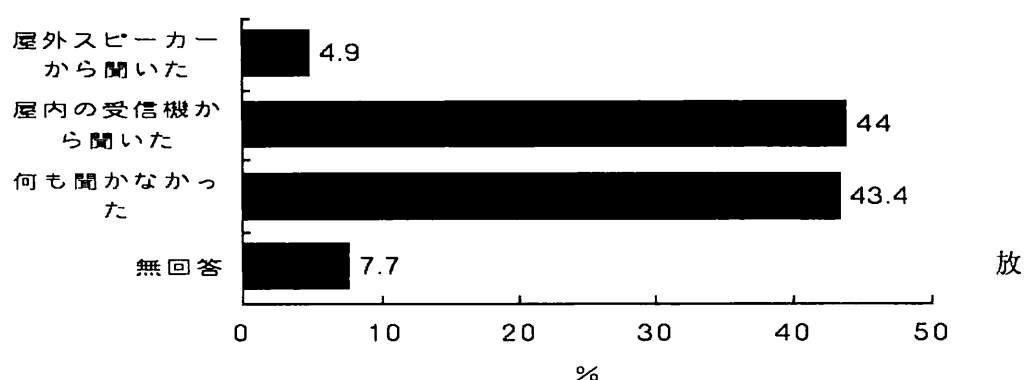


一方、今回の津波災害の被害を受けた島牧村には、オフトーク通信のシステムがあった。

次に、島牧村の住民が、災害時にこのオフトーク通信の放送にどのように対応し、これをどのように評価しているかをみていきたい。

筆者らのアンケート調査によれば、地震の当夜、オフトーク通信を聞いた人は回答者の約半数であった。具体的にいうと、屋内の受信機から聞いた人が44.0%、屋外のスピーカーから聞いた人が4.9%だった（図12）。放送を聞いたというこの人数は、奥尻町の場合より多かったが、熊石町よりは少ない。熊石町より聞いた人が少なかった原因としては、放送が地震10分後と比較的遅かったために、すでに家から避難していた人が多かったこと、屋外拡声機が少なくかつ十分に作動しなかったこと、などが考えられる。一方、停電にもかかわらず、屋内スピーカーから聞いた人が比較的多かったのは、各家に設置されたオフトーク通信の端末が充電式の電池でバックアップされていたためと考えられる。この仕組みでは電池交換の必要がないため、停電時に確実なバックアップができたといえよう。

図 1 2 . 災害当夜、オフトーク通信の放送を聞いたか（島牧村 N = 1 8 2 人）



島牧村では、アンケートの回答者 1 8 2 人のうち、7 4 . 2 % の住民が地震直後に避難していたが、避難した人の約 4 分の 1 が、避難のきっかけとしてオフトーク通信での避難の呼びかけをあげている（表 1 1）。具体的には、家庭内のオフトーク通信からの呼びかけによって避難した人が 2 2 . 2 %、屋外の拡声機からの呼びかけで避難した人が 2 . 2 % であった。この数字をみても、今回のオフトーク通信が避難促進に重要な役割を果たしていたことがわかる。放送を聞いた人自体が住民の半数程度であったことを考えると、聞こえた人に対しては、オフトークからの避難の呼びかけは相当な効果があったといえるだろう。

こうしたことを反映して、住民のオフトーク通信に対する評価も高くなっている。つ

表 1 1 . 避難のきっかけ（島牧村 N = 1 3 5 人）

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから	3 9	2 8 . 9
家族が避難しようといったので	3 5	2 5 . 9
親戚や近所の人が避難するようにいったので	2 5	1 8 . 5
屋外のオフトーク通信スピーカーが避難を呼びかけたので	3	2 . 2
家庭内のオフトーク通信スピーカーが避難を呼びかけたので	3 0	2 2 . 2
テレビで津波警報を聞いたので	4	3 . 0
ラジオで津波警報を聞いたので	7	5 . 2
実際に津波に襲われたので	1 5	1 1 . 1
その他	2 9	2 1 . 5
無回答	3	2 . 2

まり、地震の夜から翌朝にかけてオフトーク通信は役に立ったかという質問に対して、非常に役に立ったと答えた人は39.6%、ある程度役に立ったという人は23.1%と、合わせて過半数の人が役に立ったと答えている（図13）。

一方、注目すべきなのは、地震から一週間の間ではオフトーク通信に対する評価がさらに高くなっている点である。つまり、非常に役に立ったという人が51.1%、ある程度役に立ったとする人が28.6%と、8割もの人が役に立ったと答えているのである（図14）。村ではこの間、LPガスボンベや墓石転倒に対する点検の呼びかけや、被害状況調査の協力の呼びかけなどを放送している。その中でもっとも役に立ったと思われるのは、断水にともなう給水車の派遣場所と時刻の告知放送である。この放送は、グループページング機能を使って地域別に行ったが、給水車が行くと多くの住民がすで

図13. 地震当夜、オフトーク通信は役だったか（島牧村 N=182人）

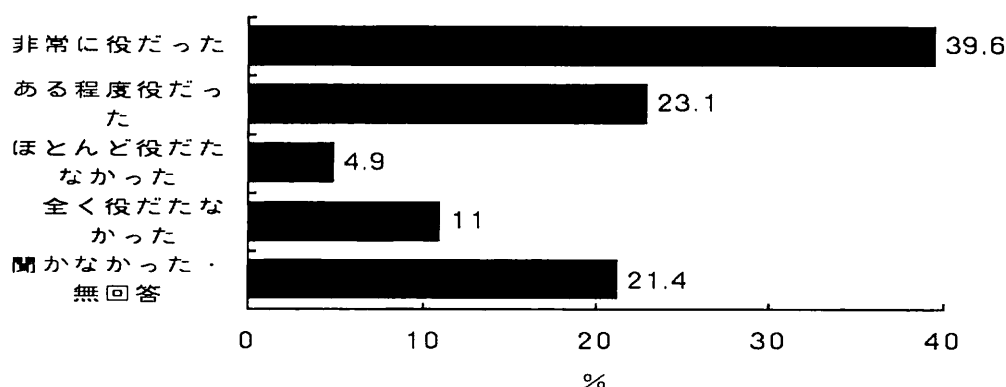
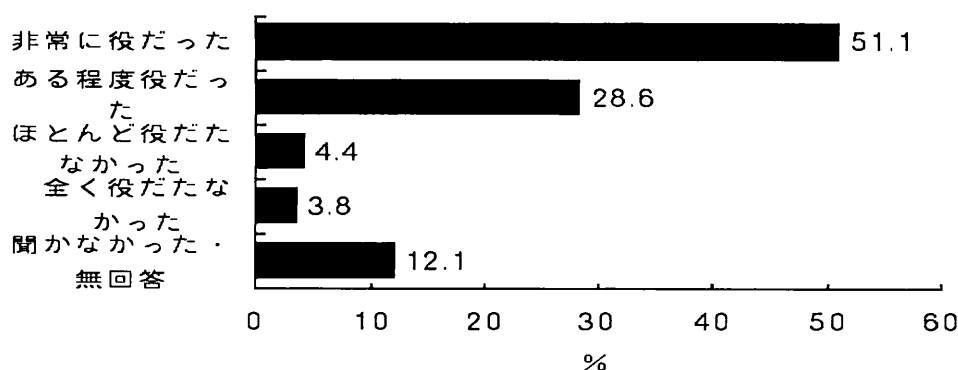


図14. 地震後1週間のあいだ、オフトーク通信は役だったか（島牧村 N=182人）



に集まっており、かなりの人がこの放送を活用したようだ、と村では話している。日常メディアとして日頃から利用されているオフトーク通信が、その特性を生かして災害に対するさまざまな行政情報を提供し、災害の復旧過程で大きな役割を果たした例といえるだろう。

6. 住民の電話行動

渡島半島の大成町の住民の電話行動の特徴としては、まず第一に活発な電話行動があげられる。たとえば大成町では、地震が起こった当夜から翌朝にかけて、どこかに電話をかけた人は62.5%にのぼり、島牧村でも53.8%と半数を越えていた。逆に、災害当夜にどこかから電話を受けた人は、大成町が48.5%、島牧村が66.5%と、こちらは島牧村のほうが多かった。

第二の特徴としては、災害直後に起こった激しい輻輳によって、電話がなかなか通じなかったことである。つまり、電話がかかってきた人のうち、大成町では78.4%が相手が「なかなか電話がかかりにくかった」と言っていたと回答している（表12）。

また、電話をかけた人もなかなか通じなかった人が多く、「電話をかけてすべての相手に通じた」人は大成町が14.5%、島牧村が18.7%といずれも2割に満たず、一方、一部しか通じなかったり一つも通じなかったりした人が大成町43.5%、島牧村35.1%にのぼっていた（図15）。

表12. 地震当夜から翌朝までの電話の疎通状況（上；大成町 N=97人 下；島牧村 N=121人）

	N	%
電話がかかりにくかった」と言っていた人がいた	76	78.4
別に「電話がかかりにくかった」とは言っていなかった	20	20.6
無回答	1	1.0

	N	%
電話がかかりにくかった」と言っていた人がいた	117	96.7
別に「電話がかかりにくかった」とは言っていなかった	4	3.3

そして第三に、人々の主な通話欲求は家族や親戚・知人の安否の確認であったが、電話がつながりにくかったために、満足にそれができなかったようである。つまり、大成町では、調査対象者の半数以上にのぼる56.0%の人が、また島牧村では58.8%が、安否をたずねる電話が町外からたくさんかかってきたと答えている。一方、大成町では半数近くの43.5%、島牧村でも35.2%もの人が、電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかったと答えているのである（表13）。

図15. 地震当夜から翌朝までの電話の疎通状況（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

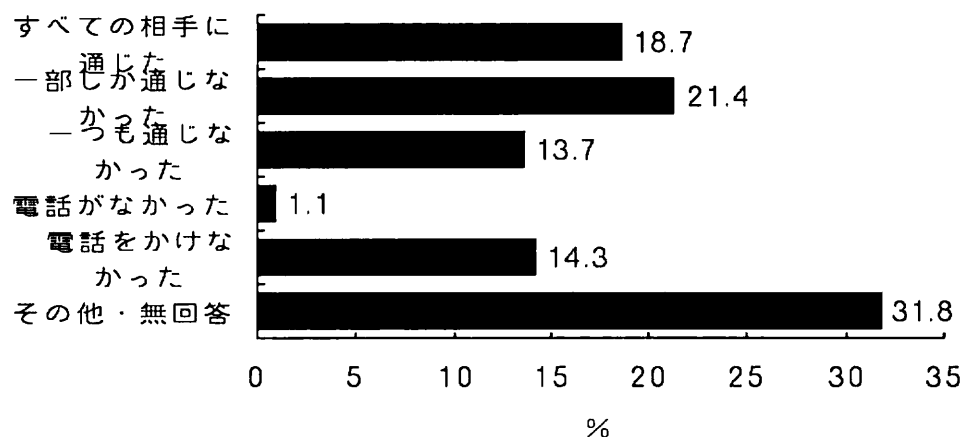
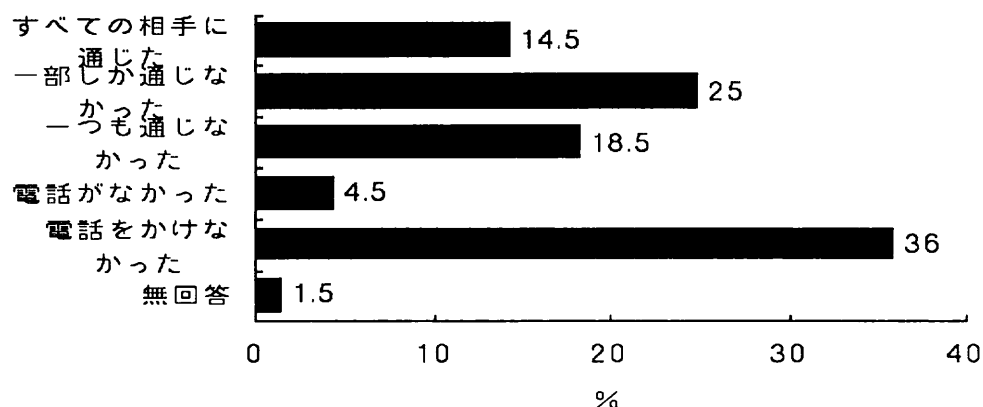


表13. 今回の災害において、電話について感じたこと（前；大成町 N=200人 後；島牧村 N=182人）

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	2	1.0
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が町外からたくさんかかってきた	112	56.0
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	87	43.5
無回答	45	22.5

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	3	1.6
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が町外からたくさんかかってきた	107	58.8
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	64	35.2
無回答	27	14.8

7. マス・メディアの活動に対する評価

7-1. 避難行動と放送

まず、渡島半島における住民の避難行動と放送との関係を見ると、住民の避難行動のきっかけとして「テレビもしくはラジオの津波警報を聞いたので」と答えた人は、奥尻町ではゼロだったのに対し、大成町では「テレビの津波警報を聞いて」が0.7%（1人）、「ラジオの津波警報を聞いて」が8.2%（12人）と、総数からみれば少ないものの、「テレビ・ラジオ」というマスコミ情報を意志決定のよりどころとしていることがわかる。

一方、島牧村では、避難するきっかけは、大半が地震により津波がくると自分で判断したり、家族や近所の人呼びかけによる避難であった（73.3%）。次に、オフトーク通信による呼びかけ（24.4%）であった。しかし、テレビ・ラジオによって津波警報を聞いて避難した人は、大成町と同様に、合計して8.2%だった（表14）。

参考までに、以下、北海道各局の津波警報の伝達時間と、その伝達方法を紹介しておこう。

放送局名	放送時間	発信局	放送方法
NHK札幌	22:24'27	NHK札幌	番組中断・アナウンス 総合テレビ・ラジオ第1 ・FM3波一斉
HBCテレビ	22:29'00		HBCスーパー・テロップ
HBCラジオ	22:25'00		HBC生番組中アナウンス
STVテレビ	22:55'50	NTV（東京）	スーパー・テロップ
北海道テレビ	22:28'50	ANB（東京）	生番組中アナウンス
北海道文化放送	22:28'50		スーパー・テロップ

表 14. 避難のきっかけ（上；大成町 N=146人 下；島牧村 N=135人）

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	41	28.1
家族が避難しようといったので	47	32.2
親戚や近所の人が避難するようにいったので	51	34.9
テレビで津波警報を聞いたので	1	0.7
ラジオで津波警報を聞いたので	12	8.2
実際に津波に襲われたので	10	6.8
その他	18	12.3

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	39	28.9
家族が避難しようといったので	35	25.9
親戚や近所の人が避難するようにいったので	25	18.5
屋外のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	3	2.2
家庭内のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	30	22.2
テレビで津波警報を聞いたので	4	3.0
ラジオで津波警報を聞いたので	7	5.2
実際に津波に襲われたので	15	11.1
その他	29	21.5
無回答	3	2.2

前のページの一覧を見ると、かりに渡島半島への津波襲来時刻が地震の10分後としても、津波警報が間に合ったのはNHKとHBCラジオの2つであり、それ以外は、津波襲来後に警報を伝えたことになる。

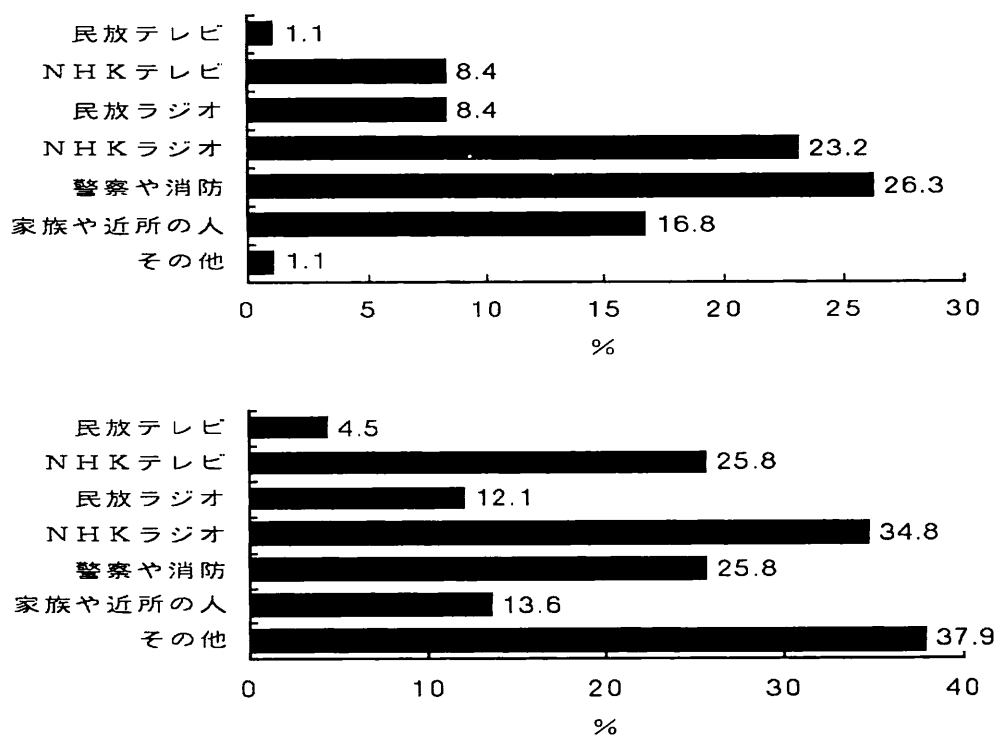
これに関連するのが、津波警報をどのように知ったかという問いに対する回答であるが、奥尻町の場合、NHKラジオが7.4%、民放ラジオが3.7%の合計11.1%がラジオから津波警報を得ている。調査対象者のほとんどが、地震後停電していると答えていることもあり、テレビという回答者はなかった。

それに対して、大成町の場合、津波警報を聞いた人が半数近くおり（200人中95人）、そのうち、NHKラジオが23.2%と最も多く、次いで、民放ラジオ、NHKテレビが同数で8.4%、民放テレビが1.1%と、全体の41.1%が放送から警報を聞いている。また島牧村でも、津波警報を知ったメディアは、テレビ、ラジオといった放送が77.2%と大半を占め、そのうちNHKがテレビ、ラジオともに25.

8%、民放ラジオが12.1%、民放テレビが4.5%であった（図16）。

渡島半島の場合、停電しなかった地域や停電しても比較的是約復旧したところが多く、テレビによって情報を得る人もいたが、ラジオによって情報を得たという人がテレビよりも多い（とくに大成町）のであり、この結果は、停電時もしくは避難場所ではラジオが役にたつことを物語っているように思われる。災害時のラジオの有効性を示した結果ではないだろうか。

図16. 津波警報の情報源（上；大成町 N=95人 下；島牧村 N=66人）



7-2. 住民の情報ニーズとマスコミ評価

次に、住民の情報ニーズについて、奥尻町と比較しながらみると、奥尻では、一番多かったのが「家族や知人の安否」で全体の半数近くを占め、次が「食料や生活物資について」で、以下、「水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて」「余震や津波の今後の見通しについて」などとなっていた。

一方、大成町でも島牧村でも、一番多かったのが「余震や津波の今後の見通しについて」（大成町57.5%、島牧村80.8%）で、奥尻町よりも圧倒的に多かった。大成町では、次に多かったのが「地震・津波の被害について」で、反対に、奥尻で一番多かった「家族や知人の安否」は、大成町35%、島牧村27.5%であり、次に多かった「食料や生活物資について」は大成町12.5%、島牧村14.3%と奥尻の半分以

下であった。島牧村では、2位以下は、「地震・津波の規模や発生場所について」（50.0%）、「地震・津波の被害について」（49.5%）となっている（表15）。

表15. 地震後1週間位の住民の情報ニーズ（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	93	46.5
余震や津波の今後の見通しについて	115	57.5
地震・津波の被害について	97	48.5
家族や知人の安否について	70	35.0
行方不明者の救出・搜索活動について	53	26.5
国や道や町のとっている対策について	40	20.0
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	35	17.5
食料や生活物資について	25	12.5
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	30	15.0
大成町以外の地域の様子について	46	23.0
その他	5	2.5
特になかった	24	12.0

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	91	50.0
余震や津波の今後の見通しについて	147	80.8
地震・津波の被害について	90	49.5
家族や知人の安否について	50	27.5
行方不明者の救出・搜索活動について	69	37.9
国や道や町のとっている対策について	55	30.2
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	52	28.6
食料や生活物資について	26	14.3
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	52	28.6
島牧村以外の地域の様子について	70	38.5
その他	4	2.2
特になかった	1	0.5
無回答	10	5.5

このように、奥尻町と渡島半島の町村では、住民の情報ニーズにいくつかの違いがみられた。大まかに見て、奥尻のほうは、安否情報・生活情報・復旧情報のニーズが高く、一方、渡島半島では、地震および津波の規模や今後の見通し、被害といった地震・津波自体の情報や、被害情報のニーズが比較的高いといえよう。このような差が出た要因は、奥尻ではほとんどの世帯が大きな被害を受け、避難所生活を余儀なくされた人が多く、安否情報や生活情報・復旧情報のニーズが高まったのであろう。一方、渡島半島の場合は、地震・津波による被害は生じたものの、奥尻にくらべて少なかったことや、ライフラインも復旧のメドがたつのも奥尻にくらべて早かったことなどから、安否情報や復旧情報のニーズが比較的低くなったと思われる。それよりも、規模の大きな地震であったことから今後も余震が続くであろうし、また大きな余震があった場合にはふたたび津波が襲うかもしれないという心配もあったことなどから、地震・津波自体の状況や今後の見通し、そして被害の情報のニーズが高くなったのではないと思われる。

次に、住民が知りたかった情報を情報をもっともよく伝えたものは何かという問いについては、一番多かったのがNHKテレビで、大成町が58.5%、島牧村が45.1%となっており、以下も、テレビやラジオ、新聞といったマス・メディアをあげる人が多かった。奥尻町にくらべて、マス・メディアが住民のニーズに応えたといえるだろう。ちなみに、奥尻町で一番多かった「家族や近所の人から直接聞いたこと」は、大成町では4.5%、島牧村では6.6%であった。島牧村では地震発生直後はオフトーク通信から情報を得る人が多かったが、しかし、時間が経つとマス・メディアからの情報収集が多くなるようである（表16）。では、このように大きな差が出た要因は何だろうか。

まず、奥尻の場合、家財の被害が大きく、テレビ、ラジオ自体が紛失・破損した人が多かったであろうし、避難所生活をしている人にとっては、落ち着いてテレビ・ラジオを視聴・聴取することは難しい。そこで、テレビ・ラジオ自体の接触率が低くなったことが考えられる。

もう一つには、奥尻町では、住民が知りたい情報がテレビ・ラジオから得られなかったという点が指摘できるのではないかと。前述した「地震後の1週間くらいの間に知りたかった情報」に関係するが、奥尻町で情報ニーズが高かったのは、安否情報や生活情報、復旧情報であった。たしかに、地震や津波に関する報道は連日テレビやラジオで放送されてはいたが、被災者もしくは被災地域の住民に対しては、きめ細かいくわしい情報が報道されていなかったのではないかと。たしかに、NHKのラジオでは安否情報が放送されたが、全体的には、被災地向けというより被災地以外に被災地の様子を伝える情報が主であったようである。そのため、奥尻の住民のニーズに放送が十分応えていなかったといえるのではないかと。

次は、NHKテレビ、民放テレビ、および新聞が役にたったかという問いである。

まず、NHKテレビに関しては、「非常に役にたった」と「ある程度役にたった」の合計が、大成町では88.0%、島牧村では81.3%とどちらも8割を越え、次に、民放テレビに関しては、大成町が77.0%、島牧村では75.9%。そして、新聞に関しては、大成町が68.5%、島牧村が70.8%であった。いずれも、役に立ったという評価が非常に多くなっている。

表16. 知りたい情報をもっともよく伝えたメディア（前；大成町 N=200人 後；
島牧村 N=182人）

	N	%
民放ラジオ	8	4.0
NHKラジオ	27	13.5
民放テレビ	16	8.0
NHKテレビ	117	58.5
新聞	1	0.5
警察や消防の話	5	2.5
家族や近所の人から直接聞いたこと	9	4.5
他人との電話での話	1	0.5
その他	5	2.5
無回答	11	5.5

	N	%
民放ラジオ	5	2.7
NHKラジオ	14	7.7
民放テレビ	23	12.6
NHKテレビ	82	45.1
新聞	19	10.4
警察や消防の話	6	3.3
家族や近所の人から直接聞いたこと	12	6.6
他人との電話での話	3	1.6
その他	3	1.6
無回答	15	8.2

逆に、「役にたたなかった」という回答（「あまり」「全く」の合計）は、NHKテレビが大成町10.5%、島牧村3.8%、民放テレビが大成町20.0%、島牧村2.7%、新聞が大成町15.5%、島牧村1.6%と、どれも島牧村のほうが少なかった（図17、図18）。

以上のように、奥尻町と同じく大成町でも、マス・メディアはおおむね評価が高い。

次は、マスコミ取材に関する質問である。まず、「マスコミの取材を受けたか」という問いに対して、「自分自身が取材された」「家族が取材された」「誰かが取材されたのを見た」の合計が、奥尻町が90.7%だったのに対し、大成町は42.0%、島牧村では45.6%と大きく下回っている。なかでも「自分自身が取材された」という人が奥尻町が72.5%なのに、大成町は11.5%、島牧村は13.2%と大きく差がある。この数値は、今回の地震に対するマスコミの関心が奥尻島に集中し、他の被災地はあまり重視されなかったことを示すものと思われる（表17）。

図17. 災害報道においてマスコミは役立ったか（大成町 N=200人）

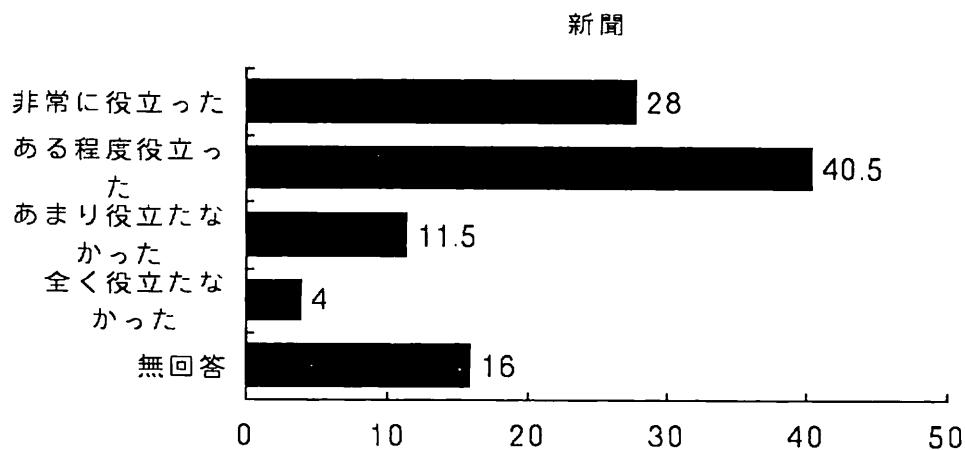
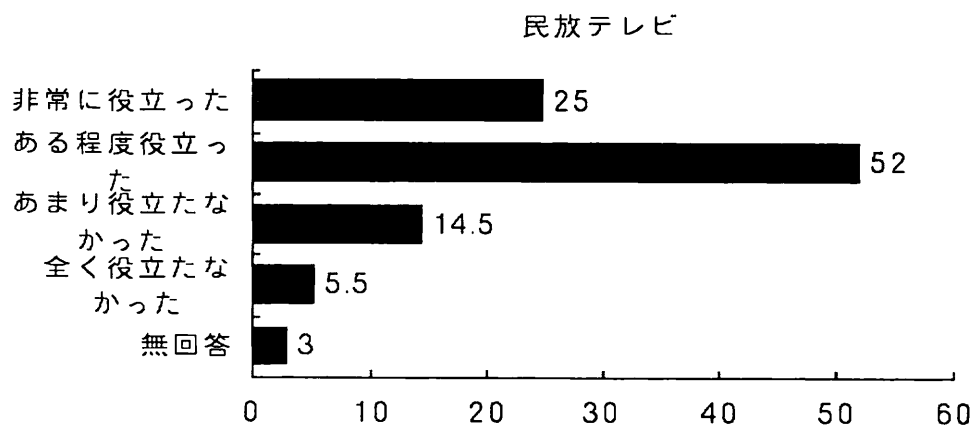
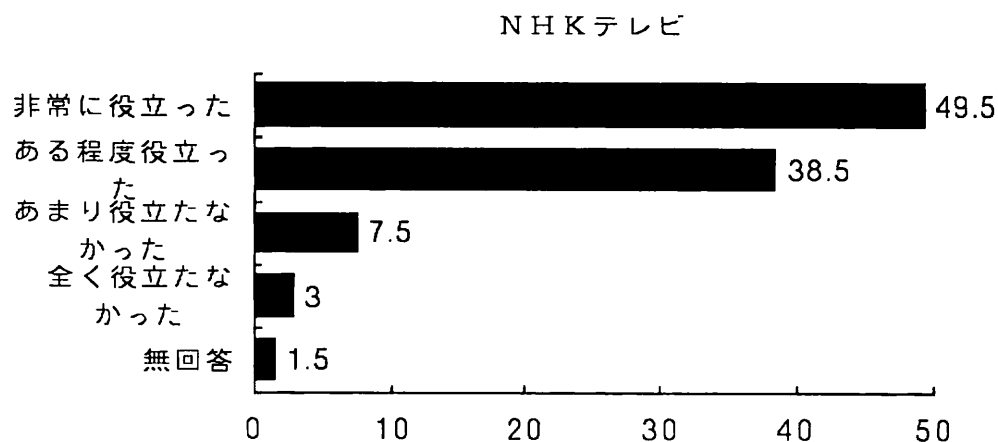
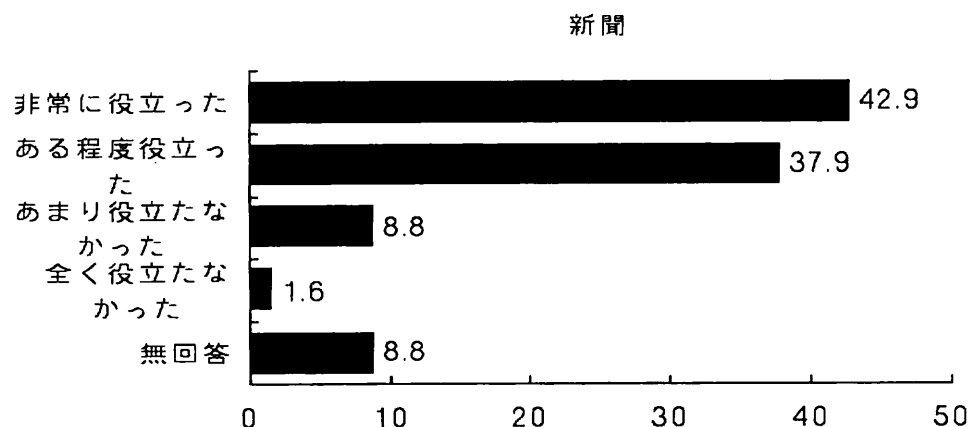
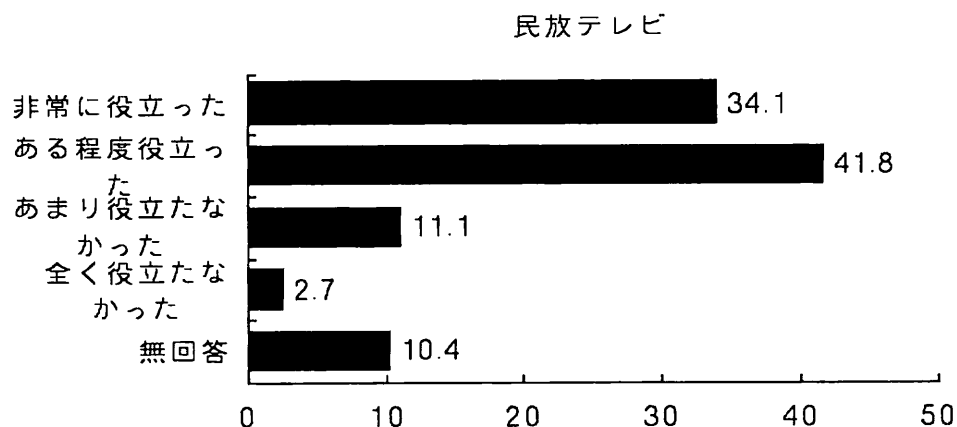
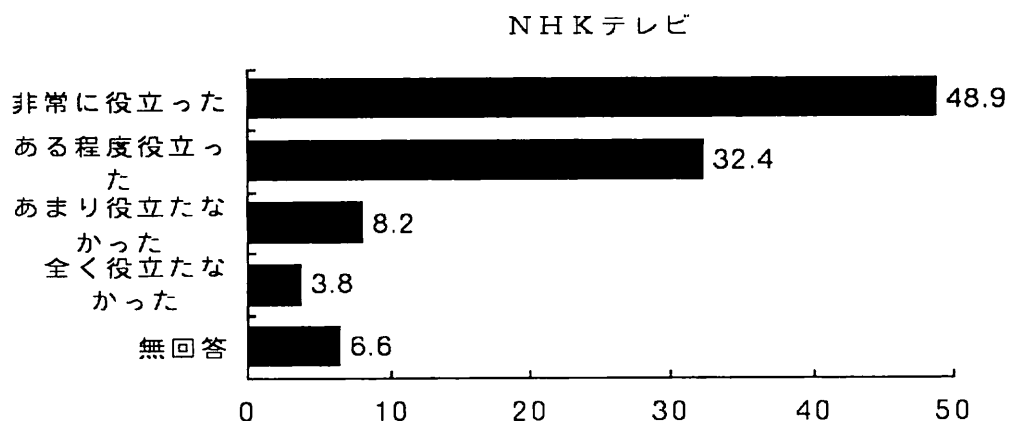


図18. 災害報道においてマスコミは役立ったか（島牧村 N=182人）



また、そのマスコミの「取材態度」に関する質問では、「たいへんよかった」という人が大成町56.5%、島牧村54.2%、「まあ普通だった」が大成町43.5%、島牧村41.7%という結果で、「態度が悪い」という回答はゼロであったのに対し、奥尻町では、「やや感じが悪かった」と回答した人が、7.4%もいた。これは、奥尻島への取材集中がもたらしたマイナス面の結果の反映であろう（図19）。

表17. 今回の災害で、マスコミに取材を受けたか（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
自分自身が取材された	23	11.5
自分は取材されなかったが、家族が取材された	5	2.5
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのをみたことがある	56	28.0
取材された経験もないし、取材のシーンを見たこともない	113	56.5
その他	2	1.0
無回答	1	0.5

	N	%
自分自身が取材された	24	13.2
自分は取材されなかったが、家族が取材された	7	3.8
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのをみたことがある	52	28.6
取材された経験もないし、取材のシーンを見たこともない	78	42.9
その他	7	3.8
無回答	14	7.7

次に「報道の伝え方」であるが、奥尻町においては「適切に伝えていた」と答えた人が65.7%、「実際はもっと悲惨なのにそれを十分に伝えていなかった」と答えた人が21.1%という結果に対し、「適切に伝えていた」と答えた人が大成町50.5%、島牧村で41.8%。「実際はもっと悲惨なのにそれを十分に伝えていなかった」と答えた人が大成町44.0%、島牧村41.8%と、「実際はもっと悲惨なのにそれを十分に伝えていなかった」という回答は、大成町が奥尻町の2倍強であった。これも、奥

図19. 取材態度はどうだったか（上；大成町 N=23人 下；島牧村 N=24人）

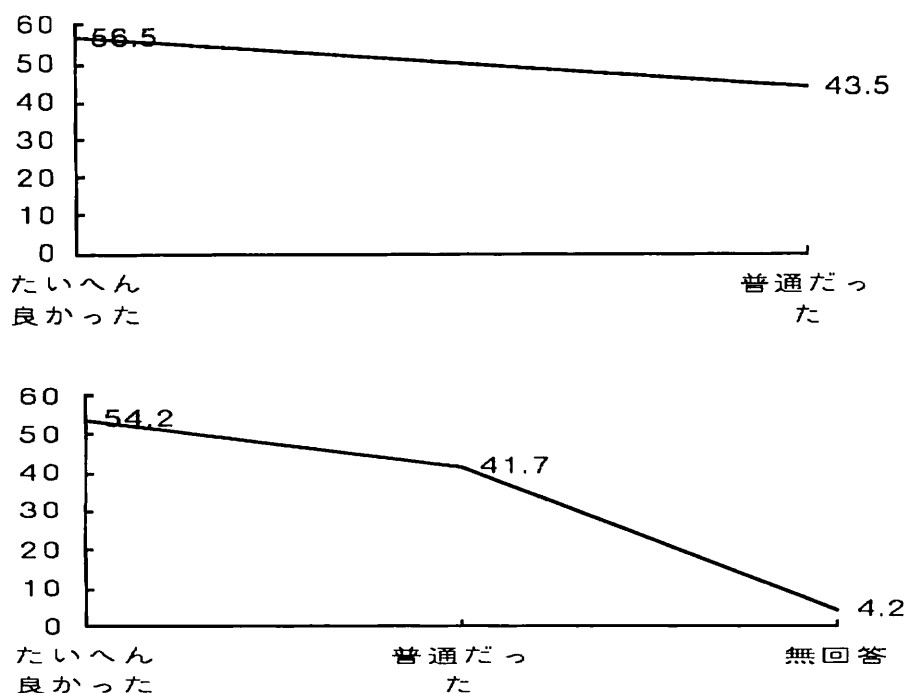


表18. テレビや新聞で被害の実態をどう伝えたか（上；大成町 N=200人 下；島牧村 N=182人）

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	4	2.0
適切に伝えていた	101	50.5
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	88	44.0
その他	5	2.5
無回答	2	1.0

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	3	1.6
適切に伝えていた	76	41.8
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	75	41.2
その他	9	4.9
無回答	19	10.4

尻町ばかりに取材が集中したことの結果の反映であり、マスコミがあまり取りあげなかった大成町の住民の不満といえるのではないだろうか（表18）。

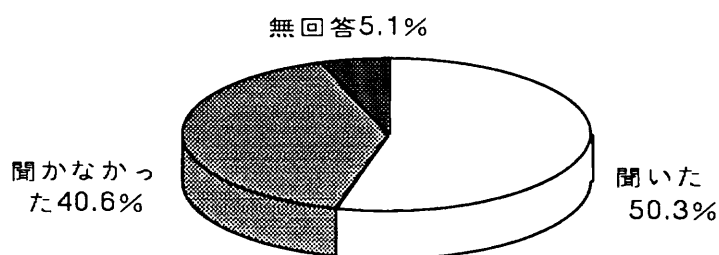
8. 大津波来襲のうわさ

今回の災害では、大災害からほぼ1週間後の7月18日夜、渡島半島の桧山支庁管内の熊石町と乙部町において、「また津波が来る」といううわさがどこからともなく発生し、これを信じた80人ほどの住民が、手に手に荷物をもって高台に避難し、そのまま高台で一夜を明かしたという出来事があった。その経緯については、4章でくわしく述べたが、ここでは、このとき人々がその流言に対して何を感じ、どう行動したかをみておく。

まず、7月18日夜、熊石町と乙部町において広がった流言からみていこう。前にも延べたように、筆者らは、熊石町民に対してアンケート調査を実施した。

その結果を以下に紹介すると、この夜、「また大津波が来る」という話を聞いた人は、54.3%と半数以上にのぼっていた（図20）。

図20. 「また大津波が来る」という話を聞いたか（熊石町 N=352人）



次に、こうした話をだれから聞いたかたずねたところ、「近所の人から」聞いたという人が圧倒的に多く71.2%を占め、以下、「親戚・知人から」（24.6%）、「職場の人から」（18.8%）と続いていた（表19）。通例のことであるが、この流言が、身近な人たちのパーソナル・コミュニケーション・ネットワークを通じて広がったことがわかる。

さらに、人々がこの話を聞いてどう思ったかについては、「大津波が本当に来ると思った」という人はさすがに少なく、9.9%にすぎなかったが、「ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った」人は、52.9%と過半数にのぼっていた（図21）。

表 19. 大津波が来るという話をだれから聞いたか (熊石町 N=191人)

	N	%
家族から	18	9.4
近所の人から	136	71.2
親戚、知人から	47	24.6
職場の人から	36	18.8
警察や消防から	1	0.5
報道関係者から	8	4.2
その他	5	2.6
無回答	3	1.6

図 21. 本当に大津波が来ると思ったか (熊石町 N=191人)

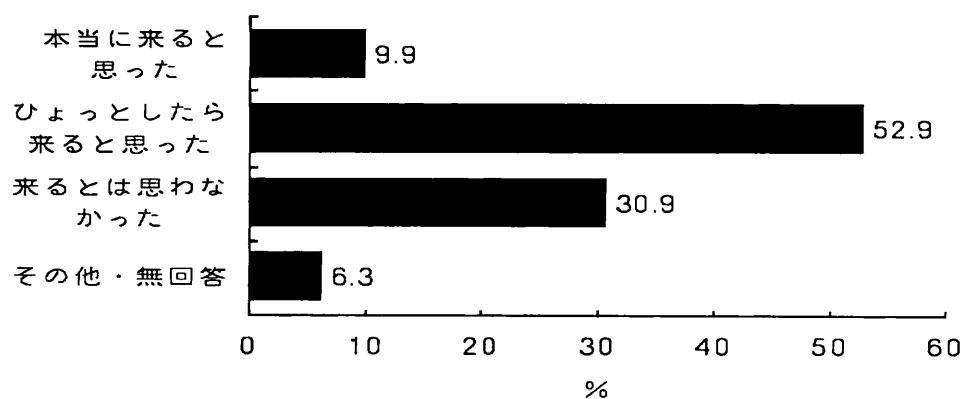
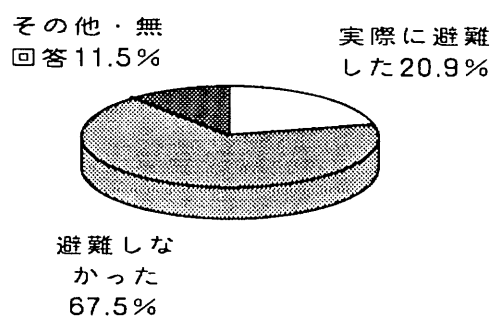


図 22. 大津波が来ると聞いて避難したか (熊石町 N=191人)



大津波再来流言に対する住民の信頼度は、相当に高かったといえよう。

そして最後に、この話を聞いた人たちがどう行動したかをみると、「実際に避難した」という人が20.9%、「避難しなかった」人が67.5%となっており、5人に1人が避難した計算になる（図22）。またこのほか、避難はしなかったが避難の準備をした人が5%程度あった。避難率はかなり高かったことになるが、これも、人々の不安の大きさを反映した結果と思われる。

9. 防災ボランティア活動

最後に、防災ボランティア活動についての質問に触れる。奥尻町には、災害直後から赤十字や宗教団体などのボランティア団体やそうした団体には属さない多くの個人が訪れ、さまざまなボランティア活動を行なった。そしてそれは、被災した奥尻町の多くの住民から感謝され、また高く評価されている。

しかし、大成町や島牧村の住民の回答をみると、まったくちがった側面がうかがえる。つまり、奥尻町とちがって、渡島半島ではボランティア活動はあまり活発には行なわれなかったのである。

まず、調査対象者に対し、どのようなボランティア活動を受けたかをたずねると、「自宅周辺のあとかたづけ」が大成町7.0%、島牧村21.4%、また「義援物資の仕分け・運搬」が大成町5.5%、島牧村31.3%など、多少はボランティア活動が行なわれているが、この数字は、奥尻町の「義援物資の仕分け・運搬」（66.2%）、「けがや病気の手当」（48.0%）、「炊事・洗濯の手伝い」（38.7%）などと比較すると、かなり少ない。とくに大成町の数字が低いのにいささか驚く（表20）。

しかし一方、ボランティア活動に対する住民の評価は、「ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う」という人が大成町で74.0%、島牧村で71.4%もあり、だいたい4人に3人がボランティア活動を高く評価している。また一般的にも、ボランティアが「個人・団体を問わず絶対必要だと思う」人が大成町で79.5%、島牧村で61.5%にのぼっているが、この数字は奥尻町に匹敵するものでもある（図23、図24）。

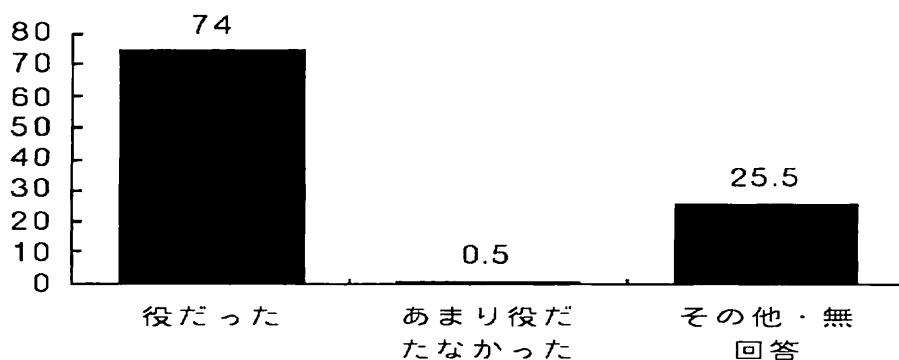
つまり、渡島半島には少数のボランティアが訪れ、その活動が高く評価されているといえよう。あるいは逆に、多くの住民がボランティアを評価しその必要性を認識しているのに、ボランティアの活動はあまり活発でなかったというべきかもしれない。なぜ、奥尻町と大成町でボランティア活動にこんなに差が出てしまったのかは明白であろう。それは、マスコミ取材についての分析でも述べたように、今回の災害では奥尻町の被害があまりにも甚大だったため、マスコミの関心が奥尻町に集中し、その結果、かなりの被害が出ているにもかかわらず、それ以外の地域への関心が相対的に低くなってしまったためである。奥尻町の報道が突出し、その惨害が番組や紙面を埋めたため、ボランティアの関心も奥尻町に集中してしまった。たしかに、奥尻町の被害は深刻であり、ボラ

表20. どんなボランティア活動を受けたか（前；大成町 N=200人 後；島牧村 N=182人）

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	14	7.0
けがや病気の手当	1	0.5
炊事・洗濯の手伝い	9	4.5
義援物資の仕分け・運搬	11	5.5
宅配便関係	1	0.5
掃除	6	3.0
引っ越しの手伝い	7	3.5
話し相手	4	2.0
その他	3	1.5
無回答	174	87.0

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	39	21.4
けがや病気の手当	4	2.2
炊事・洗濯の手伝い	8	4.4
義援物資の仕分け・運搬	57	31.3
宅配便関係	2	1.1
掃除	17	9.3
引っ越しの手伝い	7	3.8
話し相手	6	3.3
その他	23	12.6
無回答	78	42.9

図23. 防災ボランティア活動に対する評価（大成町 N=200人）



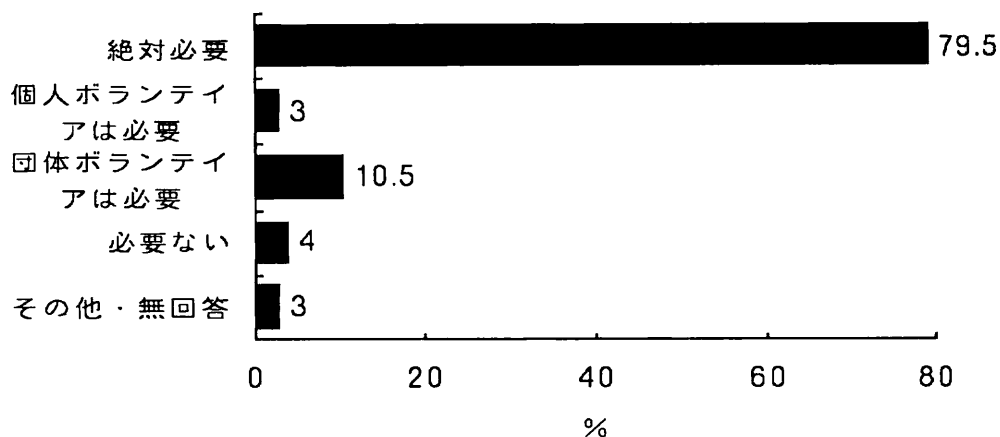
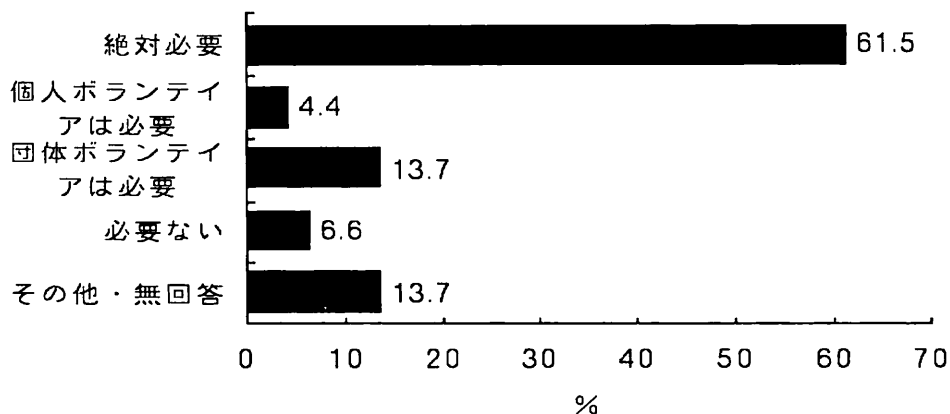
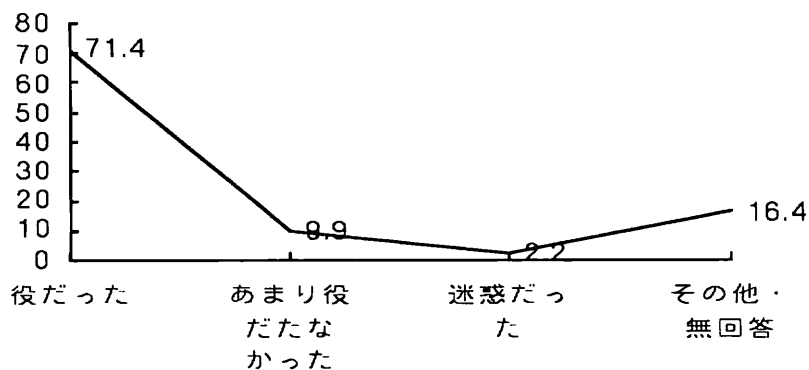


図24. 防災ボランティア活動に対する評価（島牧村 N=182人）



ンティア活動が積極的に行なわれることは望ましいにちがいない。しかし、他方では奥尻町に義援金や義援物資が集中し、その管理に大変だったという話もある。今後は、被災地域全体にバランスよく援助の手をのばすような仕組みをボランティア活動にも導入する必要があると思われる。

付属資料

- 1－1；奥尻町役場聞き取り抜粋
- 1－2；瀬棚町役場聞き取り抜粋
- 1－3；大成町役場聞き取り抜粋

- 2－1；奥尻町聞き取り調査抜粋
- 2－2；瀬棚町聞き取り調査抜粋

- 3－1；北海道南西沖地震に関するアンケート調査（奥尻町）
- 3－2；北海道南西沖地震に関するアンケート調査（大成町）
- 3－3；北海道南西沖地震に関するアンケート調査（島牧村）
- 3－4；北海道南西沖地震に関するアンケート調査（熊石町）

付属資料 1－1

奥尻町役場聞き取り抜粋（1993年8月17日）

Q；わたしどもは、自然災害が起こったときの人間の心理とか行動とかの調査を続けてまして、で、今回も大変な災害で、それこそ津波の被害としては60年ぶりの大災害ということで。で、この地震と津波のときに住民の方が、どういうふうに行動したのか調査をさせて頂いているんですが、で、最終的には報告書にまとめようと考えておりますが、それで住民の方にも津波が襲ってきたときの様子をいろいろとお聞きしているんですが。今回おじゃましましたのは、とくに災害直後の奥尻町の対応ですね、とくに津波警報をどこから受けてどういうふうに住民にお伝えになったのか、そのあたりをお聞きしたいと思ひまして。

A；わたしは日頃防災担当ということで、緊急患者なんかが出た場合にヘリコプターに乗せるなどの係なもんですから、メモを取るのが慣れてまして、当時一応メモは取ったんですよ。それだから、これを見れば何かわかるかもしれないですね。

Q；メモの差し支えない部分をコピーさせて頂いていいでしょうか。

A；後じゃあ。

Q；お願いします。それで、奥尻町さんの場合は企画振興課が防災担当ですか。

A；そうです。

Q；で、当日は夜10時過ぎの地震なわけですけども、津波警報はどういうふうに流れてきたんですか。

A；津波警報ですね。あの22時17分頃に地震があったので、すぐここに走り込みまして、地震の発生があったよということで、津波のおそれもあるので避難せよということは防災無線で流しました。

Q；なるほど。それが20分頃ですね。

A；そうです、20分頃です。その後、テレビで津波警報を確認しましたので、すぐまた防災無線で一斉指令かけて避難命令。だいたい31－2分頃と思います。しかしどうかね。これも1分や2分はズレがあると思うんですよ。

Q；津波警報が出たのは22分ですよ。そうすると31分てのは時間的にかなりたってますよね。

A；そうですね。ただテレビで確認してから、こちらではもう警報についての放送はやはり31分。これ早いかわかりませんが遅いかわかりませんが、その前に、一報を20分くらいに。

Q；同報無線で。

A；前の中部地震の例もありますけれども、津波の発生があるからとにかく避難して下さいよ、という放送は流してありますね。

Q；それは独自の判断ですね。

A；はい、防災担当者の判断です。まあ、一報はわたしが流したんですけどもね。防災無線でね。

Q；やっぱりそのときは、もうこんな地震ならば津波が来る可能性が高いと。

A；ええ、もう当然それは予測されました。前の中部地震と比較して。もうかなりのものが来るだろうという気がしましたね。

Q；で、そのときは電気は通じていたんですか。

A；電気は、地震直後は消えました。消えまして、そしていい案配に役場を含めてこの一角のみが数分だか何秒かくらい前に電気がついたんですよ。それで役場の庁舎内のいろいろな作業が出来たと。

Q；消えていた時間はほんの数分ですか。

A；ちょっと定かじゃないんですけども。1分半までは消えてなかったと。北電さんの方に聞けばわかるんですけども。

Q；一瞬でまたついたわけですか。

A；ええ。

Q；そうしたらテレビも見られたというわけですね。

A；ええ、そうです。

Q；地震で、この庁舎内もバラバラといろんなものが落ちたりとか。

A；まだ地震がおさまらないうちにものが崩れてきたんですけどね、もうメチャクチャでしたよ。それと一番大変だったのは防災無線の放送室だったんですけども。

Q；ここですか。

A；ここでロッカーとかダンボールなんか、いろいろなものが落ちちゃって、それを取り除くのにも大変でしたよ。放送する椅子に座るまでも大変で。それが、電気がついたり消えたりという感じだったもんで。

Q；なるほど。で、防災無線の放送は、ここで放送なさった音声は、パンザマストとか戸別受信機からでたんですか。

A；それはいろいろなんです。放送した時点で、青苗地区のほうなんですけれども、あそこでは鳴ったところと鳴らないところがあった。上のほうでは鳴ってるんですけども、下のほうではもうそんなの鳴らなかったということなんです。上のほうの人は聞いてるんですけどね。ですから、地震と同時に壊れたものか、それともこちらが放送しているときに、もう津波が来てしまったものか、これは定かでないんです。

Q；郵政省の報告書を見ますと、戸別受信機は津波にさらわれていてダメだと、それからパンザマストのほうも、稲穂なんかは津波の被害で駄目になっちゃったと。

A；そう。ですから、津波の警報をわれわれが流した時点にもう、向こうは津波が襲ってきてるんじゃないかと思うんですよ。

Q；で、その同報無線の放送出力の記録は残ってるはずですよ。

A；記録は残らないんですよ。

Q；なるほどね。そうするとその最初の放送を正確にいうと、「地震がありましたから津波にご注意ください」という形でしたか。

A；そうですね。「ただいま地震の発生がありました」と。ただいま地震の発生がありました。津波の恐れがありますので避難して下さい。これを2回か3回繰り返しましたね。それからすぐ、わたしは広報車でとりあえず市内だけ回ったんです。で、ずっ

と回ればよかったんですけども、ちょっと危険度が高いということで引き返してきました。

Q；そうしますと、NHKのテレビで津波警報を知って、その後30何分かに放送なされたということですね。新聞記事を見ますと、NTTから津波警報を受け取って、同報無線で放送したという記事があったんですよ。それは違いますか。

A；それは違います。テレビです。テレビで確認してからの放送です。

Q；で、その後もいろいろなところから津波警報が流れてきたんですか。

A；まずはこの放送局から流しまして、それとこの状態がややもすれば破損して放送されてない場合困るということで、もう1人消防へ駆け込みまして、消防からも流しました。

Q；消防でも。

A；消防でもこれと同じ設備です。

Q；なるほど。それからもう1つ確認したいんですけど、これも何かの新聞だと思うんですが、当初、同報無線が故障して声がでなかったっていうんですが。

A；そうですね。実は町長もそういうふうな答弁してるんですけども、現実にはちゃんと聞いている人もいますから、放送されてますね。

Q；そうするとこの記事は、たとえばさっき青苗で聞こえなかった人がいたというようなところからきたんでしょうか。

A；そうですね。青苗なんか、地震が来て逃げるときにはもう防災無線なんかどうだかわからなかったと。おそらくそうだと思うし、僕も、今回の防災無線に関しては戸別についている受信機がありますね、あれについてはおそらく誰も聞けなかったと思いますよ。揺れた瞬間に、みんな家から飛び出してますからね。

Q；戸別受信機はおそらく無理でしょうね。

A；ですから、最後は屋外にある放送施設を。

Q；あの放送は、音がちょっと割れますよね。けども、わたしが三宅島や大島にお邪魔して聞いたのにくらべるとかなりよく聞こえます、この同報無線は。音量が大きいて感じですね。で、最初に津波警報を知ったのはテレビっておしゃいましたけれども、その後も自治体経由とか、警察経由とか入ってきますよね。それはわかりますか、何時にどこからきたかっていうことは。

A；それは、正確にメモしてるのは支庁一斉指令は23時10分なんですよ。このほかにも入ってきてると思うんですけどね。桧山支庁から入ってきている。支庁一斉指令で入ってきてるのは、23時10分に記録してます。この前にも入っているかもしれないんですよ。ただわたしが確認したのはこれということで、メモは取ったんです。

Q；支庁からきたのは無線で来たんですか。

A；防災無線で、23時10分と23時15分にも入っていますね。

Q；気象台からは。

A；気象台からも入ったと思うんですけども、メモしてないんですよ。入ってると思いますよ。まあ一番初めに入ってくるのが気象台。それから桧山支庁、奥尻町っていう流れになっているんですけどもね。

Q；じゃあ、無線はうまく動いていたってことですね。

A；そうですね。ただ、壊されたり、損害しちゃってる場所については定かじゃないんですけれども。

Q；それから発災直後ですね、いろいろ情報を収集しなければいけないということがあると思うんですけれども、そういう面での障害については。

A；それについては、いい案配にうちの無線ですけれども、移動用の携帯用ですけれども、青苗の消防署に一基預かってあったんですよ。それをうちの職員がとりにいって、向こうで使ってくれましてね。それで、青苗地区の被害状況はその無線とうちらのやつとで、やり取りした。

Q；青苗の消防署の無線を、市の職員が借りて。

A；青苗消防署にうちのやつを預けておいたんです、非常用に。それをうちの職員が取りに行って、こちらと通信できたと。それと、ミヤツ方面にもやはりそれが一基ありまして、ところがもう奥尻から寸断されて。で、それも町の職員がたまたまそこに住んでましたんで、それを利用してうちと交流をしたと。それで、だいたいそれぞれの地域の被害状況は把握できた。

Q；それからテレビを見てると、町長さんとテレビ局がずっと電話でつないでやってましたけれども、まあ、それで電話が一本こう、向こう岸とはふさがっちゃうんですけど、そういう意味での迷惑みたいなものはありましたか。

A；いや、そのへんについてはちょっと（苦笑）。

Q；コメントできませんよね、それは。

A；電話はうちは5本くらい入ってるんですが。

Q；電話はほとんど通じない状態ですか。

A；電話はパニック状態でしたね。。ですからこちらから入れるのにも空くの待って素早くボンってやるんじゃないかと。ですから、向こうからの電話はほとんどつながらなかったですよ。

Q；じゃあ、こちらからも当日はかかりにくい状況だったんですか。

A；そうです。

Q；NTTに聞いたら当日はそうでもなかったなんて話をされていて、あれっと思ったんですけれども。

A；いやあ、かかりずらかったですよ。

Q；ここには災害時優先電話は入ってないんですよね。

A；入ってない。NTTさんもいち早く緊急なものはやってくれましたよ。船舶電話みたいなのはすぐしてくれましたね。

Q；で、12日は市内もかかりにくかったんですか、島内も。もちろん青苗なんかは切れちゃってるからかからないっていうのはあるんですけれども。本来かかるところでかからないっていうのもありましたか。たとえば消防署とか。

A；一般住宅では、ほとんど電話はつながらないというふうな感じだったらしいですよ。ですから、NTTさんについても公の施設の電話を緊急性があるということで、いち早くつけたと。そんなところだと思いますね。ずいぶん助かりました。

Q；地震発生当時には、この役場には誰か宿直の方はいらっしゃったんですか？

A；おりましたよ。委託している業者の方ですけれどね、1人。

Q；で地震があった後、どれくらいの方が出勤なさったんですか。

A；地震があつて、すぐとりあえず集まったのは10人くらいかねえ、町長もすぐ来たんですけれど。町長がきて対策本部を設置したのが22時50分ですね。22時50分に災害対策本部を設置しています。そして、防災無線で町の職員には緊急出動命令をかけてますから。

Q；この役場にはだいたいどれくらいの方がいらっしゃるんですか、職員の方は。

A；庁舎内だけで5、60人くらいですかね。で、集まってきたのが約30人くらいですね。まあ、この地区の人が集まっただけですから。あとは道路が寸断されてますから、集まってこれなかった人もいるし。

Q；援助物資は？

A；ああ、援助物資ね。援助物資が一番早く入ってきたのは巡視船です。海上保安庁の巡視船で入ってきていますね。まあ、水なんかもそうですけれども。

Q；その仕分けは職員の方がやってるんですか。

A；仕分けはとりあえず職員だけでやってましたけれども、いまはいろいろなボランティアの方や、他の町村に置いてあるものは、他の町村の方にやってもらっていると。他の町村で、一時倉庫とか体育館とかの集会施設を借りて置かせてもらって、で、まあ町の職員なんかの人なんですけれども、仕分けしてくれてるんですよ。もうこっちへ入って持ってきてても入れるところがないですからね。いまは学校の体育館なんかもほとんど避難所になって使われていますから。ということで、緊急に必要なものだけはいれてもらっていると。

Q；先ほどの同報無線に話に戻りますけれども、もう相当戸別受信機も屋外拡声方式のパンザマストも痛んでますんで、おそらくこれから復旧というか、修復が必要ですね。

A；ええ。いまはとりあえず応急修理は済ませました。まあ戸別のものは無理ですけれども屋外のパンザマストなんかは立てまして、仮設住宅の人には放送が伝わるようにしました。

Q；それで、静岡の焼津なんかはやってるんですけれども、同報無線の自動放送ってのがあるんですよ。つまり震度5とか震度6とかの揺れがあつて、それが収まると2分後に自動的に放送されるんです。例えば大きな地震があつたから津波に気を付けなさいとか。今回の奥尻ではたまたま職員が近くにいらしたから放送できたと。だけれどもそうじゃないケースのことも考えられますよね。

A；そういうのがあるといいですね。

Q；ええ。お宅の同報無線は何年に入れてるんですか？

A；54年。

Q；54年ですか。そうするとそんなに新しくないですね。でも、今度どうせシステムをかなり資金を出して修復するときに、自動放送システムをぜひ入れたらいいんじゃないですかねえ。

A；そうですね、そういうのがあるといいと思いますね。こういうのがあるのも知らな

かったし。大雨なんかに関しての警報は、ある程度時間があってガケ崩れがあるということですから、正確に知らせることが出来るんですけどもね。この地震についてはもう、放送したって家から飛び出していないと。これは何か対策を考えないといけないと思ってるんですけどね。

Q；それからもう一問よろしいでしょうか。災害の後にまた大津波が来るという噂がひろがりましたですね。あれは、やっぱり奥尻では大騒ぎになりましたですか？

A；それはですね、震度4でかなり揺れたんですけども、うちらだけなんですよ。ここで揺れて、ここに地震計がついてますからね。で、こんなに揺れたってことでみなさんは津波がくるだろうと指摘もし、避難もしました。やっぱりテレビなんかもわれわれはすぐもう見たんですよ。おそらくこれはもう津波の注意報なり警報なりが入るだろうということで、見てただけで一向に入ってこない。どうしたんだっていうことで気象台のほうに問い合わせたら、気象台のほうでもNHKさんに情報を流してないんですよ。で、なんで流さなかったのかと聞くと、他のほうが揺れてないと。奥尻だけが揺れたと。ということで、それと、わたしは専門家じゃないですけども、津波の発生する恐れはないということらしいんですよ。ですけども、われわれにしてみれば、あんなに揺れるんですから、当然もう津波が来るだろうと。ということで、われわれは逃げるわけにいかないですからね。入ったらすぐ防災無線で順に指示することでおりましたから、たまたま入ってこなかった。問い合わせたらそういうことだった。

Q；そうですねえ。結局、津波なしという情報を流してくれればよかったんですけどね。

A；そうなんです、その後の対応は良くなりましたけれどもね。2でも3でも出れば、ただいま地震がありましたと。津波の恐れはありませんとかっていう感じでテレビの片隅にパパッと書いてくれますからね。その後は大変良くなりましたよ。

Q；そういうときには、函館の海洋気象台に問い合わせるんですか。

A；はい。うちらは桧山支庁を通して、支庁から行きますね。だから、うちらに入ってくる予警報は気象台から桧山支庁に入って、それから流れてきます。

Q；で、津波警報はNHKの他にも警察からくるルートとかありますよね。NTTから来るとか。そういうところはちゃんと来たんですか。

A；それは確認してないんですよ。まあ、僕らは出て歩いてましたし、誰かがそういう電話を受けてると思うんですけどね。そんなふうになってますから、時間が早いかな遅いかで、入っていると思いますよ。

Q；そうすると、何時何分に受け取ったという記録は少なくともないと。

A；そうです。それはないんですよ。

Q；やっぱり23時10分に桧山支庁から入ったという記録があるということで、で、そういう防災無線の受診記録もありますか？

A；それはたぶんあるんですよ。録音されるようになってますから、テープで。

Q；こんな大騒ぎのときは無理もないかもしれませんが、同報無線は放送記録の作成義務がありますよね。

A；そうですね。実は放送するさいには原稿をキチっと作ってとじとくんですけれども、これについてはもう緊急だということで。ですから、放送文もその場で放送するものを頭でこう描きながらやると。

Q；まあ、いたしかたないですね。

A；本来の放送ですと、原稿を書いて理事者の決済を得ながらやってますけどね。このたびに關していえば、そんな時間なんかありませんし。

Q；町の防災担当部局として、要するに警報が届かないうちに津波が来るという大変な事態がおきちゃったわけですけど。

A；全く予想もしなかったですね。前に中部地震のときにも大体30分くらいだったと思うんですよ、津波が来たのはね。そういう感覚もありますから、あっ地震が来たと。で、津波がすぐ1分から2分で来るだろうなんて予測は全くわたし自身もしてなかったですね。ただ、地震の大きさからいって、かなり大きい津波が予測されるなということはありませんでしたがね。まさか地震がきてすぐに放送している最中にもう津波が来襲してるなんて考えられなかったですね。

Q；ふだんは平常時から何か住民に対して防災の啓蒙みたいな活動はやってるんですか？

A；本来ですと、津波や地震を想定した避難訓練なんかをやらなきゃならなかったんですけど、ここしばらくやってないんですよ。中部地震のあった頃1、2年は、いちおう地域を指定して避難訓練なんかやりましたけれどもね。まその後ずっとやってるっていうのは通信訓練、防災無線を使いまして通信訓練はやってたんですよ。

Q；たとえば、青苗地区にある防潮堤は4メートルですか、4.5メートルですか。で、大津波の警報は3メートル以上の津波が来るってやつですよ。ところが防潮堤は4メートル、5メートルあるから、3メートルの津波が来ても大丈夫だと。3メートル以上ってのは理論的にいえば、10メートルだって20メートルだって3メートル以上ですよ。けどもわれわれが受け取るときに3メートル以上っていうと、3メートルか4メートルというふうに受け取りますよね。で、防潮堤があんなにあるから大丈夫だというふうな、防潮堤への過信っていうか、大津波警報に対する過小評価っていうか、そういうのがあったんじゃないかという気がするんですが。

A；それも地域の住民に聞いてみなければわかんないけれども、そういう過信をしてゆっくりした人が危うく難を逃れて助かったっていう人もいれば、津波に吞まれた人もいますしね。けども、われわれもこんなでっかい津波があるなんて思わない。せいぜい防潮堤から波がチョロチョロはいるくらいの大きさで最高の津波だろうと。いや、相当なものは来るだろうということは、中部地震のときの地震の揺れ方も直接に体験してますけれども、それと比較しても何倍もという感じで、ヘタすると何十倍も揺れたなという感じがしましたからね。

Q；当日は大混乱したと思いますけれども、被害情報が一番先に入ってくるのはやっぱり洋々荘の被害ですか。

A；そうです。洋々荘が一番早かったですね。わたしも広報車で避難命令を出しながら回って歩いて、実際に洋々荘を確認してきました。

Q；青苗の火災が起こったのはいつごろですか？

A；青苗の火災が確認されたのは防災無線。移動型の防災無線で。23時53分に青苗
青苗が火災で、病院まで延焼中という連絡が入ってますね。

Q；青苗に支所はあるんですか。

A；ありません。いまここにいないけど、うちの職員がたまたま青苗から通ってるんで
すよ。それで彼が無線を消防まで取りに行って、彼が交信してくれて。

Q；そうすると、この移動形の無線は奥尻ではかなり通じるんですか。

A；ええ、通じます。

Q；不感地域なんてありませんか。

A；いくらかありますけど、ほとんど。

Q；そうですか。そうすると、これがかなり活躍したと。

A；ええ、活躍しましたね。だからこれについての整備も考えなければと思ってます。

Q；重要加入電話はどうでしたか。災害時優先電話は使いましたか？

A；そんなのは使わなかったですね。

Q；奥尻にはボランティアの関係の方々は、こういった方がお入りになられたんですか。
ちょっと聞きたいんですが。

A；団体で来ているのは宗教団体さんなんか多いですね。具体的にいうと天理教さんと
か立正佼正会さんとか、あとは大学、学校からのボランティアの方やら。

Q；大学はどんな。

A；京都の大学なんですけど、子供を先生が引き連れて14、5名で乗り込んで来て、
10日間くらいお手伝いしていた。

Q；天理教も来ましたか。

A；来ましたよ。天理教さんなんかも100人単位でヒノキシンっていうのがあるんで
すね。もう助かりました。いまは立正佼正会さんなんかもまだお手伝いしてくれてる
んですけれども、泊まる場所も炊事も自らやってくれましてね。

Q；具体的にはどんなことをやってるんですか。

A；立正佼正会さんですと、救援物資の仕分け、それから支給。ヒノキシンさんのほう
はガレキの処理やいろいろなことをやってくれましたね。あと、NTTさんと北海道
電力さんも10名ずつ交替で、いまもまだ来てますけどね。

Q；それはどんなことをやってるんですか。

A；救援物資の仕分けと支給ですね。

Q；いまは義援のお金なんかもずいぶん来てるんじゃないですか。義援金はどのくらい
来ましたか。

A；ちょっと額はつかんでないですけど、ずいぶん助かってますよ。

Q；大変なものですな。雲仙よりも多いうて話が。救援物資なんかもものすごいですね。
ただ、古着は処置に困りますよね。

A；ええ、それで一発やられましたんですけれども、仕わけしていたらジャージの穴の
空いたやつなんかどうしようもなく、ダンボールに入れて焼却炉で始末していたら、
たまたま見られましてね、新聞なんか載って書かれました。ところが、いくら言っ
てもダメですね。押さえてくれませんか。まあ、たしかに善意でよこしてくれてると

思うんですけど。

Q；こんなものが欲しいとか、そういう情報は、こっちからマスコミとかには言ったんですか。

A；要望はいちおう話しましたよ。「何か送りたいんですけれども」っていってくると、とりあえず生活ですね、たとえば頭を洗うシャンプーとか石鹸とか食器類とかね。

Q；どういう方法でそういう情報を外に出すんですか。

A；うちらから流さなくても入って来るんですよ。何か送りたいんですけれども必要なものはありますか、と。

Q；なるほど。下着類が、もちろん新しい下着ですけど、助かったって聞いたんですが。

A；そうですね。セシルさんっていう方なんですけれど、そこからやっぱり大量にありましたね。それについてもずいぶん助かりました。

Q；ほとんど着のみ着のままで来た人が多いですからね。あと、佐川急便でいろいろと配送して下さったと。

A；ええ、佐川急便さんもやってくれてますよ。

Q；これは無料で？

A；ええ、無料で。そういうのは、もちろん郵政さんもやってくれましたしね。郵政さんも無料で、佐川さん、黒ネコさんとか、それからまだあったと思いましたね。

Q；それで、こちらからあれを運んでくれと頼むんですか？

A；いや、自らただで運んであげますよーっというような感じで、どんどんどんどん運んでくれたんですよ。

Q；ただ、こちらにいらしたからにはその命令系統はこちらから下ろしたわけですよね、当然。

A；そうですね。仕事の内容についてはね。こういうことをお願いしますよって。

Q；ですけど、全くの素人さんっていうのは。

A；そういうのはあるんですけども、いちおういても泊まる場所もないんで、ある程度は戻っていったんですよ。それ以外で、自らテント張ってやるとか、御飯を自分で作るとか、それについては申し訳ないけどお願いしますと、そういう感じです。そういう方々についてはお願いしてお手伝い頂いてると。

Q；どうもありがとうございました。またお邪魔することがあるかと思いますが、よろしくお願いします。

付属資料 1－2

瀬棚町役場聞き取り抜粋（1993年8月19日）

Q；瀬棚町では、何人くらいお亡くなりになったんですか？

A；6名亡くなりまして、全員あがりましたけどね。それと、火災がなかったから、まあ不幸中の幸いということで。6名も死者を出したっていうことは、非常に痛ましい災害だったんですけど、手の打ちようがなかったというのが現状でございます。それで、今回の地震につきましては、10年前のあの日本海中部大地震、これが一つのいい経験になっているんですよ。といいますのは、当日は5月の26日ですね、このときにちょうど町長が東京へ出張してまして、たしか昼頃の地震だったですよ。

Q；そうです、12時00分です。

A；そうですね。それで、こっちの方は海岸線が多いもんですから、で、漁師が多いもんですから。それで、東京からすぐわたしのところに電話がありまして、「港からすぐ船を出せ」という指示がありまして、それで、港から当時船を全部沖へ出しましてね。それで、被害を逃れたと。まあ、一隻くらいはちょっと沈没した船もあったとは思いますがね。それでもそのくらいで済んだ。これが、町長からの指示の一番大きな経験で、で、避難した後に津波が当時どーっと入ってきて、もう港の中はもう海水も全然なくなっているような状態でございますんでね。そういうことで、その経験がわたしなりに生かされて。これが、わたしの自宅での記録なんですけれども。平成5年の7月12日、地震がきてすぐ、わたしは寢床に時計を置いてるもんですから、見たら17分か18分なんですね。で、わたしの家は消防のすぐそばなもんですから、ここから1分もかからないところにあるんですが、それで広報車を出して、そして住民に避難命令をかけて、で、一番被害の多い三本杉地区ですね、役場から三本杉まで車で行くっていても2分くらいで行ってしまう場所でございますので、で、すぐ避難命令を出したわけです。役場はもっとこっちにございますけれども、避難命令かけながら来たときにはこのへんはもう水が上がっているわけですよ。それで、水が引いているから、車で行こうとしたら、このへんで「もう一波来るぞ」ということで引き返して、町全体に避難命令を出しました。海岸には行けなかったわけです。おそらく海岸に行ったらわたしもやられていたと思いますけれども、そういうことで、PRを終わったのが10時34分なんですよ。避難PRしたのが。で、町だけで1060名が避難しました。

Q；避難所はだいたいどういうところなんですか？

A；瀬棚中学校の高台ですね。これは、町からちょっと高台にあるんですが、すぐそこですね。それと、青少年旅行村とあとは役場の2階ということで。4カ所ですか。で、海岸のほうはどうかといいますと、それぞれ高台に上がったたり、それから学校に避難したりということで、人数は確認しておりませんが、それぞれの避難はしてございました。

Q；そうすると、津波警報はどこから届いたんですか？

A；松山支庁から津波発信は、12日の22時30分なんですね。

Q；22時30分。ちょっと遅いですね、警報が出たのが22時22分ですよ。松山支庁から届くわけですか。

A；はい、22時30分に松山支庁からきております。

Q；でも、テレビは22時24分に放送してるんですけど、テレビはご覧になりましたですか？

A；いや、テレビは見てないです。もう、職員も全員出て対応しましたので、テレビは全然見るひまがなかったです。

Q；松山支庁からは行政無線で連絡があるんですか？

A；これは何で来たのかな？これはファックスで来たのかな？

Q；で、昨日から今日にかけて、この三本杉の人達の話聞いてきたんですが、津波というのはあんまり考えなかったと。おそらく日本海中部地震では、さっきおっしゃったような被害がほとんどなかったから、奥尻の人にもう地震があったらすぐ津波と思った人が多いんですけど。まあ、被害がなかったから津波が起こると考えなかったのかなという気がしていたんですが、役場としては即津波と思ったわけですね。

A；はい。やはり一般の方っていうのは。わたしどももこういう津波がくるとは想像してませんから、まあお年寄りの話を来きまして、こんな津波は今まで聞いたことないっていうんですから。ですから、おそらく地震には津波がつきものですけども、大なり小なりの津波はですね。ですけども、そういう経験がないもんですから、あるいは中には「津波がくるよ」という認識はなかったかもしれません。とにかく、津波がこの川を1キロ半くらい登っているんです。津波が押し寄せて来る、それから登った津波が下がる、で、これがこうぶつかってあふれたやつが堤防から市街地に被害を及ぼした。それと、この川の橋ですね、これが川底から欄干まで6メートルあるんです、高さが。その欄干に、2メートルの交通安全の旗がたってます。ですから最低でも8メートル。

Q；その交通安全の旗のところまでいっちゃったんですか？

A；いってるんです。それから、わたしどもはこの護岸がありますよね。この護岸までは5メートル80あるんですよ。それを乗り越えてきてるから、最低でも9メートルか10メートル。おそらく、この付近は9メートルから10メートルの津波があったと推測しているんですけどね。

Q；で、町としては第一波が何時ごろ、第二波が何時ごろとか、そういうのはつかえますか？

A；それはちょっとつかんでないです。

Q；第二波が一番強かったという話ですけども。

A；ええ。でも場所場所にもよるんですね。その場所場所によって、強かったところと弱かったところがあるんですね。

Q；そうすると、瀬棚町さんで、被害が大きかったのは三本杉と本浦ですか？

A；そうです。三本杉と本浦と。

Q；この死者6名の方も大体その辺りで亡くなっているんですか？

A；ええと、三本杉で3人。キャンプに来てた方と、それから漁師の方と、津波によって押し潰されて、その下で亡くなった方と3人です。それから、梅花都、いまは本浦といっていますが、ここで2人。こちらは、漁師の方が2人、これは船をこぎにいて流されてしまったと。

Q；そうすると、もう1人はどうですか？

A；もう1人は、中歌で魚釣りに行ったんじゃないかっていう方が。車の中に入って港の中で発見されたから、釣りに行ったんじゃないかっていう話なんですね。

Q；推測ですね。この重傷という方は、どういう方なんですか？

A；重傷は、津波によってぶつけられた方、ガラスで怪我された方、逃げようとして怪我された方、いろいろありますね。

Q；すると、この重傷・軽傷のほとんどが津波ですね、地震そのものではなくて。

A；津波です。

Q；さっきKさんという、この三本杉の顔を怪我した人にお会いしたんです。

A；この方は重傷。この方は、地震がきたもんですからすぐ外に出て、そしてガス栓を締め忘れたもんですから、またいったん中に入ったんですね、ガスを閉めるのに。そのときにもう津波がブーンと来て、家も波でもって流されましたから、その中で顔を切ったとか。で、水の中をかきわけて外に出てきたと。ですから、話を聞きますと、火災がなかったっていうのは、全部が全部じゃないと思いますけれども、これもやっぱり電気を消したり、ガスを止めたりという話は聞かされておりますけれども。

Q；火災については、相当に注意をしたということですね。こんなに瀬棚町さんが災害で被害があったのは初めてですか？

A；初めてです。

Q；「災害救助法」は適用されたんですか？

A；されました。

Q；今度は「激甚災害」がどうなるか。奥尻は、どうにかなるような感じですけどね。

A；そうですね、一番うちで大変なのが商工業者です。この方々が何も収入がございせんのでね、全然商店の売り上げっていうのがストップになっているんです。それと、今年はこういう冷夏ですから、それに合わせての被害ですから、大変な状態なんですよ。何とか「激甚災害」に指定して頂いて、復興をはかって行きたいなと。

Q；今年は、海水浴客はほとんど見ませんが、ふだんは賑わってるわけでしょう？

A；今が盛りですね。ですから、ここは8月に3000人くらいの旅行が予想されるんです。で、比較してみますと今年は200名ちょっとなんです、8月は。

Q；それはやっぱり地震の影響ですか？それとも冷夏の影響ですか？

A；地震でしょうね。というのは、もう奥尻ばかりじゃなくて、利尻、礼文あたりもキャンセルがあるっていいですからね、地震で。だから、日本海全体はもう地震ということで、かなりうちばかりじゃなくて大変なんじゃないですか。

Q；なるほど。瀬棚町さんの人口は何人くらいですか？

A；3123人です。

Q；それで、瀬棚町さんにはマスコミはずいぶん来ましたですか？奥尻あたりだと、もう傍若無人だといって、ずいぶん顰蹙をかってるんですが。

A；はい。まあ、災害が大きいのか小さいのかっていうだけの問題ですから、奥尻の場合は、当然大きなことになるだろうと考えますけれども、正直言いまして、もう地震と同時に電話が不通になりました。

Q；じゃあ、もう防災活動は電話の不通で相当に障害があった。

A；はい。NTTさんも一生懸命やってくれましたんですがねえ、もう夜中までやってくれましたけれども、なかなかやっぱり復旧のほうに行かれないわけですから。

Q；消防署長さんのお話ですと、国道が寸断されて一部地域が連絡が不能になったという話ですよ。

A；そうですそうです。50トンくらいのが落ちてまいりまして。

Q；その孤立したのは、地域はなんていう地域でしたか。

A；白岩です。

Q；それで、その消防署長さんの話ですと、白岩の町会議員さんが、「俺んところは、全然孤立してる」ということで、見捨てるのかと怒られたという話ですが。それで、どうなのでしょう？瀬棚町さんでは今回を契機に同報無線か何か、孤立地区と連絡できるような仕組みを作ろうとかいう計画はあるんですか？

A；ええ。これは、災害が起きる今年の当初予算に、それらも含めた調査をちょっとやってみようということで、先進地の視察職員の旅費を計上しましてね。下準備にかかろうかといったときに、この災害なんですね。

Q；先進地っていうのは、だいたいどのへんを考えていますか？

A；島牧。

Q；島牧はオフ・トークですよ。

A；ええ。防災無線はもう各省がやってますけども、これらも合わせていまいろんなものが出てますんで、いろんなものを調べてどれがいいのかを選定して、近い将来考えて見ると。

Q；そうすると、オフ・トークを入れるか同報無線を入れるか、そのへんもまだこれからということですね。

A；そうです。

Q；やっぱり孤立地域なんてことを考えると、そういう無線網が必要ですよ。奥尻さんは立派なのがあったんですけど、残念ながら津波で家が流されちゃって。戸別受信機も全世帯にあったんですけどね。

A；ですから、うちはあの津波がなければ、災害はほとんど皆無ですね。ということは、やっぱり地盤が良かったのかなあという感じは持ってますけども。

Q；地震の被害はほとんどないんですか？液状化以外は。

A；ええ、液状化と基礎に亀裂が入ったりですね、潰れたのも1軒あります。農家ですね。あとは、まあ皆無といっていいでしょうね。瀬棚町の場合は、それだけ地盤が良かったのかなあ。

Q；瀬棚町さんの主要産業っていうのはやっぱり漁業ですか？農業ですか？どっちです

か？

A；漁業ですね。漁業も最近大変なものですから、だいたい20億ちょっとの水揚げがあるんですが、最近ですと17、8億ですね。やっぱり200カイリって言葉は定着してますけれども、これからは養殖で「育てる漁業」ですね、これらに力を入れていこうということでいまはずっとやってきてるんですが、それにつきましても、全部もう今回の津波で流されてしまいましたのでね。

Q；災害の前に魚が採れるようになったとか、逆に採れなくなったとかそんな話がありますか？

A；そういう話はないんですけども、ネズミが非常に鳴いたって話はあるんですね。

Q；奥尻でもネズミがずいぶん出てきたっていうんですね。10年前の「日本海中部」のときも出てきたけど、今回も出てきたと。やっぱりネズミですか？ネズミがふだんは鳴かないのにチューチュー、チューチュー鳴くということですか？

A；はい。

Q；どうもありがとうございました。

付属資料 1－3

大成町役場聞き取り抜粋（1993年8月19日）

Q；わたしどもは、ここ十数年、地震とか台風とか噴火とか自然災害時の人間の心理と行動とか、あるいは災害が起こったとき災害情報がどういうふうに流れていったかというような調査をしているんですが、今回の北海道南西沖地震も、津波時の住民の方の行動と、津波警報がどう流れたかといったような観点から調査をしておりますで、で、奥尻さんとか瀬棚さんとかにいろいろお邪魔して話をお聞きしたんですが、本日は大成町さんに当時の被害の実態とか、あるいは津波警報をどこから受けて、住民にどういうふうに伝えたかとか、そのへんをおうかがいしたいと思ひまして。それで、まず被害ですが、人的被害が10人ですか？

A；そうですね。

Q；で、太田地区はちょっと拝見して来たんですが、この地区が一番死者が多いわけですね。

A；ええ、そうですね。

Q；どんな形で亡くなっているんでしょうか。死者の方は。

A；3名が海で発見されて、あとの5名が住家の側ということなんです。この図面見ていただくと、これが太田集落ですね。要する、これが道道なんですけれど、ここで行き止まりなんです。で、中に町道がありまして。で、こちらの町道のほうは、海側の道路よりも低いってことになってます。そして、こちらのほうから1名、これは子供1名なんですけれど、あとは大人の方なんです。まあ、こっちの方がちょっと低くて。なおかつ反対側のほうは山へ直接逃げられる道路があるんです。山道に上がるための道路があるんですよ、畑に行く。ところがこちらはない。それと、どちらもおそらく1波2波が来たときは、プールみたくなったと思うんですけど。で、こちらのほうがより長い時間になりやすいってことですね。

Q；そうすると避難が間に合わなかったという感じですかね。

A；そうですね。

Q；波はどっちから来るんですか？

A；役場のほうで住民の方にも聞いても、まあ全部の住民に聞いたわけではないんですけども、どちらから来たかって面についてわからないという人が多いんですよ。波がどちらから来たのか。で、これが平浜地区ですが、平浜は1名の方が亡くなっています。それで、その方は78才の方なんですけれども、この方は第1波が来たとき外に出たっていうことなんです。で、奥さんが裏口から出ようとしたときに波がきたと。その第1波がきたときは、旦那さんは生きていたんですよ。で、ちょっと笑ってたという話なんですけど。で、その後、これは誰も見ていないから想像なんですけれども、船を見に行っただけでないかっていう可能性もあるんですね。で、一緒に暮らしている奥さんは、1波が来て、玄関から出ようと思ったんだけど出なくて、流され

たんですけれど、まあ、家に押し戻された、茶の間に押し戻されたっていうことじゃないですか。その後まっすぐ山に逃げたっていうんですよ。だから、旦那さんは外にいたぶんだけ、まっすぐ逃げようとすれば奥さんより早く逃げれたわけですよ。そこが、逃げてなかったんじゃないかと。それとも、何かにはさまって動けなかったのかと。けども、それであればそのときに動けないという言葉が出ると思うんですよ。

Q；なるほど。で、この太田地区の地図で亡くなったお宅はどれでしょうか。

A；まずこの家なんですけど、ここはOさんっていう家なんですけど、5人家族で旦那さんは漁師でイカ釣りに行ってたんですね。だから中に4人残ってたんですよ。中に4人残ってて。このTさんはおばあちゃんが亡くなってる。おじいちゃんは、2階にいたって言うんですよ。2階にいたために助かってるんですよ。

Q；そうすると、2階までは波は来なかったというんですね。

A；ええ。幸いにして、家が半壊よりひどかったですけれども2階部分は残りましたんで。ですから助かったという。ただ、ここの家は奥さんと旦那さんですが、旦那さんが入院してて奥さん一人だったんですけれど、ここの家は全壊なんですよ。この奥さんと直接話したんですが、津波がきたときに自分は避難しなけりゃいけないと思って、2階に物をとりに行ったっていうんですよ。そのときに波がきて家が壊されたと。で、もうその後はどうなったかわからないと。で、とにかく家が動いている。家が道路沿いまで来たらしいんですよ。ただ2階にいてやっぱり助かってるんですよ。そうして、窓から屋根づたいに降りて、このプールみたいになったところを越えてこの小学校まで行ったっていうんですよ。このとなりの家ですね、亡くなったのは。で、ここに奥さんもいるんですよ、ここ2人なんで。奥さんはどうして助かったのかは聞いてないんですけど、このSさんっていう旦那さんは50何歳の方なんですけど、この人はどうして亡くなったのか、ちょっと見てないからわからないけれども、外に出た可能性もあるんですね。地震が来た後に。で、ここも全壊ですね。Nさんも全壊、ここも全壊。

Q；子供さんが亡くなったっていうのは・・・

A；子供さんが亡くなったのはこの家なんですけれども。ここは半壊なんですよ。こういう言い方は大変失礼なんですけれども、自宅の2階で子供さんが寝てたって言うんですよ。逃げ遅れてそのままずっといたならば、怪我程度ですんだかもしれない。でも、当然逃げますわね。そして、奥さんの話から想像すると、子供をかかえて道路に飛び出してから、波に持って行かれたと。で、そのとき自分はどういうふうになったかわからないと。抱きかかえていた子供がいなくなったと。

Q；そうすると、地震の後に津波が来るっていうことはあんまり予想していなかったんでしょうか。

A；そのへんはどうでしょうね。ただ、うちの方ではここにコミュニティセンターってのがありますよね。ここの消防無線を聞いたのか聞かなかったのか。

Q；はい、あれは受信機が水を被って放送されなかったようだと、津波で。消防署長さんの話ですとね。

A；ああそうですか。

Q；1階にあったんで、受信機がですね。

A；そうすれば、地震＝津波っていう意識はない方もいると思いますね。まあ、若い方はそうではないでしょうけれども。わたしの母親も白浜っていう被害を受けたところに近いんですけども、地震＝津波だと思わなかったと。ただ、嫁さんが津波が来るって言ったんで、ああ津波っていうふうに思ったって言ってますからね。

Q；じゃあ、お嫁さんはわかってたわけですね。

A；ええ、若い方はやはりわかってらっしゃいましたね。もう当方では、毎年1回災害対策のために広報を出すんですよ。その中に、例の10年前の日本海中部地震の地震の被害のことで、7分後に青森の海岸では来たって話を書いてですね。ただ、広報は出してるんですけど、ほとんどの方がそれを読むかっていったらちょっと難しいところなんですけどね。

Q；そうですね。10年前の日本海中部のときは、大成町さんは津波の実質的な被害はなかったんですか？

A；軽傷が2名いるんですよ。ところが住家被害がなかったんですよ。漁港の被害と漁船の被害はあったんです。で、軽傷も、船を助けにいく、そういうことでけがされたんですよ。

Q；瀬棚さんでは、船をあげにいったって亡くなっている方が何人かいると聞いてきたんですが、大成町さんではそういう方はいないんですか？

A；ええ、実際の話は、太田漁港からさらわれたって人はいないんですね。でも、地震＝津波っていうふうに思わなければ、例えばこの亡くなったAさんでも、船を助けに行った可能性もあるわけですよ。それと、イカツケに行ってお出でなくて、もっと早い時間であれば、昼の12時頃であれば、おそらく船を助けに行かれたと思いますね。そういう意味では、太田と瀬棚と、時間帯によってはどちらもそういう人的被害はあったかもしれません。

Q；そうすると、この方々が亡くならなかったのは、流されたけれども助けられたっていうんでしょうか。それともさっと避難してこの遠い道を避難して助かったっていう。

A；いや、おそらくほとんどの方は避難できなかったと思います。話から聞いても、5分程度で津波が来たって言ってますんで。まあ運良く助かったというふうに言ったほうがあってるかもしれませんね。第1波と第2波の間に逃げた方が多いんじゃないですか。

Q；第2波のほうはやっぱ大きかったわけですよ。

A；ただ、わたしは何せ対策本部の事務局勤めなんで、現実実際に町民と直接話す機会がずっとなかったんですよ。最近ようやく1人や2人にどうだったっていう話を聞くようになりまして。それで、この太田小学校にいるS先生っていう人が、ここは波が来ないですから、地震が終わった後に車で下りてったっていうんですよ。で、そのとき第1波の波と第2波の波とで、第1波のほう为上にあがったっていうんですよ。そういうことになる、第1波のほうが強かったかもしれないですね。

Q；第1波が5分後、第2波がどのくらいなんですか？

A；それがわからないんですよ。平浜地区のほうはくわしく聞いたんでわかりますけれ

ども。

Q；平浜はどうなんです？

A；平浜は、第1波が5分から10分以内って言ってるんですね。その方が。で、第1波と第2波の間は絶対5分以内、5分以内っていうか3分っていうのも含めて、5分は絶対かかっていないと自信を持って言ってましたね。その方は、地震が来たときにやはり懐中電灯を持って海を見に行ってる人なんですよ。で、海を見に行ったらもう水がなかったと。なくて、あ、これは津波来るぞって思って、まっすぐ山に逃げたと。まっすぐ最短距離で山に逃げたと。

Q；大成町さんの実際の被害は、太田と平浜だけですね？

A；いや、まだあります。ここは久遠なんですけれど、漁港がありますね。ここの漁港に止めていた車はみんな海の中に行きましてね。ここで1名亡くなってるんですよ。

Q；地震や津波で道路が不通になったとかいうことはなかったんですか？

A；道路は不通になったんですよ、実は。消防でもお聞きの通り、夜中の10時過ぎですね、広報車なり消防車なりも走ってたんですけど、途中で引き返してきた理由は道路が不通のために引き返してきてるんですよ。それと、波があがってるっていうことで。そしてその後、道路障害除去は一般住民がやってるんですよ。

Q；それで入れるようになったんですね。消防さんの話ですと、この太田地区の被害がなかなかつかめなかったと。現地に行けなかったからっていうお話しでした。警察が一番最初に入ったんですよ。

A；そうですね。ここにも警察関係が入ったってのが書いてありますけど。

Q；この大成町は、北桧山警察署なんですか。

A；そうです。

Q；1時30分頃太田着と。

A；そのとき、石を手作業でどけて行っただって言ってましたね。それは、直接行かれた署員の方が言ってましたね。

Q；なるほど。それと、町としては、津波警報は札幌管区气象台が22分に出したんですが、支庁より後日確認とあるところを見ますと、当日は来なかったってことですか？

A；いえ、当日来ましたよ。23時16分ですか、防災無線で受けてます。ただ、他の町村とだいたい時間がずれていると思います。やはり、うちは停電したもんですから、発電機の接続に手間どったってこともあるんですね。こちらは接続したつもりでも、きちっと接続されてないで、それをまた確認しないので。そういうこともあると思いますね。

Q；そうしますと、大成町さんが津波警報が出たのを知るのはテレビですか？

A；ええ、わたしはラジオで知りました。わたしは役場に来るまでの間ラジオで津波警報が発令されましたって聞きました。それが25、6分頃だったと思うんです。

Q；津波警報は、22時22分に出てるんですよ。で、そのくらいから繰り返し繰り返しやってましたから。で、第1放送でしたか。

A；それが、何のラジオだったかわかんない。おそらく、わたしはSTVかHBCにあわせていると思うんですよ、ふだんから。

Q；こちらは、NHKラジオは良く聞こえるんですか？

A；うーん、良くってというほどではないですね。まあ聞くには聞けますね。それで、津波警報が発令されたっていうことは、わたしは役場に着くと同時にわかりましたんで。

Q；消防署長の話ですと、津波警報が出る前に、津波がくるぞということで、もうかなり警戒していたという話ですけど。

A；ええ、そうでしょうね。おそらく職員であれば、みんな同じく思ってたと。わたしも10年前のときも津波が来ましたんで、あれよりは相当なひどい揺れだ。これは、ひょっとすればわが家は津波でやられるなと思いましたんで。

Q；平浜地区にお住まいですか？

A；いえ、わたしは上浦地区に住んでいます。ですから、ひょっとすれば帰ったら家はもうねえかな、と思うくらいひどい揺れだったんでね。

Q；ところで、大成町さんは今回の災害を契機にして同報無線とかいうものを入れようという計画はあるんですか？

A；はい。うちらが考えるよりも先に、町議会議員から出てますね。議会で出てますね。まあ同報無線っていうか、スピーカーをつけるべきだと。

Q；なるほど。いまは消防無線でやってるんだそうですね。かなり混信があるんだそうですね。いろんな地域と同じ波を使っているから。

A；そうなんです。それで、こういう緊急事態のときはあんまり使えないんでね。実は前々から、これは将来的には絶対やらなきゃいけない事業だっていうことは思ってたんですよ。ただ事業費のからみがあるもんですから、まず何を優先してくかっていうことについて、毎年見送り見送りっていうふうにやってきたんですけども。

Q；かなり費用がかかるわけですね。やっぱり億の単位でかかりますか？

A；同報無線ですと億の単位がかかりますね。ただ、一地区に多くをっていうことではなくて、一地区に2カ所とか考えて、まあ最低ラインは何カ所いるのかと考えた場合、安く済める方法もあると思いますね。ただその場合、聞こえる住宅と聞こえない住宅っていうこともありますんで、80パーセント聞ければいいだろうということにもならないんじゃないかなと思うんですよね。

Q；特に海岸沿いがね、聞こえればいいのかね。同報無線の自動放送ってのがありまして、たとえば揺れがおさまって2分ぐらいたちますと、自動的にスピーカーが前に録音したのを放送することが出来るんですよ。ですから、事前に録音しておけば、震度5以上の地震がくると2分ぐらいたつと、自動的に津波に気をつけろーって声が出る仕組みがあるんですよ。

A；そうですね、はっきりいって警報が出るのを待ってたんじゃないあ。

Q；今回の地震はそれが一つの教訓ですよ。

A；ええ、それを待ってたんじゃないあ、もうすでに亡くなられてる方がいるわけですから、その時点で。ただ幸いにしてテレビ・ラジオがあるっていうことは、現代社会に暮らしている幸せなことですよ。

Q；ええ、津波警報はやっぱりテレビが一番早いんですね、テレビ・ラジオがね。お宅の庁舎は停電したんですか？

A ; そうです。

Q ; そうすると、テレビはもう見れないわけですね。

A ; そうです。

Q ; そうすると、災害対策はラジオを聞きながらやるわけですか？ 状況をつかみながら。

A ; いえ、たぶんわたしはラジオ聞いていなかったとしても、全く同じ行動に走ったことに変わりはないですね。で、わたしが来たときには、もうすでに総務課長はおりまして、他の職員も来て発電機をたいて、もう広報車も出る準備してましたんで。わたしは、おそらく25分頃に着いたと思うんですよね。その時点ではもう出動体制が出来てましたね。

Q ; ところで、大成町さんにも、マスコミがずいぶん来ましたか。

A ; ええ。正直言ったら怒られちゃうかも知れないけど、本当に13日の電話にはまいりましたね。

Q ; 殺到ですか？ ある局ですか？

A ; まあいろいろなところからはいますんで、うちみたいにスタッフも少なくてなおかつ現地に職員を派遣してしまったら、電話の対応だけで追われましたもんね。幸い、消防の方で気を回して、炊出しの関係とか全部手配してくれたから良かったものの、あれがなければ「対策本部は何やってんだ」で終わってしまうんですよね。

Q ; それから、おたくは行方不明の方はすぐに遺体は見つかったんですか？

A ; いえ、最終的にわかったのは8月10日で、全員死亡確認っていうことなんですよ。7月19日までで、9人が遺体で発見されたんですよ。あと1名がわからなかったんですけど、奥尻町にもうすでに流れ着いてたんですね。で、奥尻で8月10日に遺体確認で、遺族に遺体引渡しということになりました。それが、7月16日にあがった遺体だったんですね。それが8月10日に。要するに、奥尻のほうでも、こういう遺体があるって情報を出せないし、うちもそういう情報収集ができなかったもんですから。

Q ; 当然、奥尻は奥尻の被災者だと思いますもんね。で、いまはどうでしょうか。義捐金の集まり具合いなんてのは。

A ; 5千万ぐらい大成町に集まったっていう。細かい数字まではわからないですけど。

Q ; 大成町は人口はどのくらいですか？

A ; 3100人。

Q ; そうすると、瀬棚と同じくらいですか。

A ; そうですね、瀬棚と大体同じくらいですね。

Q ; 大成町で、こんなに大きい災害ってのははじめてですか？

A ; こんな大きい災害っていわれるとはじめてになりますけれども、62年もすごかったんですよ。62年との違いってのは・・・

Q ; 62年ってのは高潮ですか？

A ; そうですね。62年の8月31日か9月1日。そのときも、80歳以上生きられてる方が、いま防波堤できてますよね、この防波堤が出来て波が越えてくるなんて、こういう大きな高潮ははじめて見たって言われたんですよ。で、58年の地震のときの

津波もはじめて見たって。ということですから、この10年で3回ですか。まあ、58年の被害は被害って言えないですけどね。要するに、これほど防災体制ができて、被害を受けるということは62年がはじめてだったと。それまでは防波堤そのものがないから、被害を受けて当たり前だっていうことですね。

Q；高潮と津波の区別はついてるんでしょうか、住民の方は。高潮ってのはウワッと来ますよね。津波はものすごいスピードですよ。

A；わたしも58年の津波を見てたんですけど、今回も10分以内に来るなんて予想もしていなかったです。絶対10分以上、または15分くらいかなと。

Q；時間的余裕があると。

A；時間的余裕があると。まだ15分は絶対あるなというふうに思っていました。だからとりあえず広報が先だっていうことで、上浦に住んでいながらも役場に上がってきて、それで広報車を回すってことを先に考えましたね。だけど、ときは既に遅かったですから。まあ、職員そのものの考え方も甘かったと。

Q；この間、テレビでやってましたけれど、宮野地区でMさんっていう方だったかな、どなたかが避難をさせて高台に行ったと。

A；NHKをわたしは見えてないんですけども、役場職員が聞いてるんですけど、Mさんの大工さんじゃなくて、Mさんの母親が大きな声を出して津波来るぞーっていうふうに避難させたって聞いてますけどね。ただ、その地区は、NHKのテレビの紹介があったと思うんですけども、去年避難訓練をやった地域なんです。去年の10月に、津波を予想して避難訓練をやってますね。

Q；避難訓練ってのはこの地域だけですか。

A；要するに、毎年持回りで。全地区一斉にやれないもんですから、毎年地区を変えてやるんですよ。で、宮野地区は広いもんですから、とりあえずこの地区に限定させてもらったと。ここは30何戸あるんですけどね。

Q；そうすると、そういう避難訓練が役だったっていえますか。

A；いや難しいです、それは。ということは、住民1人1人にアンケート調査をやった場合、その避難訓練が役立ちましたかって聞いて、果して「その通りだ」って答える住民が何人いるかっていうのは、わたしは難しいと思いますね。でも、あのとき消防車で「訓練、訓練、津波が来ますんで避難して下さい」っていうふうにやったんですけど、8分かかってんですね、ここまでの距離が。それぞれの家庭から。

Q；ああそうか。そうすると、今回のようなスピードでは間に合わなかったと。その通りにやったら。

A；その通りにやったら間に合わないですね。ただ、やはり話を聞きますと、NHKのテレビでは大工さんですけど、わたしが聞いた話ではここのお母さんが声をかけてくれたことによって、第1波と第2波の間にみんな避難してしまって。まあ、これ以上はあくまで余談ですけども、ここに避難した後、このSさんの奥さんだけが財布をとりに行くって戻ったっていうんですよ。だけど第2波が来て、この奥さんは波にさらわれてしまったところを、ここにとまったK木材の運転手さんが、お母さんを引っ張ってここに連れて逃げて来たって。

Q；それと、こちらでは災害の後に大津波が来るっていううわさが広がったってことはありますか？

A；新聞には、熊石と乙部が実際に避難された方がいると。大成町ではないんですけども、ただその発生源は大成町の人だっていう話もあるんですね。だから、それはあくまでもうわさばなしで。

Q；大成町の予言者みたいな。

A；いや、大成町には予言者はいません。ただ、ここの駐在所に実際に相談にこられた方がいるらしいんですよ。それは熊石町の占い、占いて言ったら失礼ですけど、まあ神様のお使いが、民間人の方ですよ、神主ではなくて。その方が地震がまた来るぞと。で、実際に余震が来たわけですよ。で、津波がくるぞ、また同じく大きな被害になるぞと言っていると。その話は本当なんですかと、それを警察に確かめてくださってという相談があったっていうことですね。

Q；その確かめてくださって頼んだ人が、大成町の人だったと。

A；ええ。ですから、そういううわさがあったことは事実ですね。

Q；で、熊石町も乙部町も、新聞を見ると実際に避難したっていう話ですが、大成町はそういうことはなかったわけですか。

A；ええ、そのために避難されたことはなかったですね。もうすでに避難されてる方はいましたけど。

Q；大成町は災害救助法は適用ですか？

A；はい。

Q；まあ、当然ですよ。で、昨日太田に行きましたら、太田は山崩れの危険があってまだ避難をなさってるんですね。

A；ええ、いまは7世帯の17名ですね。

Q；いつごろまで避難しないといけないんですかねえ。

A；ええ、それがこのままですと、単純に3月20日にならないと避難勧告が解けないですね。で、実際は、避難勧告が出てるの10世帯なんですよ。10世帯22名なんですけれど、その10世帯とも集ってもらいまして、見込みとしては3月20日なんて出てる。そのままこの会館いるってことは、これはとてもできないだろうと。そういうことで、太田地区には町民住宅もあるんですよ。屋根が雨漏りするとか、もう10年も使っていないとか、そういう住宅があるんですね。それとその隣の地区にもやっぱり町民住宅があるもんですから、そこを若干費用をかけて修繕すれば、まあなんとか住めると。ならば、一時しのぎに、大々的な修繕はしないけれど、そういうところにそれぞれが散らばって生活することはどうだろうか、昨日提案したんですけど。それで、地域の方もそれだったら考えてみると。どこの公営住宅に誰が入るかってことは任せてくれと。ということを、向こうのほうから言われたんでね。

Q；なるほど。仮設住宅ってことはまだ考えてないんですか？

A；仮設住宅は、実はそれ23戸建ったんですが。それは津波によって壊された家です。それで、いまのこの10世帯のうち、仮設住宅を希望する人がいたらどうするか、道のほうに聞いたんですよ。仮設住宅を作ってもらえるのかと。そしたら、道は生活

福祉部が担当なんですけど、向こうの方から電話がかかってきたんですよ。で、道のほうで仮設住宅を建ててくれるのかって聞いたんですよ。そうすると、大成町は駄目だって言うんですよ。大成町は、要するに全壊ではないわけですよ、この10世帯の方ってのは。全壊ではなくて、半壊なり一部破損、または全く被害受けてない。そういう被害の少ない住宅に対して、仮設住宅の移転なんてのはないもんですから。

Q；まだ住宅があるという解釈なんですね。なくなってるんじゃないんだと。

A；はい。それで、それは出来ないと。そうすれば、町単独で建てるか、町がなんらかの方法で用意してあげるか、本人が自分で探すかということになるんですよ。で、とりあえず町として出来るだけのことはするということで、いま言った方法をやっているんです。

Q；仮設住宅は、一軒あたりどのくらいかかるんですか？

A；300万近くですね。だから、単純に10世帯希望されますと3千万、単純計算ですね。それなら、いまある住宅を何百万か出して、直したほうがいい。

Q；いずれにしても、3月20日になれば、その10世帯は必要なくなるんですからね。

A；そうですね。ただ、仮設住宅よりはちょっと壁も汚いだろうし、暖房効果も悪いかもしれませんけれども。やはり、そういう方法でもとってもらわないとね。

Q；どうもありがとうございました。

付属資料 2 - 1

奥尻町聞き取り調査抜粋（1993年8月18日）

1. Aさん

Q；地震が起きたときは10時17分ですけどね。何をなさっていたんですか？

A；寝るというか、ウトウトしたような感じなんですけど。

Q；ではもう床についていた？

A；そのへんにおいて、横になっていたんですが。

Q；それでドカンと地震が来るわけですが、揺れの程度というのはどんな？

A；わたしのところは縦揺れみたいな感じで、その後、横揺が。「地震だが」とすぐ起きて。

Q；生れて初めて感じるほどの強烈な揺れですか？

A；いいや。前の地震のときには小学校3年生でここにいましたので、収まるだろうなとは思っていたんですよ。だけどだんだん酷くなってきたので、「これはまずいな」と思ったら天井の電気が落ちてきたんですね。

Q；シャンデリア形式のですか？

A；シャンデリアというほどのものではないんですが。

Q；それは天井から抜けて落ちてきた？

A；こうねじってはめるやつだから、あれが落ちてきたんです。そんなに頑丈でないものですから、たまたま落ちたんでないかと思うんですが。

Q；それで話をいろいろ聞きますと、いったんグラグラと来て止まったかと思ったらまた来たという、やはりそんな感じの揺れでしたか？

A；止まったかというよりも、細かなことにかかれなかったけども、収まるかなと思っただけでもずっと続いていたみたいな感じで、だんだんやはり酷くなってきた物が倒れ出したんです。

Q；家具なんかはほとんど倒れてしまうような状況ですか？

A；わたしは部屋にいたんで、本棚とかはたいした重さはないんですが、それが前のほうに倒れたぐらいです。あとはふつうに積んであるものは全部ある程度ぐじゃぐじゃになってますが、ただ真っ暗になっているもんですから、自分では掴めないんですね。

Q；それで揺れが収まって、すぐ外に出るわけですか？

A；揺れが収まるか収まらないかのうちに、わしの部屋の戸がきしんでしまってなかなか開かなかったもんですから、戸を蹴って開けて。それでも収まるまで動けなかったですね。収まってから出たんですけども。

Q；戸を蹴って開けたというのは、やはりその後に津波が来るかもしれないという気持

ちがあったですか？

A；いいや。一緒にいた人達が「早く来い」と呼んでいたんですよ。だもんですから。

Q；同居している家族の方が。

A；ええ。家族が「早く」と。

Q；もう外に出てしまっていた？

A；いいや。中にいるんですが早くに逃げて、その人は日本海中部地震を体験してますから「早く逃げなきゃ」ということで。それでわたしのほうのじいさんと、わたしはすぐ外に出て、じいさんが歩行がなかなか困難で、普通の人みたいに歩けないもんですから、「これは車でないとまずい」ということで、家のすぐ横に車を置いてあるので、すぐ車を取りに行って、家の前でエンジンかけて待っていたんです。

Q；それでおじいさんが出てきたと。エンジンかけてスタートして家から出るまでに時間はどのくらい？

A；地震はある程度収まったと思うんですけども、まったくわたし達の場合は物を取りにいったということはほとんどないですから、人が乗れば車を出すみたいな感じで、後は30メートルぐらい離れたところに親戚があるんですが、その人を1人乗せて、その人が来た時点で走ったんですよ。

Q；その人には声をかけて「乗れ」と言うわけですか？

A；いいえ。その人は走ってきたんですよ。たまたま。特に誰もこっちから知らせに行ったという余裕はなかったですから。

Q；その方は何さんですか？

A；Bさんというんです。

Q；Bさんね。

A；だから、そこは、要するに家が倒壊すると思って、とにかく家から出なければいけないと思って出たらしいんですよ。

Q；それで道路に出てきたら、たまたまAさんの車があったわけですか？

A；わたしの車があったからそれで逃げたような感じなんです。

Q；それでは4人で車で逃げるわけですか？

A；そうですね。最終的には4人で逃げることになりますけど。

Q；地震発生から何分後ぐらいに避難がスタートしたんですか？

A；わたしの記憶ではCさんという、広い道路の、いわゆる第一波をまともに被ったところを通ったんですが、まったく人も見なかったですからね。上に上がって一息ついたあたりで津波の音が聞こえましたから、「津波が来たんだな」と。

Q；上に上がって行ったというのは、このDさんのあたりですか？

A；いいえ、違います。このEという家があるんですけど、これはわたしの親戚なんです。こう登ってここまで車で来たんですよ。

Q；そのEさんのところで一息ついたときは10分後ぐらいですか？

A；そうですね。ただ一般に言われてます3分とか5分とか。3分ということはないです。地震が発生してから3分ということはないと思う。

Q；5分ぐらいという意見もあるんです。

A；5分ぐらいだと思う。でないと、わたしのところはたまたま車で逃げたけども、まだ遠くから走って逃げた人もいますからね。それで助かっている人もいますから。実際に第一波が来たのは3分後でないと思います。

Q；それでAさんが車で避難するときに、車の数は多かったですか？

A；いいえ。後から聞いた話なんですけど、このところに1台止まっていたんです。それでわたしの考えとして、とにかくここを脱して緑が丘という団地に避難すればいいと思ってましたから、だからクラクションをこのへんで鳴らしたわけなんですよ。要するに、避けてくださいみたいなね。ただそのときにはほとんどあまり人影もまばらでしたね。逃げるにしても。だからそれでこの止まっていた車は知ってましたから、後で聞いたんですよ。「あそこに止まってましたね」と。実はこのFさんという家の車なんですよ。それで1台ここに止めておいて、Fさんのお母さんがこれに乗って逃げるために空にして置いておいたそうなんですよ。その車をかわしていくらクラクションを鳴らしても動かないから、それをかわしたのが1台ですね。あとは何かこのへんでウロウロしている人はいましたけども、まったく見ている余裕はなかったです。

Q；それは山へ逃げようとしているのではなくて、外へでて様子を見ているという感じですか？それとも山に向かって逃げるという避難している人達ですか？

A；いいえ。人影は見たけど、そこまではわかりませんね。

Q；そうするとざっと見て、そのときにはこのへんにはほとんど車はないと？

A；わたしが緑が丘のほうに上がったときには何台かあったでしょうけど。

Q；真っ先に逃げたような感じですか？

A；そうですね。だからほんとに話を聞くと、逃げたところの人の話を聞いても、かなり早いうちに上がってきたみたいな話はしてましたから。

Q；後からここを上がった人は津波でやられているんですよね。だからもちろんその前ですね。こういうときにこっちに行った人は助かって、こっちに行った人も助かったと聞いたんですが、やはり多くの方はこういうように行くだろうと思いますか？

A；話を聞いたところでは、日本海中部地震のときにこの灯台に、ここはいくらか高台になっているんですが、避難したそうなんですよ。実際に今回もここまで逃げれば助かったんだろうけど、それで高台に向かっているうちに何人か波にさらわれたと。それでこのところは実際に電柱が倒れていて、当日は車が通れなかったんですよ。

Q；その南西沖地震のときに。

A；はい。だからただわたしとしてはこの道を通るというのはまったく考えていなかった。正直なところ、まだわたしが車を走らせている頃には津波は来ないだろうということと、まったく音的なものもまったくなかったし、だもんでとにかくここを。ここは結構入りくんでいるんですよ。道が細いし、かなり車がすれちがうとなるとかなりきつい道路なんです。

Q；電柱が倒れていたんですか。

A；はい。倒れていたんです。

Q；そうすると車では行けないですね。駆け上がった人もこの電柱なら越えられるんですね。これを通り過ぎて何分後ぐらいにやって来たという感じなんですかね？

A；だから音がただけで、実際に波が第一波がこう西のほうから来たというのは見てないものだから。

Q；音はどのくらいあったんですか？このEさんのところで音を聞いたわけですか？

A；そうです。

Q；ではそうとう早かったわけですね。それで、このFさんの車は結局助かった？

A；助かりました。ですからここも車で2台とも健在ですから。

Q；どの道を行ったんですか？

A；それはわかりません。ここで分かれ目になったということは、実際はこの地域はぎりぎり間に合っている人達の話だと思うんですが、ここに家がある人が実際にここを見ていたそうなんですが、かなり流されてここに人が巻き込まれて流されていったと。ここは一般的に町営バスが通る太い道なんです。ですからやはりかなりここを目指して歩いてきたことには間違いはないんですよ。

Q；歩いた人はね。だけど途中で巻き込まれてしまった。

A；そうです。このGさんという建具屋さんなんです、この人も出るかと思ったらこっちから津波がきたので諦めて家の二階に避難していたと。

Q；それで助かっているわけですか？

A；そうです。それでここをこっちから「津波が来たぞ」ということで、こちらのほうに逃げて助かった人もいますよ。たまたま波が見えたもんだから、こっちに逃げて。

Q；そうすると、こういうように来た津波が道路沿いにわっと降りてきたわけですね。

A；道路を走ったと聞いてますが。たださっきから申し上げているわたしの場合はかなり早かったものですから、その状況というのはまったくわからないんですが。

Q；さっきもいろいろ話を聞いていたんですが、このへんで助かった人はやはり何はともあれ早く避難した人が助かったという感じですか？

A；そうですね。ですから岬の先端の人も助かってますから、このHというこの人が助かってますから。ですから収まってこの距離を全力疾走したとして間に合う時間はあったんですね。

Q；彼女はこう走って、Iさんのところから上がって行ったと言っていましたね。こっからここまで若い女の人で走るとして、どのくらいですかね。2、3分で走りきりますか？

A；2、3分では走りきるでしょう。どうみても2分で走りきるでしょう。わたしは裸足でしたからね。靴入れが倒れていたもので靴を履く暇がなかったということ。それで亡くなった人の状況を見ると、あちこちの家に起こしに行っていたというような感じだから、まともに走って逃げればその人個人は助かったと。

Q；親切が逆に自分の不幸になってしまったんですね。わかりました。どうもお忙しいところをすみませんでした。ありがとうございます。

資料 2－2.

瀬棚町聞き取り調査（1993年8月18日）

1. Aさん

Q；津波が来たときにはお宅は何をしてらしたんですか？

A；ちょっと用事があって、ちょうど橋の向う口まで来てたんですが。突然地震が来ましたんでね。それで橋を渡ったらいいかどうしたらいだろうなと思って、一時ためらったんだけど、「とにかく家に帰らねばね」ということで帰りました。ですから、地震が揺れ終わるときに家に着いたという感じになりますね。

Q；それからの経過をちょっと話して頂きたいんですが？

A；とにかく、すぐ津波が来るとは思いませんでした。それで、いったん玄関から外へ出まして、それで店やっているもんですから、「店の被害どうだろう」と思って店のほうに行こうと思ひまして道路を横断して、車庫がありますんでその車庫へ着いたら、すぐ家々の間から津波が1 m 5 0 ぐらいの高さで来たと、こういうことになりますね。それで、すぐ浜手のほうのおじいちゃん、おばあちゃんを避難させねばならないし、もう胸まで水はありますしね。みんなで助け合ったと、こういうことになります。

Q；お宅の裏のところですが、壁が一部剥がれていますね。

A；はい。この流しの窓も波で取られたことになるんですね。

Q；窓は新しく入れ替えてますね。あそこまで来たんですか？

A；そうです。そのままで。いまはまだ注文しても大工さんも忙しいもんだから手が回らないということで、まだ入らないんですよ。

Q；高さが4 m以上で、6 m近くありますね。

A；はい。ですから『波ガシ』と言うんですが、その堤防から海面まで5 m 7 7 あるんです。それも完全に越えてドっといっぺんに来ましたんでね。この家々の間から、1 m以上の波で来たのは間違いないですからね。その堤防だって1 m以上の高さで越えていることは間違いありませんね。

Q；道路はさらに堤防よりも高いですね。

A；そうですね。高いんです。道路の中央線でわたしの胸まであったんですから、やはり1 m以上、1 m 5 0 くらいはあるんでしょうね。

Q；地震が来たときに、津波を想像されましたか？

A；とっさにはまったく想像しませんでした。しかもあんなに早く来るとは、誰も想像しなかったんですね。いまはこういうガレキになってますが、この間に何軒あったでしょう、6軒ですね。それとスナックが1軒と、漁師さんの網だとかそういう器具を入れている大きい倉庫があったんですが、それもみんないっぺんに流されてこの家々にみな寄りかかったということです。そして、すぐわたしのところからこの位置に家が1棟2軒入ってあったんですが、78才になるYさんというおばあちゃんが津波

にのまれて亡くなってますね。

Q；お宅のちょうど裏側から海に向かっては、まったく何もなくなってしまったということですね。

A；何もなくなりましたね。ほんとに寂しいですよ。まだこれからの計画なんていうのは、まったく頭にありません。

Q；しかし、お宅は紙一重だったんですね。

A；そうですね。見る通りに、地下をみんなが持っているんですね。ある程度頭がつつかえない程度の地下なんですよ。この地下を持っている人が全部地下から波が入って、逆に床も上げられちゃって、そして床上浸水とこういうことになるんですね。隣の住宅はまだ住めないんですよ。

Q；今は空家ですか？

A；二階のほうにしろうじて旦那さんが住んでいると、こういう状態でしてね。大工さんもそれぞれ、まだまだ手が回って来ないもんですから、寒くなるまで一時風しのぎに板を当てまして、あの通りですよ。

Q；お宅も地下を破られたんですか？

A；ええ、やられました。ですから、地下に冷蔵庫だとか冷凍庫だとか温水機だとかあったんだけど、みなやられましたね。3日目に、札幌にいる兄弟夫婦が来て、それで片付けてくれて何とか住めるようにしたと、こういう感じです。片付けてもらうときに、まだ海の水がある程度入ってますので、ウグイが何匹も泳いでました。

2. Bさん

Q；地震が来たときに何をしましたか？

B；わたしは民宿の側に居酒屋をやってまして、そのときにお客さんとワイワイとやっていたんですね。それで、10時過ぎ頃にガタガタと地震が来て、それで上のボトルやなんかはみなひっくり返ったんで、それで「片付けよう」ということになって、けっこう呑気にしていたんですね。そんなに津波が来るとかいうのは全然頭になくて、それで掃除なんかしていて、それでお客さんは半分帰ったんですね。「子供が心配だ」と言うお客さんもいて。それでわたし達は残ったお客さんと「飲み直そう」と言って呑気にしていて、それでこうやって片付けたりして、「テレビ入れてみよう」と言ったら、ちょうど日本海のほう真っ赤になっていて。そしたらマスターが「津波」と言って、「えー」と言って窓を見たら、目の前に津波がワーっと来たんですね。それで「津波だ。逃げろ」と言って玄関を出たとたんに、もうすぐ巻かれて水の中にワーっと入って。それで、そのときにはみんな駐車場に車がいっぱいあって、その巻かれたときに挟まれないように潜りながら足で押したり、手で押したりしていて、1回顔を出して息を吸って、そしたらまた津波が来たんで、そのときはすごく長かったですよね。1分ぐらいだと思ったけど考えたら1分も息が続くわけないから、やはり

20秒ぐらいでないかなと思うけど、10秒か20秒がすごく長く感じたんだけどね。その間もずっと水の中にいて、全然頭が出ないんですよね。そのうちにゴーっという音と共に顔を出したら、ちょうど民宿の道路にパーッと顔が出たんです。それで「あー助かった」と思ったら、マスターが見えないんで、「大変だ」と思ってまた戻ったんですよ。それで戻って「マスター、マスター」と叫んだら、「おーい、ここだ」と裏のほうで手を上げて。「あー、助かったんだ」と言って側に行ったら、「来るな、来るな」と言って。ガレキがいっぱいだったもんだから。それでわたしはもう1回戻って、マスターは別なほうから這い上がるようにして助かったんですがね。

Q；奥さんはどうして助かったんですか？

B；巻かれて投げ出されるように道路に行ったんです。それで顔が出たんで、助かったんですね。

Q；顔が出たというのは、水から顔だけが？

B；パーッと出たんです。だから地面がほとんど手に着いたんで、それでこうやって浮き上がったから顔が出たんです。見回したら道路なんで、「あらこんなところに出ちゃった」と思って。

Q；窓を開けて津波だと。

B；開けたんでなくて、窓は開けていたんだけど二重で、そしてパッと見たときに津波がゴーッと迫ってくるのが見えたんですよね。音はしないんですけども、ゴーッと押し寄せて見えるんですよね。何と言ったらいいか、山が押し寄せてくるような感じで。

Q；波が立ち上がってくるんでしょう。

B；ええ。そういう感じに見えたんです。すぐ目の前なんですよね。それですぐ出たらもうパーッと来ちゃって。

Q；2回来たと言いましたね。

B；だと思いますね。わたしは1回顔を出して息を吸って、またグーッと来たからやはり2回ですね。2回目が長かったんですよね。水の中で全然頭が出なかったから。

Q；地震のときに、津波だとすぐ感じましたか？津波が来るぞと思いましたか？

B；いいえ。全然思わないんですよね。だから呑気にお客さんと「もう1回飲み直そう」なんてのんびり言っていたんですよ。みんなもそんな気はないんですよ。

Q；思って帰った人もいるわけですね。

B；ただ地震が来たんで、子供達が心配だと言うんで帰っただけで、全然津波がくるなんて頭になかったですね。そういうことってここはないから。

Q；地震から津波まで何分ぐらい？

B；5分もなかったですね。1回停電したんですが、1回外に出て、そしてまたすぐ中に入ったらすぐですから、5分もしないうちに来たんですよね。

Q；地震の揺れはどんな揺れでしたか？

B；うちの二階にいと結構ひどいと思うけど、じかにコンクリートの上にいたからそんなに感じないんですよね。もちろん揺れましたけども。ボトルとかグラスも落ちたんだけども。

Q；家具なんかは倒れなかった？

B；倒れないんですね。

Q；では、棚の上のボトルやなんかが倒れた。

B；ボトルとかが倒れただけで。だけど、後から全部終わって見に来たら、もう中なんかはすごいものね。畳が剥げて、カウンターは壊れて、店を出てよかったと思いました。もし店の中にいたら、狭い店ですから全然助からなかったんでないかな、とみんなで言っていてね。

Q；よくそこまで行って、物におつかってケガしなかったですね。

B；ケガはやはり擦り傷だらけでした。体中が。あの当時は、仕事のお客さんがいっぱい民宿に泊まっていて、車がいっぱいでしたから。その車が浮き上がったりなんかしてて、自分の体とおつかり合ってたから。ただ、体が車に挟まれたら大変だと思って、それで水の中で手で押し退けたり、足で蹴飛ばしたりしてたんですね。

Q；案外と余裕があるんですね。

B；自分でも余裕があったなと思って。

Q；水泳はできるんですか？

B；ええ。子供の頃からここで生まれていたもんだから。案外とそういうのはね。でも、ああいうときの水泳というのは、役に立たないね。

Q；ものすごい波でしょう。力は？

B；やはり水の中の音はすごく聞こえました。「ゴーッ」という音が。

Q；やはり渦を巻くんですか？

B；巻いているんでしょうね。もう無我夢中だったんだけども。

Q；民宿というところですか？

B；Hさんと海の家と、ちょうどこっちのお隣の民宿の間を流されて道路に投げ出されたんですね。

Q；道路が見えますが、どのへんまで流されたんですか？

B；道路のちょうど車道ですね。車道に投げ出されたんですね。そして、民宿の飲んでいたお客さん達もいち早く逃げたんで、みんな大丈夫だったみたいですけども。

Q；お客さんとお酒を飲んでいて、よく頑張れたですね。

B；そうですね。

Q；1人も亡くなった方はいないんですか？

B；お客さんの中にはいないですね。

Q；この防波堤よりももっと越えてくるわけですか？

B；そういう感じがしたんですがね。見た感じは。

Q；この防波堤が5 m以上ですよ。

B；そうですね。だからワーっと来た感じで。でも夜だったからはっきりとわからないけど、津波が壁のように襲って来た感じで、慌てて外に出たんだけども。そのときにはもう目の前だから。

Q；地震のときに空が光るとか、そんな感じはなかった？

B；そういうのは全然。

Q；飲んでいた人の中で、「津波がくるかもしれない」と言った人は1人もいない？

B；誰もいないんですよ。

Q；何人ぐらい飲んでいたんですか？

B；10人ぐらいでいっぱいだったです。それで半分ぐらい帰って、土地の人が半分と、
民宿に泊まっているお仕事のお客さんが半分ですね。そして民宿に泊まっているお客
さんが残ったんです。「もう1回座り直そうか」と言って。

Q；それで他の人は家に帰って？

B；ええ。帰ったですよ。やはり家族が心配だというんでね。

Q；いまのテレビのところを確認したいんですが。テレビを付けましたね。それから後
を話してください。

B；テレビを付けて、マスターが「津波だ」と言って。

Q；どうしてですか？テレビの画面は何をやっていたんですか？

B；「津波が来るぞ」と地図だけが載っていたんです。どこのチャンネルを入れたのか
わからないんですが、真っ赤になっていて。「津波がくるんでないか」とそのときに
マスターが言って、それで窓を見たら目の前にすぐに。ほんとにアッと言う間に目の
前に波が。ほんとにあのときは。

Q；その時間は何時頃だったんですか？

B；10時20分ぐらいだと思うんですけどね、はっきりわからないんですけど。たぶ
んその時間だと思うんですけども。

Q；10時20分ぐらいというのは、それは何で？

B；テレビではないんですが、だいたいお客さんが来て飲んだりなんかしていて、そう
いう感じですね。後から考えたらやはり10時20分頃だなと。お客さんの中で待っ
ているお客さんがいたもんだから、「あと何時にくる、いま10時だ」と言っていた
ものだから、たぶんそうだと思うんですけども。

Q；では、テレビで津波警報をやっていたときには、もう津波が？

B；もうやってきていたんですよ。

Q；お宅の叔父さんは亡くなったそうですが、一緒に住んでいたんですか？

B；家は隣なんです。ここは叔父の家で、そして「きっと船を見に行っただろ」と。「も
しかして船と一緒に流されたんでないだろうか」ということになって、とにかく探し
てみようということになって。

Q；それは奥さんが流された後ですか？

B；後です。

Q；助かって？

B；わたしが「地震だ」と言うと同時に、叔父もそっちに船を見に行っただろうと思うんです。

Q；そこで3人亡くなっているという話ですよ。

B；そうです。うちの叔父とそれからキャンプに来ていた青年と、向うの浜の人達みた
いですね。

Q；やはりここに船を置いてあるんですか？

B；船はいつもここに置いてあったんです。それでここから出入りしていたもんです。

Q；どうもありがとうございます。

3. Cさん

Q；Cさんにうかがいます。地震のときの様子ですが、どんな様子でしたか？

C；お店をやってまして、そして10時ちょっと過ぎに急に地震が来まして。

Q；地震はどんな様子でしたか？

C；地震は店の中のグラスが投げ落ちるようにして、足の底から沸いてきたみたいな地震でした。そしてまもなく停電になりまして、店の表に出たんです。そして地震が終わってから、ガスを使っていたもんで、そしてガスの元栓を止めて、家に帰ろうと思って足が3歩動いた時に、ものすごい音が壁のほうからしたもんだから、見た瞬間、壁が破れて津波がすごいねりて入ってきたのと、逃げる間もなくワーっと言ったままの状態、そしてずっと水の中に漬かっているという状態で、カウンターの間にいて水の中に漬かっていたんです。それで、口を開けたら苦しくなれば水を飲むと思って、口を開けないで息を耐えるだけ耐えて、それで苦しくなれば全身でもがくようにして、そしてそれでも苦しくなって、そして口をちょっと開けるようにして水をブクブクしながら、その繰り返しをずっとやっていたんです。そして、玄関の戸が開いたままだから、玄関のほうから入る波と壁の破れから入る波と同じになって、おそらく潮が渦巻いたと思うんですね。はっきりしたことはわからないんだけど、水の中にいて。そしたら急にコロコロンやっているうちに、宙に浮いたみたいな感じで上に上がったんですよ。そしてそれで、わたしがびっくりして苦し紛れに「もう駄目だ」と思いながら、引波に出されると思ったんですよ。そしたら、両手をバタバタしながら右手のほうに何かぶつかったみたいのがあったから、とにかくぶつかったものを何でもいいから掴まなくてはいけないと思い必死になったら、テレビを吊っている棒頭があるんです。その棒頭にうまく掴まったんですよ。それで掴まったんだけど、そこに掴まってもぶら下がっている状態で、頭の上にさらに天井までの水が入っているから、ずっと水の中で。そして苦しくなってさっきと同じ状態でブクブクしながらもがきながら、そしてあるときには苦しいものだから、両方に力を入れて自分の体を上にグーっと上げたんですよ。そしたら、顔がちょっと鼻のところまで水から出たんですよ。そして出て息を吐くとスーっとなって、水の中にいて苦しいものだから。そして吐く息もすごかったと思うんです。7、8回か10回ぐらいだったと思います。そしてそうやっているうちに、もっと凄い音がしたから、もう天井のほうに宙に浮いたみたいになった感じで見たら、2回目の津波が入ったんですよ。2回目の津波はもう真っ白な津波で、あれを見たときには一瞬駄目だと思いました。でも、1回目と同じようにまたすぐ手が離れてしまって、そしてまた水の中にゴロンゴロンされたんですよ。その間はどのぐらいだか、自分でははっきりわからないんですよ。でも結構な時間だと思うんだけど。そして一番先に掴まったとこに、おそらくカウンターの中だと思うし、泳ごうと思って全然泳げないんですよ。引波が強くて。そして、1回目の繰り返しと同じ状態にっていて、いくら体が浮くみたいな状態になって、そして何かまた手元にぶつかったみたいな状態になって、そしたらまた同じ場所に掴まっ

たんですよ。それで掴まっていたんですが、同じ頭の上のさらの上の水です。そして苦しくなって、その状態を繰り返しながら鼻の下まで水が引いたときに、そして「もう助かったな」と思った瞬間に、頭の中がボーっとして意識がなくなったんですよ。気を失って、それからがわからないんですよ。そしてわからなくなった状態で、下のお店が壁も両方とも破れて物自体が何もないし。そして気が付いたときには、真っ暗闇の中で遠くから誰かが呼んでいる声がするんです。「誰か呼んでいる」と思っても目が開かないんですよ。そしたら、真っ白い雲の中に自分の体が浮いている状態で、そして起きようと思っても起きれない。そしたらまた誰かが呼んでいる。そして目を開けようと思っても開かない。そしてだんだん呼ぶ声が近くなって、ほんとに耳元で聞こえたときにホッと目が覚めたら、真っ暗闇の中にいたんです。そして「起きなければ、こんなふうになったら津波が入ったらもう助からない」と。起きようと思ったら、手が両方がちょっと動くだけで、あとは2階の下敷きになって動けない状態です。そして誰も助けに来ない。そしたら、何とかしてここから出なければいけないと思って、頭の上の手が届くところまで手をやって、トタンを5、6枚ぐらいむしり取ったんですよ。むしり取って、そしてそこまでやって、どうにか顔だけ出して叫んだら誰かが助けに来る。だけども、そこまで体が2階の下敷きになっているもんだから動かなくて、自分の体を両方に手をやったら水がまだあったもんだから、水があるうちに出なかったら、だんだん水が引けたら2階が下がるから出れない。そしたら、いまのうちに何とかしなければいけない。そしたら、肘と腰に力を入れて自分の体を下に埋めるようにして、頭の穴を開けたところにズルようにして、ようやくそこに出たんですよ。そして出てから、このへんの家に行こうと思ったら、まだ水がかなりあったしね。そして隣の屋根に這い登ったんですよ。そしてそこから跳ねようと思ったときに、そっちの一角がないし。

Q；ないというのはどうしてですか？

C；津波でなくなったんです。そして、そこから跳ねたら屋根から2 mか3 mぐらいあったと思うんだよね。そして、そこから跳ねたはいいんだけど、走っているうちにまた津波が来たらさらわれる。「これは駄目だ」と思って、また向きを変えて、そしてまたさらに隣の高い屋根に登ったんです。そして登って叫んでも誰もいない。そして、今度は屋根から降りて、店の行灯を出している部分に跳ねて掴まって下まで降りたら、軽トラックの上に誰か男の人が乗っていたんですよ。で、そこまで行こうと思って、「行く」と言ったら、その人が「水の深さがひどいから引波もあるから来たら駄目だ」と言われたんだけど、わたしも人を見たから「助かった」と思ってそこからポンと飛んだんですよ。そしたら自分の背丈が埋まるだけの深さがあったんです。そして「駄目だ」と言ってまた向きを変えて、1回スッと泳いで花壇のブロックに上がって、そこに暫くの間立っていて、そしたらまもなく救急車が遠くのほうに来て止まったから、その人と2人で「しばらく水が深いからもうちょっと待つか」と言って、それで待っていて20分ぐらいだったと思いますね。そしてその人が先に降りてみて水嵩を見て、「僕が降りて大丈夫だったら、すぐ後ろに付いてこい」と言って。その人が降りたらちょうど首くらいのところで深いんだけど、救急車のほうに向かったら

徐々に、道路が高みだから、水嵩がだんだん浅瀬になるから「急がなくていいから、助かったんだから後ろをついてこい」と。そして水の中をずっと漕いでいて、そして救急車に乗っていったんです。

Q；顔をケガしてますね。どうして切ったんですか？

C；津波の2回目に、水の中にテレビを吊って棒頭に下がっているうちに、左側の目の横に何かがぶつかってきて押されるような状態で、とにかく必死になって掴まっているものだから、顔を動かせない状態ですよ。だからおそらく重みがあったから冷凍庫でないかと思うんですよ。あとはボックスとかだったら、椅子とかテーブルであつたらある程度軽いから。わたし考えてみると冷凍庫だと思うんだけど、見ようと思っても見れない状態で、少しでも気を緩ませたら手元も緩むと思って必死に掴まっていたからわからないですよ。

Q；無我夢中の数分間ですね。地震が来たときに津波が来ると思いましたか？

C；わたしはガスを使ってたから、まず火事だけは。

Q；津波はあまり予想しませんでしたか？

C；全然。

Q；1回目の波と2回目の波とどっちが大きかったですか？

C；2回目の波です。

Q；地震が来てから第1回目の津波が来るまでは時間はどのくらいあったんですか？

C；5、6分だと思うんですがね。

Q；テレビは付けていたんですか？

C；テレビは3台付けているんだけど、普通にはかからないんですよ。音楽のほうのレーザー盤になっているから。でも、地震の最中に停電になったときに表に出て、そして収まるまで立っていて、近くにおばちゃん達がいたから「新聞ちょうだい」と言って貰って店に入ってガスの元栓を止めて、体を振じて3歩目のことだから、たぶん5、6分だと思います。

Q；お客さんはいなかったんですか？

C；2人いたんです。一緒に地震の最中に表に出たんです。

Q；その人達も津波ということは何も言ってませんでしたか？

C；漁師の人で、この紅ズワイを捕っている船に乗っている人だけど、1人が迎えに来て、そして「船を沖に出す」と言ったんだけど、そのときにはわたしは全然火事しか頭なくて、いま思えば「船を沖に出す」と言えば津波だと思うんだけど、そのときにはガス使っていたから火事しか頭になかったです。

Q；沖に出すと言った方も無事だったんですか？

C；船に乗る暇がなくて、組合の冷凍庫の市場がありますよね。その屋根に3人ともぶら下がったと聞いてます。

Q；どうもありがとうございました。

付属資料 3 - 1

北海道南西沖地震に関するアンケート調査

(奥尻町)

東京大学社会情報研究所

○調査期間；平成 5 年 1 0 月 2 9 - 3 1 日

○調査対象地域；青苗地区において被害がいちじるしかった 2 6 5 世帯
のうち、2 0 4 人

○調査方法；訪問面接法

問 1. 北海道南西沖地震が発生した 7 月 1 2 日午後 1 0 時 1 7 分、あなたはどこにいましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 2 0 4 人)

	N	%
奥尻島内の自宅	1 8 1	8 8 . 7
奥尻島内の自宅以外の建物の中	8	3 . 9
奥尻島内の野外	5	2 . 5
奥尻島にはいなかった	6	2 . 9
海上の船の中	1	0 . 5
その他	2	1 . 0
無回答	1	0 . 5

その他；よその家、店にいた

問 2. では、地震が発生したとき、あなたは何をしていましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 2 0 4 人)

	N	%
すでに眠っていた	8 6	4 2 . 2
床に入っていたが眠ってはいなかった	3 1	1 5 . 2
風呂に入っていた	1	0 . 5
食事をしていた		
お酒を飲んでいた	1 0	4 . 9
テレビを見たり本を読んだりしていた	5 0	2 4 . 5
その他	2 2	1 0 . 8
無回答	4	2 . 0

その他；同僚とお茶を飲んでいて、いかつり操業、犬のトイレ、トイレ、話をしていた、歩いていた、食事をしていた、寝ようと思っていた、手伝いをしていた、茶の間で話をしていた、手洗い、北海道本島にいた、酒を飲んでいて、飲んでいて、友達宅でおしゃべり、仕事、話をしていた、手洗い、商売をしていた、函館にいた

問3. 地震が起こったとき、あなたはとっさに何をしましたか。次の中であてはまるものをいくつかもお答え下さい。(N=204人)

	N	%
あわてて外に飛び出した	60	29.4
家族に逃げようと声をかけた	68	33.3
高台に向けて避難した	98	48.0
火の始末をしようとした	37	18.1
窓や戸をあけて外の様子を見た	6	2.9
室内を片づけた	4	2.0
服を着た・着替えた	27	13.2
家具などが倒れないように押さえた	21	10.3
頑丈なものにつかまって身をささえた	17	8.3
子どもや老人・病人などを気づかった	42	20.6
机の下などに身を伏せた	18	8.8
海や船のようすを見に行った	5	2.5
何もできずぼう然としていた	32	15.7
無我夢中だったので覚えていない	10	4.9
その他	15	7.4
無回答	6	2.9

その他；老人ホームの教室を廻り入居者を避難させた、プロパンのもと線を切る、ショックがきたので地震と思わず機械の故障かと思った、地震の治まるのをまった、親戚が迎えにきた、戸を開けた、ボンベの弁を閉めた、タンスの下敷になっていた、戸を開けた、北海道本島にいた、はって外へ出た、おさまるのを待った、部屋のすみで布団をかぶっていた、倒れたタンクをおこした、函館にいた、電灯を探す

問4. このたびの地震によって、あなたのご自宅はどんな被害を受けましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
津波によって自宅が全壊(半壊)した	129	63.2
津波による浸水があり、後に火災によって全壊した	25	12.3
津波被害はなかったが、火災によって全焼した	38	18.6
地震の揺れで家が壊れた	7	3.4
地震の揺れで家具が倒れた		
その他	1	0.5
被害はとくになかった		
無回答	4	2.0

その他；浸水したが家は壊れなかった

問5. 地震の後、お宅では停電しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
停電した	198	97.1
停電しなかった		
無回答	6	2.9

問5-1. (問5で「停電した」という人だけお答え下さい) お宅では何時間ぐらい停電していましたか。(N=198人)

	N	%
50時間未満	4	2.0
50-72時間未満	47	23.7
72時間以上		
無回答	147	74.2

(停電時間；平均 70.1時間)

問6. 地震の直後、あなたは、この地震で津波がくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
大きな被害が出るような津波が 来ると思った	81	39.7
来るとは思ったが、あれほど大 きな津波がくるとは思わなかった	82	40.2
津波のことはほとんど考えなかった	35	17.2
無回答	6	2.9

問6-1. (問6で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたが、津波がくると思ったのはなぜですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=163人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で 津波を経験したから	118	72.4
津波は経験していないが、日本海中部地震 のときの話を知っていたから	24	14.7
日本海中部地震の話は聞いていないが、大 地震の後には津波が来ると知っ ていたから	12	7.4
その他	8	4.9
無回答	1	0.6

その他；単に地震があったから逃げた、近所の人の話、大きな地震だったから、経験していない、地震の大きさから判断、近所の人の話、地震が来れば津波が来るものだと思っていた

問6-2. (問6で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたは、津波が地震の後どのくらいで来ると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=163人)

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	99	60.7
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	30	18.4
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	16	9.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	1	0.6
その他	8	4.9
無回答	9	5.5

その他；思う間もなく津波がきているのを見た、高台にいたから、1と2の中間。すぐとは思わないが荷物をもって逃げる程の余裕はなし、考えた時にはもう波がきていた、そんなことは考えることもなく逃げた、あまり考えなかった

問7. (再び全員がお答え下さい) では、地震の直後、あなたが避難したのは地震からどのくらい後のことでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた	47	23.0
揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた	112	54.9
津波がやってきてから避難しはじめた	23	11.3
津波がやってきてから避難しようとしたがもう避難できなかった	9	4.4
避難しなかった	1	0.5
その他	4	2.0
無回答	8	3.9

その他；地震だと解って寄港しようとした、地震のあと戻った、津波がひいてから(他の人を助けていた、警察と連絡をとっていた)、火事があったので逃げた、地震のあと戻る

問7-1. (避難した人だけお答えください) あなたが自宅から避難したのは、地震から何分後頃だったですか。おおよそでけっこうですからお答えください。(N=170人)

(避難時間; 平均5.3分)

問7-2. (避難した人だけお答えください) あなたが避難するきっかけになったのは何でしたか。あてはまるものを、次のうちからいくつでもお答えください。(N=182人)

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	92	50.5
家族が避難しようといったので	71	39.0
親戚や近所の人が避難するようにいったので	36	19.8
屋外の防災無線拡声器から避難を呼びかけたので	3	1.6
室内の防災無線戸別受信機で避難を呼びかけたので		
テレビで津波警報を聞いたので		
ラジオで津波警報を聞いたので		
実際に津波に襲われたので	2	1.1
その他	21	11.5
無回答	2	1.1

その他; 入居者の安全を考えて、津波が見えて、単に地震があったから逃げた、火が見えた、地震がきたから逃げた、自分から逃げた、自分で避難した、なんとなく逃げた、日頃から津波がくると思ったから、地震がきたら津波とまず思った、自分から出ようとした、自分の判断、自身の判断、自身で判断、波を見たから、地震が強かったから、地震から津波が来たので、家がつぶれると思ったので、自分の判断、自分から避難しようとした、津波がすぐそばまで来たから

問7-3. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき、どのようにして避難しましたか。主なものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
歩いて避難した	40	22.0
走って避難した	52	28.6
自転車を使って避難した	1	0.5
バイクに乗って避難した		
自動車に乗って避難した	87	47.8
その他		
無回答	2	1.1

その他; 人をおぶって、自動車から歩き、走った後娘の宅の自動車と出会って一緒に避難、歩いた後車にひろわれた

問7-4. (避難した人だけお答えください) あなたはご家族と一緒に避難したのですか、それとも一人で避難したのですか。主なものを一つだけ選んで下さい。

(N=182人)

	N	%
家族全員で避難した	119	65.4
家族の一部と避難した	14	7.7
近所の人や親戚と一緒に避難した	33	18.1
一人だけで避難した	23	12.6
家族はいない		
その他	5	2.7
無回答	1	0.5

その他；職員や入居者と、お客さんと一諸、けがをした観光客と、友人と、友人と、夫が漁に出ていた

問7-5. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲はどのくらい危険な状態でしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった	112	61.5
死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった	53	29.1
その他	15	8.2
無回答	2	1.1

その他；一番さきに高台へ逃げたから何も思わなかった、考えられる状態ではない、逃げるのに夢中、逃げるのに夢中、火災が恐ろしかった、高台だったので大丈夫でした、見る暇もありませんでした、暗くて見えない、暗いから何も見えない、あまり考えない、記憶なし、考えなかった、余裕がなかった、記憶なし、記憶なし

問7-6. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲の混乱状況はどうでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
避難する人や車はほとんどいなかった	68	37.4
避難する人や車が多少あった	45	24.7
周囲は避難する人や車でかなり混雑していた	57	31.3
その他	10	5.5
無回答	2	1.1

その他；見ない、わからなかった、わからない、車はなかった

問 7-7. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき何か持ち出せましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
かなりのものを持ち出すことができた		
少しだけ持ち出せた	30	16.5
何も持ち出せなかった	148	81.3
その他	3	1.6
無回答	1	0.5

その他；電池1本持ち出せた、ポーター・紙おむつ・布団、アノラック上下・書類、電池だけ持ち出した、遊びにいていた・巾着袋ひとつ

問 7-8. (避難した人だけお答えください) 津波がきた時、あなたはどの経路で逃げましたか。次の地図でできるだけ詳しく教えてください。

(地図記入)

問 8. (再び全員がお答え下さい) では、あなたは実際に津波に襲われましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	12	5.9
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.4
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	58	28.4
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	114	55.9
その他	5	2.5
無回答	6	2.9

その他；本島にいた、津波に襲われた、床上に少し水が入り外にでると津波がきて建物が流されてきた

問8-1. (問8で1あるいは2と答えた人だけお答えください) その津波からあなたは
 どうして助かったのですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。

(N=21人)

	N	%
よその人に助けてもらった	6	28.6
自分の力で津波から逃れた	13	61.9
その他	2	9.5

その他；港にあふれた波だったので弱かった、弱い波だった、運が良かった

問9. (再び全員がお答え下さい) 10年前の日本海中部地震のときも、奥尻島は津波
 によって大きな被害を受けていますが、この10年前の経験は、今回のあなたの避難
 行動にどのように影響したと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。

(N=204人)

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、 すばやく避難することができたと思う	106	52.0
日本海中部地震の経験がかえってわざ わいして、津波が来るのにまだ余裕が あると思い避難が遅れてしまったと思う	15	7.4
日本海中部地震の経験は、今回の避難と はあまり関係ないと思う	27	13.2
日本海中部地震の経験はない	43	21.1
その他	6	2.9
無回答	7	3.4

その他；自分は海にいたから前回と比較できないが丘の人には経験が生かされた人と生
 かせない人が両方いたと思う、あれだけ大きければ逃げる、前回より強かったから、当
 時より強かった事が経験的に分かったから

問10. 今回の津波は、皆さんのお住まいを完全に破壊してしまうほど大きな破壊力を持っていたが、あなたは災害が起こるまで、津波がこんなに大きなエネルギーを持っていることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N = 204人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	67	32.8
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	19	9.3
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	106	52.0
その他	5	2.5
無回答	7	3.4

その他；昔から知っていた、経験が生かした人と生かせない人が両方いたと思う、10年も経験しているが今回こんなになるとは思わなかった、破壊力は知っていた、大きいとは知っていたがこれ程とは思わなかった

問11. 津波は大きな破壊力を持つばかりでなく、場合によってはジェット機とかそれほどでなくとも新幹線と同じくらいの早いスピードで襲ってきます。あなたは災害が起こるまで、津波がこんなにスピードがあることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N = 204人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	45	22.1
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	17	8.3
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	121	59.3
その他	13	6.4
無回答	8	3.9

その他；そんなに早いとは思わない、昔から知っていた、実際に見ているので知っていた、10年前に見ているがこんなにはおもわなかった、スピードはない、見ていない、スピードはない、見ていない、見たことがない

問 1 2. 次に、津波警報についてお聞きします。今回の地震では、地震の5分後に大津波の警報が出ましたが、あなたは、地震当日、津波警報をお聞きになりましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N = 204人)

	N	%
聞いた	27	13.2
聞かなかった	164	80.4
その他	3	1.5
無回答	10	4.9

その他；聞いたような聞かないような

問 1 2-1. (津波警報を聞いた人だけお答えください) では、あなたはその津波警報をどのようにして知りましたか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。(N = 27人)

	N	%
民放テレビから		
NHKテレビから		
民放ラジオから	1	3.7
NHKラジオから	2	7.4
防災無線の戸別受信機から		
防災無線の屋外拡声器から	20	74.1
警察や消防から		
家族や近所の人から	4	14.8
その他	1	3.7

問 1 3. 次に、防災無線と電話についておうかがいします。まず、防災無線からうかがいますが、地震のあと数分のうちに、防災無線で津波を警戒するようにという放送がありました。あなたはそれを聞きましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N = 204人)

	N	%
屋外拡声器から聞いた	37	18.1
戸別受信機から聞いた		
そういう放送は聞かなかった	151	74.0
その他	5	2.5
無回答	11	5.4

その他；聞いたような気がするが覚えがない、はっきりと記憶していない

問14. また、地震の十数分あとには、津波警報が出されたという放送が防災無線から流れましたが、あなたはこの放送はお聞きになりましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
屋外拡声器から聞いた	34	16.7
戸別受信機から聞いた		
そういう放送は聞かなかった	154	75.5
その他	5	2.5
無回答	11	5.4

その他； 消防の無線で聞いた、記憶がはっきりしない

問15. では、今回の地震のときに防災無線は役にたったとお考えですか。まず、地震の当日、地震があってから火災がおさまるころまでは役にたったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
非常に役にたった	22	10.8
ある程度役にたった	22	10.8
ほとんど役にたたなかった	21	10.3
全く役にたたなかった	82	40.2
防災無線の放送は聞かなかった	46	22.5
無回答	11	5.4

問16. では、地震から一週間くらいのあいだはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
非常に役にたった	21	10.3
ある程度役にたった	47	23.0
ほとんど役にたたなかった	20	9.8
全く役にたたなかった	61	29.9
防災無線の放送は聞かなかった	41	20.1
無回答	14	6.9

問17. 奥尻島の防災無線は、戸別の受信機と屋外拡声方式のスピーカーがありますが、地震前、お宅には戸別受信機がありましたか。また、その受信機はいつでも聞こえる状態にありましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
戸別受信機があって、いつでも聞こえる状態になっていた	139	68.1
戸別受信機はあったが、音がしばってあったり故障などで聞こえない状態だった	17	8.3
戸別受信機はなかった	39	19.1
その他		
無回答	9	4.9

問18. では、屋外拡声方式のスピーカーはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
ふだんから放送の内容がまったく聞き取れなかった	17	8.3
ふだんから放送の内容があまり聞き取れなかった	76	37.3
ふだんから放送内容はほとんど全部聞き取れる状態だった	97	47.5
その他	4	2.0
無回答	10	4.9

その他；風などに影響されやすかった、わからない、家にあるので外のはあまり聞かなかった、風で聞こえない時もあった

問18-1. (問18で、1あるいは2と答えた人だけお答えください) あなたが屋外拡声方式のスピーカーの音が聞き取れない理由は何ですか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。(N=93人)

	N	%
音が重なり合って聞き取れない	43	46.2
しゃべり方が早口で聞き取りにくい	7	7.5
音が小さくて聞き取れない	14	15.1
周囲に雑音が多くて聞き取れない	19	20.4
その他	30	32.3
無回答	4	4.3

問19. (再び全員がお答えください) 次に電話についてお聞きします。あなたは、今回の地震があつてから火災がおさまるころまで、どこかに電話をかけましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
電話をかけて全ての相手に通じた	9	4.4
電話をかけたが、一部しか通じなかった	3	1.5
電話をかけたが、一つも通じなかった	35	17.2
電話をかけようと思ったが、電話がなかった	66	32.4
電話をかけなかった	71	34.8
その他	10	4.9
無回答	10	4.9

その他；かける余裕なし、かけても通じない、お金がなくてかけられなかった

問20. 今回の地震では、電話についていろいろなことがありましたが、次の中であなた自身が経験したことを、いくつでも選んでください。(N=204人)

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	1	0.5
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が島外からたくさんかかってきた	85	41.7
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	85	41.7
無料の公衆電話を多くのマスコミの人が使って自分たちが使えなかった	14	6.9
流失や焼失した家に電話すると避難所の電話番号を伝えるサービスを利用した	20	9.8
無回答	64	31.4

問 2 1. 次に、地震・津波の情報やマスコミの取材についておうかがいします。まず、あなたが地震の後1週間くらいのあいだ、知りたかった情報は何か。次の中からいくつでも選んで下さい。(N=204人)

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	52	25.5
余震や津波の今後の見通しについて	58	28.4
地震・津波の被害について	41	20.1
家族や知人の安否について	101	49.5
行方不明者の救出・捜索活動について	53	26.0
国や道や町のとっている対策について	36	17.6
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	58	28.4
食料や生活物資について	62	30.4
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	35	17.2
奥尻島以外の地域の様子について	40	19.6
その他	16	7.8
特になかった	11	5.4
無回答	12	5.9

その他；学校、地元の情報－電気がない、1週間以内はそれどころではなかった、これからの生活について、これからどうするのか、今後のこと、避難場所への指示、今後の住居について、今後の住所、避難場所の指示（しばらく車中にいた）、避難場所の指示、身内にどう連絡をつけるか

問 2 2. では、あなたが知りたかったそういう情報をもっともよく伝えてくれたのは、つぎのうちどれでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
民放ラジオ	4	2.0
NHKラジオ	16	7.8
民放テレビ	6	2.9
NHKテレビ	48	23.5
新聞	21	10.3
防災無線	10	4.9
警察や消防の話	3	1.5
家族や近所の人から直接聞いたこと	62	30.4
他人との電話での話	1	0.5
その他	10	4.9
無回答	23	11.3

その他；情報が得られない、自衛隊、テレビ、町役場の人、なかった、はっきりとは

言えない、周りの人の話

問23. 次に、マスコミについてお聞きします。地震の発生にともない、多くのマスコミが地震と津波についていろいろ報道しましたが、その報道は役にたちましたか。

次の中から一つだけ選んで下さい。まず、NHKテレビはいかがですか。

(N=204人)

	N	%
非常に役にたった	107	52.5
ある程度役にたった	50	24.5
あまり役にたたなかった	16	7.8
全く役にたたなかった	13	6.4
無回答	18	8.8

問24. では、民間放送のテレビはいかがですか。(N=204人)

	N	%
非常に役にたった	86	42.2
ある程度役にたった	53	26.0
あまり役にたたなかった	23	11.3
全く役にたたなかった	20	9.8
無回答	22	10.8

問25. 次に、新聞はいかがですか。(N=204人)

	N	%
非常に役にたった	86	42.2
ある程度役にたった	46	22.5
あまり役にたたなかった	28	13.7
全く役にたたなかった	27	13.2
無回答	17	8.3

問26. 奥尻島には、津波の翌日から多くのマスコミがやってきて、いろいろ取材していましたが、あなたはマスコミの取材を受けましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
自分自身が取材された	148	72.5
自分は取材されなかったが、家族が取材された	15	7.4
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのをみたことがある	22	10.8
取材された経験もないし、取材のシーンを見たこともない	8	3.9
その他	4	2.0
無回答	7	3.4

問26-1. (問26で、1と答えた人だけお答えください) あなたが取材を受けたそのマスコミの人の取材態度はいかがでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=148人)

	N	%
たいへんよかった	46	31.1
まあ普通だった	67	45.3
やや感じが悪かった	11	7.4
たいへん感じが悪かった		
その他	20	13.5
無回答	4	2.7

その他；好意の持てる人も持てない人もいた、自分本位、しつこい、疲れているので困る、しつこい、悪い人も良い人もいたがおおむね良心的、しつこい、しつこい、しつこい

問27. 奥尻島の被害状況については、さまざまな報道がありましたが、あなたは奥尻の被害の実態や被災者の状態について、テレビや新聞はどう伝えたと感じていますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	5	2.5
適切に伝えていた	134	65.7
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	43	21.1
その他	10	4.9
無回答	12	5.9

その他；分からない、どうしようもない、おおげさに伝えていた、十分に伝えていない、どちらともいえない、どちらともいえない、正しい報道をしていない気がした、良いことも悪いこともあった、わからない、わからない

問 2 8 . 北海道南西沖地震のあと、いくつかのラジオで「〇〇さんの消息を知っている人は△△さんに電話してください」という放送をしていましたが、あなたは、そうした放送を聞いたことがありましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。

(N = 2 0 4 人)

	N	%
直接そうした放送を聞いた	5 1	2 5 . 0
放送は聞かなかったが、そうした放送をしていることは知っていた	4 2	2 0 . 6
そんな放送をやっているとは知らなかった	9 4	4 6 . 1
その他	2	1 . 0
無回答	1 5	7 . 4

その他；ラジオ放送は聞かなかった、ラジオは聞かなかった

問 2 9 . あなたはその安否をたずねるラジオ放送を利用したことがありますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N = 2 0 4 人)

	N	%
自分や家族の消息を伝えてもらおうとして電話をした	6	2 . 9
知人や友人の消息が知りたくて放送局に電話をした	1	0 . 5
利用しなかった	1 7 7	8 6 . 8
その他	3	1 . 5
無回答	1 7	8 . 3

その他；知人が電話した（自分をさがして）

問 2 9 - 1 . (問 2 9 で、1 および 2 と答えた人だけお答えください) では、あなたはこうした消息をたずねるラジオ放送は役だったと思いますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N = 7 人)

	N	%
役だったと思う	7	1 0 0 . 0
あまり役に立たなかったと思う		
その他		

問30. 今回の災害で多くのマスコミが奥尻島に来ましたが、そのマスコミの取材や報道について、なんでもけっこうですから、あなたの考えをお聞かせください。

- 落ち着いていない時に、何人死んだとか、誰が死んだとかと言われるのは迷惑。
- 相手の立場を考えて、そっとしておいて欲しい。風呂もマスコミが住民より先に 入ったとか聞いた。
- 気持ちの整理がつかないうちに（身内の安否が分からないうちに）しつこく、聞かないで欲しい。悲しいことを根ほり葉掘されたくない。マスコミが自己規制、自己判断して欲しい。
- マスコミが役にたった。悲惨な状態を伝えてくれた。
- マスコミがいろいろ教えてくれた。
- 津波だけでなく、火災の方しか関係無いのに報道がかたよっている。
- 関東大震災の予行練習のようだった
- 報道が役にたった。
- よくしてくれた。
- 親切だった。
- 島のことを心配して来たと思った。
- うるさい感じ。
- マスコミに聞かれるのはすきではない。
- 疲れているときに、来るのは頭に来るし、困る。
- うるさい、ああいうものだ。
- 援助はマスコミのおかです。
- 良い人
- 悪い印象ではない。雨の中でたいへんだろうと思った。
- 対応は悪くなかった
- うるさすぎる
- 忙しい時に、ズカズカくるのが嫌であった。
- 態度が良かった。力をつけてもらった。
- 遺体を運ぶときにも、マスコミがいた、しつこいと思う。そういう精神状態じゃない、もう少し考えてほしい。
- しつこい
- 話を聞いたり、話相手になった。
- しつこい
- 役にたった
- しつこい。良い面もある。（大勢の人々への呼掛けの点）
- マスコミがそれほど大きく報道したとは思えない。
- 少し図々しい面があった。公衆電話の長電話。
- 何でもとっていた。入らないことまで書いていた。
- 親切だった

- いい感じではなかった。電話での雑談は気分がよくない。印象はよくない
- もう少し遺族に気をつかつてくれても
- 親しくしたり話相手になってくれた
- 一時いそがしかったので他にまわした
- ニュースが早く伝わった。NHKが早かった
- 北海道新聞の人、親切であった
- しつこい。はたで見えていても腹がたった。気の毒な人や配給の列を取材するのはよくない
- 援助物資（現金）が豊かで特に海外（アメリカ）からもきた。マスコミに感謝している
- 良くやってくれた
- 幼稚園のNHKの取材があったので全国の幼稚園から手紙、義援金が集まった
- 忙しい時にしつこいのでやめてほしかった。数が多い。毎度も同じことをくりかえす人が違うのだから仕方がないが
- うるさい
- しつこすぎる。嫌いだ
- 国民から心配、見舞いをうけたのはマスコミのため
- 助かった
- 適切に伝えてほしい
- 大変親切であった
- 助かった
- 迷惑はなかった
- 大変親切であった
- 無事を知らせてくれてありがたかった
- ふつう
- よかった
- 多少のしつこさは皆感じているように思う。何回も同じことを聞かれた。たえずいろいろな放送局がはいっていたため
- あれだけの災害ならば多くの人にもくるだろうし、伝えなくてはいけないのだからきてもよいと思う
- しつこい
- 役立った
- しつこい
- 役立った
- 職務なのでしつこくもなるであろう
- しつこい。忙しいのにきちんとした答えができなかった
- 取材の対象がきまっている。同じ人が多い。広く取材対象をとったほうがよい
- 朝から晩まで見られている感じ。カメラをかくしてもちこもうとしていた。プライベートな部分での取材は困る

- 良かった
- 話はしなかった
- 親切だった
- 避難場に常時いて困った
- 新聞、TVの取材がしつこい。遺体のそばで質問

問31. 次に、今回の地震の前兆現象についておたずねします。あなたは地震の前に動物や地下水の異常、地鳴り、海鳴り、海面の異常など何らかの前兆を感じていましたか。もしあれば具体的にお聞かせ下さい。

- よく釣りをするのだが今年は魚のとれ方が全く違う、魚のサイズも違う、15年間やっているが今までこんなことはない
- 雲がいつもと違う。当日の夜魚のうろこみtainな雲がぼつぼつ
- 祖母が松江の山に住んでいるがねわき水の井戸を使っている。その水がとぎれた（地震の一週間前から）
- あとで考えるとネズミが5月に夜、山から海へといたりきたりするのを目にした
- 今年から海水温度が高い、ウニの成長よかった
- 直前に雷のような音がした
- 一週間も潮がかれなかつた
- 今まで湧いていた水が2、3日前から出なくなった
- ネズミが多くいた、寒かった
- 天気がさわやかでなかった、いつもより寒かった
- 潮がひかなかった
- ネズミ（地下のネズミ）が発生した
- ネズミが多くでている（長浜で）、一ヶ月くらい前にヘビもでたという話を聞いた
- ツバメが巣からいなくなった
- 全然なし
- カラスが加工場にこなかった
- その夜、寝つかれなかった、いつもは寝巻をきないのにその日に限って着てた
- 12日はいいなぎだつた。別に異常だとは思わなかったが
- 当日、息子が一時間前に帰ってきた。いつもより魚が釣れないといっていた
- 津波の音
- 風がなくて天気が良かった。地震がおこる前からずっと波がひいていた
- 一ヶ月前くらいに何度も何KMにもわたって、ネズミがたくさんでた
- 動物（鳥の鳴き声）、地下水がでた。山にヘビがでた
- 潮の流れが速い
- 南東の風が多かった。山瀬の時干潮、35CMも高い（5月ころからずっと）
- ネズミの異常発生。カラスがPM9：00異常に鳴いた。温泉の温度があがった

- ネズミが多かった
- 一週間前から温泉が熱いという話を聞いていた
- アンテナ（8 Mくらい）をとりつけにいて屋上にいたときカラスが全然いなかった
- ネズミが山のほうへ移動
- ネズミが多く動いた
- 畑のそばにネズミがいなかった。朝、潮位が高かった。夕、潮位が低い
- 飼い猫が無性に鳴く、うるさかった
- 港の潮位が高い。水力発電所でネズミの死体が多く流れていた
- 漁師の人が1 か月程前にきて海の中が渦巻いている、海底がきもちわるい、蛇が山からおりてきていると言った
- 鯉を飼っていた。それが2、3日前から暴れていた。ネズミが多いという話を聞いていた。10年前もねこもいなくなった
- トタンがたくさんつんであるのを見て（1、2日前に）地震がきたらどうすべなと思った
- 見たことのない大きな蛇が出た
- 魚がよく釣れた
- 静かな夜だった（10年前の地震の時もそうだった）
- 朝、カラスが一羽もいなかった。ヒラメが異常にとれた。カタツムリがたくさんいた
- 静かな夜だった
- 潮位が高かった
- 潮位が高かった
- 潮位が高かった
- わからない
- 巨大な潮虫が発生、ネズミの発生
- 犬が変な声で何日も鳴いていた（朝、夕）
- 気づかなかった
- 聞いた話では、農家の方からネズミの異常発生
- ネズミがたくさんいた、6月頃、笹の白い花があると地震がくるというウワサがあり今年は咲いていた
- ネズミの大発生
- 動物（鳥の鳴き声）
- 野ネズミが増えた。前日ネズミが一匹もいなくなった。温泉の温度があがった
- ネズミが長浜に夜たくさんいた。笹の花が咲いた。深海2000の調査
- 天気がとてもよかった（10年前も）、いいなごだった。当日フェリーの船着場の水位がいつもより低かった
- 温泉が異常に熱かったらしい
- 小鳥が籠から逃げようとした。温泉が熱かった（1か月前）
- 余震があった（6月の末）、ネズミがたくさん道路に出ていた（夜間、1、2か月前）
- なごが続いた（6月中頃）

○ネズミが山へ向かっているという話も

問 3 2. 地震学者のなかには、近い将来に奥尻島の周辺で地震が起こるかもしれないといっていた人がいましたが、あなたはこのことを知っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
知っていた	58	28.4
知らなかった	138	67.6
無回答	8	3.9

問 3 3. けれども、今回の地震が起こった日にちも規模も予知はできませんでした。あなたは今まで、今回のようなマグニチュード7.8クラスの大地震なら予知はできるものと思っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
思っていた	47	23.0
思っていなかった	148	72.5
その他	2	1.0
無回答	7	3.4

問 3 4. 次に、大津波のうわさについてお聞きします。大地震の後2週間ほどたった7月25日に震度4の余震が2度ありました。その時、再び大津波が来るという話が広がりましたが、あなたはその日、このような話を聞きましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
聞いた	101	49.5
聞かなかった	93	45.6
無回答	10	4.9

問34-1. (問34で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい) それは、具体的に
はどんな話でしたか。覚えていることを教えてください。

- 自分はこのくらいならこないと思った。逃げた人もいる
- 来るかもしれないが、ここ来岡会館にいれば大丈夫だ
- 保安庁の船が津波がくると知らせた
- 占い師が地震がくると言ったと聞いた
- 大きい津波がくる
- 津波がくる
- 再びくる
- 再びくる
- 再び津波がくる
- また来るのではないか
- 津波がくるのではないか
- 避難場にいた
- また来る
- 来るのではないかと考えていたが、漁にも出ていた
- 高台だから津波は何ともない
- すぐ来ると
- 来るにしても高台まではこないと思った
- 住んでいる所(避難所)まできたら大変だと思った
- 自衛隊の方から
- 津波警報がきた
- 貴重品だけでももつて逃げねばと思ったが何も避難はしなかった。
- 落ち着けと言いつつ
- 近所から津波がくると
- 津波がくるかもしれない
- 再び津波がくる
- また来る
- また来るので気をつける
- また来る
- また来る
- 必ずもう一度くる
- 再び来る
- 再度くる
- また来る
- 津波がくる
- 心理的に皆そう思った
- 人をまどわすような話だった

- 津波がくるから高台へ
- 津波がくる
- 再びくる
- 津波が来る
- また津波が来る
- また来るのでは
- 津波が来る
- 地震の時は（震度3、4の時）必ずもう一度来る
- 「10日から12日後に再び地震がある」
- 津波が来る、墓地の下へは下らないようにという話を聞いた
- 津波が来る
- 津波が来る
- 津波が来る
- 再び警報が出た
- また津波が来る
- 津波が来る
- また大きいのが来る
- わからない
- 再び来る
- また来る
- また来る
- 再び来る
- 再び来る
- 津波が来る
- 来る
- また津波が来る
- 再び来る
- 再び来る
- また来る
- また津波が来る
- 再び来る
- 震度4で津波が来る（10年前も震度4）
- 津波が来る
- 一か月後に大きい余震がくれば地震が収まる。大きい地震がくれば津波も来る
- 十年前の時もあったから
- 津波が来るかもしれない
- また津波が来る
- 再度来る

問34-2. (問34で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい) あなたは、その話をだれからお聞きになりましたか。次のなかからいくつでも選んで下さい。

(N=101人)

	N	%
家族から	11	10.9
近所の人から	65	64.4
親戚・知人から	16	15.8
職場の人から	1	1.0
警察や消防から	1	1.0
報道関係者から	4	4.0
その他	12	11.9
無回答	5	5.0

その他；体育館にいた人々（避難所）、自衛隊、テレビ、避難していた人たちから、防災無線、中学校にいた人々、役員の人

問34-3. (問34で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい) あなたはその話を聞いて、大津波が本当に来ると思いましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。

(N=101人)

	N	%
大津波が本当に来ると思った	33	32.7
ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った	44	43.6
大津波が来るとは思わなかった	21	20.8
その他	1	1.0
無回答	2	2.0

その他；たいしたことはないと思った

問34-4. (問34で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい) では、あなたはその話を聞いて実際に避難しましたか。(N=101人)

	N	%
実際に避難した	28	27.7
避難しなかった	54	53.5
その他	13	12.9
無回答	10	9.9

その他；避難所にいた、避難所にいた、避難所にいた、避難所にいた、外へでて様子を見た、避難所にいた、避難所にいた、避難所にいた、すでに避難所にいた、様子を見た、島にいなかった、避難所にいた

問35. (再び全員がお答え下さい) 今回の災害では、災害の直後から赤十字や民間の人たちがいろいろなボランティア活動を行ないました。あなたはどのようなボランティア活動をしてもらいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。
(N=204人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	30	14.7
けがや病気の手当	98	48.0
炊事・洗濯の手伝い	79	38.7
義援物資の仕分け・運搬	135	66.2
宅配便関係	29	14.2
掃除	38	18.6
引っ越しの手伝い	45	22.1
話し相手	14	6.9
その他	5	2.5
無回答	22	10.8

その他；島にいなかった

問35-1. (問35で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
あなたは、そうしたボランティア活動のうち、どれがありがたかったですか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=182人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	19	10.4
けがや病気の手当	85	46.7
炊事・洗濯の手伝い	51	28.0
義援物資の仕分け・運搬	102	56.0
宅配便関係	14	7.7
掃除	20	11.0
引っ越しの手伝い	29	15.9
話し相手	14	7.7
その他	5	2.7
無回答	6	3.3

その他；風呂そうじ、物資援助、風呂、医療関係

問35-2. (問35で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたが受けたボランティアは、どのような人(グループ)でしたか。あてはまるものにいくつでもまるをつけてください。(N=182人)

	N	%
個人	62	34.1
団体	162	89.0
わからない	11	6.0
無回答	5	2.7

問35-3. (問35で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたは何時からボランティア活動を受けましたか。また、その人数は何人くらいでしたか。

期間；(省略)

人数；(省略)

問36. (再び全員がお答え下さい) あなたは、今回のボランティア活動についてどう思いましたか。あてはまるものを一つだけ○をつけてください。(N=204人)

	N	%
ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う	190	93.1
ボランティア活動はあまり役に立たなかったと思う	1	0.5
ボランティア活動はかえって迷惑だったと思う		
ボランティア活動をみたことがないのでわからない		
その他	4	2.0
無回答	9	4.4

その他； 町との連携がとれていなかった。個人できた人は思うような活動ができなかったのではない、島にいなかった

問 3 7. あなたは、今後他の地域で災害があった時、ボランティア活動を行ないたいと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
ぜひ行いたい	60	29.4
可能ならば行いたい	116	56.9
行うつもりはない	2	1.0
その他	13	6.4
無回答	13	6.4

その他；地元ならできるが島外へは事情によりできない。また統率してくれる機関があればそれに従って動くが一人でやっても仕方がない、年齢が・・・、年がわかれば行く、体が悪いから出来ない、年齢が高いので不可能、年だから体が許すかぎり、江差までなら(年だから)、今はそういう余裕はない、今は余裕なし、迷惑になるので行かない、そばなら行ってもよい、高齢である

問 3 8. あなたは今回の災害の経験から、今後災害地においてボランティア活動は必要だと思いませんか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
個人・団体を問わず絶対必要だと思う	138	67.6
個人のボランティアは必要である	1	0.5
団体から派遣されるボランティアは必要である	51	25.0
被災地救済は行政が行うことであり、ボランティアは必要ない	1	0.5
その他	1	0.5
無回答	12	5.9

問39. (災害の後、避難所で生活した人だけお答え下さい) あなたは、避難所での避難生活で不便や不満を感じたことがありますか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。(N=204人)

	N	%
なんとなく落ちつかなかった	85	41.7
プライバシー	34	16.7
風呂	75	36.8
人間関係	36	17.6
騒音	20	9.8
洗濯	45	22.1
食事	20	9.8
子供の学校	12	5.9
寝具等	49	24.0
する事がなかった	19	9.3
交通の便	28	13.7
マスコミの取材	30	14.7
冷暖房	10	4.9
衛生	22	10.8
情報の入手	21	10.3
電話のとりつき	14	6.9
その他	19	9.3
不便や不満はなかった	23	11.3
無回答	49	24.0

その他；無線が聞こえない、衣類、水の事、贅沢は言っていない、本島にいた、水、地元の人の救助の態度が乱暴、トイレ、よく寝られなかった、水が出なかった、よく寝られない、水が出ない、衣類

問40. (災害の後、仮設住宅に入居した人だけお答え下さい) あなたは、仮設住宅での生活で不便や不満を感じていますか。あてはまるものにいくつでも○を付けてください。(N=204人)

	N	%
なんとなく落ちつかなかった	72	35.3
プライバシー	15	7.4
風呂	15	7.4
人間関係	9	4.4
騒音	16	7.8
洗濯		
食事	4	2.0
子供の学校	4	2.0
寝具等	3	1.5
する事がなかった	12	5.9
交通の便	34	16.7
マスコミの取材	2	1.0
冷暖房	2	1.0
衛生	13	6.4
情報の入手	2	1.0
電話のとりつき		
その他	31	15.2
不便や不満はなかった	65	31.9
無回答	9	4.4

その他；薬屋、病院が遠い（奥尻島まで720円かかるので、病院に行くのなら半額にしてほしい）、バスがない、防災無線、防災無線、どこに行くのにも遠い、防災無線、狭いから、隣近所に迷惑にならないようにする、贅沢はいつていられない、トイレ、風がふくとゆれる、狭い、海が遠い、狭い、トイレ、狭い、冬に対する準備、周りに対して気をつかう（音など）、個別の受信機、行政の対応、贅沢は言われない

問41. 今回の津波災害の後、あなたやご家族がかかえている生活上の問題について、どんなことでもけっこうですからお聞かせください。

○土地、移転、住宅問題

○仕事がない

○これからの土地のこと。下には、もう建てられないと言う説明をこの前うけた。

○仕事（漁師）ができない。2年後が心配だ。

○できれば、もう1部屋欲しい

- 寒くなったらどうするのか、気になる。水道とかガス警報機がついていない。
- すきま風が入る。土ほこりが入る。
- トイレがすぐ溜る。なかなか直して貰えない。
- 今後の事、住むところが決まらない。
- 今後の生活（早く生業が出来るようにしたい）
- 収入
- 忙しい
- 住宅の事
- 住宅の事（2年後）
- 民宿の仕事ができなくなった
- 今後をどうするのか
- 進学の問題、最終の生活場所の問題
- 金銭的な問題、住宅の問題
- 住宅の事（2年後）
- 住宅の問題（2年後）
- 2年後の住宅の事、新築の家が焼けたので借金
- 仕事（漁師）ができない
- 1年くらい、何も出来ないのでたいへん
- 忙しい
- 家が狭い
- 住宅のこと（2年後）
- 買物に時間がかかる
- 仮設住宅の期限
- これから寒くなること
- 今後の住宅の事、狭い
- 住宅が狭い
- 何処に家を建てるのか。国、町の方針が分からない
- 老人が気の毒、部屋が狭い
- 海の状況が知りたい、その後の生活補償
- 狭い、冬の不安
- 今は特になし、しかし2年後が恐ろしい（ここを出なくては行けないので）
- 見通しがたたない
- 何とか商売が軌道にのった、2年後が心配
- 今後の事、住むところ
- 今後の事
- 仕事ができない
- 船に出ること、船を準備しようとしている
- 収入、衣類の不足
- 健康上の問題

- 仮設住宅は狭い
- 住居
- 病院が無い
- 漁業を辞めたらどうかという話があった、移転の悩み
- 狭い、漁師ができない
- 家のローンとか経済的なこと
- 住む所
- 1人けが人がいる
- 仮設は狭い
- 漁業組合、復活した
- 住み家、漁業ができるか
- 漁師として漁にでること（先が見えない）、住宅
- これからどこへ落ち着くのか、家族と一緒に暮らせるのか
- 街づくりがはっきりしていない、住居を建てたい（土地）、町民に対する働きかけを一人一人に聞いて欲しい
- 休む所が狭い
- 家が狭い、店が流れてしまったので稼げないからお金がない
- 狭い、6人だからもう一部屋欲しい
- 家を建てること
- スナックに建て変える（現在食堂）
- 収入、土地
- 家が狭い
- 忙しい（郵便局）
- 今後のこと
- 家が狭い、仕事がすぐ出来なかった
- 早く出たい
- スナックに建て変える（現在食堂）
- 収入
- 今後の住居
- 家を建てること
- 将来のこと
- 収入、土地のこと
- 収入（漁師としての）
- 今後の家
- 今後の住居
- 収入
- 仮設は狭い、しかし落ち着いてきた
- 救援物資をおく場所がない
- 仮設住宅、狭い、暗い

- 狭い
- 生活していける
- 収入
- 健康上の問題
- スナックにする
- 思うような漁ができない
- 住宅
- 収入、着物の不足
- 冬に対する準備
- 隣近所関係
- 仕事場まで遠い
- 収入
- 放送がよく聞こえるようにしてほしい、遠くてよく聞こえない（屋外スピーカー）
- 収入（先が見えない）

問４２．では、あなたは国や北海道や町に対してどのようなことを望みますか。次の中からいくつでも選び○をつけて下さい。（N＝２０４人）

	N	%
地震・津波予知体制の強化	８０	３９．２
消防力や緊急医療体制の強化	５８	２８．４
広報の充実	２８	１３．７
被災者のための公的住宅の建設	１０１	４９．５
町・村の対応体制の強化	５６	２７．５
観光客の誘致対策	２０	９．８
情報連絡体制の強化	３３	１６．２
漁業施設への公的援助	７８	３８．２
避難所や避難道路の整備	５２	２５．５
個人被害の補償	８８	４３．１
防波堤（防潮堤）のかさ上げ	６２	３０．４
集団移転の促進	５７	２７．９
その他	６	２．９
無回答	１７	８．３

その他；もとの奥尻にしてみらいたい、生業への援助

問44. 最後に、国・北海道・奥尻町など行政に対する不満や要望がありましたら、問43と重なってもけっこうですから、どんなことでもお聞かせください。

- 幾らでもあるけど、個人被害の保障と被害者のための公的住宅の建設。
- 言ったらきりが無いが、将来安定した生活。商売が出来るようにしてほしい。
防災設備の完備、地震予知機。
- もっとお金を出して欲しい。
- 早めに避難場所、道路、漁業関係を整備してほしい。
- 1日でも早く、全島（個人的にも島全体にも）の復興ができるように援助してほしい。
- 早く復旧作業をしてほしい。
- 借家の人（借りた人、貸した人）へは、お金が半分しかないので可愛そう。
お金の分配はどうなっているのか。
- まだ行政の情報も入ってこない、火災保険が降りない。
- この町にずっと住める環境にしてほしい。
- もう1回、元の場所に住みたい。1次産業の復興を早くしてほしい。
- 行政の対応が遅い。
- 何でも早くしてもらいたい。
- お金、今後の事。
- 日本海側の地震の観測網をできるだけ早く作って欲しい。
普段から行政は研究者の声を聞いて欲しい。
- 対策が遅い。
- 対応が遅い。
- 住宅問題、造船の問題。
- 人間関係を戻して欲しい。
- 貰った物を明確に伝えて欲しい。
- 現場にあうような、特に青苗の火災の場合は、消火弾2・3個でも投下してくれれば、
まだまだ事故が防げたはずと思う、その点を強く叫びたい。
義援金を明確にして欲しい。
- 一部を集団移転させる。
- 行政の対応の仕方が遅い。
- 援助の不公平を見直す。
- 町の施設の整備。
- 住居、1日も早く環境の整備
- 家をたてる場所を探して欲しい。
- 土地、住宅について、保障（生活基盤）、義援金について。
- 援助、施設、イカの内臓の処理場、町作りの着工を早くして欲しい。
- 偉い人に言ってもどうしようもない。
- 不満を言っても仕様がなから、別がない。命助かったんだから、不満言うより頑張っ
ていこうという感じ。

- 保険金が出てこないで困る。
- 対応が遅い。
- 義援金がどのくらい来たかということを教えて欲しい。どの様に使われたのか教えて欲しい。
- 個人被害の保障－設備がなくて、仕事が出来ない。
- 対応が遅い。
- 住宅を早くしてほしい。
- 対策が遅い。
- これからの生活が気になる、早く対策を。
- 多少の損得は別にして、早く対策をとること。
- 防波堤をもっと高く。
- 対応が遅い。
- 有難い。
- 病院がない。
- 漁業しやすい場所への移転。
- 火災保険を適用してほしい。
- 町民のことを考えずに勝手に行政が青写真をつくって、ここは住める住めないと決めていくのはおかしい。集団移転の場所も勝手に決めてる（地主は知らない）本当にそれができるのか？漁師を優先しすぎている、漁師がいきになっている。中小企業を無視している。
- 不満はない、ありがたい。
- 早く復旧の対策を、多少損をしても。
- 住宅について対応が必要。
- 対策が遅い。
- 個人被害の補償、火災保険の適用。
- ありがたいと思っている、赤十字に募金します、自衛隊もよかった。
- 早く住宅を立てる施策、港。
- 自然の災害、これからの津波や地震の後、復興。
- もっと町民の気持ちになって親身になってほしい、早いうちに意見を聞いてほしい。
- これからの交渉でどうなるか。
- Q 4 2に同じ。
- 病院の保険について。年金では暮らせないので何とかして欲しい。
- 金を出してほしい。
- 家を建てる人、補助金。
- 対応が遅い。
- 対策を早く。
- 漁師の不満はかなりあると思う、仮設住宅は海から遠い。
- 地震、津波予知体制の強化。情報を公開すべきである。
- 安心感を与えるために予知体制を整えてほしい、人的被害を防いでほしい。

- 年配の方に適した仕事がほしい。
- 対応が何でも遅い。これから住宅をどうするか。お役所仕事になっている。
- 物事を早め早めにしてほしい。
- 今後の住宅について。
- 遅い。
- 対応が遅い（義援金など）
- 対策は早くして。
- きちんと住宅問題に対処する。
- 住宅のため補助金。
- 対策を早く。
- 対策を早く（家を建てる）
- 住宅問題をきちんとする。
- もっと早く対応。
- 個人被害の補償。
- 防波堤を高くする。
- 遅い。
- 一日も早く住宅を建てられる様にする。
- 区画整理を早く、住宅を早く建てること。
- これからの生活がどうなるのか、町がどのようにしてくれるのか、もっと早く対策をこうじる。
- 個人被害の補償の処理を早くして欲しい。
- 消防力の強化（道路、水）
- 自家発電の設備、予知をしっかりとできればありがたい。
- 住宅建設をちゃんとしてほしい。
- 消防の強化。
- 対策を早く。

どうもありがとうございました。最後に、あなたご自身のことをおたずねします。

問1. あなたの性別はなんですか？あてはまるものを一つだけ選び、○をつけて下さい。
(N = 204人)

	N	%
男	83	40.7
女	120	58.8
無回答	1	0.5

問2. あなたの年齢はおいくつですか？具体的に教えてください。

平均；54.9歳

問3. あなたの主な職業を次のうちから一つだけ選んで○をつけてください。
(N = 204人)

	N	%
漁業	37	18.1
農業		
商業	35	17.2
サービス業	4	2.0
旅館・民宿	3	1.5
公務員（教員を含む）	8	3.9
会社員	11	5.4
主婦	80	39.2
学生	1	0.5
無職	14	6.9
その他	10	4.9
無回答	1	0.5

その他；土方、製材業、大工

問4. あなたは、奥尻島にお住まいになってから何年になりますか。(N = 204人)

	N	%
生まれてからずっと奥尻島に住んでいる	145	71.1
よそから移ってきた	58	28.4
無回答	1	0.5

問5. 津波が起こったとき、お宅には次のような方が一緒に住んでいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=204人)

	N	%
小学生以下の子供	40	19.6
70歳以上のお年寄り	39	19.1
体の不自由な人・寝たきりの人	6	2.9
そのような人はいない	126	61.8
無回答	1	0.5

長い間どうもありがとうございました。

付属資料 3 - 2

北海道南西沖地震に関するアンケート調査

(大成町)

東京大学社会情報研究所

○調査期間；平成 5 年 1 0 月 2 9 - 3 1 日

○調査対象地域；大成町において被害がいちじるしかった 1 1 3 1 世帯
のうち、2 0 0 人

○調査方法；訪問面接法

問 1. 北海道南西沖地震が発生した 7 月 1 2 日午後 1 0 時 1 7 分、あなたはどこにいましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 2 0 0 人)

	N	%
大成町内の自宅	1 9 0	9 5 . 0
大成町内の自宅以外の建物の中	4	2 . 0
大成町内の野外	1	0 . 5
大成町にはいなかった	4	2 . 0
海上の船の中	1	0 . 5

問 2. では、地震が発生したとき、あなたは何をしていましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 2 0 0 人)

	N	%
すでに眠っていた	8 8	4 4 . 0
床に入っていたが眠ってはいなかった	3 4	1 7 . 0
風呂に入っていた	4	2 . 0
食事をしていた	1	0 . 5
お酒を飲んでいて	3	1 . 5
テレビを見たり本を読んだりしていた	6 0	3 0 . 0
その他	1 0	5 . 0

その他；友人と電話、仕事、台所にいた、作事中、仕事、トイレ、祭りの用意、花を生けていた、歯をみがいていた、寝る直前

問3. 地震が起こったとき、あなたはとっさに何をしましたか。次の中であてはまるものをいくつかでもお答え下さい。(N=200人)

	N	%
あわてて外に飛び出した	71	35.5
家族に逃げようと声をかけた	35	17.5
高台に向けて避難した	17	8.5
火の始末をしようとした	46	23.0
窓や戸をあけて外の様子を見た	30	15.0
室内を片づけた	2	1.0
服を着た・着替えた	48	24.0
家具などが倒れないように押さえた	18	9.0
頑丈なものにつかまって身をささえた	3	1.5
子どもや老人・病人などを気づかった	37	18.5
机の下などに身を伏せた	10	5.0
海や船のようすを見に行った	11	5.5
何もできずぼう然としていた	23	11.5
無我夢中だったので覚えていない	6	3.0
その他	24	12.0

その他；電灯を探した、うろたえた、様子を見た、こわくてふとんにいた、家へ帰った、子供をあやした、家に帰った、いすに座っていた、また寝た、家に帰った、仏神棚、船内にてエンジンを止めた、電気をつけた、水道の元をしめた、終わるのを待った、様子を見ていた、ガスを止めた、ガス、ガス、ガスをしめた、ガスの元栓、はって外に出た、タンスをおさえる、ガスの元栓、ドアを開けた、はって歩いて扉を開けた

問4. このたびの地震によって、あなたのご自宅はどんな被害を受けましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
津波によって自宅が全壊した	9	4.5
津波によって自宅が半壊または一部損壊した	5	2.5
津波によって床上浸水があった	2	1.0
津波によって床下浸水があった	7	3.5
地震の揺れで家が壊れたり家具が倒れりした	4	2.0
その他	23	11.5
被害はとくになかった	148	74.0
無回答	2	1.0

その他；棚の上の物が落ちた、ボート・いそ船が流された、船が流された、船が流された、物置が流された、漁船(6T)が壊された、船が流された、いそ船が流された、ミキサーが倒れた、集合エントツが倒れた、戸棚の中の物が落ちた、家にひびがはいっ

た、地盤が弱くなった、アンテナやガラスが割れた、船が少しこわれた、店の品がこわれた、商品が落ちた、倉がこわれる（海岸ぞいの）、会社が全壊した、棚の商品が倒れた、オイルの倉庫をやられた、オイルが海に流された、額が割れた、物が落ちた

問 5. 地震の後、お宅では停電しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N = 200 人)

	N	%
停電した	191	95.5
停電しなかった	7	3.5
無回答	2	1.0

問 5-1. (問 5 で「停電した」という人だけお答え下さい) お宅では何時間ぐらい停電していましたか。(N = 160 人)

	N	%
2 時間未満	15	7.9
2 - 4 時間未満	24	12.6
4 - 6 時間未満	71	37.2
6 - 8 時間未満	40	20.9
8 - 10 時間未満	6	3.1
10 - 12 時間未満	1	0.5
12 時間以上	3	1.6
無回答	31	16.2

(停電時間；平均 4.6 時間)

問 6. 地震の直後、あなたは、この地震で津波がくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N = 200 人)

	N	%
大きな被害が出るような津波が 来ると思った	57	28.5
来るとは思ったが、あれほど大 きな津波がくるとは思わなかった	84	42.0
津波のことはほとんど考えなかった	59	29.5

問6-1. (問6で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたが、津波がくると思ったのはなぜですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=141人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	57	40.4
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話を聞いていたから	21	14.9
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るということを知っていたから	55	39.0
その他	7	5.0
無回答	1	0.7

その他；潮がひきはじめた、父の話、電話がきた、昭和36年の台風などの被害により災害には注意していた、家族が言ったから、数回津波を経験している、こういう地震がいままでなかったから

問6-2. (問6で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたは、津波が地震の後どのくらいで来ると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=141人)

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	26	18.4
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	65	46.1
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	18	12.8
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	11	7.8
その他	2	1.4
無回答	19	13.5

その他；津波がきてたのであわてて逃げた

問 7. (再び全員がお答え下さい) では、地震の直後、あなたが避難したのは地震からどのくらい後のことでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N = 200人)

	N	%
まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた	21	10.5
揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた	87	43.5
津波がやってきてから避難しはじめた	38	19.0
津波がやってきてから避難しようとしたがもう避難できなかった	1	0.5
避難しなかった	51	25.5
その他	2	1.0

その他；一時間あとに避難した、夜であったので波が見えなかった

問 7-1. (避難した人だけお答えください) あなたが自宅から避難したのは、地震から何分後頃だったですか。おおよそでけっこうですからお答えください。

平均避難時間；7.8分

問 7-2. (避難した人だけお答えください) あなたが避難するきっかけになったのは何でしたか。あてはまるものを、次のうちからいくつでもお答えください。
(N = 146人)

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくると思ったから	41	28.1
家族が避難しようといったので	47	32.2
親戚や近所の人が避難するようにいったので	51	34.9
テレビで津波警報を聞いたので	1	0.7
ラジオで津波警報を聞いたので	12	8.2
実際に津波に襲われたので	10	6.8
その他	18	12.3

その他；台風の経験、知っている人からの電話、電話がきた、役場の人がきて避難してくださいと言われて、家が壊れると思った、町の広報車、役場から電話があった、警報を車で聞いた、スピーカーで警報を聞いた、役場で警報を広報車で扱めた、電話で、広報車の警報、川の音で津波が来るのがわかった、役場の広報車、町の広報車、役場

の広報車、役場の広報車、町の広報車、台風の経験上

問7-3. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき、どのようにして避難しましたか。主なものを一つだけ選んで下さい。(N=146人)

	N	%
歩いて避難した	56	38.4
走って避難した	22	15.1
自転車を使って避難した	1	0.7
バイクに乗って避難した		
自動車に乗って避難した	64	43.8
その他		
無回答	2	2.1

その他；おんぶされて、はって出た、二階に逃げた

問7-4. (避難した人だけお答えください) あなたはご家族と一緒に避難したのですか、それとも一人で避難したのですか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。(N=146人)

	N	%
家族全員で避難した	106	72.6
家族の一部と避難した	10	6.8
近所の人や親戚と一緒に避難した	29	19.9
一人だけで避難した	14	9.6
家族はいない	8	5.5
その他	2	1.4

その他；仕事仲間、お客さんと一緒に

問7-5. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲はどのくらい危険な状態でしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=146人)

	N	%
ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった	48	32.9
死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった	93	63.7
その他	4	2.7
無回答	1	0.7

その他；無我夢中でわからない

問 7-6. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲の混乱状況はどうでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=146人)

	N	%
避難する人や車はほとんどいなかった	22	15.1
避難する人や車が多少あった	87	59.6
周囲は避難する人や車でかなり混雑していた	32	21.9
その他	4	2.7
無回答	1	0.7

その他；混乱はなかった、車はなく人は多くいた、多数いたが混雑していない、多くいたが混雑していない、20～30人ぐらいの人が神社にいた

問 7-7. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき何か持ち出せましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=146人)

	N	%
かなりのものを持ち出すことができた	1	0.7
少しだけ持ち出せた	70	47.9
何も持ち出せなかった	74	50.7
その他	1	0.7

その他；お客さんの体だけ

問 8. (再び全員がお答え下さい) では、あなたは実際に津波に襲われましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	6	3.0
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.5
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	24	12.0
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	159	79.5
その他	2	1.0

その他；いそ舟が流された、病院で寝ていた

問 8-1. (問 8 で 1 あるいは 2 と答えた人だけお答えください) その津波からあなたはどのように助かったのですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=15人)

	N	%
よその人に助けてもらった	2	13.3
自分の力で津波から逃れた	13	86.7

問 9. (再び全員がお答え下さい) 10 年前の日本海中部地震のときも、大成町は津波によってかなりの被害を受けていますが、この 10 年前の経験は、今回のあなたの避難行動にどのように影響したと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う	46	23.0
日本海中部地震の経験がかえってわざわざいして、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う	12	6.0
日本海中部地震の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	86	43.0
日本海中部地震の経験はない	42	21.0
その他	7	3.5
無回答	7	3.5

その他；避難しなかった、避難していない、避難しなかった、避難していない、避難しない、避難してない、避難していない、ガスをとめた、札幌にいたのですぐ電話した、避難していない、経験があったがすばやく避難できなかった、特に恐ろしいとは思わなかった

問 10. 今回の津波は、皆さんのお住まいを完全に破壊してしまうほど大きな破壊力を持っていましたが、あなたは災害が起こるまで、津波がこんなに大きなエネルギーを持っていることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
10 年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	29	14.5
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	57	28.5
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	114	57.0

問 1 1. 津波は大きな破壊力を持つばかりでなく、場合によってはジェット機とかそれほどでなくとも新幹線と同じくらいの早いスピードで襲ってきます。あなたは災害が起こるまで、津波がこんなにスピードがあることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波のスピードは知っていた	15	7.5
実際に見たことはなかったが、津波のスピードは知っていた	25	12.5
津波がこんなにスピードがあるとは知らなかった	160	80.0

問 1 2. 次に、津波警報についてお聞きします。今回の地震では、地震の5分後に大津波の警報が出ましたが、あなたは、地震当日、津波警報をお聞きになりましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
聞いた	95	47.5
聞かなかった	104	52.0
その他	1	0.5

問 1 2-1. (津波警報を聞いた人だけお答えください) では、あなたはその津波警報をどのようにして知りましたか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。(N=95人)

	N	%
民放テレビから	1	1.1
NHKテレビから	8	8.4
民放ラジオから	8	8.4
NHKラジオから	22	23.2
警察や消防から	25	26.3
家族や近所の人から	16	16.8
その他	1	1.1

その他；役場の人、町の広報車、役場の人、町の広報車、町の広報車から、町の広報車、町の広報車、広報車、町の広報車、町の広報車、役場から、町の広報車、町の広報車、町の広報車

問12-2. (津波警報を聞いた人だけお答えください) その津波警報を聞いて、あなたは本当に大きな津波がやってくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=95人)

	N	%
警報でいうとおり、大きな津波がやってくると思った	25	26.3
津波が来るとは思ったが、あんなに大きな津波が来るとは思わなかった	51	53.7
津波が来るとは思わなかった	7	7.4
その他	12	12.6

その他；その前に来ていた、その前に来ていた、津波がきてから聞いた、その前に津波がきた、その前に津波がきた、その前にきていた、その前にはきていた、津波が来たあとだった、聞いたときはすでに津波がきていた、聞く前に津波が来ていた、もう既に津波は来ていた、すでに津波がきていた、川に波がきていた

問12-3. (津波警報を聞いた人だけお答えください) このとき出された津波警報は、3メートル以上の津波が予想される場合に出る「大津波警報」でしたが、あなたは「3メートル以上」と聞いて何メートルぐらいの津波が来ると想像しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=95人)

	N	%
3メートルぐらいの津波を予想した	6	6.3
3～5メートルぐらいの津波がくると思った	18	18.9
5～10メートル以上の津波がくるかもしれないと思った	12	12.6
10メートルをこえる津波がくるかもしれないと思った	5	5.3
何メートルの津波がくるか深く考えなかった	54	56.8

問 1 3. 大成町の一部地域では、地震と津波が起こる前に、たまたま津波の避難訓練をしていました。あなたは、その避難訓練に参加しましたか。(N=200人)

	N	%
避難訓練に参加した	10	5.0
参加しなかった	188	94.0
参加したかどうか忘れた		
その他	1	0.5
無回答	1	0.5

その他；当地区ではやっていない

問 1 3-1. (避難訓練に参加した人だけお答えください) あなたは、今回の津波で避難するとき、その避難訓練が役に立ったと思いますか。(N=10人)

	N	%
非常に役に立ったと思う	2	20.0
ある程度役に立ったと思う	4	40.0
あまり役に立たなかったと思う	2	20.0
まったく役に立たなかったと思う	2	20.0

問 1 4. 次に、電話についておたずねします。地震のあった夜から翌朝にかけて、あなたにどこからか電話がかかってきましたか。つぎのなかから一つだけ選び○をつけてください。(N=200人)

	N	%
電話がかかってきた	97	48.5
電話はかかってこなかった	48	24.0
避難などしていて家にいなかった	54	27.0
無回答	1	0.5

問 1 4-1. (問 1 4 で、電話がかかってきたという人だけお答え下さい) その電話をかけてきた相手の中に「あなたに電話をしたがなかなか電話が通じなかった」と言っていた人はいましたか。当てはまるものに一つだけ○をつけてください。
(N=97人)

	N	%
電話がかかりにくかった」と言っていた人がいた	76	78.4
別に「電話がかかりにくかった」とは言っていなかった	20	20.6
無回答	1	1.0

問15. では、あなたは、今回の地震と津波があった夜から翌朝にかけて、どこかに電話をかけましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
電話をかけて全ての相手に通じた	29	14.5
電話をかけたが、一部しか通じなかった	50	25.0
電話をかけたが、一つも通じなかった	37	18.5
電話をかけようと思ったが、電話がなかった	9	4.5
電話をかけなかった	72	36.0
無回答	3	1.5

問16. 今回の地震では、電話についていろいろなことがありましたが、次の中であなたが経験したことを、いくつでも選んでください。(N=200人)

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	2	1.0
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が町外からたくさんかかってきた	112	56.0
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	87	43.5
無回答	45	22.5

問17. 次に、地震・津波の情報やマスコミの取材についておうかがいします。まず、あなたが地震の後1週間くらいのあいだ、知りたかった情報は何ですか。次の中からいくつでも選んで下さい。(N=200人)

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	93	46.5
余震や津波の今後の見通しについて	115	57.5
地震・津波の被害について	97	48.5
家族や知人の安否について	70	35.0
行方不明者の救出・搜索活動について	53	26.5
国や道や町のとっている対策について	40	20.0
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	35	17.5
食料や生活物資について	25	12.5
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	30	15.0
大成町以外の地域の様子について	46	23.0
その他	5	2.5
特になかった	24	12.0

問18. では、あなたが知りたかったそういう情報をもっともよく伝えてくれたのは、
つぎのうちどれでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
民放ラジオ	8	4.0
NHKラジオ	27	13.5
民放テレビ	16	8.0
NHKテレビ	117	58.5
新聞	1	0.5
警察や消防の話	5	2.5
家族や近所の人から直接聞いたこと	9	4.5
他人との電話での話	1	0.5
その他	5	2.5
無回答	11	5.5

その他：ラジオ（民放とNHK）、ラジオ（どこかわからない）、ラジオ（民放とNHK）、自分で確かめた、ラジオ（民放とNHK）、テレビ・ラジオ

問19. 次に、マスコミについてお聞きします。地震の発生にともない、多くのマスコミが地震と津波についていろいろ報道しましたが、その報道は役にたちましたか。
次の中から一つだけ選んで下さい。まず、NHKテレビはいかがですか。
(N=200人)

	N	%
非常に役にたった	99	49.5
ある程度役にたった	77	38.5
あまり役にたたなかった	15	7.5
全く役にたたなかった	6	3.0
無回答	3	1.5

問20. では、民間放送のテレビはいかがですか。(N=200人)

	N	%
非常に役にたった	50	25.0
ある程度役にたった	104	52.0
あまり役にたたなかった	29	14.5
全く役にたたなかった	11	5.5
無回答	6	3.0

問 2 1. 次に、新聞はいかがですか。(N=200人)

	N	%
非常に役にたった	56	28.0
ある程度役にたった	81	40.5
あまり役にたたなかった	23	11.5
全く役にたたなかった	8	4.0
無回答	32	16.0

問 2 2. 大成町には、津波の翌日からマスコミがやってきて、いろいろ取材していましたが、あなたはマスコミの取材を受けましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。
(N=200人)

	N	%
自分自身が取材された	23	11.5
自分は取材されなかったが、家族が取材された	5	2.5
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのをみたことがある	56	28.0
取材された経験もないし、取材のシーンを見たこともない	113	56.5
その他	2	1.0
無回答	1	0.5

その他；電話で取材された、取材されたが忙しいので拒否した

問 2 2-1. (問 2 2 で、1 と答えた人だけお答えください) あなたが取材を受けたそのマスコミの人の取材態度はいかがでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。
(N=23人)

	N	%
たいへんよかった	13	56.5
まあ普通だった	10	43.5
やや感じが悪かった		
たいへん感じが悪かった		

その他；しつこいような気がした(感じが悪いわけではない)、亡くなった方に対しては気持ちを考えてほしい

問 2 3. 大成町の被害状況についてはさまざまな報道がありましたが、あなたは大成の被害の実態や被災者の状態について、テレビや新聞はどう伝えたと感じていますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	4	2.0
適切に伝えていた	101	50.5
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	88	44.0
その他	5	2.5
無回答	2	1.0

その他；奥尻だけが出すぎている、一方的に奥尻に集中しすぎて不満、奥尻ばかり取材されていて大成町はあまりされなかった（それなりの被害はあった）、あんなもんじゃないの？、奥尻ばかりで大成はほとんどなかった

問 2 4. 北海道南西沖地震のあと、いくつかのラジオで「〇〇さんの消息を知っている人は△△さんに電話してください」という放送をしていましたが、あなたは、そうした放送を聞いたことがありましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
直接そうした放送を聞いた	14	7.0
放送は聞かなかったが、そうした放送をしていることは知っていた	9	4.5
そんな放送をやっているとは知らなかった	177	88.5

問 2 5. あなたはその安否をたずねるラジオ放送を利用したことがありますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
自分や家族の消息を伝えてもらおうとして電話をした		
知人や友人の消息が知りたくて放送局に電話をした	1	0.5
利用しなかった	197	98.5
その他	2	1.0

その他；捜している人を知っていたので放送局に電話をした、ずっと聞いていた

問25-1. (問25で、1および2と答えた人だけお答えください) では、あなたはこうした消息をたずねるラジオ放送は役だったと思いますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=1人)

	N	%
無回答	1	100.0

問26. 今回の災害で多くのマスコミが大成町に来ましたが、そのマスコミの取材や報道について、なんでもけっこうですから、あなたの考えをお聞かせください。

- ☐ 悲しんでいる人がいるなかで報道の人の出入りが多く、いい感じはしなかった
- ☐ 気持ちはわかるけど適切に相手の立場を考えてほしい
- ☐ 奥尻のことはテレビで報道されていたが、大成のことは少ししか報道されなかったの
で情報がとぼしかった
- ☐ 取材はかなりして行ったが報道は奥尻島のことが多くて実際報道された分は、かなり
少なかった
- ☐ 大変な時だったのでわずらわしかった
- ☐ いろいろと親切にしてくれた。NHKより民放のほうが良かった
- ☐ 終わったあとの取材にあんなに力をいれる必要はない。不必要なものが多い
- ☐ マスコミはただ見ていくだけでなにも役にたっていない
- ☐ 関係のない人まできて、おもしろおかしくされた気持ちがある
- ☐ マスコミのしつこさが目につく。悲しみの中にいるのに自分のことだけ考え、他のマ
スコミよりも良い情報をとろうとする姿勢が目につく
- ☐ ほとんど大成のことがTVに報道されない
- ☐ 大成には情報が入ってくるのが遅い
- ☐ 良く伝えていたと思う
- ☐ 老人が片づけている横で、いきすぎの報道をしていた
- ☐ 取材をするだけでTVもラジオも全くでない
- ☐ よくやっていると思う。でも奥尻ばかりだった
- ☐ しつこすぎる。いい加減にしてほしい。無理やり言わされた
- ☐ ちょうどよい
- ☐ 奥尻が一番被害をうけたように報道されていたが大成もかなりすごい被害を受けてい
たのに、報道されていない
- ☐ 病院にいたのでわからない
- ☐ 大成町の大きな被害ばかり報道して全員がしんでいるような放送をしていた
- ☐ じゃまにならない程度、うろうろしていた
- ☐ あまりにも「お気の毒でした」とのことが多くだしすぎて、迷惑した
- ☐ 大成町のことはあまり詳しくされていなかった。奥尻島ばかり報道されていた

- もう少し大成町のことを報道してもらいたかった
- 漁業の被害の報道をやってもらいたかった
- もう少し大成町のほうもやってほしかった
- 大成町のことがすごく少なかった
- もう少し詳しく大成町のあたりを方を報道してもらいたかった
- 大成町の太田は全滅だったのに詳しく報道されなかった
- 家も人もなくしているのに、今の気持ちはどうですかなどというレポーターが多く、腹がたった
- 奥尻島ばかりではなく、大成町についても被害状況を正確に報道してほしい。地域のばらつきが目だった
- マスコミの食料の不備、自らの食事を用意していない
- 悪くないと思う
- 奥尻ばかりでなく大成町も、もっと多くやってほしかった
- 親切であった
- 地域の差が激しい
- 聞き方があまりにもしつこい
- 奥尻ばかりで大成町があまりでなかった
- 邪魔になった
- 地域的なかたよりがあった
- マスコミの取材に関して興味本意であった
- 奥尻島との差がありすぎる
- 奥尻ばかりが目立った
- 報道が奥尻に集中している
- 報道が非常にかたよっている
- 作業の邪魔になった
- 報道が集中しすぎる
- 報道が集中しすぎる
- 報道が奥尻に集中した。→行政の反応に対する影響
- 取材のしっぱなし
- 大成町があまりクローズアップされてない
- マスコミがたくさん来すぎて対応がたいへんだった
- 一部（奥尻の青苗）だけマスコミがさわいでいた
- 地震でこわれたのがあまり報道されなかった
- 津波と地震の被害は別
- マスコミは被害状況ばかり表に出して対策のことをあまり報道してくれなかった。これからの対策についてももっと取材してほしい
- 無理に取材させている。あまりにもマスコミが多く入ってきた
- やりすぎなのは（そっとしておいてあげたかった）
- 奥尻に大臣とか来たが、被害者の人と直接あって対話してほしかった

- まちがった報道はしてないと思う
- 亡くなった人に対し根ほり葉ほり聞くのはよくないと思う
- 一番知りたいのは、予知の正確なことをはっきり報告してほしい（予知連に対して）
- 太田にあまり取材されてない。交通便の悪いところには取材があまり行ってないと思う
- 現場にいたわけではないので思いつかない
- 報道は役には立っている
- 大成町はあまりのってなかった。もう少し詳しく
- 大成をもうちょっと報道してもいいのでは
- 同情的で良好
- 良好だと思う
- 大成の一部をもう少し
- 思ったことが伝わってないらしい
- あんなもんかと思った
- 亡くなった人にも今のお気持ちを聞いているのがわざとらしくった
- 奥尻が中心になっていたが、奥尻以外にもいろいろ取り上げてくれればよかった
- 奥尻が大きく取り上げられたのは当然だが、大成町や瀬棚のことももっと取り上げてくれれば
- よくやっていた
- 情報を集めるのはいいが、被害にあった人に直接聞くのはかわいそうだ
- 奥尻以外の町村の被害状況の報道が適切でない（不十分）であった
- 一所懸命

問27. 次に、今回の地震の前兆現象についておたずねします。あなたは地震の前に動物や地下水の異常、地鳴り、海鳴り、海面の異常など何らかの前兆を感じていましたか。もしあれば具体的にお聞かせ下さい。

- カラスがうるさかったと人から聞いた
- カエルがいつもよりうるさい。蒸し暑かった
- 海にいる虫が陸に上がってきた。その他、いつもなら姿を表す北キツネの姿がなかった
- 温泉のお湯がいつもより熱かった。飼っている動物が騒いだ。
- 早い時間から外が暗くなった。（PM5時頃）
- 犬が吠えてた。（いつもより）と近所の人が言ってた。
- 海が“ゴー”といった音を立てているのを聞いた
- 海の水が減った気がした
- “ドーン”という音がした。カラスがいなくなった。
- たての雲を見た

- 地震が起こる前ダイナマイトの爆発する様な音を数回聞いた。(地震ではない)
- 地震雲を7月7日の日に見た
- 地震が起こる前日夜、海を見ると、小さな波もなく鏡の様にきれいだった
- へんに生温い風が吹いていた
- 海が透きとおって見えた(前日)
- わらじ虫が家の中に入って来た
- 7/7に地震雲を見た
- 地震の当日、カラスの鳴き声が変わって今でも思い出す
- 地震が来る2、3ヶ月前、夢で家の前まで波が来た
- 7月10日土曜、第二土曜で休みのため子供連れで海岸に行ったが、砂の上に異常な程ウニが上がっていたのを不審に感じた
- 地震雲
- ネズミが家屋の中に多数入って来た
- カラス、カモメをみなかった
- 地震雲の発生
- テトラポッドに巣をつくっていた猫が見えなくなった
- 地鳴り
- カラスが2、3日前から見なくなった
- 地鳴りの音
- 地震雲の発生
- 動物がさわいだ
- カエルの鳴き方が異常
- 精神的に不安になっていた
- 犬が異常にさわいだ
- 地震雲を見た
- 動物、異常な程さわいだ
- 前日海が異常な感じがした
- 前日、地震雲がでていた。異常な雲が6月下旬に出ていた
- 地震雲を見た
- 夢見が悪かった
- 夜にカラスが鳴いていた
- ねずみがけっこう発生していた
- 金魚がばれていた(2日前から)
- 犬がうるさかった。昨年から地鳴りがあった。(ドーンという音)
- 異常に天気がよかった
- カラスがいなくなった
- 地震雲がでた、温泉がでなくなったという話を聞いた
- 春から、しお虫が陸に上がっていた
- 気温が高く感じた。蒸し暑かった(当日)

問 28. 地震学者のなかには、近い将来に北海道の南西沖の周辺で地震が起こるかもしれないといていた人がいましたが、あなたはこのことを知っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=204人)

	N	%
知っていた	38	17.5
知らなかった	162	81.0

問 29. けれども、今回の地震が起こった日にちも規模も予知はできませんでした。あなたは今まで、今回のようなマグニチュード7.8クラスの大地震なら予知はできるものと思っていたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
思っていた	35	17.5
思っていなかった	162	81.0
無回答	3	1.5

問 30. 今回の災害では、災害の直後から赤十字や民間の人たちがいろいろなボランティア活動を行ないました。あなたはどのようなボランティア活動をしてもらいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=200人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	14	7.0
けがや病気の手当	1	0.5
炊事・洗濯の手伝い	9	4.5
義援物資の仕分け・運搬	11	5.5
宅配便関係	1	0.5
掃除	6	3.0
引っ越しの手伝い	7	3.5
話し相手	4	2.0
その他	3	1.5
無回答	174	87.0

その他；老人の世話

問30-1. (問30で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたは、そうしたボランティア活動のうち、どれがありがたかったですか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=26人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	12	46.2
けがや病気の手当	1	3.8
炊事・洗濯の手伝い	6	23.1
義援物資の仕分け・運搬	6	23.1
宅配便関係		
掃除	1	3.8
引っ越しの手伝い	4	15.4
話し相手		
その他	2	7.7
無回答	2	7.7

問30-2. (問30で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたが受けたボランティアは、どのような人(グループ)でしたか。あてはまるものにいくつでもまるをつけてください。(N=26人)

	N	%
個人	5	19.2
団体	14	53.8
わからない	5	19.2
無回答	3	11.5

その他；大成高校OB、役場、婦人会、町内会、婦人会・青年部

問30-3. (問30で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたは何時からボランティア活動を受けましたか。また、その人数は何人くらいでしたか。

期間；

人数；

問31. (再び全員がお答え下さい) あなたは、今回のボランティア活動についてどう思いましたか。あてはまるものを一つだけ○をつけてください。(N=200人)

	N	%
ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う	148	74.0
ボランティア活動はあまり役に立たなかったと思う	1	0.5
ボランティア活動はかえって迷惑だったと思う		
ボランティア活動をみたことがないのでわからない		
その他	2	1.0
無回答	49	24.5

その他；大成町だけの人だけでやれたので役に立ったと思う、ボランティアといわれてもピンとこない。よくわからない、ぜいたくを言う人もいたからどうか。

問32. あなたは、今後他の地域で災害があった時、ボランティア活動を行ないたいと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
ぜひ行いたい	57	28.5
可能ならば行いたい	109	54.5
行うつつもりはない	27	13.5
その他	6	3.0
無回答	1	0.5

その他；行けない。身体が不自由、年なので行けない、年齢的に自分は無理、忙しいので無理、やらざるをえない

問33. あなたは今回の災害の経験から、今後災害地においてボランティア活動は必要だと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
個人・団体を問わず絶対必要だと思う	159	79.5
個人のボランティアは必要である	6	3.0
団体から派遣されるボランティアは必要である	21	10.5
被災地救済は行政が行うことであり、ボランティアは必要ない	8	4.0
その他	4	2.0
無回答	2	1.0

その他；受け入れ体制ができれば必要、レベルをあげてから、ゴミのようなものを寄付されるのは困る、受け入れ体制があるかどうかによるのではないか、ボランティアの人

が宿泊施設や食料を国にたよるボランティアはいらない

問34. (災害の後、避難所で生活した人だけお答え下さい) あなたは、避難所での避難生活で不便や不満を感じたことがありますか。あてはまるものにいくつでも○をつけて下さい。(N=200人)

	N	%
なんとなく落ちつかなかった	3	1.5
プライバシー	2	1.0
風呂	1	0.5
人間関係	1	0.5
騒音	2	1.0
洗濯	3	1.5
食事		
子供の学校	1	0.5
寝具等	1	0.5
する事がなかった	2	1.0
交通の便	1	0.5
マスコミの取材	1	0.5
冷暖房	3	1.5
衛生		
情報の入手	1	0.5
電話のとりつき	1	0.5
その他	1	0.5
不便や不満はなかった	9	4.5
無回答	180	90.0

問35. 今回の津波災害の後、あなたやご家族がかかえている生活上の問題について、どんなことでもけっこうですからお聞かせください。

- ☐ 今後、地震が来るかもしれないという不安
- ☐ 地震への不安
- ☐ 地震観測地を大成町にも設置してほしい
- ☐ 家を直しているが、早く直したい
- ☐ 不安がまだある
- ☐ 常に不安がある
- ☐ 船が無くなってしまい生活が大変なので困っている

- 年をとった人をわずらっているのが気にかかる
- 仮設住宅にはいつまでも住んでいられない。
- 何も無くなってしまって、買うにも大変だ。
- 何でももらえるので、何もない。
- 300万程の被害を受けたが、役場から何の挨拶もない。お見舞いの一つもない。
- タオル・石鹸などくらいで、お見舞金が出ない。
- 体の調子が悪くなり、仕事ができなくなった。
- 仮設住宅が狭い。寝るには狭い。
- 船・機械が壊れてしまった。
- 仮設住宅は狭い。
- 身の安全が心配
- 子供達のこと
- 年寄りがいるが、車などがないので、そういう時にはどうしたら良いか困っている。
- 夫の仕事が忙しくなった。
- 商売上、売上が下がった。
- 子供を自由に遊びに行かせられなくなった。
- 大事な物をまとめる様になった。電池を買った。
- あまり被害が多くなかったのではない。
- 海に魚（宗八ガレイ）がいなくなった。
- 車2台と、イン船が流されたので、金銭面で大変苦しんだ。
- 家の基礎が緩んだ。
- 大事な物は枕元に置くようになった。不安がつきまとう。
- 1ヶ月以内は電池、通帳、ハンコ etc を枕元に置いていた。
- 仕事上（病院）子供を守ってあげたかったが、患者さんがいるので一緒にいられなかったのが不安。
- やっぱり不安がある。
- 店に売っている物が高くなった。
- 家が半壊だったので、町から50万円しかもらえなく、金銭面で大変だ。
- 井戸水が出なくなった。なんとかしてほしい。
- 老人の世話
- 家屋の修復
- 避難して来た家族・親類が多かった
- 不安がました
- 不安がとれない
- 精神的に不安がある
- 体があまりよくないので、避難の時が心配
- 住宅問題
- 住宅問題
- 非常に不安がある

- 不安だ
- 用心深くなった
- 避難場所がない。年寄りの方が多くてなかなか避難できない
- 商売で、消費意欲がなくなってきている
- 津波のあと船がやられて漁ができなくなった
- 商売ができない。仕事の話ができない（お得意先に対して）
- 被害はなし。火災保険がでてない。津波では保険がおりてこない。
- 直接支障はない
- 船の機械（網あげ機）が使用ができなくなった
- 風呂がこわれた

問 3 6. では、あなたは国や北海道や町に対してどのようなことを望みますか。次の中からいくつかでも選び○をつけて下さい。（N＝200人）

	N	%
地震・津波予知体制の強化	114	57.0
広報の充実	47	23.5
被災者のための公的住宅の建設	50	25.0
町・村の対応体制の強化	42	21.0
観光客の誘致対策	7	3.5
情報連絡体制の強化	63	31.5
漁業施設への公的援助	56	28.0
避難所や避難道路の整備	68	34.0
個人被害の補償	35	17.5
防波堤（防潮堤）のかさ上げ	56	28.0
集団移転の促進	57	27.9
その他	6	3.0
無回答	13	6.5

その他；川に何かしてほしい、観測所が欲しい。大成町の震度が出ないので震度がわからない、無線が欲しい

問 3 7. 最後に、国・北海道・奥尻町など行政に対する不満や要望がありましたら、問 3 6 と重なってもけっこうですから、どんなことでもお聞かせください。

- 避難訓練
- 国・道の災害時における指導力を強めてほしい。
- 義援金などが集まっても、個人には1円も来ないので、家の修理代などは借りたりしているのでもう少しそのへんを考えてほしい。

- 避難場所等の誘導や前もっての情報の提供
- 船を流された分の補償が2／3と最近やっと決まったので（約3～4ヶ月後に船が来ると）、その間収入がないので、もっと早く補償額などを決定してほしい。
- 働くところがない。若い人がみんな出ていく。
- お金が出ない。家を建てたいがお金がない。冬になるのに冬物の服がない。
- なににもない。十分である。
- 税金を安くしてほしい。（災害にあった人について）
- 津波災害で家のなくなった人達が、手際良く生活できるようにしてほしい。
- 漁業施設がなくなり、漁場に行っても仕事にならない。
- 冷凍工場の施設ができないので、急速にやってほしい。援助がほしい。
- 不満を言ってもしょうがない。
- 川をなんとかしてほしい。
- 台風のように地震の場合も教えてほしい。
- 道路を整備してほしい。避難道路を作る。
- 個人被害の補償をしてほしい。
- 国の対応が遅い。
- 防波堤のかさ上げ。
- 防災無線を付けてほしい。
- 一家一家に消防団と直通のインターホンをつけてほしい。
- 道路工事に不満がある。
- 何か災害のあった時のための放送をしてもらいたい。
- 大成町には個人個人の家に無線が支給されてない。他の町にはある。
- 寄付の問題。役場、日赤、大成町などまとめて1ヶ所で寄付が出来ればと思う。
- 避難道の整備をしてほしい。
- よくやってもらっている。
- 自分自身のイソ船が流されているのに、太田地区の人命救助に1ヶ月半も時間を割いているのに、何の援助もない。
- 宮野地区・太田地区は小さい水道なので、ちょっとした地震ですぐに止まってしまうのでちゃんとしてほしい
- 川の整備などが遅い。
- いろいろよくやってもらっている。
- 早く地震予知が出来るようにしてほしい。
- 町で50万被害の大きい地区の対応があまりにも遅い。
- 被害の大きい地区の対応があまりにも遅い。
- 義援金の用途の正確な発表を欲する。
- 情報の速度の遅さ。指示内容の不徹底。
- 災害に対する意見の統一。
- 情報の伝達強化。
- 復旧対策の充実

- 不必要なまでに救援が来た。
- 金銭的援助
- 連絡体制の強化。通信機器など
- 防災連絡体制の強化
- 対策の促進
- す速い対応を希望する
- 十分とはいかないが、行政はよくやっている
- 大成町にも防災無線を付けてほしい
- 予知を強化してほしい
- 対応が非常に遅い
- 対応が遅すぎる。漁業に対する援助があまりにない
- 避難場所の確保（安全な）。広報の強化。対応が遅い。対応方法の問題。避難道の増加
- 住宅問題
- 復旧作業の充実。情報伝達の遅れをなんとかしてほしい
- 避難した人たちの身の回りをすぐ用意できる（食料など）体制になってほしいと思う
- 津波で停電してサイレンが鳴らなかった。各家に対してでも道路にでも無線をつけてほしい
- 町の対応が悪い
- 防波堤を高くしてほしい
- 町の防災対策の対策が全くない（現在も）。事務的な対応でもう少し親身になってほしい。
- もう少し予知の情報を流してほしい。地震がおこるならどこでおこるのかおしえてほしい
- もっと視察してほしい。隅から隅まで調査してほしい。月日がたつと補償してくれないので、すばやく補償してほしい。年寄り中心の町なのでその対策もしてほしい。
- 避難場所がちゃんとしたところにあるようにしてほしい
- 避難道路の整備
- 地震で火事になったのに火災保険や車の保険の対象にならないというのは不満
- 要望を親身になってきいてくれない（大成町）
- 防波堤は高くして欲しい
- 町長が積極的でないのでだれか来て欲しい。上浦の川が水が上がったのに、遊園地を作ったりしていらいらする
- 人口減少をくいとめる対策を親身になって考えて欲しい。
- 被害がなかったからあまりピンとはこない
- 防波堤をもっと高く。
- 寄付の衣類が全然着られないものとかゴミに出すような服は貰っても困る。はた迷惑
- 避難所の整備

- 町はよくやっていると思う
- 情報の充実。広報車の声が低い
- 大成町の観測所が無いので作って欲しい
- 町役場の人の対応が事務的で
- 広報・連絡が遅かった。処理が事務的。町の対応態度の悪さが目についた
- 地震後の対策が遅い
- 被害が無かったから別にない
- 町に対して・こういうことが起こったらすぐ広報する。情報網、無線の整備
- 橋を作って欲しい
- 家の一部が壊れた人にも補償をして欲しい
- 過疎対策
- 役場の人は頑張ってくれてよくやってくれた
- よくやっている

どうもありがとうございました。最後に、あなたご自身のことをおたずねします。

問1. あなたの性別はなんですか？あてはまるものを一つだけ選び、○をつけて下さい。
(N=200人)

	N	%
男	67	33.5
女	133	66.5

問2. あなたの年齢はおいくつですか？具体的に教えてください。(N=200人)

	N	%
20歳未満	6	3.0
20-30歳未満	10	5.0
30-40歳未満	27	13.5
40-50歳未満	37	18.5
50-60歳未満	35	17.5
60-70歳未満	55	27.5
70歳以上	30	15.0

問３．あなたの主な職業を次のうちから一つだけ選んで○をつけてください。
(N = 204人)

	N	%
漁業	31	15.5
農業	6	3.0
商業	20	10.0
サービス業	5	2.5
旅館・民宿	2	1.0
公務員（教員を含む）	7	3.5
会社員	3	1.5
主婦	73	36.5
学生	6	3.0
無職	35	17.5
その他	12	6.0

問４．あなたは、大成町にお住まいになってから何年になりますか。(N = 200人)

	N	%
生まれてからずっと大成町に住んでいる	104	52.0
よそから移ってきた	95	47.5
無回答	1	0.5

問５．津波が起こったとき、お宅には次のような方が一緒に住んでいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N = 200人)

	N	%
小学生以下の子供	42	21.0
70歳以上のお年寄り	62	31.0
体の不自由な人・寝たきりの人	9	4.5
そのような人はいない	100	50.0
無回答	2	1.0

長い間どうもありがとうございました。

付属資料 3－3

北海道南西沖地震に関するアンケート調査

(島牧村)

東京大学社会情報研究所

問 1. 北海道南西沖地震が発生した 7 月 12 日午後 10 時 17 分、あなたはどこにいましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 182 人)

	N	%
島牧村内の自宅	165	90.7
島牧村内の自宅以外の建物の中	6	3.3
島牧村内の野外		
島牧村にはいなかった	5	2.7
海上の船の中		
その他	2	1.1
無回答	4	2.2

その他；(自宅にいた)

問 2. では、地震が発生したとき、あなたは何をしていましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N = 182 人)

	N	%
すでに眠っていた	74	40.7
床に入っていたが眠ってはいなかった	42	23.1
風呂に入っていた	2	1.1
食事をしていた	1	0.5
お酒を飲んでいた	5	2.7
テレビを見たり本を読んだりしていた	46	25.3
その他	9	4.9
無回答	3	1.6

その他；(次の日の食事の支度をしていた)(仕事で他家へ訪問)(ユースホステル内でホステラーと話をしていた)(床に入っていた)(札幌にいた)(電話をしていた)(勤務していた)(札幌より来客あり、雑談中)

問3. 地震が起こったとき、あなたはとっさに何をしましたか。次の中であてはまるものをいくつでもお答え下さい。(N=182人)

	N	%
あわてて外に飛び出した	33	18.1
家族に逃げようと声をかけた	62	34.1
高台に向けて避難した	45	24.7
火の始末をしようとした	40	22.0
窓や戸をあけて外の様子を見た	48	26.4
室内を片づけた	7	3.8
服を着た・着替えた	65	35.7
家具などが倒れないように押さえた	18	9.9
頑丈なものにつかまって身をささえた	16	8.8
子どもや老人・病人などを気づかった	32	17.6
机の下などに身を伏せた	7	3.8
海や船のようすを見に行った	21	11.5
何もできずぼう然としていた	29	15.9
無我夢中だったので覚えていない	3	1.6
その他	12	6.6
無回答	3	1.6

その他；（止まるまで待っていた）（義理の親に電話をした）（落ち着いてから外に出た）（すぐ停電したので電灯を探し火の始末をした）（治まるのを待っていた）（布団を被ってじっとしていた）（すぐ治まると思って寝ていた）（戸を開けて外に避難した）（ラジオと思って外に出て車のラジオを入れた）（地震が終わるまで動けなかった）（小震があったが今におさまるものとそのままの状態で見守ったが何時間も長く感じる。その内異常に気づき外に出た。道路は川と化し津波と気づき避難体制をしたが水は次第に減木をしはじめ、その後トラックにて前の老人夫婦と共に役所前に避難）

問4. このたびの地震によって、あなたのご自宅はどんな被害を受けましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
津波によって自宅が全壊した	15	8.2
津波によって自宅が半壊または一部損壊した	12	6.6
津波によって床上浸水があった	15	8.2
津波によって床下浸水があった	13	7.1
地震の揺れで家が壊れたり家具が倒れりした	8	4.4
その他	24	13.2
被害はとくになかった	90	49.5
無回答	5	2.7

その他；（家屋等に緩みが出ている。縦横、上下の動きが非常に激しかったためであろうか）（倉庫二軒浸水）（物置だけが、一部損壊した）（玄関の中に水が入った、家の前の畑が塩水で野菜がだめになる）（当直だったので、酒魚協組合一階全壊）（モルタルにヒビ）（モルタルがひび割れ、食器類等が壊れ）（外面では見えない家の土台や、モルタルの剥離、戸のずれなど）（石油タンクが傾いた）（コップが3コ壊れた）（物置に水が入ったが家には中ぐらいまで）（家、横の畑、小屋に津波襲う）（磯船を流した）（住宅が国道より5m変所にあり、20段の階段の7階まで津波がきた）（外に止めてあった車が、塩水につかり廃車になった）（食器類が数枚割れた。家の外の灯油タンク（380リットル）が傾いた）（車庫が浸水した）（今の電気が落ちて壊れたり、逃げる時、車などに海水がかかったりして壊れた）（物置小屋が1m位移動した）（小震があったが今におさまるものとそのままの状態で見守った）（横にある物置小屋が流される）（漁船2隻を失った）（商店なのでビン等がくずれた）（漁船、漁具が全損）（寺院なので本堂の仏具が落ちたり、壊れたりした）（船外機が海水をかぶってしまった）（船、網壊）

問5. 地震の後、お宅では停電しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N=182人)

	N	%
停電した	177	97.3
停電しなかった	1	0.5
無回答	4	2.2

問5-1. （問5で「停電した」という人だけお答え下さい）お宅では何時間ぐらい停電していましたか。（N=177人）

	N	%
2時間未満	5	2.8
2-4時間未満	5	2.8
4-6時間未満	1	0.5
6-8時間未満		
8-10時間未満	1	0.5
10-12時間未満	2	1.1
12時間以上		
無回答	163	92.1

問 6. 地震の直後、あなたは、この地震で津波がくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
大きな被害が出るような津波が来ると思った	25	13.7
来るとは思ったが、あれほど大きな津波がくるとは思わなかった	99	54.4
津波のことはほとんど考えなかった	53	29.1
無回答	5	2.7

問 6-1. (問 6 で、1 および 2 と答えた人だけお答下さい) あなたが、津波がくると思ったのはなぜですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=124人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、自分で津波を経験したから	48	38.7
津波は経験していないが、日本海中部地震のときの話を知っていたから	29	23.4
日本海中部地震の話は聞いていないが、大地震の後には津波が来るとを知っていたから	31	25.0
その他	9	7.3
無回答	7	5.6

その他；（あまりにもゆれが大きかったから）（向いの奥さんに言われて、後で分かった）（意外に動きが大きかったから）（学生時代に地学で、地震のメカニズムを勉強したから）（家の前が船入間があるが、間底の水がきれいに水がなくなり魚船隻が破損した）（海の側に住んでいるので大地震＝津波と日頃から思っていた）（地震があると津波が来ると思っている）（津波は経験ないが、過去に島牧で津波が来た話を来て知っていたから。また、強い縦波の後横波が長かったので震源が近いと思った。）（戸を開けた時、引き波のすごい音を聞いて）（地震がおさまってすぐにガスを止めに外に出たら、もう津波がきていた）（外でまわりの人たちが言っていた）（祖父、祖母から聞いていた）（大地震の後には津波が来るとは思っていました）（10年前の秋田沖の津波位かと思っていました）（地震後の津波の話は聞いていたが、経験は初めて）（揺れが普通じゃなかった）（地震があまり強くなかったので、何も考える事が出来なかった）

問6-2. (問6で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたは、津波が地震の後どのくらいで来ると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N=124人)

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	18	14.5
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	26	21.0
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	33	26.6
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	19	15.3
その他	6	4.8
無回答	22	17.7

その他；(オフトークの教えでびっくりした)(ラジオの警報では、15分位で津波と言っていたが3分位で来た)(地震の震度によって)(ここまで早く来とは思わなかった)(早く来ると思ったがこんなに早く来とは思わなかった)(いつ頃来るのか全くわからずただ津波のくる方向を見ていた)(地震が終わり早く来とは思わなかった)

問7. (再び全員がお答え下さい)では、地震の直後、あなたが避難したのは地震からどのくらい後のことでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N=182人)

	N	%
まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた	20	11.0
揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた	54	29.7
津波がやってきてから避難しはじめた	61	33.5
津波がやってきてから避難しようとしたがもう避難できなかった	10	5.5
避難しなかった	17	9.3
その他	11	6.0
無回答	9	4.9

その他；(津波の影響がなかったので、津波の来た後かどうか分からなかった。避難したがなんでもないと思い自宅へ帰った。その後でオフトーフで避難するように言わ

れたので、再び避難した）（避難はすぐしたが、高台に住んでいたのいつ津波が来たのか分からない）（老人がいるので、避難出来なかった）（国道より少し高い場所で山側に家があったから）（地震の動きが止む5、6分にて津波が来た）（津波が来て、しばらくしてから避難した）（自宅が少々変所にある近所の人達7人位私達の家避難していた）（自分は外で、腰まで津波につかった）（揺れがおさまって歩く途中に私達の所までという少し余裕がありました）（家の前で波を見ながら待機をした）（二度目の津波が来る時に避難しました）（地震が終わって津波がくるかと浜を見に行つて津波に60m位、流されて助けられる）（高台にあるので近所の人避難してきた。それから避難するよう言われ、皆でさらに高台へ逃げた）（地震が終わって寝床から起きて下へ降りたとたん救急車が止まったのであわてて行ったら、老夫婦は岩の下で死んでいたので避難はしなかった）（地震、津波がおさまってから）（避難所だから）（2度の津波の音で避難した）（揺れがおさまらないうちに、船の見回りに行った）

問7-1.（避難した人だけお答えください）あなたが自宅から避難したのは、地震から何分後頃だったですか。おおよそでけっこうですからお答えください。（N=135人）

	N	%
3分未満	5	3.7
3分以上-5分未満	14	10.4
5分以上-7分未満	32	23.7
7分以上-9分未満	10	7.4
9分以上-11分未満	39	28.9
11分以上	30	22.2
無回答	5	3.7

平均避難時間；11.3分

問7-2. (避難した人だけお答えください) あなたが避難するきっかけになったのは何でしたか。あてはまるものを、次のうちからいくつでもお答えください。
(N=135人)

	N	%
日本海中部地震の経験から、また津波がくる と思ったから	39	28.9
家族が避難しようといったので	35	25.9
親戚や近所の人が避難するようにいったので	25	18.5
屋外のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	3	2.2
家庭内のオフトーク通信スピーカーが 避難を呼びかけたので	30	22.2
テレビで津波警報を聞いたので	4	3.0
ラジオで津波警報を聞いたので	7	5.2
実際に津波に襲われたので	15	11.1
その他	29	21.5
無回答	3	2.2

その他；(上下の振動が激しく、家が破壊するかと思ったので)(屋外のオフトーク通信の様子を見ようと思った)(大きな地震だったので、津波は必ず来ると思い近所の方々に話し避難した)(父が津波が来ると言ったから)(札幌に泊まっていた次男からの電話で津波の来るのをしった。停電中、テレビは見られずに居たが電話はゆれがおさまってから5分位後)(日本海中部地震の経験は、ないが津波は来ると思った)(津波が来たから)(海の音を聞いて)(年寄りの2人住まいなので、すぐ安全と思われる場所へ)(大きな地震の後には津波がくると聞いていたから)(海の水が引く音がしたから)(大地震=津波と思っていたから)(海鳴が聞こえて来た)(家財などの揺れで自分の感で)(電気が消えて、暗く、外へ出ようとしたら津波が来た)(停電したので外の車でラジオを聞いた)(音がすごかったので直感的に)(外に出ないと危ないと思った)(港の水位が上がってきたので)(近所の人「津波が来たー」という声で)(オフトーク通信も停電で役に立たなかった)(消防の人々が車で避難するよう言っていたので)(岩の恐ろしさで津波の恐ろしさは感じなかった)(家が海にすぐ横にあったから)(高潮に襲われた事があるので)(付近が避難しだしたので)(漁港から上がった津波が道路に沿って流れてきたから)(家の前の広場に急いで出た。その後、避難のための特別移動無し)(海水が引けたから)(また大きな津波が来ると主人が言ったから)9津波が見えて音がすごかったから)(停電す、テレビ、オフトークだめ)(オフトーク、テレビ、ラジオの放送前に逃げた)

問7-3. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき、どのようにして避難しましたか。主なものを一つだけ選んで下さい。(N=135人)

	N	%
歩いて避難した	50	37.0
走って避難した	32	23.7
自転車を使って避難した	1	0.7
バイクに乗って避難した	1	0.7
自動車に乗って避難した	45	33.3
その他	4	3.0
無回答	2	1.5

その他；(学校屋体) (船7.4 t 港外にだすのに、1.5 tトラックで船に。自宅から約300 m (娘婿が迎えに来た) (停電したため、近所の高台に車を上げてライトを照らして、近所の方々と避難した) (揺れたから、はって外に出た) (裏山に登った) (近所の人の車) (津波に流されて家の人に助けられる) (水の中を歩いて) (お年寄りがいた)

問7-4. (避難した人だけお答えください) あなたはご家族と一緒に避難したのですか、それとも一人で避難したのですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=135人)

	N	%
家族全員で避難した	94	69.6
家族の一部と避難した	8	5.9
近所の人や親戚と一緒に避難した	16	11.9
一人だけで避難した	8	5.9
家族はいない	4	3.0
その他	3	2.2
無回答	2	1.5

その他；(家内と共に裏の小高い所) (家族全員と近所の方々と避難した) (隣の婆さんも乗車して) (家族は先に避難していた) (宿泊客(全員をつれて一緒に避難した) (家族全員と近所の老人2人) (主人が船を見に行ったので、息子と逃げた) (家族は先に避難していた)

問7-5. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲はどのくらい危険な状態でしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。

(N=135人)

	N	%
ひょっとしたら死んだりけがをしたりしたかもしれないほど危険な状態だった	61	45.2
死んだり怪我をしたりするという危険はほとんどなかった	59	43.7
その他	6	4.4
無回答	9	6.7

その他；(揺れが終わってすぐ避難した)(避難したときは、まだ海もとても静かだった)(安全な場所に逃げたから安心)(港の前の高台なので港に置いているトラックや漁船がぶつかりあっている音と道路に流れてくる残がいで危険を感じた)(家族でいったん逃げたのですが隣に親戚の人がいたので父さんが助けに行ったので津波が来ているので心配した)(自宅前の海岸堤防から波が超えなかった。地形のせいようです)(となりの災害に行かないで漁港へ行ったら波にさらわれて命はなかったと思います)(道路に木の枝や海水が少しかぶった程度だったが津波だとは思わなかった)(安全な場所だったのでのんびりしていた)

問7-6. (避難した人だけお答えください) あなたが避難しているとき、周囲の混乱状況はどうでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=146人)

	N	%
避難する人や車はほとんどいなかった	19	14.1
避難する人や車が多少あった	63	46.7
周囲は避難する人や車でかなり混雑していた	35	25.9
その他	7	5.2
無回答	11	8.1

その他；(裏の小高い所に、近所)(一人で二階にかけのぼった)(一応落ち着いていた)(もうすでに近所の人は避難していた)(裏山に逃げた)(近所の人々が道路より一段高いところに集まった)(裏山へ逃げたため近所の人達だけ)(波に流されているので状況は不明)(どうすることも出来ないのですぐ裏山に避難しました)(裏の山へ逃げた)(暗闇で分からなかった)

問7-7. (避難した人だけお答えください) あなたは避難するとき何か持ち出せましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=135人)

	N	%
かなりのものを持ち出すことができた	2	1.5
少しだけ持ち出せた	43	31.9
何も持ち出せなかった	71	52.6
その他	13	9.6
無回答	6	4.4

その他；(貴重品、若干の飲物、菓子類、水、医薬品、着るもの)(足元を見るのに電池のみ持参)(タオルケット、おんぶする紐)(業務用金庫)(いつも用意してあるからリュックを背負って)(7月5日に亡くなった夫の遺骨と預金通帳)(子供のミルク、タバコ、海中電灯)(裏山があるので、何も持ち出さなかった)(お金)(電池1本だ)(命だけ助かればと思って電気一つだけ持って逃げました)(家の中で飼っている犬を抱いて逃げた)(荷物を少々)(毛布、御本尊、寺院の為)(隣の救急車が気になったので、起きたまま靴を履いただけで逃げた)

問8. (再び全員がお答え下さい) では、あなたは実際に津波に襲われましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=200人)

	N	%
家のなかで津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	15	8.2
避難しているとき津波に襲われて、津波にさらわれたり体が水に浸かったりした	9	4.9
津波に襲われなかったが、目の前までまたはすぐ後ろまで津波が来た	68	37.4
津波に襲われなかったし、そんなに危ない思いもしなかった	68	37.4
その他	18	9.9
無回答	4	2.2

その他；(パジャマのままで、船にエンジンをかけ作業灯300点灯、まだ津波は来てなかった)(3-5分で荷揚げ、岸壁に波が第一波です、すぐロープを外して船を走らせた、津波は引かないで最初から膨れていました(父さんは今は、船の下になった時の足を悪くして病院に通って何にも働きができません)(停電で音だけ聞こえて、不安だった)(家の中にもうすでに波が入って来てから2階に逃げた)(磯船を見に行き津波に逢い身体半分見ずに入った)(闇夜の中の津波の不気味な音が恐ろしかった)(早々に出たので津波の事は知らなかった、過去にも津波に合った事はない)(津波

の前に逃げた）（裏がすぐ海なので、津波が来ないか見に行き、海岸線がいつもと同じである事を確認して、背をむけて歩き出して間もなく津波に襲われた）（5 m位の海岸堤防があり、目の前まで来た）（地震が止み港に船を見に行く途中で1回目の津波）（国道で車ごと津波をかぶった）（本村は津波の恐ろしさはなかったが岩の恐ろしさは今でも思い続けています）（本村は岩の下で生活しておりますので何とかしてくれればと願っています。

日々の生活はとても不安でございます）（車が水に浸ったので車から降りた）（津波が100 m手前の国道まで来た）（津波に約30メートル流された）（玄関の前が水で膝までつかって車でゆっくり走って逃げた）（自動車で避難中、津波に襲われた）（漁船上で襲われた）

問8-1.（問8で1あるいは2と答えた人だけお答えください）その津波からあなたはどうして助かったのですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
（N=24人）

	N	%
よその人に助けてもらった	1	4.2
自分の力で津波から逃れた	19	79.2
その他	3	12.5
無回答	1	4.2

その他；（第一波が入ってきて、ひきはじめの終了時に港口を出れたのでは？と思っている）（裏窓を破って逃げた）（早めに避難した）（私達の所はおもに川の方がひどくなり民家の方は余りひどくありませんでした）（早めに高台に逃げる）（早く逃げた）（水がひけてから逃げた）（イソ舟で流されましたが人の助けで中から持ってきてくれました）（国道まで津波が来た）（家族4人であるが3人で助け合って二階に逃げた。1人は外にいて、1人で逃げた）

問 9. (再び全員がお答え下さい) 10 年前の日本海中部地震のときも、大成町は津波によってかなりの被害を受けていますが、この 10 年前の経験は、今回のあなたの避難行動にどのように影響したと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N = 182 人)

	N	%
日本海中部地震の経験があったから、すばやく避難することができたと思う	29	15.9
日本海中部地震の経験がかえってわざわざいして、津波が来るのにまだ余裕があると思い避難が遅れてしまったと思う	32	17.6
日本海中部地震の経験は、今回の避難とはあまり関係ないと思う	48	26.4
日本海中部地震の経験はない	55	30.2
その他	6	3.3
無回答	12	6.6

その他；(北の地震は近くだからすぐ津波が来ると言っていた)(あんな大きいのが来るとは思わなかった)(地震はあったが当地に津波の被害はなかった)(中部地震の津波は 0.8 m 位だから)(夜で海が見えないので津波の状況がよく判らなかったが海鳴りがジェット機で発生する音のようでした)(何も考えられなかった)(家が海のすぐ横にあったから)9 頭がパニックになり、日本海中部地震など思い出せなかった)(日本海中部地震は、約 20 分以上はあったと思う)

問 10. 今回の津波は、皆さんのお住まいを完全に破壊してしまうほど大きな破壊力を持っていましたが、あなたは災害が起こるまで、津波がこんなに大きなエネルギーを持っていることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N = 182 人)

	N	%
10 年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	21	11.5
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	45	24.7
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	106	58.2
その他	2	1.1
無回答	8	4.4

その他；（家の父さんは地震は近いところだからすぐ津波は来るから、船を上がると言っ
て靴下もはく暇がないので、裸足でなが靴をはいて浜に走ったのです。一回上げて二
回目には津波が来て、船は道路まで流されてそのまま家の前まで波と一緒に道路を水で
上がって、電柱にくくりつけて、私を迎えに来たときは、私は呼ばれても返事ができ
ませんでした、その時は浜の電柱にぎっしり捕まったまま離れられませんでした）（
津波がどんな物か知らなかった）（津波はおかげでこの目では見なかった。翌朝の様子
を見ましたが、とてもとても口で表すことの出来ない有様でございます。本当に気の
毒で言葉の出ようもありません）

問 1 1. 津波は大きな破壊力を持つばかりでなく、場合によってはジェット機とかそれ
ほどでなくとも新幹線と同じくらいの早いスピードで襲ってきます。あなたは災害が
起るまで、津波がこんなにスピードがあることを知っていましたか。あてはまるも
のを一つだけ選んで下さい。（N = 182人）

	N	%
10年前も経験しているので、津波の スピードは知っていた	20	11.0
実際に見たことはなかったが、津波の スピードは知っていた	15	8.2
津波がこんなにスピードがあるとは知 らなかった	141	77.5
無回答	6	3.3

問 1 2. 次に、津波警報についてお聞きします。今回の地震では、地震の5分後に大津
波の警報が出ましたが、あなたは、地震当日、津波警報をお聞きになりましたか。あ
てはまるものを一つだけ選んで下さい。（N = 182人）

	N	%
聞いた	66	36.3
聞かなかった	108	59.3
無回答	8	4.4

問12-1. (津波警報を聞いた人だけお答えください) では、あなたはその津波警報をどのようにして知りましたか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。
(N=66人)

	N	%
民放テレビから	3	4.5
NHKテレビから	17	25.8
民放ラジオから	8	12.1
NHKラジオから	23	34.8
警察や消防から	17	25.8
家族や近所の人から	9	13.6
その他	25	37.9

その他；(オフトーク) (オフトーク通信で聞いた) (オフトーク通信) (オフトーク通信) (村のオフトークで聞いた。既にそのときは、津波が来ていた) (オフトーク) (車のテレビで知った) (オフトーク通信で) (うしお通信) (オフトーク) (村内有線放送オフトーク) (ラジオ警報は15分位後と言っていたが3分位で来た) (村のオフトーク) (オフトーク通信2回目の時) (オフトーク) (親戚より電話で) (村のオフトークからも聞いた) (村営のオフトーク) (村内のオフトーク放送) (ラジオを聞いてすぐ電灯で海堤防から海を見たら海が川の流れの様に大きな音を立てて流れていた。それですぐ、家族、近所に津波が来てるからと知らせて裏山に避難させた) (すでに眠っていて、テレビを見て、親類の札幌からの電話) (オフトーク) (警報を聞く余裕はなかった) (オフトーク通信で) (オフトーク通信で) (オフトーク通信) (オフトーク通信で) (オフトーク通信で) (オフトーク通信)

問12-1-1. (問12-1で、テレビ・ラジオから津波警報を聞いた人だけお答え下さい) あなたが、初めて津波警報を聞いたのはどこの放送局でしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=41人)

	N	%
NHKテレビ	13	31.7
NHK衛星テレビ	1	2.4
NHKラジオ	21	51.2
HBCラジオ(ベストテン北海道)	2	4.9
忘れた	3	7.3
無回答	1	2.4

問12-2. (津波警報を聞いた人だけお答えください) その津波警報を聞いて、あなたは本当に大きな津波がやってくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=66人)

	N	%
警報でいうとおり、大きな津波がやってくると思った	14	21.2
津波が来るとは思ったが、あんなに大きな津波が来るとは思わなかった	38	57.6
津波が来るとは思わなかった	4	6.1
その他	5	7.6
無回答	5	7.6

その他；(警報はまったくなし)(警報前に津波は来た)(警報を聞いた時にはすでに海岸線の人々は津波を受けて私の家の所まで来ていた)(停電している為、警報は津波の後で聞いた)(津波が来て近くの避難場所に行ってから、しばらくしてから見た)(警報もろくに聞こえないうちに、波が来た)

問12-3. (津波警報を聞いた人だけお答えください) このとき出された津波警報は、3メートル以上の津波が予想される場合に出る「大津波警報」でしたが、あなたは「3メートル以上」と聞いて何メートルぐらいの津波が来ると想像しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=66人)

	N	%
3メートルぐらいの津波を予想した	8	12.1
3～5メートルぐらいの津波がくると思った	13	19.7
5～10メートル以上の津波がくるかもしれないと思った	6	9.1
10メートルをこえる津波がくるかもしれないと思った	1	1.5
何メートルの津波がくるか深く考えなかった	30	45.5
その他	3	4.5
無回答	5	7.6

その他；(こんな大きいのが来るとは思わなかった)(何メートルというより、とにかく大きいのが来ると思った)(7メートル50であった)(ラジオで津波警報を聞いたが3メートル以上のことは知らなかった)9大津波警報が何mの基準かも知らずにいたのでよく分かっていなかった)93～5メートル位のが来たから、もう来ないと思った)(警報もろくに聞かないうちに、波が来た)

問13. 次に、オフトーク通信と電話についておうかがいします。まず、オフトーク通信からうかがいますが、地震の起こった夜、あなたはオフトーク通信の放送を聞きましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
屋外のスピーカーから聞いた	9	4.9
屋内の受信機から聞いた	80	44.0
何も聞かなかった	79	43.4
無回答	14	7.7

問14. では、今回の地震のときにオフトーク通信は役に立ったとお考えですか。まず、地震の夜から翌朝までには役にたちましたか。あてはまるものに一つだけ○をつけてください。(N=182人)

	N	%
非常に役にたった	72	39.6
ある程度役にたった	42	23.1
ほとんど役にたたなかった	9	4.9
全く役にたたなかった	20	11.0
オフトーク通信の放送は聞かなかった	26	14.3
無回答	13	7.1

問15. では、地震から一週間くらいのあいだはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
非常に役にたった	93	51.1
ある程度役にたった	52	28.6
ほとんど役にたたなかった	8	4.4
全く役にたたなかった	7	3.8
オフトーク通信の放送は聞かなかった	10	5.5
無回答	12	6.6

問16. 鳥牧村のオフトーク通信は、戸別の受信機と屋外のスピーカーがありますが、地震前、お宅には戸別のオフトークがありましたか。また、そのオフトークはいつでも聞こえる状態にありましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
(N=182人)

	N	%
戸別のオフトークがあって、いつでも聞こえる状態になっていた	141	77.5
戸別のオフトークはあったが、音がしぼってあったり故障などで聞こえない状態だった	11	6.0
戸別のオフトークはなかった	11	6.0
その他	8	4.4
無回答	11	6.0

その他；（テレビが切れて見られませんでしたのでオフトークだけが便りでした）（オフトークには気づかなかった）（あったが電源を抜いていた。日に三回も放送されることもありうるさくてきらいでしたから）（風によって聞こえたり聞こえなかったり）（津波で壊れてしまっていた）（何もかも頭になかったので二ヶ月過ぎてからやっと、心も落ち着きました）（停電のため避難のオフトークは聞かなかった）（緊急放送だけが入る状態）（戸別のオフトークはあるが地震の時は聞こえなかった）

問17. では、屋外のオフトークのスピーカーはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
ふだんから放送の内容がまったく聞き取れなかった	27	14.8
ふだんから放送の内容があまり聞き取れなかった	15	8.2
ふだんから放送内容はほとんど全部聞き取れる状態だった	58	31.9
その他	43	23.6
無回答	39	21.4

その他；（何処に設置しているか見たことがない）（近くにはないので分からない）（スピーカーが遠いから）（付近にはない）（近くにはない）（私の付近には野外のスピーカーの設置はありません）（野外にあることは知らなかった）（家の近くにはオフトークはない）（戸外にはなかった）（野外にはない）（何も聞こえなかった）（近所にオフトークはない）（避難場所にはなかったから知らない）（スピーカーの位置よ

り遠くて聞こえない）（家の近くには野外のスピーカは無いと思う）（その日によって、全く聞き取れない事がある）（島牧村には野外にはない）（当地区には野外オフトークはありません）（野外オフトークはない）（屋外にあるのは知らなかった）（野外は聞いたことが無い）（風によって聞こえたり聴こえ無かったり）（漁組の屋外オフトークは災害を受けてしまったので放送は聞けなかった）（屋外オフトークの設置なし）（屋外のオフトークはない）（屋外オフトークはついていない）（屋外のスピーカーは遠くにあるので普段外にいても聞く事は出来ない）（アナウンサーの早口で聞きにくい）（遠く離れて聞こえない）（そばに屋外オフトークがなかった）（普段から屋外のオフトークのスピーカーは聞く事がない）（停電の為）（屋外のオフトークは知らない）（スピーカーのない所に避難していた）（屋外のオフトークは近くにない）（聞き取れる範囲にスピーカーがない）（屋外にスピーカーなし）（そばになかった）（半径2キロ以内にスピーカーがない）（地震前はなかった）

問17-1.（問17で、1あるいは2と答えた人だけお答えください）あなたが屋外のオフトークの声が聞き取れない理由は何ですか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。（N=42人）

	N	%
音が重なり合って聞き取れない	5	11.9
しゃべり方が早口で聞き取りにくい	1	2.4
音が小さくて聞き取れない	9	21.4
周囲に雑音が多くて聞き取れない	4	9.5
その他	18	42.9
無回答	8	19.0

その他；（スピーカーから遠い）（遠いので）（場所が遠いので）（離れているので聞こえない）（遠くてだめ）（近くにない）（近くにない）（野外スピーカーが近くにない）（場所が遠い）（スピーカーの距離が遠い為、よく聞き取れない）（普段、屋外に全くいない）（停電の為）（地域的についていない）（風向きによる）（野外のどこにあるか分からない）（野外にあった事は知らなかった）

問18.（再び全員がお答えください）次に、電話についてお聞きします。地震の日およびその翌日にあなたにどこからか電話がかかってきましたか。つぎのなかから一つだけ選び○をつけてください。（N=182人）

	N	%
電話がかかってきた	121	66.5
電話はかかってこなかった	12	6.6
避難などしていて家にいなかった	29	15.9
無回答	20	11.0

問 18-1. (問 18 で、電話がかかってきたという人だけお答え下さい) その電話をかけてきた相手の中に「あなたに電話をしたがなかなか電話が通じなかった」と言っていた人はいましたか。当てはまるものに一つだけ○をつけてください。

(N=121人)

	N	%
電話がかかりにくかった」と言っていた人がいた	117	96.7
別に「電話がかかりにくかった」とは言っていなかった	4	3.3

問 19. では、あなたは、今回の地震と津波があった夜から翌朝にかけて、どこかに電話をかけましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
電話をかけて全ての相手に通じた	34	18.7
電話をかけたが、一部しか通じなかった	39	21.4
電話をかけたが、一つも通じなかった	25	13.7
電話をかけようと思ったが、電話がなかった	2	1.1
電話をかけなかった	26	14.3
その他	16	8.8
無回答	40	22.0

その他；(火災が無かった)(大災は起きていない)(島牧は火災はなし)(火災がなかった)(一件にかけただけだったが通じなかった)(避難していたので電話はかけられなかった)(火災がない)(火災はない)(火災は起きていない)9翌朝、仕事場から札幌の母にだけ掛けたがすぐ通じた)(電話が全く通じないので困っていた)(津波により電話機流出の為)(島牧村に火災はありません)(相手からの電話はしばらく不可でした)(火災はありませんでした)(避難していたのでかけなかった)(避難先でかけた)(電話、オフトークは津波の為に10日間ぐらいは使えなかった)

問 20. 今回の地震では、電話についていろいろなことがありますが、次の中であなた自身が経験したことを、いくつでも選んでください。(N=182人)

	N	%
119番や110番に電話をしたが、なかなかつながらなかった	3	1.6
自分や自分の家族の安否をたずねる電話が町外からたくさんかかってきた	107	58.8
電話がかかりにくかったので友人・知人の安否の確認がなかなかできなかった	64	35.2
無回答	27	14.8

問 2 1. 次に、地震・津波の情報やマスコミの取材についておうかがいします。まず、あなたが地震の後 1 週間くらいのあいだ、知りたかった情報は何ですか。次の中からいくつでも選んで下さい。(N=182人)

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	91	50.0
余震や津波の今後の見通しについて	147	80.8
地震・津波の被害について	90	49.5
家族や知人の安否について	50	27.5
行方不明者の救出・捜索活動について	69	37.9
国や道や町のとっている対策について	55	30.2
水道・ガス・電気・電話の復旧の見通しについて	52	28.6
食料や生活物資について	26	14.3
大きな被害を受けた人や奇跡的に助かった人の様子について	52	28.6
島牧村以外の地域の様子について	70	38.5
その他	4	2.2
特になかった	1	0.5
無回答	10	5.5

その他；（マスコミ等の取材は迷惑である）（津波被害の整理に追われて気持ちが動転していた）（交通の状況、普段から車が必要な所なので、また避難することがあった場合の道路の状況について）（地震のメカニズムや活動を詳しく知りたかった）（テレビが 10 日位見られなくて、いらいらしてラジオを聞いていた。裏の電柱が倒れて、いくら役場に話しても直してくれなかった）

問 2 2. では、あなたが知りたかったそういう情報をもっともよく伝えてくれたのは、つぎのうちどれでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
民放ラジオ	5	2.7
NHKラジオ	14	7.7
民放テレビ	23	12.6
NHKテレビ	82	45.1
新聞	19	10.4
警察や消防の話	6	3.3
家族や近所の人から直接聞いたこと	12	6.6
他人との電話での話	3	1.6
その他	3	1.6
無回答	15	8.2

その他；（電話が使用可能になってから村外の親戚から電話が殺到した）

問 2 3. 次に、マスコミについてお聞きします。地震の発生にともない、多くのマスコミが地震と津波についていろいろ報道しましたが、その報道は役にたちましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。まず、NHKテレビはいかがですか。(N=182人)

	N	%
非常に役にたった	89	48.9
ある程度役にたった	59	32.4
あまり役にたたなかった	15	8.2
全く役にたたなかった	7	3.8
無回答	12	6.6

問 2 4. では、民間放送のテレビはいかがですか。(N=182人)

	N	%
非常に役にたった	62	34.1
ある程度役にたった	76	41.8
あまり役にたたなかった	20	11.1
全く役にたたなかった	5	2.7
無回答	19	10.4

問 2 5. 次に、新聞はいかがですか。(N=182人)

	N	%
非常に役にたった	78	42.9
ある程度役にたった	69	37.9
あまり役にたたなかった	16	8.8
全く役にたたなかった	3	1.6
無回答	16	8.8

問 2 6. 島牧村には、津波の翌日からマスコミがやってきて、いろいろ取材していましたが、あなたはマスコミの取材を受けましたか。(N=182人)

	N	%
自分自身が取材された	24	13.2
自分は取材されなかったが、家族が取材された	7	3.8
自分も家族も取材されなかったが、誰かが取材されているのをみたことがある	52	28.6
取材された経験もないし、取材のシーンをみたこともない	78	42.9
その他	7	3.8
無回答	14	7.7

その他；（NHKより地震直後電話にて取材があった）（自分の所は何でもなかった）（取材のシーンをテレビで知った）（現場を見て通り過ぎるだけ）（私が聞く北海道大学工学部から来た3名に聞いた態度も良く分かりやすく教えてくれた。大変に感じがよかった）（役場にたくさんの取材関係者がいたのを見た）（特別被害はなかったので取材されなかった）（マスコミに会わなかった）（マスコミの取材等、受けたことはありません）

問26-1.（問26で、1と答えた人だけお答えください）あなたが取材を受けたそのマスコミの人の取材態度はいかがでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい／。
（N=24人）

	N	%
たいへんよかった	13	54.2
まあ普通だった	10	41.7
無回答	1	4.2

自由回答；（普段からテレビを見ていて、マスコミの人は嫌いです（マスコミに会わなかった）

問27. 島牧村の被害状況についてはさまざまな報道がありましたが、あなたは大成の被害の実態や被災者の状態について、テレビや新聞はどう伝えたと感じていますか。次の中から一つだけ選んで下さい。（N=182人）

	N	%
実際以上におおげさに伝えていた	3	1.6
適切に伝えていた	76	41.8
実際はもっと悲惨なのに、それを十分に伝えていなかった	75	41.2
その他	9	4.9
無回答	19	10.4

その他；（奥尻等の報道が多く、島牧は少なかった）（奥尻の報道ばかりで、道新がよく取り上げて居たが、全道等は報道があまりなかった）（見られなかった）（同じものを余りにも何でも伝えすぎた）（奥尻中心の報道すぎた）（後始末でテレビも見なかった）（島牧村についてはよくみていない）（奥尻の被害の大きさからすると適当だった）（午後、車にて村内を一回りし、被害状況を一応確認）（テレビにも出ました。バック2、どさんこワイド他多数出演）

問28. 北海道南西沖地震のあと、いくつかのラジオで「〇〇さんの消息を知っている人は△△さんに電話してください」という放送をしていましたが、あなたは、そうした放送を聞いたことがありましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。

(N=182人)

	N	%
直接そうした放送を聞いた	10	5.5
放送は聞かなかったが、そうした放送をしていることは知っていた	29	15.9
そんな放送をやっているとは知らなかった	125	68.7
その他	1	0.5
無回答	17	9.3

その他；（知らなかった、村は電波が入りにくいので、ラジオは聞きません）

問29. あなたはその安否をたずねるラジオ放送を利用したことがありますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
自分や家族の消息を伝えてもらおうとして電話をした	1	0.5
知人や友人の消息が知りたくて放送局に電話をした	1	0.5
利用しなかった	139	76.4
その他	8	4.4
無回答	33	18.1

その他；（ラジオない）（他からの電話でたいへんでした）（電話が通じてから、各地に電話で知らせました）（電話が通じてから各地に電話で知らせました）（自分のことで精一杯でした）（津波に流されて）

問29-1.（問29で、1および2と答えた人だけお答えください）では、あなたはこうした消息をたずねるラジオ放送は役だったと思いますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=2人)

	N	%
あまり役にたたなかったと思う	2	100.0

問30. 今回の災害で多くのマスコミが島牧村に来ましたが、そのマスコミの取材や報道について、なんでもけっこうですから、あなたの考えを聞かせてください。

(N=182人)

○報道関係者が来たとは聞いていましたが、別に質問された訳じゃなく只奥尻の事ばかり、毎日報道されていて、島牧の事はあまりテレビ、新聞にのらないので遠くの知人からの問い合わせが有り、もう少し詳しく報道して欲しかったと思います。

○私の受けた感じでは真剣に迅速に状況取材して北海道はもちろん、全国に報道していたように思う

○行方不明者が発見されたさいに、遺族の事も考えずに遺体を撮影しようと遺族をはねのけて、撮影していたカメラマンがいたが、報道の価値観の異常を感じた。

○色々忙しいのに、人の痛みをさらけ出すようで嫌な気がしています。

○島牧村の災害状況については、何も誠実な報道は無く電話の故障が直ってから安否の問い合わせがあった。

○実際は災害の翌日の悲壮な状況がよく伝わって報道されていないように思いました。

○あまりの早さに驚いた。

○住民が避難中で、消防車が避難勤務中に取材しており、一本しかない国道を占有していることもあり、非常に残念である。又、マスコミの電話問い合わせで、大事な状況連絡が非常にとりずらかった。

○もうちょっと報道してほしかった。家を失った人の所など取材してもらいたかった。

○津波の被害は、被害者だけではなく船が壊れて漁にでれない人などの放送も大切だと思った。かなり時間がたってからの放送では、そんなに島牧の被害は無かったようにとらえられるものがあった。

○あまりにもしつこすぎた。忙しいのに、同じ事を何回も聞いた。もう少し考えて取材をしてほしい。

○被害者には、あまりしつこくつきまとわない方が良くとおもう。

○私の兄弟からも、奥尻ばかりの放送で島牧はどうなのかと連絡を受けた。又、NHK関係の有線テレビ施設の被害に使用するため、後志版の切抜きを送ってやった。

○取材に来たけれど、あまり島牧の災害がテレビでは出なかった、奥尻だけ多く出ていて島牧の災害が小さく見られたのではないのでしょうか。

○報道が奥尻にかたよっていた

○見ていないで復旧作業に手を貸して欲しかった。

○同じ所にばかりカメラを向けていたので、もっと全体の様子を伝えてくれればテレビを観ている知人達にも詳しく分かったのと思った。

○テレビで、様子を見ましたが、あまり時間が短くてついでにという感じがした。

○同じ所ばかりカメラを向けていたので、もっと全体の様子を伝えてくれればテレビを見ている知人にも詳しく分かったのと思った。

○翌日、あるマスコミの人に色々尋ねられたが、全く落ち着かず何を答えたのか記憶にありません。

○テレビ、新聞等、桧山管内奥尻島は別として他管内よりも島牧はあまり報道されなかった。

○かってに写真を取っている人が多かったが、自分の身分をあかして了承を取ってからにすべきである。

○「今の心境は？」とかインタビューしてたようだけど、そんなものに答えられるような状況ではないだろうに。そんな状況の中を、なに食わぬ顔で取材して居るのを、自分が見つけたら「バカヤロー」といってやりたい。

○同じ様な災害が世界中で起きているわけですから、見る聞く側が「かわいそう」ではなく、事が起こったときに「あっそうだ、あの時TVでこう言っていた」と言うような教訓になるような、いざという時に頭をかすめる役に立つ報道であって欲しい。いつか自分の身にくるかも知れないのに、気の毒な話の報道だけが目だつような気がします。

○直接、被災者にはありませんでした。

○マスコミの方が色々来て被害の状況を写真に取って行くだけ。

○報道については奥尻町の事は詳しく報道していたが島牧村の被害の状況の報道は少なかったと思う。

○奥尻島の報道で島牧は報道されなかったと思います。1カ月所用で札幌でも（知人）島牧の災害があったのかと驚いておりました。

○島牧村の被害状況や放送時間をもう少し大きくしてほしい。

○マスコミの取材の仕方に見ていてあまりしつこいように、また取材された人も後で立腹していた。

○父の葬儀の時、お寺の窓の外からカメラとライトを当てられて撮られたが何も挨拶がなかった。

○島牧では見た事のないタクシーが翌朝たくさん走っていてびっくりした。

○もう少し詳しく聞いて欲しかった。

○状況を知っているのに何回でもしつこく聞くので頭にきた。

○島牧村は奥尻島ほど被害がなかったせいもあり、被災者の気持ちを逆撫でするような取材もなかった事については適切な取材、報道であったと思っております。

○直接、取材を受けた訳ではないのでよくわかりませんが報道は大変役に立ったと思います。多くの方々からの善意を頂き、どれほど多くの人達が救われたかわかりません。人の優しさ、暖かさが身にしみました。

○奥尻の件があったので仕方がないが、取材に来るのが遅かった。

○恐怖とパニック状態の中、無神経だと思いました。

○被災者にとってはあまり感じの良いものではないと思いますが災害の実状況を多くの人に見てもらい、そこから災害対策の発展へと結び付くならば、まあ、必要な事と思います。でもやはり、常識的、人道的な報道をして頂きたいと思います。

○民放等、多数来た場合、復興の妨げになると思う。道路に中継車があると走る邪魔になる。

○もう少し島牧の被害状況を詳しく報道するべきだった。

○私の地域は割に被害が小さかったのでマスコミの取材等に気づけなかった。

- 多くの善意が寄せられたがこれはマスコミ報道の影響が大きかったと思う。
- あまり良くなかった。
- 私の働いている温泉にも来ましたが何日も後ですっかり片付いてからでした。本当の島牧の災害にあった所はもっとひどかったです。道路もしばらく走れなくシェルフにユンボで道路をあけて走りました。その人達の話を取材して欲しいです。
- マスコミが取材も来た事も知らなかった。
- 実際に適切に伝えていたと考える。
- 午前1:30分頃、自宅近くの海岸で取材していたので、「津波はまだ来るよ」「死にたいのか」と言うと、その数分後津波が来たので、きっとカメラは壊れたろうと思う。
- いいかげんな取材で、朝早くからタクシーできて、うるさくて人の迷惑です。
- 一部分より取材しておりません。私たち兄弟三軒は新築してから、まだ5、6年しか立って居ません。その家が、3軒とも全壊してしまったのです。島牧村ではたくさんの家が全壊していると思いますが、年数的には古い家ばかりです。私たちの所には公営住宅も何十軒も被害にあっていますが、マスコミなど全然入って来ません。また、島牧村なども無視しています。残念でなりません。
- あまり被災者にしつこく聞きすぎる。頭が混乱しているのに。
- 被害者に対して、きずかってインタビューしていた。
- 奥尻につづいて死者が多かったのに、島牧はあまり報道されていなかった。
- 奥尻島に次ぐ被害があったと思いますが、島牧村の報道は少なかったと思います。

問31. 次に、今回の地震の前兆現象についておたずねします。あなたは地震の前に動物や地下水の異常、地鳴り、海鳴り、海面の異常など何らかの前兆を感じていましたか。もしあれば具体的にお聞かせ下さい。

- 普段は冬にしか家に居ないネズミが、7月まで出て家族で変だねと言っていた。
- 二日前から空の雲がいつもより違っていた。前にも雲が変わった時に地震があったので変だと思っていた。
- 2, 3日前からカラスが居なくなった様だ。海岸線の温泉が熱くなっていた。
- (地震のくる1月位前から)ねずみが異常に騒いだ。
- 1. 地震のあった12日の夕方異常に夕日赤く、海が波一つ立たずトローっとして、なんとも静かな海だなと思った。2. 今年はねむの木の葉が成長しなく、どうしてだろうと思っていた。
- 数日前に地震雲が、西沖合いに出ていた。
- 地震の前触れとは思わなかったが、それまで冷夏であまり暑くなかったのに12日はとても暑かった。
- 前の日は、とても風がよく静かな夜でした。
- 前の日はとても風が良く、静かな夜でした。

○春から冷害のこともあるからかも知れないが、畑仕事をしていると毎日蛇を見るのですが、地震の前は三回ぐらいより見なかった。それにカラスもうるさいほどが例年より少なく、裏に来るビフヤスズメも、ほとんどいなかった。7月2日午前中、橋の上からしばらく見ていた。

○1. 何日も同じ風向きがつづいた（南西の風のようなもの）。2. 今年の7月はそんなに風がなく、毎日のようにこの南西の風向きであった。約1月前にシフト機のような音が夜にきいたことがある。

○国道にキツネが出てこなくなった。

○今回ではないが、10年前の島牧村が人身事故があった大海化のおり、前浜の塩虫が国道を越えて、山側の家屋の外壁が真っ黒になるほど付着した事がありその漁師が大海化があると予感したと話したことを聞いたことがある。

○1. 当日の午後位から、鳥が飛んでいなかったような気がします。2. 何日か前に、珍しくほとんど視界が無くなるほどのガスがかかった。3. 今年は魚釣りをしても、さっぱりだった。

○雲が今まで見たことがないような現象でした。（2日前）

○海の魚が取れなくなっていた。

○いつも大漁であるカワハギがどこへ行ったのか、全然取れない事とカラスがあればどいるのが1、2匹しかいない事、きつねも全然、見えなかったです。漁だっていつも取れていない量が取れたりして本当に不思議でした。

○大変、静かな夜だと思ってた。余りにも静かでした。

○カエル、虫の鳴く声がうるさい程なのに声がない津波後に感じる。

○私の家に猫10匹飼っていましたが、地震の夜は家に1匹もいませんでした。

○猫5匹を飼っておりますが、1日位前より食事も取らないで、全然元気がなく家内と何かあるのじゃないかと心配しておりました。その晩に地震があり、この頃では猫の様子を見ております。

○当日、朝のカリバ山の雲の様子が変だった。

○毛虫が異常に多かったと思う（津波の起こる2、3日前から）。

○いつもツバメの巣にたくさん親ツバメが飛来し、ふんがひどかったがその日の朝は少なかった。

○今年はたくさんの小さいねずみを取った。（6月～7月に家の中で50匹ぐらい）

○地震の2、3日前から家の周りに見えていたカラス、小鳥が姿を見せなかった。それと空と海の色が同じで地平線がわからない不気味な雲が流れるように見えた。人の言う話では地震雲とか聞きました。

○3日前位に地平線に異常と思うような雲が出た。

○家の屋根にスズメが巣を作っていたのですが、前日その巣が下に落ち大変騒がしかった。巣はカラスが落としたと思いい子供たちと話していたのですが、後になってみると前兆では・・・と思っております。スズメが私達に危険を知らせたのでは・・・。

○カラス、スズメがいなくなった。

○年間、見たこともない魚が2日ぐらい取れました。

- 家の中にネズミがいたのですがいつの間にかいなくなっていた。
- 私の家は海岸より少し遠いので何の異常も感じませんでした。
- 夕方、山でキツネが何匹かで鳴き淋しそうな鳴き声で気持ちが悪かった。又潮が異常に枯れた。かもめが沖の高い岩に巣を造らなかった。
- 1週間程前から犬が遠吠えをしたり、キツネの赤ちゃんが妙ににぎやかに騒いでいたように思います。
- 全て人から聞いたものですが・・・たくさんのウニが渚まで上がってきて夕暮れ時、子供たちが拾っていた。夕焼けが今までに見たことのない様な、異様な美しいものだった。空に珍しい「雲」を見たという人もいた。（地震雲？）
- 島牧に住んで4年目ですが1週間程前から海の夕焼けの色が紅すぎた。特に2、3日前からは空と海（水平線）の区別がつかなかった。当日は海の潮がひどくひいていた。1週間前から異常に蒸し暑かった。
- 海面が異常なくらい平だった。
- 知人の話として・・・特別な形をした雲が数個、規則的に出ていた。当日の夕焼けが異常に赤かった。
- 特にはなかった。関係ないかも知れませんが、今まで取れた魚が全然取れなくて、島牧であまり取れない魚が取れた。
- 地震が止まって約5分くらいたってから地波で浜辺の海水が岸から引いて行く音が裏山へ響いて鳴音がひどかったです。
- 海の中の動物が（魚、カニ）静止状態だった。カモメ、カラス、スズメが一羽も見なかった。（7月12日午後6：00ころ）
- 自分の家の犬が、異常に朝からいつもと違う鳴き方で変だと家族と言っていた。それと海面が1回目の津波の後で、あまりにも静かなのにはびっくりした。
- 地震雲が出ていた、海老がいなくなった、蛙がいなくなった。
- 近くに温泉があるのですが、いつもより温度が非常に暑かった。また、平常より気温も高く感じ、生暖かく思った。
- 7月12日の夕焼けが、異常で気味が悪いと家族と話しあった。
- 1ヵ月前から物置に野ねずみが、異常に入った。（今まで入った事がなかった）

問32. 地震学者のなかには、近い将来に北海道の南西沖の周辺で地震が起こるかもしれないといっていた人がいましたが、あなたはこのことを知っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。（N=182人）

	N	%
知っていた	38	20.9
知らなかった	134	73.6
無回答	10	5.5

問33. けれども、今回の地震が起こった日にちも規模も予知はできませんでした。あなたは今まで、今回のようなマグニチュード7.8クラスの大地震なら予知はできるものと思っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
思っていた	24	13.2
思っていなかった	137	75.3
その他	7	3.8
無回答	14	7.7

その他；(地震の予知は知っていれば、対策はできたと思う)(不可能でしょう)(自分が地震に合うとは思わなかったので、まったく考えていなかった)(「北海道防災計画」の中に記されている。規模も震源もほぼぴったりです)(日本海は海が荒いから大きな地震はないと思っていた)(予知出来たと報道されているが、知らされなかったのので行政で無視されたため)(一般に知らされなかったのでは)(現実的には無理だと思う)

問34. 今回の災害では、災害の直後から赤十字や民間の人たちがいろいろなボランティア活動を行ないました。あなたはどのようなボランティアかつどうをしてもらいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=182人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	39	21.4
けがや病気の手当	4	2.2
炊事・洗濯の手伝い	8	4.4
義援物資の仕分け・運搬	57	31.3
宅配便関係	2	1.1
掃除	17	9.3
引っ越しの手伝い	7	3.8
話し相手	6	3.3
その他	23	12.6
無回答	78	42.9

その他；(見舞金¥5000円)(自衛隊の給水を受け有難かった)(消毒)(炊出し)(飲料水を自衛隊の人達が車で運んでくれた)(港の後片付け、自衛隊)(給水)(食事3日間)(自衛隊の給水)(個人的には何もしてもらっていない)

問3 4－1. (問3 4で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
あなたは、そうしたボランティア活動のうち、どれがありがたかったですか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=104人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	26	25.0
けがや病気の手当	5	4.8
炊事・洗濯の手伝い	10	9.6
義援物資の仕分け・運搬	35	33.7
宅配便関係	3	2.9
掃除	12	11.5
引っ越しの手伝い	6	5.8
話し相手	4	3.8
その他	7	6.7
無回答	43	41.3

その他；(見舞金¥5000円)(消毒)(炊出し)(給水)(自衛隊の給水)(特に被害がなかったのであまりありがたいと思わなかった)(食事の準備)(ボランティアの方々の人間性を問う)(給水)

問3 4－2. (問3 4で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
あなたが受けたボランティアは、どのような人(グループ)でしたか。あてはまるものにいくつでもまるをつけてください。(N=104人)

	N	%
個人	17	16.3
団体	28	26.9
わからない	11	10.6
無回答	51	49.0

ボランティア組織名；(建設重機)(島牧村はまなす会)(役場、建設会社)(自衛隊の給水)(島牧慈光園、島牧柏光園)(婦人会)(島牧村)(自衛隊)(自衛隊)(島牧村役場)(地区会)(むつみ会)(地区会)(部落の方々)(自衛隊)(はまなす会)(地区会)(はまなす会、婦人会)(永豊町内会)(はまなす会)(職場の人)(はまなす会)(島牧村役場、歌棄慈光園、島牧柏光園、徳美会)(元町地区)(島牧開発)(自衛隊)(はまなす会)

問34-3. (問34で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
あなたは何時からボランティア活動を受けましたか。また、その人数は何人くらいでしたか。

期間；(省略)

人数；(省略)

問35. (再び全員がお答え下さい) あなたは、今回のボランティア活動についてどう思いましたか。あてはまるものを一つだけ○をつけてください。(N=182人)

	N	%
ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う	130	71.4
ボランティア活動はあまり役に立たなかったと思う	18	9.9
ボランティア活動はかえって迷惑だったと思う	4	2.2
その他	5	2.7
無回答	25	13.7

その他；(援護、物資配送、区分け等) (非常に迷惑だったとの声をたくさん聞いた)
(ボランティア活動はしてなかった) (ボランティアの人たち(村長の奥さん方)が、全国の人からの義援物資の中から良いものだけを、選んで午前3時位に車で運びだして行く所を、村の人々に見られて、みんなが不満を持っている。現金も相当入っていたそうです。何がボランティアだ！それこそ、マスコミに取り上げて欲しいです) (嬉しいと言うか、有難かったが、怪しい行動をしている人も居た)

問36. あなたは、今後他の地域で災害があった時、ボランティア活動を行ないたいと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
ぜひ行いたい	30	16.5
可能ならば行いたい	109	59.9
行うつもりはない	14	7.7
その他	6	3.3
無回答	23	12.6

その他：(老人だから)

問 3 7. あなたは今回の災害の経験から、今後災害地においてボランティア活動は必要だと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=182人)

	N	%
個人・団体を問わず絶対必要だと思う	112	61.5
個人のボランティアは必要である	8	4.4
団体から派遣されるボランティアは必要である	25	13.7
被災地救済は行政が行うことであり、ボランティアは必要ない	12	6.6
その他	4	2.2
無回答	21	11.5

その他；（必要だが受ける側の事を考えてほしい）（状況に応じた適任者が必要と思う）（そんな経験がないのでわかりません）（自衛隊は絶対に助かります。個人ボランティアは奥尻島など来すぎて、宿泊と場所、食料などにかえて支障をきたしたのではと思う）（被害者を力づける為にも個人、団体問わず必要と思う）

問 3 8. 今回の津波災害の後、あなたやご家族がかかえている生活上の問題について、どんなことでもけっこうですからお聞かせください。

○全壊した自宅をどうするか？

○壊れた自宅のローンが残っているので資金の問題。

○南西沖地震でもはや4カ月がたとうとしておりますが、あれ以来夜になると、又、地震がくるのではないかと毎日が不安です。

○建物（住宅）は残ったとしても生活必需品は流失または破損した為、全て最小限必要な物を用意した。住宅も柱がずれたり、破損した為、応急処置で生活している。冬に向かって強い風が吹くたび落ち着かない生活をしている。

○これから10年後でも地震がもしあったなら私達の家は津波がきても崖なので山に登るにしてもはしごがないと本当に大変です。出来ることなら造ってほしいです。この地震があった時、この場所から離れようとしても住めば都でつい恐ろしさは忘れて住みよくなるんです。これを読んで何か良い事あったら教えてほしいね。

○生活の為の資金の問題。漁業のため家舟等復興のため、2カ月も無給のため、生活費が悩みの種です。

○妻が心臓病なので地震の驚きで後遺症が永びき週に2日診療所に通っております。

○私は一人暮らしなのでこんな事2度とあったらどうしようと思い、ただ毎日を寂しく暮らしております。でも近所に人達が良い人達なので頑張っていきます。

○収入が少なく生活が苦しい。津波災害の後、全く漁獲がなくなりました。漁船、漁具の被害対策。

○冬仕度、家を新しくしなければいけないこと。父（夫）がいなくなって心細いこと。

漁のよう。経済的に見通しがたてづらいこと。

○自営している者なんです、家等には災害はなかったが

夏は観光客等をあてにしているものですから生活がゆるくなくてこれから冬を迎えるに当たり不安です。

○津波の後、魚が取れず、生活できず、不安である。

○崖崩れの防止対策

○災害が多かったので頭の中はまだ整理がついておりません。どうにか生活が出来るようになったので後はこれからです。

○仕度をなおし、金に一番困った。流された物を揃える金に一番困った。

○金銭的な事。

○この度の地震、津波では特別な被害はなかったけどこれから先は不安です。というのは私の家は岩がかぶさっているの岩の下に寝てるようなものです。ですから命あるうち安心な暮らしをしたいと願っております。村にもお願いしています。

○津波があつてから漁もなく収入がなくなり、漁業者は皆、苦しい思いをしています。農家と違い共済が出る訳でもないのどうやって年を越したらいいのかわからないという人ばかりです。

○今回津波で、家にかなり流水して妻は、病院に入院した。不便でした。

○田んぼの海水の冠水で水稲が半作だった。冷害は温暖な地域だった為、関係がなかった。村民全員が被災者だったと思う。村は全戸に見舞金を出すべきだ。岩内に行く事が多いので俱知安回りでないと行けない為、2時間かかり、倍かかるので大変不便だった。地域にお客が来ず観光業旅館にアルバイトに行けず収入がなかった。今後の観光業への不安。車の修理代に5万円かかった。

○被害といえる被害でないのに特に問題はなかったですが今後は早い予報周知と非常の予防に心がけが必要と今回の津波、被害により痛感している。

○住宅が古いので今より少しくらい出しても同じ場所で直してほしいです。年金で生活しているので今の所から離れると困ります。親戚と離れると一人暮らしで困ります。

○津波で災害にあった人は気の毒ですが、その他の人も津波災害と同じくらいの支障を受けてます。津波で災害した人は義援金が出るがその他の人は一つも義援金が出ることがなく、生活にも苦しい思いをしています。私の家は避難所でしたが義援金はず、夫の仕事もままならず今だに生活の上でこの支障は大変です。

○物資より金を。

○早く国道を通れる様にしてほしいです。

○家は全壊、家財は全部流され、夫婦鉢一つになり、今後家をどうするか金銭面で悩んでおります。

○生活費の確保、地震の後魚が来なくなったので困る。

○今回津波で、家にかなり流水して妻は、病院に入院した。不便でした。

○のぎ天が津波で破られ、壁の中に塩水が入り、外見上は問題はないのですがこの後、塩で家屋の傷みが心配です。ガラス戸などは寒いので、修理しましたが、少しばかりの見舞金では、カベの中まで手が届きません。調査に、不公平があります。

○国家の対応が遅すぎる。商工関係の救済があまりにも遅い。水産、農業に対しての救済が非常に目につく。

○災害時には、おばあちゃんが入院で居なかったが、退院後は今住んでいる所が狭いため、札幌の兄弟の所に行っているのでも早く広い所に移り住んで戻ってこられるようにしたい。

○津波の後、魚がいなくなり漁業ができるか不安です。住宅資金をどうしたらよいか悩んでいます。

問 39. では、あなたは国や北海道や村に対してどのようなことを望みますか。次の中からいくつでも選び○をつけて下さい。(N=182人)

	N	%
地震・津波予知体制の強化	130	71.4
広報の充実	61	33.5
被災者のための公的住宅の建設	64	35.2
町・村の対応体制の強化	82	45.1
観光客の誘致対策	14	7.7
情報連絡体制の強化	68	37.4
漁業施設への公的援助	70	38.5
避難所や避難道路の整備	104	57.1
個人被害の補償	71	39.0
防波堤（防潮堤）のかさ上げ	110	60.4
集団移転の促進	14	7.7
その他	6	2.7
無回答	14	7.7

その他；（オフトーク通信の充実。普段はOFFにしているが、緊急時には回線が勝手につながるように）（防波堤がありません）

問 40. 最後に、国・北海道・島牧村など行政に対する不満や要望がありましたら、問 37と重なってもけっこうですから、どんなことでもお聞かせください。

○相当義援金があるにも関わらず、少しの配分の様であります。被害の調査なしで申込に依じての配分で、実態調査の上（まだ調査に来ない）配分して欲しい。（調査の金額に依じての配分）

○予知体制と村の対応を望む。屋外のオフトーク通信のスピーカーを増やして欲しい。

○国及び道の災害地にたいしての、施策の配慮の遅さや各償いの意見のみのテレビ、新聞等に報道されるが実行がないので、どれも空の様なものである。各地の義援の物資の

様に、官が早急に計画を立案して最短の行政機関に実行をうつせる様な行政であって欲しい。

○昨日、皆で船を捜しに行ったけれども見つからない。

○個人被害の補償と、村民に対して見舞金の支払い。村では被害に合われた人には、補償していますがその他の人には何もない、今回の地震では高価な物も壊れたりしていますので家族に2、3万円の見舞金を出して欲しい。見舞金を貯金して置くと、村長が話しているが、くれた人は、村民の生活のためと思っているとテレビなどで話しているのだから。

○島牧は交通事情が悪いため（交通機関が少ない）各家庭で、自家用車を所有し近くの市町村へ買い出し、通院等に利用しているため、生活に無くてはならないのだ。自家用車の被害を請けた者に対し、車税の減免だけである。自家用車も個人財産であるから、何か購入に対する援助は考えてはいかが。

○島牧村にも、地震を予知する機械等を入れて欲しい。死亡した人の搜索を半年に延ばして欲しい。

○家は半壊に近い状態だったが、床上浸水と認められ、どこまでが半壊でどこまでが床上浸水なのか基準があれば聞いてみたい。義援物資の中には電化製品なども合ったようで、出来ればそういう物が欲しかった。義援物資の仕分けを行っていたボランティアの中には仕分けの間に、新しい物を被災者でもないのに、持ち帰った人も居るようでそんなことは、絶対に許されることではないと思う。早く防波堤を造って欲しい。

○自宅前に防波堤を入れて欲しい。

○情報連絡体制、防波堤のかさ上げ。

○1、避難場所をいつも決めておいて欲しい。2、見舞金の配分にも格差があったり、又災害の取り組みにも公然として100年に1回の地震であるからと、のんきであり対応がまづい。

○漁網が流失して保障してほしい。

○いくら要望しても役所仕事だから、個人の半分の要望もかなえてもらえない。もう少し個人のことも見て、確実に検査して欲しいと、この度の地震、津波で切に思った。

○私どもの家は、国道より奥にありまして、津波の時は一部損壊でしたが村会、並びに村対策本部では調べに来てくれませんでした。よその人に頼んでやってもらいました。お陰様で助かりました、もう少し早くやって欲しかったと思います。私は一人で住んでいるのですが、今回の災害を元に早い対策をお願いします。

○浜の防波堤が途中で切れているのがとても気になるので、早く続きをやって欲しい。

○災害の後の復旧がはかどらないため、（防波堤等）これから冬に入って工事はできなくなるのではないかと心配である。春の増水時（雪解け）に間に合う様に早めの工事が必要。

○10年間に日本海では地震が2回もやってきて、津波が発生して、多数の人が亡くなっています。今回被害を受けて天災の怖さを知りました。しかし、今住んでいる所からは、簡単には移住できません。そこで今回、被害のあったところについては早急に防波堤の笠上げや補強をしてもらいたいと思います。普段生活していて非常に、家族共々不安な

思いで海を見つめています。

○予知体制の強化に多大なお金がかかると聞きましたが、他の予算を減らしてもこれを備えるべきだと思った。

○奥尻の同時発生火災に於ける家屋保険の不払いなど見直しなど法改正を望みます。

○たくさんの救援物資や義援金に、改めて日本人を見直した思いで嬉しくなりましたが、それを道や村がどれほど生かし得たかが疑問です。義援金の分配については役場関係の被害者に厚いのではないかと、被害者状況の査定が平等でないとかいう話も聞きました。大変難しいことだったとは思いますが、今後の為にもきちんとした対応策をたてて欲しいと思います。

○寒い冬を迎えるについて、気力を失ってばかりいても仕方ありません。家内中で、力を出し合って今年の冬を越すことに話し合っています。お正月も間近です、年もとっています、あれ以来お正月など迎える事は考えていません。何とか頑張ります。

○人の命を預かる宿泊業なので、安全面そして、すぐ目の前に高い防波堤が出来ればロケーションも悪くなって、同じ場所での再建はおもわしくないの、別の土地の問題、そして資金的援助もなく被災の次の日から収入がなくなって・・・という様なことで、ウルトラcがなければ撤退しか道はありません。

○自家用車の被害に対して、一切金を貰えないことが不満。私の場合近所の床上浸水者と総被害額を比較すると、私が2倍位あるのに車には一切金が出ない。おまけに床上浸水となると村から、日赤から共済互助会からと様々な方面から金を貰い被害額以上の金を受け取っている人も居る。又、今回の災害に対しての援助金なのによく調べもしないで、使い道がないと言う理由で災害の基金を設けるなどバカじゃないかと思う。

○国道が3ヵ月も復旧出来ないのは困ります。地震後に新聞でこの南西沖地震は、予想されていたと言うのを知りショックでした。土地感のない転勤族の私には海まで100と言う近い住宅に生まれて初めて住み、転勤当初（今春）津波が不安で村の人々に聞いたのですが、一笑されるくらい全く心配がないと言うことでした。地震も来た事ないし、原子力発電の誘致運動を行ったと言う過去の話聞いて安心していました。予想される災害は、もっと情報提供してほしいです。地元の人知らないことを、転勤族が知るはずありません。避難場所も知りませんでした。

○災害が起きてからいつも対策が後手になる。学者の意見がもう少し尊重されてもいいし、又、それにもっと責任を持たせて対策をたてるべき。又、各家庭、市町村の防災体制はおざなりでなく避難場所などもっと具体的に全員参加させて行すべきである。

○被災者の要望、話し合いの場をもってほしかったと思います。

○島牧村の行政に対する不満。何事も早く連絡をしてほしい。雨が降っても、水が出ても避難場所を確保してほしい。津波にあっても大、小の差別があっては困る、不公平だ。防波堤のかさ上げ、裏山の工事を早くしてほしい。

○全国から寄せられた義援金を被害の状況によって配分してもらいありがたかった。しかし、その配分方法が納得行かない。見た目の判断で被害程度の段階を決めないで各戸の被害金額を調べてもらいたかった。せっかく全国の人達が送ってくれた見舞金を頂いた被害者の中には不満の声があちこちで聞こえた。島牧村で配分した見舞金で今までよ

り生活が裕福になった人もいればほんの一部分にしか利用できなくて多額の借金を抱えた家庭もある。島牧村の調査方法に不満がある。

○この度の地震後、海とか家の身の回りとか足のつき場もないくらいメチャメチャ物が散らばって手の付けようがなかったです。特に豊浜栄磯にかけてそんな時ありがたい事に自衛隊さんが先になって飲み水を運んでくれたり、物を片付けたりして下さいまして本当に助かりました。感謝してます。私達、日本人に生まれて本当に良かったです。食用品、衣料品など何不自由なく過ごさせて頂いて毎日が感謝して頭の下がる思いです。今年も後わずか1993年7月12日は一生忘れる事の出来ない思い出でした。日本国に生まれた私達は幸福です。テレビやラジオで見えますけどインドの災害、本当に私達からみるとずっと気の毒ですよ。

○電気、電話の対応が大変悪かった。津波により電話等流出、電気水が降り漏電の危険と言うことで、4日後個人で届出して復旧となった。

○電気、電話の対応が大変悪かった。津波により電話等流出、電気に水がかぶり漏電の危険と言うことで4日電話も5日後それも個人で届出て復興という事。

○選挙なので災害地に道内より立った代議士連中は誰もお見舞いにこないせめて励ましの声がほしかった。村はもう少し災害調査を細かくしてほしかった。

○災害対策は非常に遅く、又、激甚災害が適用されていながらも詳細且つ迅速に周知されるべきです。

○この度の地震津波で全国の皆様から頂いた援助物資ありがとうございました。それからしばらくして平成5年10月に入ってから援助物資がありました但バスで行かなければならない所でしたのであれは不満でした。地元の人、車のある人はよいけれどこれからはこのような事がないように手元に渡してくれるようにお願いします。

○村の対応は良かったと思う。国、道の対応は時間がかかり過ぎる。

○災害復旧は進められているが、今後安心して住める環境づくりを望みます。

○漁業施設への公的援助。個人被害の補償。

○家屋に対する被害にも見方に相当差があり災害見舞金の配分にも相当差が生じているように思う。また漁船等の被害で流失し、修理等にも保険金で出来ず、相当高額の借金で修復した人も漁も出来ず、新造船買船等は補助制度があるが修理費が相当高い金で修理して使用する様にした者の事も考えてもらいたい。

○経済的なこと。その他多くあり過ぎてうまく言えない。

○対応が遅い。

○国、道、村、漁協からの対応が遅すぎる。

○不満はない。

○この度の災害では村長が先頭になって職員も一生懸命に災害の人達には協力して頂き、心より感謝申し上げます。

○今回の地震と津波の災害の状況から見しても地震警報と津波警報はもっと早く知らせるようにしてほしいものです。お願い致します。

○私は津波にさらわれて塩水を飲んで気を失った。すぐ病院に運ばれたが声も出ず、とても苦しかったです。退院したのは8月22日でした。

○漁港のかさ上げ、巻揚施設。

○自宅なおし金が一番欲しかった。その他も同じ。村で被災者にきた義援金の3分の1も配布しないで一方的に金貸してやると言っている役場でかなりの額を何に使うでもなくおさえこんでいる。まだまだ義援金が欲しい。これはなんとかならないものかお聞きしたい。低所得者は金を借りるにも限度があり、返すのも大変でこれより先どうしていけばよいか思案にくれる。

○村の被害調査が一定ではない。また村に多額の見舞金を頂いているがこれについては被害者に見舞金が送られているので全額配布することが望ましいと思う。尚、見舞金の全金額についても、現在、公表されていない。

○この地震経験を生かし、行政面におけるできうる限りの対応をして頂きたいと思います。

○この度の災害に当たりまして日本の国の有難さをしみじみと感じました。私は特別の被害は受けなかったものの周りの被害の受けた皆を見た時、水も電気も止まり、入る家さえ、命さえなくした人の早速、救助して下さった自衛隊並びに消防車の方々を本当に有難く思いました。自衛隊がいなかったらこの村もどうなっていたかと考えました。それに数々の国民の皆様からの心遣い頂き涙の出るほど有難さで一杯です。

○私達の地域に災害の整理に自衛隊が1台入り、その後も来ると思いましたが翌日になっても来ませんでした。この様な自衛隊について何年も好意的だった私も大変怒りを覚えました。

○地域別等の避難場所の確保、連絡をしてほしい。

○防波堤のかさ上げは絶対必要だ。緊急に作ってほしい。避難場所が決まっていない。これからは雪が降るので避難することが出来ない。

○若い人達、及び定年退職者の働く場所を作って欲しい。

○電話回線の混乱で島牧からはかかる率が高いので心配してくれた所などにこちらから電話をした。このような大災害の場合、被災地からの電話料金を1週間程、無料にしてほしい。被災状況の説明をオフトークを利用し伝えるべきだ。人づての話は大きくなりやすい。オフトークの緊急ブザーがずっと鳴りっぱなしで困った。正しい情報を迅速に伝えてほしい。義援金や救援物資をくれた全国の方々のお礼を村長は村民を代表し、マスコミ等を通じて言うべきだった。救援物資も村長のワンマン政治で平等に与えられていない。今後の避難道の話が何もなく個人で考えている。

○緊急医療体制の強化。避難所の整備。防波堤のかさ上げ。

○今回の津波被害は地形的に差が大きかった。私達の地域は国道建設に伴う防波堤があり防げたものと思う。道路が河と化した波は斜路及び消波溝のない部分からと思われる。被害地は破格的無防備か低防波部分が多いように思われるので今後に於いても行政の対策をお願いしたいです。

○早急に海岸道路の防波堤のかさ上げをしてほしい。人家の近くの崖の保全。海底調査をして発表してほしい。尚、モシタ岬海岸近くの海面に何10メートルかわからないが水蒸気がたち、それに虹がかかったのを現地の人がみております。発見者は7月14日頃と9月24日頃の地震直後に見ております。

○島牧、あまりよくありません。

○年金で少し足りないので働いています。地震の後サービスで村の人に温泉に入ってもらいました。もう少し国や北海道から使う人の声を聞いて設備を良くして下さい。

○国はもっと地震、津波予知体制の強化を図るべきである。

○島牧村の行政には不満があります。津波で災害にあった人以外も生活の上で少し考えてほしいと思います。津波で家をなくした人は300～500万のお金が入り、その中で生活をしている。例えば寺などお金が入ることがなく2カ月間は仕事もできない状態で生活をしてました。

○今後また地震、津波が来ないとも限らないので島牧は前は海、後ろは崖というところが多いので避難場所が不安で一杯です。

○村民全員が災害にあったと考える。心の痛手である。物資よりお金を送るようテレビ、ラジオ、新聞などの行政で伝える。

○家がなくなって困っている人の為に住宅の確保が充分に出来ていなかった事を聞いた。本当に困っているのに村の方では「お宅は規約に的さない」と言われて自分達で何もかもしていた姿がかわいそうに感じられた。やはり住民の立場をもっと親身になって考えてあげてほしい。

○島牧村での義援金が、どの様に配分されているのか分からない。また、救援物資の量の良いものが行政に流れているとの噂がある。義援金が均等に配分されていないと思う。

○島牧村行政に、いろいろとたくさん不満がある。村に芝に、水をやるのが大事か人の命が大事か、よく考えて欲しいです。自分の事しか考えない村長は必要ない。

○今回の地震は奥尻等が重点となっていますが、私たちも奥尻等の方々と同じくらい非常に被害を受けているのに、保障では奥尻とは問題にならないくらい少なく不満と思っています。なぜ地域区別するのですか。全壊なら皆同じ金額を出しても良いと思うのです。又、たくさんの義援金を受けながら、被害者に渡さず今後の為に預金して置くと言った状態です。寄付して下さった人々は、いま被害にあった人々に少しでも何かの足しにしてほしいと送ってきていると思います。それなのに、被害者に渡らず村が保管することすらおかしいのではないのでしょうか。2億円ものお金を保管する必要があるのでしょうか。そのため、私たちは毎日苦しい思いをしています。被害にあった人々の気持ちをもう少し分かっていたいただきたいと思います。

○漁業資金の（この災害で被害にあった漁船、漁具、漁網等）遅れ、赤十字から配分になった義援金の一部を配布し、残りを村の資金にしているのはおかしいと思う。救援物資の配分について、一部の人だけが良い思いをしている（特に被害にあっていない人）。漁業施設の復旧のおくれ、4ヵ月たった今もまだできていない。まだまだたくさんあるが、ここでやめます。

○村民の安全を守ることを先決にしてください。地震や津波、高潮などから村民の命と財産を第一に考えてください。観光島牧など、まだまだ考えてもらっては困ります。

○第一次被害は元より、その被害に対する第二次被害に対して、公的援助が必要と思う。それは、公務員と一般住民との差が多すぎる。一般住民には、公的援助は二次被害に対しては何もなされていない、今国会の対応では駄目だ。

○まず第一に、防波堤のかさ上げをしてもらいたい。避難所や避難道路を整備してもらいたい。村の決めた避難所まで、2 k mもあり車も流され避難することも出来ないので、近くに作って貰いたい。個人被害にも補償して貰いたい。

どうもありがとうございました。

最後に、あなたご自身のことをおたずねします。

問1. あなたの性別はなんですか？あてはまるものを一つだけ選び、○をつけて下さい。
(N = 182人)

	N	%
男	98	53.8
女	72	39.6
無回答	12	6.6

問2. あなたの年齢はおいくつですか？具体的に教えてください。(N = 182人)

	N	%
20歳未満	1	0.5
20-30歳未満	10	5.5
30-40歳未満	18	9.9
40-50歳未満	26	14.3
50-60歳未満	42	23.1
60-70歳未満	40	22.2
70歳以上	36	19.8
無回答	9	4.9

(平均 55.4歳)

問3. あなたの主な職業を次のうちから一つだけ選んで○をつけてください。
(N=182人)

	N	%
漁業	29	15.9
農業	8	4.4
商業	5	2.7
サービス業	5	2.7
旅館・民宿	2	1.1
公務員（教員を含む）	23	12.6
会社員	12	6.6
主婦	39	21.4
学生	1	0.5
無職	34	18.7
その他	5	2.7
無回答	19	10.4

その他；（土工）（団体職員）（造林業）（僧侶）（飯場炊事婦）（ユースホステル経営）（団体職員）（僧職）（団体職員）（定年退職者）（僧侶）（団体職員）（看護婦）

問4. あなたは、島牧村にお住まいになってから何年になりますか。(N=182人)

	N	%
生まれてからずっと島牧村に住んでいる	89	48.9
よそから移ってきた	83	45.6
無回答	10	5.5

問5. 津波が起こったとき、お宅には次のような方が一緒に住んでいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=182人)

	N	%
小学生以下の子供	29	15.9
70歳以上のお年寄り	51	28.0
体の不自由な人・寝たきりの人	12	6.6
そのような人はいない	77	42.3
無回答	31	17.0

長い間どうもありがとうございました。

付属資料 3－4 北海道南西沖地震に関するアンケート調査 (熊石町)

東京大学社会情報研究所

問 1. 北海道南西沖地震が発生した7月12日午後10時17分、あなたはどこにいましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N=352人)

	N	%
熊石町内の自宅	313	88.9
熊石町内の自宅以外の建物の中	20	5.7
熊石町内の野外	5	1.4
熊石町にはいなかった	6	1.7
海上の船の中	1	0.3
その他	1	0.3
無回答	6	1.7

その他；(病院に居ました) (職場で勤務中)

問 2. では、地震が発生したとき、あなたは何をしていましたか。次のなかから一つだけ選んでください。(N=352人)

	N	%
すでに眠っていた	96	27.3
床に入っていたが眠ってはいなかった	94	26.7
風呂に入っていた	7	2.0
お酒を飲んでいた	18	5.1
テレビを見たり本を読んだりしてく		
つろいでいた	116	33.0
その他	17	4.8
無回答	4	1.1

その他；(茶碗洗い) (電話をしていた) (洗濯) (風呂からあがったばかり、パジャマを着ていた) (部屋の片付け) (勤務中) (スナック) (仕事中) (法事の守篋作ってました) (午後9時半頃函館から帰宅、家内と話していた) (助宗縄を仕立てていた。針付け) (来客中) (駐車場に車をおいて、建物の中) (仕事中) (布団に入る直前) (仕事) (仕事をしていた) (仕事をしていた) (針仕事)

問3. 地震が起こったとき、あなたはとっさに何をしましたか。次の中であてはまるものをいくつでもお答え下さい。(N=352人)

	N	%
あわてて外に飛び出した	73	20.7
家族に逃げようと声をかけた	150	42.6
高台に向けて避難した	110	31.3
火の始末をしようとした	125	35.5
窓や戸をあけて外の様子を見た	86	24.4
室内を片づけた	3	0.9
服を着た・着替えた	135	38.4
家具などが倒れないように押さえた	34	9.7
頑丈なものにつかまって身をささえた	33	9.4
子どもや老人・病人などを気づかう		
行動をした	80	22.7
机の下などに身を伏せた	13	3.7
海や船を見に行った	20	5.7
何もできずぼう然としていた	30	8.5
無我夢中だったので覚えていない	10	2.8
その他	25	7.1
無回答	3	0.9

その他；（懐中電灯を探そうとしたが、動くことができなかった）（逃げようと思っても戸が開かなかった）（病室の巡回）（地震と殆ど同時に停電、真っ暗い中で動くことができなかった。地震が治まるとまず懐中電灯を所定の場所から取り部屋、玄関等の戸を開けガスの元栓を閉めた）（家に戻った）（この地区は山と海、3階建ての建物があるから避難した）（揺れが大きいので死ぬと思った）（戸を開けて逃げ道を確保、家族を起こす）（地震が止まるのを待ってラジオをかけた、停電でテレビがだめなので）（布団の下にもぐった）（町防災無線の指示により高台に避難）（テレビ及びラジオに入電）（海辺ですので、すぐ浜を見た。潮が引いていくので、津波が来るとしてすぐ逃げた）（夫婦2人で体を支えあって、道路に立っていた）（余りに揺れたので、地面に座ってボーっとしていた）（テレビの上の蚊取り線香が、落ちてきたので火の始末をした）（予報を聞いていた）（戸を開けておいた。外にはすぐは出なかった）（布団をかぶって、地震が治まるのを待った）（とっさに電池を買いに行った）（近所の人を、早く高台へ避難させようとした）（まず夫を起こし、子供達を起こしてそのまま戸外へ、揺れがおさまって我が姿を来たときは、裸足にパジャマで、家の中に入りジャンパーやズボン食料をもって、靴をはいて夜の明けるのを戸外で近所の人達と待っていた）（すぐ地震が止まるのではと少し様子を見た）（余震だと思ったので主要動が来る前にどこへ逃げるか考えていた）（出口の確保）（貴重品のまとめ）（すぐ終わると思って何もしなかった）（一瞬なにがおきたかわからず、子供を自分の側によせ、揺れがおさまる

までじっとしていた)

問4. 地震の直後、あなたは、この地震で津波がくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
大きな被害が出るような津波が 来ると思った	108	30.7
来るとは思ったが、あれほど大きな 津波がくるとは思わなかった	162	46.0
津波のことはほとんど考えなかった	76	21.6
無回答	6	1.7

問4-1. (問4で、1および2と答えた人だけお答え下さい) あなたが、津波がくると
思ったのはなぜですか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=270人)

	N	%
10年前の日本海中部地震のとき、 自分で津波を経験したから	122	45.2
津波は経験していないが、日本海 中部地震のときの話を知っていたから	68	25.2
日本海中部地震の話は聞いていないが、 大地震の後には津波が来るとい うことを知っていたから	65	24.1
その他	11	4.1
無回答	4	1.5

その他：(10年前の地震とは全く海の様子が違っていたから)(日本海中部地震の時、
前の海で津波を見ていた)(地震の時間がいままでになく長かった、震度が強かった)
(津波の経験がないのでわからなかった)(奥尻と大島の間だと津波が大きいから)
(防災無線とラジオで知った)(農業で畑に出ていた、丁度昼どきと思う、大変揺れた
ので津波が来ると思った。津波が来るまで時間の余裕があると思った)(隣の人が津波
がすぐ来ると言った)(必ず来ると考え、何時でも逃げる仕度をしていた)(有球山の
時よりひどい)(防災無線にて避難命令が出た)(10年前家が高台にあるので、経験
していないが、高台から強い津波を見ていたので)

問４－２．（問４で、１および２と答えた人だけお答え下さい）あなたは、津波が地震の後どのくらいで来ると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
（N＝２７０人）

	N	%
すぐ逃げないと間に合わないくらい早く来ると思った	62	23.0
津波は早く来るが、服を着たり車に荷物を積んで逃げるくらいの余裕はあると思った	105	38.9
日本海中部地震の経験から、津波が来るまでかなり余裕があると思った	47	17.4
日本海中部地震の経験はないが、津波が来るまでかなり余裕があると思った	29	10.7
その他	3	1.1
無回答	24	8.9

その他；（津波が来るというより、高台に逃げた）（５分位は余裕があると思った）（津波は来ると思ったがあれほど早く、大きく来るとは思わなかった）（地震が大きかったので、津波がすぐ来ると思った）（自分の位置、地震の発生位置に依る）

問５．（再び全員がお答え下さい）では、地震の直後、あなたが避難したのは地震からどのくらい後のことでしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
（N＝３５２人）

	N	%
まだ揺れがおさまらないうちに避難しはじめた	51	14.5
揺れはおさまったが、津波がまだ来ないうちに避難しはじめた	240	68.2
津波がやってきてから避難しはじめた	7	2.0
避難しなかった	14	4.0
その他	28	8.0
無回答	12	3.4

その他；（熊石町の防災無線で大津波警報を聞いてから）（家族に避難を指示したあと職場に駆けつけた）（防災無線の津波警報が入ったから高台に避難した。熊石にはあまり大きな津波がこなかったもので、いつ津波がきていたのかわからなかった）（私の家は避難場所に指定されているので、高台にある近所の人達３０人位集まって来た）（高台なので地震の後津波の心配はないけれど、電気が消え、地震で家がつぶれると思って着替え、ラジオ等持ち中学校へ避難した）（必要なし）（揺れが治まってから、家が高台なので、自分と子供達に服を着せて外に出た）（揺れが治まってから。建物の危険を

感じたので）（防災無線で避難を呼びかけられたので高台に避難）（ラジオで大津波警報の発令を聞いてから、役場広報車の避難命令があって）（家が高台のため避難しない）（町内の防災無線で津波警報の通告がありそれから避難した）（家族の事は妻に任せ、役場に行った）（防災無線が流れてから）（勤務中）（町の津波警報で避難した）（地震が治まってから、波を見に行ったら逃げるほどの波ではなかったので。家は高台の方なので）（町の防災無線の、津波警報が入ってから避難した）（高台に住んでいる）（住宅が高台地にあるので、津波の心配はないが地震の心配はあり、屋外で待機した）（病院に入院中で体が動かず避難出来なかった）（家族を定められた所に避難させ、私は消防団のため町内のガスをバルブを締めたり、住民の誘導をおこなった）（避難命令は津波の後でした故、次の命令を待った）（町内会の人の誘導で）（外に出てもシーンとしていた。隣の家の人呼びに来て避難した）（熊石にはあまり、津波がなかった）（防災無線連絡で放送が流れてから）（船上にいたため、操業を中止した）（幸に我らの所は津波はこなかった）（始めから避難場所にいた）（家が高台にあるので、ここまでは津波が来ないと思い自宅にいた）（自宅が高台にあり津波の影響がないので避難しなかった）9家が高い所にあるので避難場所には行かず外に出て、近所の人達とラジオで情報を聞いていた。3時間程外に）（津波警報が出てからあわてて避難した）

問6. 今回の津波は、木造住宅を完全に破壊してしまうほど大きな破壊力を持っていましたが、あなたは災害が起こるまで、津波がこんなに大きなエネルギーを持っていることを知っていましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。
 (N=352人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波の破壊力は知っていた	81	23.0
実際に見たことはなかったが、津波の破壊力は知っていた	134	38.1
津波がこんなに大きな破壊力を持っていることは知らなかった	129	36.6
その他	2	0.6
無回答	6	1.7

その他；（破壊力があるとは思っていたが考えていたものより大きな破壊力であった）（想像をはるかに越えるものでした）910年前も経験しているけど、前と今回は全く違う）

問7. 津波は大きな破壊力を持つばかりでなく、場合によってはジェット機とかそれほ
どでなくとも新幹線と同じくらいの早いスピードで襲ってきます。あなたは災害が
起こるまで、津波がこんなにスピードがあることを知っていましたか。あてはまる
ものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
10年前も経験しているので、津波の スピードは知っていた	55	15.6
実際に見たことはなかったが、津波の スピードは知っていた	72	20.5
津波がこんなにスピードがあるとは 知らなかった	214	60.8
その他	1	0.3
無回答	10	2.8

その他；(小さい津波しか見たことがなかったから、ビックリした)(私は海の側に住
んでいるからね)(テレビや本等で見て知っていた)

問8. 次に、津波警報についてお聞きします。今回の地震では、地震の5分後に大津波
の警報が出ましたが、あなたは、地震当日、津波警報をお聞きになりましたか。あ
てはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
聞いた	328	93.2
聞かなかった	17	4.8
その他	7	2.0

問8-1. (津波警報を聞いた人だけお答えください)では、あなたはその津波警報を
どのようにして知りましたか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。
(N=328人)

	N	%
民放テレビから	9	2.7
NHKテレビから	59	18.0
民放ラジオから	27	8.2
NHKラジオから	52	15.9
警察や消防から	27	8.2
家族や近所の人から	16	4.9
その他	7	2.1
無回答	1	0.3

その他；（テレビによる大津波警報の出たことを、滝川市在住の娘より連絡あり、防災無線による警報とあわせて急いで避難した）（とりあえずスイッチを入れたラジオから）（北電泊発電より）（娘より先に電話で知り、仕度した）（避難して20分前後）（病院の人）（停電したので、テレビが見られなかった）（電気が消えて回りが真っ暗だったので、防災無線だけがたよりだった。避難所の中ではラジオで聞いた）

問8-1-1.（問8-1で、テレビ・ラジオから津波警報を聞いた人だけお答え下さい）あなたが、初めて津波警報を聞いたのはどの放送局でしたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。（N=147人）

	N	%
NHKテレビ	67	45.6
HBCテレビ	2	1.4
STVテレビ	1	0.7
UHBテレビ	1	0.7
NHKラジオ	39	26.5
HBCラジオ	4	2.7
STVラジオ	7	4.8
忘れた	11	7.5
無回答	15	10.2

問8-2.（問8で、津波警報を聞いた人だけお答えください）その津波警報を聞いて、あなたは本当に大きな津波がやってくると思いましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。（N=328人）

	N	%
警報でいうとおり、大きな津波がやってくると思った	121	36.9
津波が来るとは思ったが、あんなに大きな津波が来るとは思わなかった	170	51.8
津波が来るとは思わなかった	18	5.5
その他	6	1.8
無回答	13	4.0

その他；（波の様子で津波が来ないと思った）（熊石町には来ないと思った）（大津波警報だったので大きいのだと思った。今まで大のつくのは聞いたことがなかった）（どの程度の津波がくるかわからなかった）（津波がくると思って高台に逃げたけど、私達は何ともなくてラジオで奥尻の津波やら火事を聞いていた）（今までに津波警報を聞

いたことはあったが、今回は大津波警報は初めての事だったので）（当村は警報以下であった）（何が何だかわからず避難していた）（無線を聞いて忠実に、明け方まで高い所に避難していた）

問 8-3. （津波警報を聞いた人だけお答えください）このとき出された津波警報は、3メートル以上の津波が予想される場合に出る「大津波警報」でしたが、あなたは「3メートル以上」と聞いて何メートルぐらいの津波が来ると想像しましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。（N=328人）

	N	%
3メートルぐらいの津波を予想した	65	19.8
3～5メートルぐらいの津波がくる と思った	62	18.9
5～10メートル以上の津波がくる かもしれないと思った	45	13.7
10メートルをこえる津波がくるか かもしれないと思った	26	7.9
何メートルの津波がくるか深く考え なかった	109	33.2
その他	5	1.5
無回答	16	4.9

その他；（3m以上を大津波と知らなかったが、大津波警報なのでかなり大きな津波がくるものと思った）（3m以上とは知らなかった）（3m以下の津波を予想した）（大津波警報と言われたが、何メートルとかの予想は分からなかった）（メートルというより波にのまれたらどうしようと思った。メートルの想像はつかなかった）

問 9. 次に、防災無線と電話について、おうかがいします。まず、防災無線からうかがいますが、地震の起こった夜、あなたは防災無線の放送を聞きましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。（N=352人）

	N	%
屋外のスピーカーから聞いた	137	38.9
屋内の受信機から聞いた	201	57.1
何も聞かなかった	7	2.0
無回答	7	2.0

問 10. では、今回の地震のときに防災無線は役に立ったとお考えですか。まず、地震の夜から翌朝までには役にたちましたか。あてはまるものに一つだけ○をつけてください。(N=352人)

	N	%
非常に役にたった	279	79.3
ある程度役にたった	61	17.3
ほとんど役にたたなかった	4	1.1
全く役にたたなかった	3	0.9
防災無線の放送は聞かなかった	1	0.3
無回答	4	1.1

問 11. では、地震から一週間くらいのあいだはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
非常に役にたった	236	67.0
ある程度役にたった	90	25.6
ほとんど役にたたなかった	7	2.0
全く役にたたなかった	2	0.6
防災無線の放送は聞かなかった	6	1.7
無回答	11	3.1

問 12. 熊石町の防災無線は、戸別の受信機と屋外のスピーカーがありますが、地震前、お宅には戸別の防災無線がありましたか。また、その防災無線はいつでも聞こえる状態にありましたか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
戸別の防災無線があって、いつでも聞こえる状態になっていた	334	94.9
戸別の防災無線はあったが、音がしぼってあったり故障などで聞こえない状態だった	4	1.1
戸別の防災無線はなかった	2	0.6
その他	7	2.0
無回答	5	1.4

その他；(避難して聞いていない) (あったが、毎朝早く放送が入るのでうるさい。ス

イッチを切ってあった) (戸別の防災無線は寝室から離れていた) (店舗のため無線がない) (戸別の防災無線と同じ放送である) (乾電池がなく停電で聞こえない) (戸別の防災無線はあったが、停電のため役に立たない状態だった)

問13. では、屋外の防災無線のスピーカーはどうだったでしょうか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
ふだんから放送の内容がまったく聞き取れなかった	8	2.3
ふだんから放送の内容があまり聞き取れなかった	58	16.5
ふだんから放送内容はほとんど全部聞き取れる状態だった	255	72.4
その他	13	3.7
無回答	18	5.1

その他; (屋外の防災無線はよく聞き取れる) (屋外の防災無線が家の近くなのでいつでも聞こえる) (普段もよく聞き取れていた) (普段から放送内容は良く聞き取れる) (はっきり聞こえた) (家に居るときは戸別を聞いているので、屋外で聞こえるのかどうか良く分からない) (聞き取れる時と聞き取れない時がある) (10年前も経験しているけど、前と今回は全然違う) (室内放送で聞いていた) (戸別放送の内容とほとんど同じなので屋外は聞いていない) (放送している時間はほとんど室内なので屋外の放送は聞くことはない) (戸別の防災無線で充分)

問13-1. (問13で、1あるいは2と答えた人だけお答えください) あなたが屋外の防災無線の声が聞き取れない理由は何ですか。あてはまるものをいくつでも選んで下さい。(N=66人)

	N	%
音が重なり合って聞き取れない	50	75.8
しゃべり方が早口で聞き取りにくい	2	3.0
音が小さくて聞き取れない	8	12.1
周囲に雑音が多くて聞き取れない	7	10.6
その他	5	7.6

その他; (風向きで) (屋外防災無線の距離間が遠すぎる為、聞こえない) (音が山びこ状態) (屋内に居るのであまり聞き取れない) (側に居ない)

問 1 4. (再び全員がお答えください) 次に、電話についてお聞きします。地震のあった日およびその翌日にあなたにどこからか電話がかかってきましたか。つぎのなかから一つだけ選び○をつけてください。(N=352人)

	N	%
電話がかかってきた	248	70.5
電話はかかってこなかった	54	15.3
避難などで家にいなかった	38	10.8
無回答	12	3.4

問 1 4-1. (問 1 4 で、電話がかかってきたという人だけお答え下さい) その電話をかけてきた相手の中に「あなたに電話をしたがなかなか電話が通じなかった」と言っていた人はいましたか。当てはまるものに一つだけ○をつけてください。
(N=248人)

	N	%
「電話がかかりにくかった」と言っていた人がいた	224	90.3
別に「電話がかかりにくかった」とは言っていなかった	19	7.7
無回答	5	2.0

問 1 5. (再び全員がお答えください) あなたは、今回の地震があつてから火災がおさまるころまで、どこかに電話をかけましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。
(N=352人)

	N	%
電話をかけて全ての相手に通じた	46	13.1
電話をかけたが、一部しか通じなかった	110	31.3
電話をかけたが、一つも通じなかった	46	13.1
電話をかけようと思ったが、電話がなかった	4	1.1
電話をかけけなかった	78	22.2
その他	10	2.8
無回答	58	16.5

その他；(火災がなかった) (火災はありませんでした) (火災はなかった) (電話を掛けるよりかかってきた。電話を掛ける余裕がなかった) (火災は出ませんでした) (先方から電話が通じなかったといって来ました) (私の所では火災は発生しなかった)

(一度掛けたが混線しているので、しばらくしてから掛けてくださいの、放送が聞こえたので断念した)

問 16. 今回の地震では、電話についていろいろなことがありますが、次の中であなた自身が経験したことを、いくつでも選んでください。(N=352人)

	N	%
119番や110番に電話をしたが、 なかなかつながらなかった	2	0.6
自分や自分の家族の安否をたずねる 電話が町外からたくさんかかってきた	221	62.8
電話がかかりにくかったので友人・知人 の安否の確認がなかなかできなかった	140	39.8
無回答	49	13.9

問 17. 次に、地震・津波の情報やマスコミの取材についておうかがいします。まず、あなたが地震の後1週間くらいのあいだ、知りたかった情報は何か。次の中からいくつでも選んで下さい。(N=352人)

	N	%
地震・津波の規模や発生場所について	191	54.3
余震や津波の今後の見通しについて	290	82.4
地震・津波の被害について	171	48.6
家族や知人の安否について	132	37.5
行方不明者の救出・捜索活動について	117	33.2
国や道や町のとっている対策について	114	32.4
水道・ガス・電気・電話の復旧の 見通しについて	46	13.1
食料や生活物資について	45	12.8
大きな被害を受けた人や奇跡的に 助かった人の様子について	95	27.0
熊石町以外の地域の様子について	210	59.7
その他	4	1.1
特になかった	5	1.4
無回答	15	4.3

問18. では、あなたが知りたかったそういう情報をもっともよく伝えてくれたのは、つぎのうちどれでしたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
民放ラジオ	6	1.7
NHKラジオ	40	11.4
民放テレビ	62	17.6
NHKテレビ	159	45.2
新聞	44	12.5
警察や消防の話	2	0.6
家族や近所の人から直接聞いたこと	4	1.1
他人との電話での話	2	0.6
その他	1	0.3
無回答	17	4.8

その他；(兄、北電泊発電所)

問19. 北海道南西沖地震のあと、いくつかのラジオで「〇〇さんの消息を知っている人は△△さんに電話してください」という放送をしていましたが、あなたは、そうした放送を聞いたことがありましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
直接そうした放送を聞いた	64	18.2
放送は聞かなかったが、そうした放送をしていることは知っていた	64	18.2
そんな放送をやっているとは知らなかった	184	52.3
その他	1	0.3
無回答	39	11.1

その他；(ラジオは使用していなかった)

問20. あなたはその安否をたずねるラジオ放送を利用したことがありますか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
自分や家族の消息を伝えてもらおうとして電話をした	7	2.0
知人や友人の消息が知りたくて放送局に電話をした	5	1.4
利用しなかった	249	70.7
その他	9	2.6
無回答	82	23.3

その他；（安否を尋ねることに必要なかった）（特に消息を知る必要がなかった）（普段からそういう事を放送し、周知させるべきである）（利用したいが、電話の仕方も分からないので）（避難している場所でラジオを聞いていたら、青苗が全滅で連絡が取れなかった）（この様な連絡を取って消息を問うことを、知らなかった）（在ることを知らない）

問20-1.（問20で、1および2と答えた人だけお答えください）では、あなたはこうした消息をたずねるラジオ放送は役だったと思いますか。次の中から一つだけ選んで下さい。（N=12人）

	N	%
役だったと思う	8	66.7
あまり役に立たなかったと思う	1	8.3
無回答	3	25.0

問21. 次に、今回の地震の前兆現象についておたずねします。あなたは地震の前に動物や地下水の異常、地鳴り、海鳴り、海面の異常など何らかの前兆を感じていましたか。もしあれば具体的に教えてください。

○地震雲というものを見た（4, 5日前?）。一週間前位にオーロラのような虹が雲に映っていた。

○一週間位前に雲に何色か色のついたオーロラのような物を見た。

○地震のある前、晩方たくさんの潮虫が護岸にいっぱいいてびっくりした。

○地震のくる前日、外出（車）で家を離れた途端、今出たばかりの家が火災に遭うといった言い知れぬ不安と胸騒ぎに襲われた。火の始末はきちんとして出たのだが、そうした思いが1時間以上も続いた。初めてのことであった。今にして思えば予知であったのだろうか（奥尻炎上）不思議な思いである。

○今回の南西地震より2, 3年前からドトーンという音のあとにグラグラッと揺れる地震が度々起きていたのだけどテレビでも地震だとは放送されず飛行機などの空震だという噂であった、しかし今回の地震の余震と全く同じ現象なので以前からのそれも地震であったと思われる。（この辺の山は動いている）

○当日午後、びっくりする位のカモメが空中に飛んでいた。

○特に前兆現象ではないが、地震の起こる数秒前に大きな地鳴りがした。

○今から思えば4月から6月までのかれい刺網漁にあんこう、カスベが例年以上（今まで経験がない）の漁獲がされた。

○自宅で飼っているネコが3, 4日前から異常にうるさく鳴いた、又ネズミが天井裏でやはり2, 3日前より騒いだ。（今までネズミがいなかったと思っていたのに）

○ちょうど地震の一週間前に空に七色のきれいな虹のかたまりのようなものが浮かびま

した。

- 約1か月前からネズミ、ヘビ等が姿を見せなかった。
- 知人からの話ですが、海底の、うに、あわび、かれい等がそれぞれ異常にとれた。
- 私自身は特に感じていなかったが、一週間前位から地震雲が出ていたとか、例年になく全く予知していなかった。
- 今年はカレイが熊石では安く売られていた等の話は聞いていた。
- 感じてはいなかったが、何故かその日はみんな起きていて騒いでいた。
- 日本海中部地震の時に出了た地震雲が、今回の地震の起きる数日前の夕方に見た。
- 今考えると、地震の夕方地平線の方に、今まで見た事のない変な雲が出ていた。
- 地震雲を見た。
- 家で飼っていたカメが、いつもならおとなしいのに、その日の夜は水槽の中から頭を出したり、泳ぎ回っていつもと違って、何かあるなあとと思っていた。
- 動物（キツネ）が鳴いていた。
- 1週間位前に、地震雲が出ていたのを近所の人達と見た。見たことのあまり無い雲で地震雲ではと、話しあっていた。
- 地震雲を7月の初旬に見た。7月12日の2、3日前の夜、聞いたことの無い音を聞いた。
- 動物達が異常に落ちつかなかった。
- 当地方の地すべり前に、何度か地なりを聞きましたが、今回の地震の前にも何度か地鳴りを聞いています。
- 地震があったから言うのではないが、その日の夕刻家に着いた時、外の雰囲気というか気配というか、何かいつもと違っていた。
- 水槽の金魚が2、3日前から、うるさく泳ぎだした。
- 私の住宅は海岸ですから、前兆は磯に居る塩虫が多く陸に上がって来ているので不思議だと思いました。万物の人間よりも動物等は、前もって感知していると思い感動しました。
- 特にないが、町内折戸地区で地震発生以前から地鳴りが発生し（民家の無いところ）ている。その原因は地震とは関係無いと思われる。
- 犬の鳴き声が、地震前二晩位おかしな声で鳴いていた。
- 地震の前は全然感じませんでした。地震の後あの時の雲が前兆だったかとか猫が異常に鳴いた等は、後で感じました。
- 一週間程前に、オーロラのような雲を見た。
- 一週間位前にきれいな雲をみていたが、気にしていなかった。
- 3、4年前から、年に数回地鳴りがあったり、強い振動があった（短い間）。地震の当日、家の外に蛇が出た。
- 海鳥の異常な鳴き方が気にかかった。
- 今年は鼠やヘビが多く出ましたので、何か起こるのではないかと考えていました。
- 雲がまっすぐ上へのびていた。
- 地鳴り

- 今までになかったが、すずめが換気扇に4、5日前に巣を組だした。近所の家でも巣を作ったそうです。かなりの数のすずめが来ていました。
- 昨年（92年）夏頃、たびたび大きく音がしてゆれを感じた時がありました。秋頃と（93年）初夏にかけて二度程有りました。どこかで、ハッパをかけていて、その余音だろうと言う人もいましたが、その時これがもしかして何らかの前兆であったのかとも感じられております。地震と関連があるのかと心配しています。
- 私は毎日の様に温泉に入っておりますが、5日前から高温が続いておりました。
- 雲が虹の様になっていた。動物が鳴いてうるさかった。温泉が熱かった。
- 犬が異常に吠えた。地震を見た。
- 黒という名前の犬がいます。前日の夜中に異常に騒ぎました。いままで一度も夜に騒ぐような事はなかった。
- カラスの鳴き声がうるさかった。アリの行動がおかしかった。
- 地震の1週間ー10日位前、空にとってもきれいな雲が見えていた。子供達も一緒だったので、みんなで「きれいだね」「なんて言う雲なんだろう」と話した事を地震雲の話が出たときに思い出しました。
- 地鳴りがありました。車にぶつけられた様な事がありました。
- 私自身ではないが、母が前日頃からカモメがうるさく鳴いていたと聞きました。
- 近所の犬が朝から吠えていた。
- 家の近くでマムシがよく出た。（4回）いままで見たことがなかった。
- 午後5時頃富へ行きました、ついもうるさくて困っていたカラスが一羽もおらず、変だなと思った。7時10分頃帰りましたがその間カラスの鳴く声ひとつも聞きませんでした。2、3日して行った時はいつも通りでした。
- 動物達が妙に吠えたり、お湯の温度が急に熱くてさわれなかった。
- 1本の長い線のような雲がでると、大きな地震が来ると聞きました。
- ネコが夜中に鳴いていた、何匹も何日も続いていた。それでネコの会議かなあと思いました（テレビ等でネコが夜中に集まっている様子をみたことがあったので）
- 数日前、細長く伸びた雲を見ました。
- 今年はあまりにも動物の出没が激しく、不思議に思っていました。特に蛇やネズミ。
- カモメが平常より多く鳴きながら飛んでいるなど思った。
- あとで聞いた話ですが、いやな気持ちの悪い雲を見た人が2、3人いたとか聞きました。（女性60代）

問 2 2. 地震学者のなかには、近い将来に北海道の南西沖の周辺で地震が起こるかもしれないといった人がいましたが、あなたはこのことを知っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N = 3 5 2 人)

	N	%
知っていた	7 6	2 1. 6
知らなかった	2 6 1	7 4. 1
無回答	1 5	4. 3

問 2 3. けれども、今回の地震が起こった日にちも規模も予知はできませんでした。あなたは今まで、今回のようなマグニチュード 7. 8 クラスの大地震なら予知はできるものと思っていましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。(N = 3 5 2 人)

	N	%
思っていた	5 6	1 5. 9
思っていなかった	2 6 0	7 3. 9
その他	6	1. 7
無回答	3 0	8. 5

問 2 4. 次に、大津波のうわさについてお聞きします。大地震の後 1 週間ほどたった 7 月 1 8 日の夜、ふたたび大津波が来るという話が広がりましたが、あなたはその夜、あるいは翌日、このような話を聞きましたか。次の中から一つだけ 選んで下さい。(N = 3 5 2 人)

	N	%
聞いた	1 9 1	5 4. 3
聞かなかった	1 4 3	4 0. 6
無回答	1 8	5. 1

問 2 4 - 1. (問 2 4 で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい) それは、具体的にはどんな話でしたか。覚えていることを教えてください。(N = 3 5 2 人)

- 占い師が予言した。地震雲が出たから。
- 地震雲が出た。乙部町で避難している。
- 大きな余震がくる。
- 大地震の後必ず余震がくるものだ。その余震の一番大きいやつは、1 8 日か 1 9 日にくるそう。規模は 1 2 日とほぼ同じ位とのこと。どこから流れてきたのかわからない

が近所の人は皆知っていて怖がっていた。

○7月18日に大津波がくるという話だけ。

○神様が言ったとかで噂と思っていた。

○当日余震がありました、役場の防災無線で津波の注意報がありました。尚、近所の人の話によると地震雲が出て見た人がいるから又くると言った。

○地震雲が出た話。

○地震雲が出たから津波がくると聞いた。

○もう一度大きな地震が起きて津波がくる。

○地震雲が出たので又地震が起こり津波がくる。

○結構うわさが流れた。

○主人の会社の同僚の奥さんから電話があり、すぐ避難したほうがよいとの連絡を受けた。しかし、TV、ラジオ等の報道もなくすぐ噂話であることに気づく。よからぬ情報を流す無神経な者のいることに不快な怒りを覚える。数回このような情報は流れた。

○ちょうど一週間後にほぼ同規模の地震が発生し、大津波がくる。

○地震雲が出たから又地震がくるというデマ。

○一週間後大きい地震がくると話を聞きました。

○南西沖地震でマグニチュード7、8の大地震でその不安が治まらない時なので、近所の人達の話でまた大地震がきてこの熊石が全部なくなるという話でした。大地震で前の海のひいていく波が、高い所から見た人達だったのでその様な話でした。

○1回目の津波よりは小さいが必ずくると聞かされた。

○隣町から「地震雲が出たので又大地震、津波がくる」との情報が入ったが、聞いていないかと親類からその夜、電話があった。

○近所で地震雲の話が出てきて7月18日の夜に消防団の人が「地震雲が発生した」と言ったという噂が広がり、泊川の人は逃げた。

○友人からの電話で。

○また何日かに地震がくるから何か大切な物をカバンに入れておいた方がいいよと話をしました。

○奥尻と大島の間に起きるといった話。

○7月12日のような地震がまたくる。地震雲が出ているので、近いうちに大地震が起こり、大津波がくる。大島が爆発して大津波がくる。

○近くに住む奥さんが奥尻で被害を受けた母親から電話で、地震が来るから避難した方がよいと言われたそうで、私にも教えてくれた。

○どここの神様が、○月○日に地震が来ると言っていたとよく聞きました。

○神様と呼ばれている人が予言した。

○地震雲が出ていて津波は来るというウワサを聞き、地域の住民の一部が避難所に集まり明け方まで起きていたということ。

○また地震が来るそうだからリュックに大事な物を入れていつも仕度しています。電池等も用意しています。

○地震雲が大きく出て、前の様な事があるとの事でした。朝になって近くの高い所へ避

難した人達がいた。デマでも不安になるときと皆そう思うと思う。

○いついつにまた地震があり、津波が来ると、しかし私は世間の噂話として信じなかった。

○知人からの電話で聞きましたが、防災無線でも通告がなかったので家にいました。

○乙部町豊浜に住んでいる人が当町泊川地区の親戚の人に、「こちらの地区で大津波が来ると避難している。早く避難した方がいい」との電話が入ったことから泊川地区で避難中との話を聞いた。

○再び地震が起こり、震源地はより熊石に近いと予想されるので、南西沖地震に比較にならない程の地震による津波が来るらしい。

○大きな余震が来るので津波が来ると思った。

○地震雲が出ていたから。地震が来ると聞いた。

○只、デマだと思うだけだった。

○地区で今夜津波がくるからといま高台に避難しているから、地区の方も避難した方がいいと電話で知らされた、と聞いた。

○神占い。

○どこかの親戚から津波が来るから避難するようにと電話があったと言う話を聞いた。

○乙部方面の海上に地震雲なるものが現れて多くの人達が見たということです。

○大きい地震の後には必ずそれ位の規模の大きい地震が来るという話を聞いていた。

○人の噂、神様が言っていたと。

○何か予言者が言ったとか、世間の人達はかなり心の中に心配したようです。

○人から人への噂。

○また大きい地震が来ると言っていた。

○大地震が来ると近所の人達が荷物をもって避難を始めたので驚いて避難の仕度をしたが、デマだということがわかり取り止めました。

○神人が言っていました。

○噂話で聞いた。

○夕方、地震雲があそこにあると教えに近所の人 came が、その人に対して違うとか間違いないとは、はっきり言える事でもいなので（自分は「違う、まさか」と気持ちの中では思ったが）そうかしらと答えておいた。

○私の聞いたのは大津波ではなく、奥尻の上の方に地震雲が出たので、又一週間程したら大地震が来ると言う事を聞いた。

○津波が来るんだと言って、ある程度の荷物を持って高台に避難している人達がだいぶいると言う話を聞いた。

○余震が来ると又津波が来ると聞いた。

○秋田沖地震の時、津波が2回来たので噂を信じました。だが、後から考えてみると学者の方でも分からないのに、世間の噂に惑わされる事はなかったと思った。

○近所で奥さん達や、おばあちゃん達が一週間たって大津波が来て、今度は熊石が被害になると言われ、怖くて落ち着かなかったです。

○温泉の温度が高くなったから、地震が来る。

- 津波でなくて、また大きな地震があると聞いた。
- 地震雲が出たので、地震が起きて、大津波も来ると言うことでした。
- 人から人へと伝わって、奥尻の温泉が100度になった時、地震が起きたから又100度を超えたなど、みんなで気をつけていた。
- 7月12日の地震の余震が続き津波もあると思い、避難の用意はしていた。
- 事実その後、毎日の様に震度2、3度の余震はありましたが、何が来るか分からないと思い、今でもまだ心の準備はしております。
- 隣町の人が地震雲をみたと、人から人へ伝わって聞いた。
- 地震雲が出たとか、神様が言ったとか。
- 大地震が来る噂を色々と、具体性は特にはない。
- テレビ、ニュース等
- 子供が学校から帰ってきたら、熊石町にいる神様みたいな人が地震が来ると予言したと学校の中で、みんなが話していると言っていた。
- 噂等で聞いた。一週間に、又大きな大地震が来ると聞いた。
- 地震雲が出たとかと言う事です。
- 古い師が、もう一度大地震が来ると言う話。
- 地震が来ると、必ず大なり小なり津波が来ると言う。
- 世間話の中に、また大きな地震と津波が来ることを、世間の人々はこの噂話を本当にして、近の高台に物資を運んだ方もあります。
- 他町では避難しているとの話は聞いたが、余りにも馬鹿らしいので相手をしなかった。
- まことに予知しているような、世間話の中から。
- テレビで放送しているのを聞いた。(ニュース)
- 人の噂で聞いた。
- 現実はやまと思ひ、余震はある程度あると思ひました。
- 1、しばらく地域の人達は、日常生活の衣服のまま寝ている。2、高台に車で、一家避難しているとの情報。以上の話で後の新聞かと思いますが、その様なデマについてみる。
- 津波が来ると言う話。
- 地震雲が出たからと聞いた。
- 1、職場の同僚から＝乙部町豊浜で、再び大津波が来ると言うことで、全員避難している、我々も避難しなければ危険だ。2、熊石町の泊川地区でも、すでに避難が完了したそうだ。急がなければ、... 3、テレビ報道されたのでまちがいない、絶対来る。
- 又、大地震が来ると言う事だけだったと思います。
- 再び大地震が来ると言う話が広がりました。
- 地震雲が出た。
- 色々話を聞いたがデマだと思った。
- また地震があつて津波が来ると言う。
- 地震雲が出たから又地震が来て津波が来ると聞いた。神様があと何日かで又来るとかという噂が子供達や近所の人達が話していた。

- 神様のおつげと言う事で、高台に避難した人がいたという事。
- 友人の話で聞いた。
- 噂で聞いた程度に過ぎない。
- 地震が来ると津波が来ると、何度も思ってたままで寝ています。今でも続けております。近所の人から口伝えに伝わってきます。
- 泊川相沼方面の一部の人が山の高台に小屋を作り生活用具を運びだし避難準備をしている事を聞きました。
- 知人から聞きました。
- 近日中に再び地震が発生し、津波が来るとの情報が流れて隣町の人達一部が避難をしている事。（奥尻島上空に地震雲を見た人が結構いた）
- 奥尻島の大地震が収まらない内は、何時も不安な気持ちでおり、熊石も多少余震があり、又来るのではないかと不安でした。
- 何処かの占い司が大津波が来るので、自分も外国に避難して居るとか、学校でも専らの噂があったと言う。
- 再び大きな地震が来ると言う、噂は流れて聞きましたので、大なり小なり津波が来ると思いました。
- 人から人への噂だと聞きました。
- 世間の噂で聞きました。
- たびたび余震が有るから、必ず又大きいのが来る様な話でした。
- これは何の根も葉もない人々の噂でも気を付けておりました。科学的な予測と思っています。研究はしてる様だけど、まだまだ。はっきりしていれば、こんな災害ともいえるべき物は起こりません。
- 一週間前の地震よりかなり大きい地震が来て熊石にも津波が来る。
- 「神様が言った」と言う事を職場で噂になった。
- 噂で聞いた。
- 地震雲が多く出ている。
- 地震雲が出たとか雲が（地震）出たから、又地震が来るよと聞いた。
- 一部地域の人が避難したと聞いた。
- 津波が来るから荷物をまとめて置くように言われた。
- 一週間後には、必ず同じ様な大地震が来ると言う話をあちらこちらから聞いて心の準備をする様に家族で話をしていた。
- 女性の中で多く聞かれた。地震雲が時々出たことなど。
- 家族が他の人から人伝えの話で、誰も実際津波が来るとは思っていませんでした。
- 18日の数日後に他の部落で避難したと言う話を聞いた。
- 地震雲が空に出ていた。
- 近所に青苗出身の方が居て、奥尻にそんな話が出ているので気をつけ様と話をしていました。そのほか誰となく「又来るんだ」ってとか、また聞きだけど来るらしいとかハッキリ来るとまで話して居た人が居ました。
- 噂話でも恐ろしいことでした。

- 大成町方面で地震雲を見たので又津波が来ると聞いた。
- 親戚から電話が来ました、内容は地震くもが出たということです。
- 近所の人から聞いた。大きい津波が一週間後位に来ると聞いた。
- 地震雲が出ている。
- 友人、テレビなど。
- 「また津波が来るので高い山などに避難したという人もいる」と聞いた。
- ただ漠然とうわさが流れていた。その人達の話によるとテレビで霊能者が言っていたらしい。
- ・占い師の予言（地元の個人的な占い師）。・人々のウワサになっている。・地震雲が出た。
- ただ世間のウワサ話で聞きました。
- 1回目の地震の後、必ずまた余震がくると聞いていた。
- 地震雲が出た。よその地区では避難を始めているとか、誰かが予知をしたとか。
- 翌日に聞いた。隣町の乙部町豊浜の親類宅より熊石町泊川地区のある家に電話がかかってきた。（地震、津波が来ると）
- 近所の人から聞きました。どこかの神様が話したと聞きました。
- 大津波が来るとはか聞かなかったが、18日か19日に大地震がくると聞いていた。
- 江差の神様が乙部沖の地震で津波が来ると、学校で聞いた子供から聞きました。
- また同じ様なのが来るから逃げる用意をしたほうがいいと言われてた。
- 漁船に乗っている人が地震雲を見たと無線を通して伝えたことから広がったと、日にちはわからない。
- 翌日ですが、地震雲が出たので避難した人がいたといった話し程度ですが。
- 地震がまたあるとデマのように地域に話がとんだ。
- 近所の人からただ来ると言っていた。
- 近所の人から「占いの人」が言っていたとか。

問24-2.（問24で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい）あなたは、その話をだれからお聞きになりましたか。次のなかからいくつでも選んで下さい。

(N=191人)

	N	%
家族から	18	9.4
近所の人から	136	71.2
親戚、知人から	47	24.6
職場の人から	36	18.8
警察や消防から	1	0.5
報道関係者から	8	4.2
その他	5	2.6
無回答	3	1.6

その他；（子供）（神様が言っていたと言う噂が広まった）（友達）

問24-3.（問24で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい）あなたはその話を聞いて、大津波が本当にくると思いましたか。次の中から一つだけ選んで下さい。
（N=191人）

	N	%
大津波が本当に来ると思った	19	9.9
ひょっとしたら大津波が来るかもしれないと思った	101	52.9
大津波が来るとは思わなかった	59	30.9
その他	4	2.1
無回答	8	4.2

その他；（津波より先に地震が来てからの話だと思った）（そのような情報がなかった
のでデマだと思った）（マグニチュード7、8と聞いて、見て津波は来ると思った）
（翌日なので、その日なら避難したかもしれません）

問24-4.（問24で、「聞いた」と答えた人だけお答え下さい）では、あなたは
その話を聞いて実際に避難しましたか。（N=191人）

	N	%
実際に避難した	40	20.9
避難しなかった	129	67.5
その他	12	6.3
無回答	10	5.2

その他；（準備だけしていた）（避難の準備をした）（避難はしなかったが荷物はいつも車に積んで歩いた）（準備はしていた）（いつ起きても、すぐ逃げる様にリュックと電灯は用意している）（避難の用意はしていた）（いつでも逃げられる準備をしていた）（いつでも逃げられる準備をして、遠出を控えていた）（トラックを港から高台に上げた）（いつでも出れるように、心の準備はしていました。夜はあまり熟睡できたかった）（高い所にいるから荷物の用意はした）（翌日聞いたので）

問25. 今回の災害では、災害の直後から赤十字や民間の人たちがいろいろなボランティア活動を行ないました。あなたはどのようなボランティア活動をしてもらいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=352人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	16	4.5
義援物資の仕分け・運搬	6	1.7
宅配便関係	1	0.3
掃除	10	2.8
引っ越しの手伝い	2	0.6
話し相手	10	2.8
その他	60	17.0
無回答	260	73.9

その他；（隣の店の壊れ物の後片づけ）（被害がありました、町役場で状況調査のみ）（お墓のずれ直し）（義援金）（被害がなかったので何もしてもらわない）（自分が体が動かず、家の中がメチャクチャ）（熊石では大きな被害がなかったのでもない）（被害状況の調査）（ボランティアの人達は、当地にはまったく来なかった）（被害調査）（被害はコップ一個割れた位なので、ボランティアは受けていない）（私の周辺ではボランティア活動を受けた人は見受けられませんでした）（町内会として義援金集め等）（被害がなかった、ボランティアの人達は来ませんでした）（上から全部落ちたものを自分で片付けた）（人の手をかりる被害にありませんでした）（活動してもらう必要がなかった）9熊石町にボランティア活動の人達が来たのかわからない

問25-1.（問25で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください）
あなたは、そうしたボランティア活動のうち、どれがありましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。(N=92人)

	N	%
自宅周辺のあとかたづけ	6	6.5
義援物資の仕分け・運搬	1	1.1
掃除	3	3.3
引っ越しの手伝い	1	1.1
話し相手	3	3.3
その他	1	1.1
無回答	80	87.0

その他；（今金町で奥尻の親戚の火葬に立ちあったので今金町役場の婦人会の人、大変親切にしてくださいました）

問25-2. (問25で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたが受けたボランティアは、どのような人(グループ)でしたか。あてはまるものにいくつでもまるをつけてください。(N=92人)

	N	%
個人	7	7.6
団体	5	5.4
無回答	80	87.0

自由回答；(今金町役場、婦人会)(働き仲間)(役場職員)(町、商工会)(役場)

問25-3. (問25で、何らかのボランティア活動を受けた人だけお答えください)
 あなたは何時からボランティア活動を受けましたか。また、その人数は何人くらいでしたか。

期間；(省略)

人数；(省略)

問26. (再び全員がお答え下さい) あなたは、今回のボランティア活動についてどう
 思いましたか。あてはまるものを一つだけ○をつけてください。(N=352人)

	N	%
ボランティア活動は被災者にとって役に立ったと思う	241	68.5
ボランティア活動はあまり役に立たなかったと思う	14	4.0
ボランティア活動はかえって迷惑だったと思う	2	0.6
その他	11	3.1
無回答	84	23.9

その他；(役に立つと思うが、必要なボランティアを計画的に)(場あたりに押し掛けても、と思う)(活動の仕方の問題だと思った)(はっきり指揮がとれる活動であって欲しい)(何をしたら良いのか考えて欲しい)(どうでしょう、特に必要であったと思います?)(もっと組織だったものだとよかったと思います)

問 27. あなたは、今後他の地域で災害があった時、ボランティア活動を行ないたいと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
ぜひ行いたい	56	15.9
可能ならば行いたい	218	61.9
行うつもりはない	12	3.9
その他	13	3.7
無回答	53	15.1

その他；(自分にできる事があれば行く)(老年者に役に？)(老人だから出来ない)(高齢の為出来ない)(体が不自由なので行けないが、協力はしたい)(出来る限り行いたい)(時と場合による)(余震が毎日あったので安全が確保されたらボランティア活動が可能です)(子供がいるので隣近所位しか行けません)

問 28. あなたは今回の災害の経験から、今後災害地においてボランティア活動は必要だと思いますか。あてはまるものを一つだけ選んで下さい。(N=352人)

	N	%
個人・団体を問わず絶対必要だと思う	227	64.5
個人のボランティアは必要である	13	3.7
団体から派遣されるボランティアは必要である	45	12.8
被災地救済は行政が行うことであり、ボランティアは必要ない	6	1.7
その他	10	2.8
無回答	51	14.5

その他；(必要なのだが、ボランティアを被災地で統括する組織が必要と思う)(必要と思うが受け入れ側の対応ができてから)(行政の被災地救済を前提として、必要だと思う)(被災地が必要と思う程度のボランティアなら必要)(必要に応じた対応)(ボランティアが必要とされないような救済が、行政により行われれば要らないと思う)(個人、団体問わず必要だと思う)(以前はいいと思っていましたが、今回奥尻で食料がとばしいのにボランティアの人ばかり食べていたと聞いたので必要以上の人数はいらないのかも)(必要だと思いますが、大変な人は忙しく働き何をしてよいのかわからないといった人のニュースを聞きこんな時はと思ってみましたが、組織だったものがもっとあったらと思ってみましたが)

問 2 9. (ふたたび全員がお答えください) では、あなたは国や北海道や熊石町に対して、今後行なうべき対策としてどのようなことを望みますか。次の中からいくつでも選び○をつけて下さい。(N = 3 5 2 人)

	N	%
地震・津波予知体制の強化	2 6 0	7 3. 9
消防力や緊急医療体制の強化	1 2 3	3 4. 9
広報の充実	8 7	2 4. 7
被災者のための公的住宅の建設	1 0 8	3 0. 7
町・村の対応体制の強化	1 3 1	3 7. 2
観光客の誘致対策	1 3	3. 7
情報連絡体制の強化	1 2 3	3 4. 9
漁業施設への公的援助	8 6	2 4. 4
避難所や避難道路の整備	2 4 8	7 0. 5
個人被害の補償	1 0 5	2 9. 8
防波堤のかさ上げ	1 5 2	4 3. 2
集団移転の促進	1 3	3. 7
その他	3	0. 9
無回答	2 3	6. 5

その他；(沖の方へ島堤の建設) (離岸堤設置) (一本道路なので、山の方にもう一本欲しい) (国、道行政の強力な援助)

問 3 0. 最後に、国・北海道・熊石町など行政に対する不満や要望がありましたら、問 2 9 と重なってもけっこうですから、どんなことでもお聞かせください。

○熊石町の地形を考えれば、防波堤の強化と山(がけ)崩れ対策を強化してほしい。

○今回の災害を基準として地域の危険区域を設定し、国の施策により集団移転地域造成を行い、すみやかに移転を実施する。代替道路の整備を早急に実施し、各施設には、必要最低限の寝具等を備え付けるとともに(炊出し用具含む)停電の際の緊急用街灯(避難灯)が設置できないか、海岸護岸等の整備も根本的に規格等を考え直す時と思う。

○避難所への避難の際、自動車で避難する人が多数います。そのための道路整備、又避難場所へ避難する時間の余裕がない場合のために、裏山へ避難道の早期作成。

○1. 海低調査の促進。国の予算措置。2. 地震津波の予知体制の強化。早期検知網の整備促進。今、国会に補正予算3 5 億円以上提出したとのこと。道内2 7 か所、全国1 5 0 か所最新観測点の新設など年度内完成、新年度から運用開始の促進。3. 避難場所や避難道路の整備。4. 防潮堤の新設、嵩上げ工事の促進。5. 被災地の復興対策の促進。

○熊石町では地震、津波に対してとてもよく親切にしてくれてとても嬉しかったです。

○津波時における避難場所として高台はあるが、雨、風または寒い時期では身をよせる場所がない。

○津波の時高台に休む所がない。

○津波の時の避難所がない。

○高台に避難しても避難所へ通じる道路がなく、今回のように夜地震があった時、一夜を外で過ごすのが病人、老人、子供達にとって大変な不安と疲労であったと思います。是非、高台に各避難所に通じる道路を付けてほしい。

○避難所についてですが、避難所と避難所の間隔が近い方がいいと思います。遠いと、避難所まで行かないで近くの裏山に登ったり、お宮の石段でしゃがんでいたりしておりますが、虫にさされたとか、蚊に悩まされたとか、寒くて家に服を取りに戻ったとか聞きました。若い人ならそれでもいいのですが子供や老人では避難解除までの時間が長いので、一晩中そうしているのは無理です。小さくてもいいので雨風の当たらない小屋が高台にあったらいいと思います。

○奥尻島の被害状況の報道を見て痛切に感じた事は、すべては天災が起こした事による被害なのであるから被災者の方達には国はその再建のために微細に渡って援助をする必要があるのではないか。そんな思いを深くしました。人類は愛せても、人間を愛せないと言った行政だけはしてほしくないものである。

○1. 町、職員の組合があるが、ボランティア活動への不参加が多く異常に思う。2. 民活にもっと積極的な姿勢を見せてほしい。3. 課長さん達はもっと部下を信頼して、良いアイデアを引き出す努力をしてほしい。4. 町を良くするために町民と一丸になって頑張ろう。

○天災に対する財産の被害は相応額、いづれかが保証してやるべきと考える。特に住居に関する部分はそう思う。奥尻が保険では少額しか貰えないという話を見ているので保険のそういう点を改善していくよう働きかけるべきだと思う。

○すぐ山に登ったけれど、逃げる場所は一時小屋の様なものでも建てて雨や風があたらない所に逃げたいです。

○町の被災地への対応が遅かった。

○避難所を増やし、避難道路をぜひ整備してほしい。

○町の対応が遅れたため、奥尻町や瀬棚町への義援金や義援物資等がだぶってしまった。

(例) 多い人では小学校、中学校、高校、職場、町、婦人会といった具合いで、5つも6つも中にはもっとある人もいたと聞いた。

○私の住んでいる場所はすぐ目の前に高台がありますが、これより先4k位離れている町内があり、その辺の町民が避難する場所がありません。行政で避難場所を考えてほしいと思います。

○もっと早く避難の連絡をしてほしい。とっさに逃げるのに必要な物を確実にして、たくさん物のならぬよう指導してほしい。もっと具体的に早く逃げるとか、どうしたら心を落ち着けて何をするかの訓練を多く経験させたらよいと思う。

○北海道や国からの対応があったと思うが、私達の町は被害が小さい故か、上部の親心の対応を知らされていない。今後は小さい事でも広報などで上部の対応を知らせてくれ

たらと思う。

○熊石町にある防災無線がこんなに役に立つものと始めてありがたく思いました。熊石町は海と山の間に町があるような所ですので、避難道路の整備が最も大事な事だと思っています。

○国の対応の遅さに疑問を感じる。大規模災害は一地方自治体が対応すべき問題ではないと思う。総理大臣が「後は国に任せなさい」と大見栄をきったが何もやらないと思う。視察もいいがその結果の対応を確実にしてほしい。

○町行政には絶望感でいっぱいです。特に町長の性格が良くなく、翌年7月には選挙ですので、考えたいと思います。（前回支持者より）公約を守ってほしい。

○町民の要望には可及的に即時実施すべきである。

○熊石町でも、うちは被害が全くといっていい程なかったので、被害のあった方は本当に気の毒と思います。家も船も流され、生活が出来ない人達の話も聞きます。その方達にせめて心配なく生活していけるだけの援助はしてほしいと思います。

○NHKテレビ放送で、奥尻沖の海底調査（地震のための）が、2、3年前になされていた事を知りました。それによると近い将来地震発生の可能性ありとの事だったと思います。その様な大事な調査結果が出ているにもかかわらず、道、町とも何らの手も打たなかった事が残念です。せめて避難訓練だけでもしていたらと思われてなりません。10年以内にまた地震があると覚悟しています。国の行政の中にこの地区の地震問題を取り上げてもらいたいものです。

○道や支庁の人達は親切で意欲が感じられるが、町職員については、全く意欲が感じられない。行政使用の商品を他町から多く買っているのは変だと思う。地元の事についてもっとリーダー的な存在であってほしい。町民ともっと交流してほしい。

○この度の被災地の中で奥尻町は別として、私達の町では、国や道、他の団体等からの対応の状態が町民の一人として、全くわからない。被害がなくとも国からこうであった、北海道の方からはこのような心配りがあったことを、町民に公報等で知らせるべきである。当町にも地震、津波の予知器など設置されるのかなど。

○義援金が適切に使用されているか不安である。奥尻では、一部に酒の呑み代になっていると言う噂もある。

○避難所を考えて欲しい。

○不満だらけで、書ききれません。（今の町長になってからは）

○私たちは地震、津波が起きた場合裏山の高台に上がると、20mや30mの波は大丈夫なのですが、上がってしまってから他家の畑の中ですので、避難している中雨風をしのぐ小屋でもあれば良いと思います。南西沖地震の時は夏でしたから、島のあぜに腰を下ろしてスカーフだけで一晩、次の朝の解除になるまでいましたけど雨降りとか雪降りでもあったら、とても駄目だと思いますので、頭を隠す小屋でもあれば良いと思います。定められた避難場所は有るけれど、私たちのお寺は津波に危険な場所ですので、山に登って逃げてしまうとう安全な場所ですので。

○自然災害は、認識や学識及び経験だけでは駄目です。

○今度の南西沖地震は、予想以上に大きな災害を私たちの住む地域に起こし、又地震に

対しての予知が出来ておりません上に、突然の大地震に今後はその対策に対して、行政面に於て予知の情報の周知完備と避難態勢の予報を知らせる事と共に、災害に対しての準備を完全に対策を行う様に希望します。

○昭和62年の12号台風くずれの時も、20m位の波が相沼の湾に押し寄せている。津波がいつか来るとなると、海岸の護岸のかさ上げや島堤が早急にやらなければならないと考えます。

○海岸に溶壁を高くして、離岸堤も必要であります。早急に行くべきだ。

○避難道路や避難場所を設置したほうが良い。

○海岸護岸のかさ上げと、島堤の建設が必要である。

○避難道路が欲しい。

○地震災害において、町の方からも被害状況を調べに何でも来たが、墓石などが崩れた所などは、老人だけが住んでいる所などもあるので、町の方でも助けてほしかった。公衆トイレを立派にするのも結構ですが、スポーツ体育館にも力を入れてほしい。津波、地震の時の避難場所、避難道路の整備を確実な物にしてほしい。

○海岸護岸を2mかさ上げし、沖の方に島堤を作ること。早急に必要である。台風が来ても、波が家の中まで入る箇所が相当ある。

○避難場所に防災無線が聞こえないので、設置してほしい。

○よその国のボランティア活動を一生懸命やる前に自分の国、日本の災害の為にもっと一生懸命になって欲しい。いざという時の為のお金や住宅を考えて欲しい。

○消防力や緊急医療の体制の強化。漁業施設への公的援助。

○何かあってからでは遅すぎます。いろいろな事があって大変でしょうが、何かある前に事を早めに進めて欲しいです。

○前は海、裏は山なので避難場所がない、又裏山に登るにしても今までの道路がダムになり、道路はすべてない。前の海の道路より、波よけブロックが下がっていて、いくら町、国に要望しても災害が起きてからでないと手をつけてくれない。

○町内の被害の調査等を早めに、調査の結果をまとめて早めに修復等の相談に乗って欲しい。

○避難所や避難道路の整備、避難・防災訓練の強化。

○島のある山の上にぜひ道路が欲しい。前から町民に呼びかけては消えてしまうのでぜひ、もっと力をいれて一日も早く敢行してほしい。

○町と町民との対話。

○国や道が早急に、住宅や食生活が安定して生活出来るようにしてもらいたい。

○私たちの町は海岸沿いなので、一日も早く防波堤のかさ上げなどしてほしい。

○地震、津波等の予知体制の強化、避難所や避難道路の整備。

○町長自身が町民と同じに避難し、町民から何でここにいるのかと言われたと聞く。こんな事では要望する気にもなれない。防災無線の「避難してください」では今回の様な地震では通用しない。現に避難しなかった人も居るから、「避難命令」等と放送したほうが、よい。また、そういう体制が必要だ。

○どうかよろしくお願いします。

○指定されている避難場所に避難している人達の状況把握が、不十分。少なくとも名簿位は作って置くべきだ。町内の状況が防災無線で一度も放送されなかったのが不安だった。他町村の状況はラジオで聞いていた。マスコミとの連絡を密に。最も近い高台に避難するので、国道からの避難路の整備が必要。災害は好天気の日とは限らないので、身近な所に避難所が必要。高潮を防ぐ為防波堤のかさ上げを要望する。最も危険な任務の防災地区連絡員の身分保障をきちんとすべきだ。

○避難所や避難道路の整備を一日も早くやって頂きたいと、町長さん始め役職の方々にお願いします。

○避難道路をぜひ通して欲しい。

○行政に対しては幾つかの問題はあります。すべての海岸地帯ですので、災害の発生前に防波堤のかさ上げが必要かと思います。各開発や土木現場等でよく現地調査して見て現地の地形等を見て、工事災害のない事前に行うよう、但し何をするにも、先立つものは・・・です。その点を町民も判断していますが各町に所在地は、優先に施工しているなどと思います。町内差別なく、上司はいつも言葉と実行は反比例しています。今後十二分検討の上、施行をお願いします。土地状況を見回りするようお願いします。町長の話も聞きます。

○私の住む地区では前は海、背後は急傾斜しかも、保安林指定地区、避難道路の整備及び場所設置について、熊石の要望を法的手続きは後日として、緊急対策を優先させて欲しい。地域住民の不安解消を急ぐべきだ。

○国は早急に対策をたて、援助すべきである。

○1、災害を想定した避難場所の指定がない。2、住民は自主的に、安全地域を探しており判断するまでに時間がかかる。また、その場所に行くまでには相当に時間がかかる。3、避難道路がないため、すべて海岸に面した国道を乗用車で避難するため、災害以外の交通事故の危険もある。4、これらの事を以前から町にお願いしていますが、まったく対応してくれない。

○北海道南西沖地震は今生きている方々は、これまで経験したことのない大被害です。全国各地からの団体、個人からの心温まる救援活動には、本当に感謝に堪えません。被害の復興には、被害者個人の力ではどうにも出来ません。国道行政での強力な復興行政を希望します。

○町内根崎に住んで居りますが、時々地震の様に海側の方の窓等が、すごくガタガタ揺れています。びっくりします。近所でも同じ様です、調べてもらいたいと思います。

○せっかくある防災無線の活用方法を、もっともっと工夫すべき。

○情報連絡を迅速にしてください。

○避難道路の整備が必須だと思う。今幹線道路の建設計画があるが、それに到達するまでの支線がない。幹線まで到達するまでに、奥尻の様な津波があれば全部全滅するのであろう。高齢化するに伴い、運転免許の有るものは限られてしまいます。徒歩で避難できる通路が必要だと思う。新幹線利用するのが若者ばかり、避難口確保もできず新幹線か。

○地震により災害地の出たところ、危険な場所早く治して安心させて欲しい。雨が降る

と危険がいっぱいで心配だ。

○災害発生から4ヵ月以上もたっているが、個人被害の保障が今だにない。被害状況調査も終わっているのに、私たち、低年金所得者は修理したくても出来ず冬に向かって心配です。土台の基礎部分が割れ、床が落ちて土台、窓などの隙間から風が入り、ストーブに火を入れても部屋は暖まらないので、早急に相応の配分を要望するものである。

○熊石も日本海に大島をおいており、何時かまたと思うと大変心配です。日本海一帯は地震地帯と思われ、中部又今回と又何年か後、地震が起きるかと思われます。熊石も大島の津波発生前、海は大変心配な状態に有ります故、出来れば様々な施設をお願いします。

○幸い当町では、人的被害はもちろん物的被害も少ない方でしたが、被害の大きかった地域の義援金品の対応について、町当局と社協との連携が適当でなかった様に思う。奥尻等のあの被害を見たら、もっと親身になって対応を考えて欲しいと思う。今後の問題として海岸地域の防波堤のかさ上げや離岸堤の設置を早急に実施されることを、お願いします。

○（国・道に対して）世界的に見ても日本は、火山地震国と言われています。四方を海に囲まれてる日本は、当然これに伴う津波の起こる事が予想されます、従ってその予知体制強化が望まれます。国の財政力からみても、これに対する予算を倍増すべきであります。当津波警報はマグニチュードによって、瞬時に出せる体制で有って欲しい。

（町に対して）情報連絡について戸別の防災無線があるが、細長い又老人世帯、出稼ぎによる女世帯の町では、災害に対する混乱が起こる。役場の職員が来るまでには、時間がかかる。各地域に防災員とか配置してその人の指示に従うようにしたらどうか。

○予知体制の強化が良かったら死者が少なかったのではないか。南西沖地震の様な多くの死者を出さないためにも、もっと詳しい情報を直前に知りたいです。

○地震、津波予知体制と町の対応体制の強化を望みます。

○私たちの住んでいる所は、避難道路は全然有りません。人は登れても車は国道に出る道はありません。南西沖地震の時はお陰様で大きな被害もなくすみましたけれど、せめて車が国道に上げる道だけでも有りましたら、どんなに安心するかと、毎日が不安でありません。袋小路です。熊石町西浜。

○地震は何度か経験したが、地震＝津波と言う考えがなかった。今の住宅は海のすぐ側なので、私の様な人が他にもいるかも知れません。防災無線は、地震が起きたらすぐにかけて欲しい。私が聞いたときは避難した後だったから。

○とみに役場の職員は、親身でない。親切でない。役場などの職員は、威張っている。私たち町民を、本当に思って親切にしていない。役場にある職員は頭を高くして威張っている。そんなものではないかと思っています。公金をもらって、威張っているように思います。中でも町民にはよく頭を下げて親切にしている者は、出世して、早く課長になっているのに。

○11月18日午後1時50分頃、又小さな地震が起きた。又7月に起きた大きな地震が来るのではないかと心配している。地震が来たとしても津波だけは、絶対嫌だ。

○津波の予知体制を強化してほしい。特に、今回の第一報の防災無線においても何分後

にどのくらいの波が来るかを、知らせたら良いと思う。何分後に来るかと言うことが大切である。

○護岸のかさあげと、護岸堤（島）の設置が急務です。

○漁師町であるから、護岸のかさ上げや島堤の建設をしてほしい。台風と津波は時として、同じ様に波が高い物です。

○避難道路。防波堤。

○避難所や防波堤の早急な着工。

○予知体制、避難場所、防波堤。

○避難道路及び、防波堤を早急に着工して欲しい。

○避難所や避難道路の整備。

○護岸のかさ上げ、離岸堤（水上20m位の巨大なもの）があれば、台風時期でも津波でも安心出来る。

○津波と台風の波よけのため、護岸のかさ上げ、島堤の設置をしなければならない、災害は忘れた頃にやって来るからです。

○私たちの地域には、避難場所等が何もなく、特に老人が多く避難道路整備等も何も無く、道路より防波堤が低く又、海と家との距離が近い為不安が多い。今回の地震がたまたま夏だったので、外で朝まで立って入られたが、雨と雪が降っていたなら大勢の人達に逃げ場所も無い為、熊石町に避難場所、避難道路を要望したが、財源が無く今すぐどうすることも出来ないと言う返答でした。老人の多い町の為、是非国や道に対して一日も早く対策が立てるように援助して頂きたくお願いします。

○熊石の主道路は、229号線、一路線のみなので、災害で国道が使用不能になった場合、救援活動や避難あるいは消火等の緊急対応が出来なくなるので、現在進めている栄農線や農道を整備して、緊急道路として早く整備して欲しい。

○津波、台風は忘れた頃にやって来ると言われている。防波堤や護岸の2m位のかさ上げ、沖に島堤を作って欲しいと願っている。

○火災保険の制度の見直しが必要である、津波にあった奥尻島の方々については実に遺憾に堪えない。国の助言も必要であり、保険会社の一方通行には腹が立つ。

○a. 熊石町では全く台風によらず地震、津波の情報に対する事がなっていないので、せっかくの防災無線があるのもっと体制の強化をもとめます。b. 現実に今回の地震、津波が発した時、住民は避難所や避難道路も全くわからず家族がチリチリになってしまいました。今後こういうことがない様にしっかりと道路、場所を整備してほしいと思います。

○火災保険制度について不満です。毎月高く支払っている掛金にもかかわらず、いざ被害があった時、規制により必ずしも保障されていないことに腹が立つ。何のために保険に入っているのか意味がありません。困った時助けてくれる安心できる行政であってほしいです。税金ばかり高く国民から集めてこういう災害の時こそ助けてほしいと思います。

○被害者に対する公的援助の強化と将来に対する希望をしめしてほしい。電話が災害の時に通じるようにしてほしい。

○話を聞いていくだけでなく、その後の対応をしっかりとしていただきたい。

○地方からきてまだ日も浅く町の事よくわかりません。熊石町に来て感じたことは税が高いこと。役場内においても活気のないこと。町としては全てにおいて行き届いている様に思う。道路、街灯など。衛生に対してもそれなりに行き届いています。ただ海が近いので、もう少し防波堤に対して考えてほしい。家の所まで波あわがとんでくる為。

○地震や台風、津波等それにあった避難場所をきちんと地区ごとにこまかく説明してほしいと思った。子供や老人のために学校などを避難場所にしてほしいと思った。

○公宅の地盤が埋立地のため、雨などで地すべりの危険があり、大雨注意報・警報が出されると実家へ避難している状態なので急いで工事にかかってほしい。

○年に1回か2回避難訓練をしてほしい。避難する場所、道路は町民一人一人熟知する様、具体的に普段より知らせる必要あり。

○避難場所が海のすぐそば。高台まで行くのに時間がかかる。

○救援物資があまって捨てられたり、保管に困ったりということだが各町村でバザーを開いて換金して被災地に送る方法がいいと思った。またそれでも余ったのならそれらを必要としている国々はたくさんあると思う。そういう所へ送りこんだらいいと思った。

○新聞などで地震予知は不可能に近いかと聞いておりますので、専門的な分野でなく、大地震を経験したその地域の人々の生活の中での情報をまとめ、まだ大地震はおきていないが予想される地域の人々へ参考になるような情報交換があれば役立つのではないかと思います。又、アメリカの地震学者が空振りを恐れず予知をしているということを新聞で読みはズレた時よりも予知せず起こってしまった時のほうが損害が多いと思うので日本でも考えられないかと思う。でも一番は地震研究の予算の少なさに一番腹立たしさを国に感じます。

○救援する人も自分の事として考えこんなものをもらったら、自分ならと考え送る物も送られる側が一番もらえてよかったと、思うものを。送られた物のために困惑しそのためのお金も必要との話を聞くと（物の保管のための場所等）今後このような事があった時にその時になって考えるのではなく、日本は地震国ですし、その時になってではなくマニュアルがあると良かったのでは、と思うのですが。

○熊石町民は地震津波の恐ろしさを実感していないので、行政教育の中で内容のある対策が、急がれると思います。（具体的に）

○今回は夏ということもあり、暖かったので外でも避難していて助かりましたが、もし冬だったら、近所で助け合えなかったら（主人が留守で2才、4才の子供ふたりをかかえ途方に暮れるところだった）と思うと今だに不安で主人がいない時には居間で寝るようにしています。そういう避難をしても大きな施設のない山に逃げなければならない場合の事を考え町にはどの地域に対してももっと地震の時の様子などをアンケートとるなりして避難場所の対処をお願いしたいと思います。

どうもありがとうございました。最後に、あなたご自身のことをおたずねします。

問1. あなたの性別はなんですか？あてはまるものを一つだけ選び、○をつけて下さい。
(N=352人)

	N	%
男	180	51.1
女	152	43.2
無回答	20	5.7

問2. あなたの年齢はおいくつですか？具体的に教えてください。(N=352人)

	N	%
20歳未満	1	0.3
20歳－30歳未満	17	4.8
30歳－40歳未満	39	11.1
40歳－50歳未満	84	23.9
50歳－60歳未満	64	18.2
60歳－70歳未満	83	23.6
70歳以上	44	12.5
無回答	20	5.7

問3. あなたの主な職業を次のうちから一つだけ選んで○をつけてください。
(N=352人)

	N	%
漁業	25	7.1
農業	2	0.6
商業	43	12.2
サービス業	15	4.3
旅館・民宿	1	0.3
公務員（教員を含む）	54	15.3
会社員	18	5.1
主婦	100	28.4
学生	1	0.3
無職	53	15.1
その他	12	3.4
無回答	28	8.0

その他；（団体職員）（郵政職員）（夜警員）（警備員）（一人暮らし）（僧侶の妻）
 （団体職員）（アルバイト少々）（漁業職員）（建設工事業）（役場、病院の夜警員）
 （日産）（大工）（建設業）（保育所保母）（管理人）（海洋土木）

問4．あなたは、熊石町にお住まいになってから何年になりますか。（N＝352人）

	N	%
生まれてからずっと熊石町に住んでいる	173	49.1
よそから移ってきた	158	44.9
無回答	21	6.0

問5．津波が起こったとき、お宅には次のような方が一緒に住んでいましたか。あてはまるものにいくつでも○をつけてください。（N＝352人）

	N	%
小学生以下の子供	60	17.0
70歳以上のお年寄り	101	28.7
体の不自由な人、寝たきりの人	26	7.4
そのような人はいない	133	37.8
無回答	55	15.6

長い間どうもありがとうございました。

1993年北海道南西沖地震における
住民の対応と災害情報の伝達

—巨大津波と避難行動—

平成6年1月10日 印刷
平成6年1月17日 発行

編集兼発行 東京大学社会情報研究所
東京都文京区本郷7丁目3番1号

印刷所 三鈴印刷株式会社
東京都文京区小日向4-4-12
電話 (3941) 1181
